

大宰府条坊跡 46

—坂本・五条・朱雀地区の調査—

平成 27(2015) 年

太宰府市教育委員会

序

本書は、太宰府市の坂本・五条・朱雀地区で行われた大宰府条坊跡の発掘調査報告書です。

今回の調査では、整然と並んだ掘立柱建物群、丘陵上を走る南北道路など、大宰府の官衙城西端部の状況や大宰府条坊の東端部や丘陵上の土地利用など古代大宰府の都市景観を考える上で貴重な成果が得られています。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、ひいては文化財愛護の精神が高揚することを心より願っております。

結びになりましたが、本調査に対しご理解ご協力いただきました、関係各位ならびに諸機関の方々に心からお礼申し上げます。

平成 27 年 12 月
太宰府市教育委員会
教育長 木村甚治

例言

1. 本書は太宰府市坂本、五条、朱雀で行われた大宰府条坊跡の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測には、国土調査法第Ⅱ座標系（日本測地系）を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限り G. N.（座標北）を示し、本文中に記される遺構の角度もこれを基準としたものである。第 143 次調査と第 161 次調査は測量不足のため、およその方位である。
3. 遺構の実測及び写真撮影は担当者のほか、谷由紀子、上村英士（現筑後市教委）が行った。
4. 遺構の空中写真撮影は南空中写真企画が行った。
5. 出土品に関する科学分析はバリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
6. 出土した鉄製品の保存処理は榊タクトが行った。
7. 遺物の実測は、山本麻里子、福井円、吉富千春、今岡一恵、森田レイ子、酒井三保子、阿部容子、松隈里恵子、森部順子、松本理栄子、宮崎が行った。
8. 表入力・写真整理等は瀬戸ロみな子、市川晴美、吉村有紀が行った。
9. 遺物の整理接合・復元作業は馬場由美、住山景子、末永重由子が行った。
10. 遺物の写真撮影は岡紀久夫、南システム・レコが行った。
11. 図の浄書は、山本麻里子、福井円、吉富千春、今岡一恵、中島、高橋、宮崎が行った。
12. 本書に用いた分類は以下のとおり。
須恵器・・・『宮ノ本遺跡Ⅱ 一窯跡篇一』（太宰府市の文化財第 10 集）1992
陶磁器・・・『大宰府条坊跡Ⅴ 一陶磁器分類一』（太宰府市の文化財 第 49 集）2000
土器・・・『大宰府条坊跡Ⅱ』（太宰府市の文化財第 7 集）1983
瓦・・・『宝満山遺跡群 4』（太宰府市の文化財第 79 集）2005
13. 報告に関する整理・執筆は第 161 次調査を中島、第 180・227・297 次調査を高橋、それ以外を調査担当者の所見をもとに宮崎が行い、編集は宮崎が担当した。

目次

I、遺跡の位置と歴史	1
II、調査体制	2
III、調査および整理方法	5
IV、調査報告	
①坂本地区	
1、第97次調査	10
(1) 調査に至る経緯	10
(2) 基本層位	10
(3) 検出遺構	10
(4) 出土遺物	10
(5) 小結	15
2、第143次調査	17
(1) 調査に至る経緯	17
(2) 基本層位	17
(3) 検出遺構	18
(4) 出土遺物	18
(5) 小結	25
3、第161次調査	27
(1) 調査に至る経緯	27
(2) 基本層位	27
(3) 検出遺構	27
(4) 出土遺物	28
(5) 小結	28
4、第190次調査	29
(1) 調査に至る経緯	29
(2) 基本層位	29
(3) 検出遺構	29
(4) 出土遺物	44
(5) 小結	54
5、第269次調査	63
(1) 調査に至る経過	63
(2) 基本層位	63
(3) 検出遺構	63
(4) 出土遺物	67
(5) 小結	95

②五条地区

1、第78次調査	105
(1) 調査に至る経緯	105
(2) 基本層位と検出遺構	105
(3) 出土遺物	105
(4) 小結	106
2、第167次調査	107
(1) 調査に至る経緯	107
(2) 基本層位	107
(3) 検出遺構	107
(4) 出土遺物	108
(5) 小結	112
3、第297次調査	113
(1) 調査に至る経緯	113
(2) 基本層位	113
(3) 検出遺構	113
(4) 小結	113
4、第298次調査	115
(1) 調査に至る経緯	115
(2) 基本層位	115
(3) 検出遺構	115
(4) 出土遺物	116
(5) 小結	117
5、第306次調査	118
(1) 調査に至る経緯	118
(2) 基本層位	118
(3) 検出遺構	118
(4) 出土遺物	121
(5) 小結	139

③朱雀地区

1、第145次調査	146
(1) 調査に至る経緯	146
(2) 基本層位	146
(3) 検出遺構	146
(4) 出土遺物	146
(5) 小結	146
2、第160次調査	149
(1) 調査に至る経緯	149
(2) 基本層位	151

(3) 検出遺構	151
(4) 出土遺物	151
(5) 小結	154
3、第180次調査	158
(1) 調査に至る経緯	158
(2) 基本層位	158
(3) 検出遺構	158
(4) 出土遺物	166
(5) 小結	183
4、第203次調査	190
(1) 調査に至る経緯	190
(2) 基本層位	190
(3) 検出遺構	190
(4) 出土遺物	194
(5) 小結	197
5、第218次調査	201
(1) 調査に至る経緯	201
(2) 基本層位	201
(3) 検出遺構	201
(4) 出土遺物	202
(5) 小結	202
6、第227次調査	205
(1) 調査に至る経緯	205
(2) 基本層位	205
(3) 検出遺構	205
(4) 出土遺物	206
(5) 小結	209
7、第235次調査	211
(1) 調査に至る経緯	211
(2) 基本層位	212
(3) 検出遺構	212
(4) 出土遺物	214
(5) 小結	219
8、第237次調査	223
(1) 調査に至る経緯	223
(2) 基本層位	223
(3) 検出遺構	223
(4) 出土遺物	224
(5) 小結	225
9、第238次調査	226

(1) 調査に至る経緯	226
(2) 基本層位	226
(3) 検出遺構	226
(4) 出土遺物	226
(5) 小結	233
10、第268次調査	236
(1) 調査に至る経緯	236
(2) 基本層位	236
(3) 検出遺構	236
(4) 出土遺物	237
(5) 小結	239
V、第180次調査における自然科学分析・・・・・・・・・・（バリノ・サーヴェイ株式会社）	241
VI、調査まとめ	248

写真図版・・・主な遺構および遺物写真

付録・・・CD（遺構および遺物写真）



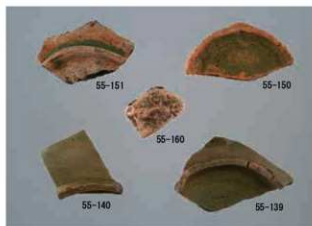
第190次調査全景（北から）



269SB085 全景（上が北）



190ST115 出土灰釉陶器製の藏骨器



269SX100 出土緑釉陶器



269SX100 出土緑釉陶器椀



269SX100 出土緑釉陶器

1、遺跡の位置と歴史

太宰府市は、北に四王寺山、北東に宝満山、南に脊振山地東端の天拝山に囲まれ、さながら盆地的な様相を示している。これらの山々が途切れている北西に福岡平野が、南東に筑後平野が広がっている。市役所から博多湾まで直線距離で15km、筑後川まで20kmの位置関係である。

二つの平野には弥生から古墳時代にかけての遺跡が多く存在し、その勢力に挟まれた太宰府では、4世紀には割竹形木棺で鏡を副葬する円墳（菖蒲ヶ浦、下高尾、宮ノ本）が築造されている。5世紀に入ると行政区こそ太宰府市であるが、福岡平野を見渡す丘陵に帆立貝形前方後円墳の成屋形古墳が築造されている。6世紀になって、四王寺山や高尾山の裾部に円墳が僅かに築造されるが、群集墳と呼べる状況を示していない。

古代になると大宰府政庁が置かれ、博多側には四王寺山と吉松丘陵を塞ぐ水城跡の土塁が築造されたほか、周囲に山々には大野城・基肆城・阿志岐城などの古代山城が築造され、いわゆる羅城を形成していたと考えられる。なお、政庁から現在の博多湾や鴻臚館跡まで直線距離で14.5kmの距離に位置する。

四王寺山の南麓には大宰府政庁、観世音寺、学校のほかに官衙が並び、その政庁を北辺中央に置いた南側一帯にはいわゆる大宰府条坊と呼ばれる都市が整備された。大宰府条坊はその規模は南北22条、東西12坊の約2km四方におよぶものと推定され、南辺部は筑紫野市まで広がっている。その存在については鏡山猛氏が『観世音寺文書』や『八幡字佐宮御神領大鏡』等に記述されている文言や地割から分析し、一区画1町四方とした条坊の復元案を提示したことに始まる。当初は発掘調査が少なかったため、その存在については疑問視する声もあったが、その後発掘調査が増大すると共に条坊痕跡が発見され、近年ではその成果を基に一区画90m四方とする条坊復元案が井上信正氏により提示されている。近年の大宰府条坊の調査成果としては、五条2丁目で行った第217・224次調査では、平安時代中期と12世紀埋没の南北道路側溝が検出され、約90mの区割りでみる条坊案では左郭12坊推定ライン上にあたる。『宇佐大鏡』久安4（1148）年条の記述から、12坊路を「京極大路」とするという見解が鏡山猛氏以来支持されてきたが、その「京極大路」の遺構である可能性が十分考えられる。また、12坊路に取り付く平安時代後期の道路も明らかになり、平安時代後期の時点で、平安時代中期以降急速に栄えていった安楽寺天満宮周辺の街区と大宰府条坊が接していたことを示すものと考えられている。筑紫野市塔原東1丁目（第258次調査）では、8世紀後半埋没の平行する東西溝が検出され、井上信正条坊案の22条と合致し、条坊の南限である可能性が指摘されている。条坊外に続く条里の存在も指摘されており、鷺田川西岸一帯には小字「市ノ上」があり、以前から古代の市場の存在が推定されている。その一画である都府樓南2丁目の第222次調査では広大な面積が調査された。ここは政庁Ⅱ期に条坊外の条里が広がっていた土地で、平安時代後期になり土地開発が行われたと推測されている。条坊と条里の関係を知る貴重な所見を得ることが出来ている。条坊の中心を南北に走る中央大路（推定朱雀大路）沿いでは、南北に並ぶ大型掘立柱建物が見つかり、一帯からは佐波理の匙や加盤をはじめ、高級食器類が出土し、大宰府にきた外国使節を安置する客館跡と推定されている。

また、条坊周辺では、南西側の宮ノ本丘陵一帯で、100基を越える奈良・平安期の墳墓があり、買地券をはじめ鏡や陶磁器類を副葬され、古代大宰府の官人墓地を推測されている。近年では条坊の南方にあたる筑紫野市堀池遺跡で、平安前期の越州窯系青磁の唾壺を副葬する木炭榎木棺墓などが見つかり、古代大宰府南辺部の土地利用や官人墓地のあり方を考える上で重要な発見であった。

II、調査体制

(昭和63 / 1988年度)・・・第78次調査

総括	教育長	藤 寿人				
庶務	教育部長	西山義則 (12月1日～)				
	社会教育課長	花田勝彦 (~11月30日)				
	文化財係長	鬼木富士夫				
	主 事	川原和典 (~11月30日)	白水伸司			
調査	技 師	山本信夫 狭川真一 緒方俊輔	技師 (囑託)	山村信榮		

(平成2 / 1990年度)・・・第97次調査

総括	教育長	長野治己				
庶務	教育部長	西山義則	社会教育課長 関岡勉			
	文化財係長	鬼木富士夫	主任主事 岡部大治	主事 白水伸司		
調査	主任技師	山本信夫 狭川真一 城戸康利				
	技 師	緒方俊輔 山村信榮	技師 (囑託)	中島恒次郎 狭川麻子		

(平成5 / 1993年度)・・・第143・145次調査

総括	教育長	長野治己				
庶務	教育部長	中川シゲ子				
	文化課長	佐藤恭宏	埋蔵文化財係長 高田克二	文化振興係長 大田重信		
	主任主事	岡部大治	川谷豊			
調査	技術主査	山本信夫				
	主任技師	狭川真一 城戸康利	緒方俊輔 山村信榮	中島恒次郎		
	技 師	塩地潤一				
	技師 (囑託)	田中克子 重松麻里子	井上信正			

(平成6 / 1994年度)・・・第160・161次調査

総括	教育長	長野治己				
庶務	教育部長	白木三男				
	文化課長	花田勝彦	文化財保護係長 高田克二	文化振興係長 大田重信		
	主任主事	岡部大治	川谷豊			
	主 事	今村江利子				
調査	技術主査	山本信夫				
	主任技師	狭川真一 城戸康利	山村信榮	中島恒次郎	重松麻里子	
	技 師	井上信正				
	技師 (囑託)	田中克子 下川可容子				

(平成7 / 1995年度)・・・第167次調査

総括	教育長	長野治己				
庶務	教育部長	白木三男				
	文化課長	花田勝彦				
	文化財保護係長	高田克二 (~5月31日)	文化振興係長 大田重信			
	主任主事	岡部大治 川谷豊	主事 今村江利子			

調査	技術主査	山本信夫					
	主任技師	狭川真一	城戸康利	山村信榮	中島恒次郎	重松麻里子	
	技師	井上信正	高橋学	技師(囑託)	下川可容子		
(平成8/1996年度)・・・第180・190次調査							
総括	教育長	長野治己					
庶務	教育部長	小田勝弥					
	文化課長	津田秀司	文化財保護係長	和田敏信			
	文化振興係長	大田重信(～6月30日)		田中利雄(7月1日～)			
	主任主事	岡部大治	川谷豊	主事	今村江利子		
調査	技術主査	山本信夫					
	主任技師	狭川真一	城戸康利	山村信榮	中島恒次郎	井上信正	
	技師	高橋学	宮崎亮一	技師(囑託)	下川可容子	森田レイ子	
(平成10/1998年度)・・・第203次調査							
総括	教育長	長野治己					
庶務	教育部長	小田勝弥					
	文化財課長	津田秀司	文化財保護係長	和田敏信	文化財調査係長	山本信夫	
	主任主事	藤井泰人	主事	今村江利子	囑託	鈴木弘江	
調査	技術主査	狭川真一					
	主任技師	城戸康利	山村信榮	中島恒次郎	井上信正		
	技師	高橋学	宮崎亮一	技師(囑託)	下川可容子	森田レイ子	
(平成13/2001年度)・・・第218次調査							
総括	教育長	關敏治					
庶務	教育部長	白石純一					
	文化財課長	木村和美	文化財保護係長	和田敏信	文化財調査係長	神原稔	
	事務主査	藤井泰人	主任主事	大石敬介			
調査	主任主査	城戸康利					
	主任技師	山村信榮	中島恒次郎	井上信正	高橋学	宮崎亮一	
	技師(囑託)	下川可容子	森田レイ子	佐藤道文			
(平成14/2002年度)・・・第227次調査							
総括	教育長	關敏治					
庶務	教育部長	白石純一					
	文化財課長	木村和美	文化財保護係長	和田敏信	文化財調査係長	神原稔	
	事務主査	藤井泰人	主任主事	大石敬介			
調査	主任主査	城戸康利	技術主査	山村信榮	中島恒次郎		
	主任技師	井上信正	高橋学	宮崎亮一			
	技師(囑託)	下川可容子	森田レイ子	柳智子	渡邊仁		
(平成16/2004年度)・・・第235・237・238次調査							
総括	教育長	關敏治					
庶務	教育部長	松永栄人					
	文化財課長	木村和美	保護活用係長	久保山元信	調査係長	永尾彰朗	

	事務主査	藤井泰人 (～6月30日)	齋藤実貴男 (7月1日～)			
	主任主事	大石敬介				
調査	主任主査	城戸康利	技術主査	山村信榮	中島恒次郎	
	主任技師	井上信正	高橋学	宮崎亮一		
	技師 (嘱託)	下川可容子	森田レイ子	柳智子	渡邊仁	長直信 松浦智
(平成18 / 2006年度)・・・	第268次調査					
総括	教育長	關 敏治				
庶務	教育部長	松永栄人				
	文化財課長	齋藤廣之	保護活用係長	久保山元信	調査係長	永尾彰朗
	主任主査	齋藤実貴男	吉原慎一 (7月1日～)			
調査	主任主査	城戸康利	山村信榮	中島恒次郎		
	技術主査	井上信正	主任技師	高橋学	宮崎亮一	
	技師 (嘱託)	柳智子	下高大輔			
(平成19 / 2007年度)・・・	第269次調査					
総括	教育長	關 敏治				
庶務	教育部長	松永栄人 (～9月30日)				
	文化財課長	齋藤廣之				
	保護活用係長	久保山元信 (～9月30日)		調査係長	永尾彰朗	
	主任主査	吉原慎一	齋藤実貴男			
調査	主任主査	城戸康利	山村信榮	中島恒次郎		
	技術主査	井上信正	主任技師	高橋学	宮崎亮一	
	技師 (嘱託)	柳智子	下高大輔	大塚正樹	端野晋平	
(平成24 / 2012年度)・・・	第297・298次調査					
総括	教育長	關敏治 (～12月21日)				
庶務	教育部長	古野洋敏				
	文化財課長	菊武良一 (7月1日～)				
	文化財副課長	城戸康利 (7月1日～)				
	保護活用係長	友添浩一 (7月1日～)				
	調査係長	山村信榮	事務主査	橋川史典	主事	古川あや
調査	主任主査	井上信正	技術主査	高橋学	宮崎亮一	主任技師 遠藤茜
	(文化財課事務取扱)					
	都市計画課	景観・歴史のまち推進係係長	中島恒次郎			
(平成26 / 2014年度)・・・	第306次調査					
総括	教育長	木村甚治				
庶務	教育部長	堀田徹				
	文化財課長	菊武良一	文化財副課長	城戸康利		
	保護活用係長	友添浩一	調査係長	山村信榮		
	事務主査	廣見京子	主事	有田ゆきな	久木原駿史	
調査	主任主査	井上信正	高橋学	宮崎亮一	主任技師	遠藤茜
	技師	沖田正大	中村茂史			

(文化財課事務取扱)

都市計画課 景観・歴史のまち推進係係長 中島恒次郎

(平成 27 / 2015 年度)・・・報告書発行

統括	教育長	木村甚治		
庶務	教育部長	堀田徹		
	文化財課長	菊武良一	文化財副課長	城戸康利
	保護活用係長	友添浩一	調査係長	山村信榮
	主任主査	廣見京子	主事	有田ゆきな 久木原駿史
調査	主任主査	井上信正	高橋学	宮崎亮一
	主任技師	遠藤茜	技師	沖田正大 中村茂央

(文化財課事務取扱)

都市計画課 景観・歴史のまち推進係係長 中島恒次郎

なお、調査及び整理に際しては次の方々からご指導ご協力があった。記して感謝いたします。(順不同・敬称略)

小田富士雄、西谷正、田村圓澄、吉留秀敏、栗原和彦、赤司善彦、横田賢次郎、飛野博文、杉原敏之、斎部麻矢、松川博一、森弘子、井上理香、松村一良、進藤秋輝、山本信夫、小鹿野亮、徳本洋一、石木秀啓、大宰府史跡指導委員会

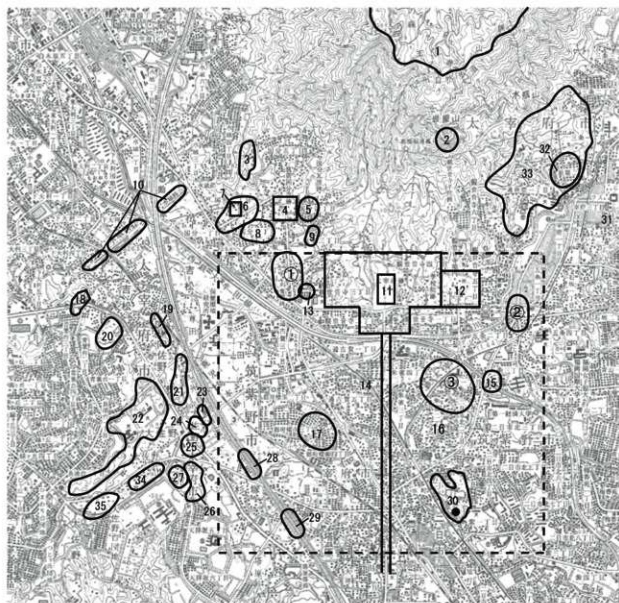
Ⅲ、調査および整理方法

調査および整理方法については、『佐野地区遺跡群Ⅰ』(太宰府市の文化財第14集 1989)、『太宰府市における埋蔵文化財調査指針』(太宰府市教育委員会 2001年9月改訂)に基づいている。

調査では、表土剥ぎをバックホーによって行った。遺構図や土層図は適時1/20等で記録し、遺構全体図は人力によって1/20の縮尺で実測を行った。

整理報告に際し、国内からの搬入品については形状が確認できるものは極力報告することに努めたが、整理報告作業の効率化と報告書のスリム化のため、規格性が強い輸入陶磁器については『大宰府条坊跡ⅩⅤ—陶磁器分類—』を基に分類し、出土遺物一覧表に分類と破片数を掲載したのみで、実測作業は基本的にやっていない。しかし、未分類のものや稀な陶磁器などについては実測し報告している。よって、遺構時期の検証については、出土遺物一覧表も同時に確認して頂きたい。

これらの調査で得られた出土遺物や実測図等は太宰府市文化ふれあい館に保管している。



- | | | | |
|------------|-----------------|-----------|---------------------|
| 1. 大野城跡 | 11. 大宰府政庁跡 | 18. 神ノ前築跡 | 28. 刺塚遺跡 |
| 2. 岩屋城跡 | 12. 観世音寺 | 19. 原口遺跡 | 29. 唐人塚遺跡 |
| 3. 陣ノ尾遺跡 | 13. 遠賀団印出土地 | 20. 権振遺跡 | 30. 峯・峯畑遺跡 (●は峯火葬墓) |
| 4. 筑前国分寺跡 | 14. 大宰府条坊跡(破線内) | 21. 前田遺跡 | 31. 大宰府天満宮(安業寺跡) |
| 5. 辻遺跡 | ①坂本地区(報告地点) | 22. 宮ノ木遺跡 | 32. 浦城跡 |
| 6. 国分松本遺跡 | ②玉糸地区(報告地点) | 23. 播川遺跡 | 33. 原遺跡 |
| 7. 筑前国分尼寺跡 | ③朱雀地区(報告地点) | 24. フケ遺跡 | 34. 京ノ尾遺跡 |
| 8. 国分千足町遺跡 | 15. 君畑遺跡 | 25. 尾崎遺跡 | 35. カヤノ遺跡 |
| 9. 御立団印出土地 | 16. 般若寺跡 | 26. 脇道遺跡 | |
| 10. 水城跡 | 17. 市ノ上遺跡 | 27. 殿城戸遺跡 | |

Fig. 2 太宰府市とその周辺の遺跡 (1/30,000)

IV、調査報告

①坂本地区

1、第97次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市大字坂本（現在坂本3丁目）81-9・82-1・84-1に所在し、「御笠団印」出土地より南西200mに位置する。

1987（昭和62）年夏頃より、共同住宅建設に関わる文化財の取り扱いについて問い合わせが始まり、1989（平成元）年6月26日に試掘調査を実施し、ピット群が見つかった。計画では遺構を破壊することは明確であったため、開発者の費用負担で発掘調査を実施することとなった。対象地は丘陵南斜面で、平坦面が形成されていた部分について発掘調査を行った。発掘調査は1990（平成2）年7月10日～8月10日の間で実施した。開発対象面積は2000㎡であったが、調査面積は154㎡である。調査は城戸康利、緒方俊輔が担当した。



Fig.5 第97次調査地土層模式図

(2) 基本層位

現況で標高48m程の低丘陵の南側斜面で、調査直前は雑木林であった。それ以前に畑地として利用されていた平坦面が残されていた。その平坦部の層序は上層から真砂土の客土、旧表土があり畑として利用されていた。旧表土下には9世紀代までの遺物を含む包含層があり、包含層を除去すると赤黄色土の遺構面に至り、焼土坑を検出した。調査区中央付近では遺構面直上に焼土層が確認された。赤黄色土の下層には白黄色土があり、その下層から遺構が検出されたが、白黄色土は全体的な広がりはなく、部分的な堆積とみられ、調査は1面として行っている。なお、地山は花崗岩バイラン土である。

(3) 検出遺構

焼土坑

97SK001 (Fig.7)

大きさは1.1m×1.0m、深さ0.3mの隅丸方形である。埋土は周囲の地山と同じ真砂土に炭化物が混じっている。最下層には0.05m程の厚みで炭層が堆積している。なお、骨片や遺物は出土していない。土坑の周壁は部分的に焼けて赤茶色に変色しているが、底面は焼けていない。

97SK010 (Fig.7)

大きさは0.7m×0.6m、深さ0.2mの円形である。埋土は炭化物を僅かに含む真砂土で、最下層は炭化物を多く含む堆積層である。土坑の周壁は部分的に焼けて赤茶色に変色しているが、底面は焼けていない。骨片は出土していない。

(4) 出土遺物

97SX003 出土遺物 (Fig.8)

須恵器

蓋3 (1) 外面上半部は回転ヘラケズリ、内面上半部はナデ、その他は回転ナデ。色調は暗灰色を呈する。

土師器

大皿×高坏 (2) 破片である全形不明で、大皿もしくは高坏とみられる。丸味のある体部。色調は淡橙黄色を呈する。

97SX005 出土遺物 (Fig.8)



Fig. 6 第 97 次調査遺構全体図 (1/300)

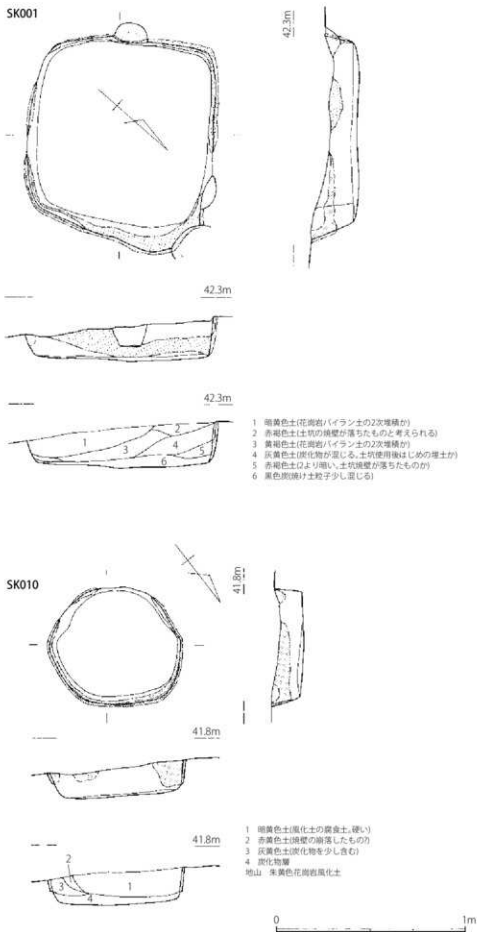


Fig. 7 97SK001・010 遺構実測図 (1/20)

土師器

坏 a (3, 4) 3 は磨滅するが底部は回転ヘラ切り。色調は白黄色を呈する。底径 6.6cm。4 は底部ヘラ切りとみられるが磨滅する。色調は黄色を呈する。復元底径 6.6cm。

97SX006 出土遺物 (Fig. 8)

須恵器

坏蓋 (5, 6) 5 は復元口径 13.0cm、外面上半部は回転ヘラケズリ、内面天井部はナデ、その他は回転ナデ。口縁部は若干肥厚しているが、段は作り出されていない。胎土は白色砂粒を多く含み、暗青灰色を呈する。外面には 2 本のヘラ記号がみられる。6 は破片で全形が明確でないが、若干丸味を持って内湾するため、坏蓋とみられる。内外面回転ナデで、色調は暗灰色を呈する。

97SX008 出土遺物 (Fig. 8)

須恵器

高坏 (7) 破片で全形が明確でないが、端部を肥厚させた形状から高坏の脚部と推測した。復元脚部径 12.0cm。色調は暗灰色を呈する。

97SX013 出土遺物 (Fig. 8)

須恵器

蓋 1 (8) 口径 14.0cm、器高 2.3cm。外面上半部は回転ヘラ切りだが、焼成時に器面が荒れている。内面天井部が不定方向のナデ、その他は回転ナデ。色調は青灰色や暗茶褐色を呈する。

97SX017 出土遺物 (Fig. 8)

須恵器

蓋 3 (9) 口縁端部を僅かにつまみ、断面三角形に作り出している。外面上半部はヘラ切り後にナデ調整、その他は回転ナデ調整。色調は明灰色を呈する。

土師器

皿 a (10) 全体的に磨滅し調整不明。色調は白灰色を呈する。器高 2.1cm。

暗黄色土出土遺物 (Fig. 8)

須恵器

蓋 1 (11) 返りが高く坏の可能性もある。残存部では内外面とも回転ナデ。色調は赤茶色を呈する。

蓋 3 (12, 13) 12 は復元口径 11.2cm、器高 1.3cm。外面上半部は回転ヘラ切り後に粗いナデ、その他内外面は回転ナデ調整。色調は暗青灰色を呈する。13 の外面上半部は回転ヘラケズリ、その他内外面は回転ナデ。色調は暗灰色を呈する。

壺蓋 (14) 外面上部は回転ヘラケズリ、内面上部はナデ、その他は回転ナデ。胎土は精製され、色調は灰色を呈する。器高 2.45cm。

坏 a (15) 器高 2.9cm。底部は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ。色調は暗灰色を呈する。

高坏 (16) 破片で器種が明確に言い切れないが、高坏と推測される。外面底部は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ。色調は赤茶色を呈する。

土師器

碗 c (17) 全体的に磨滅する。断面三角形の高台を貼付する。色調は黄褐色や灰色を呈する。復元高台径 6.7cm。

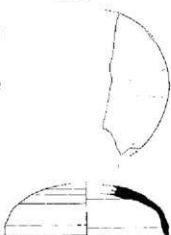
甕 (18) 破片で器種が明確に言い切れない。他の器種の可能性もある。胎土は白色砂粒を多く含み、黄橙色や黒色を呈する。内外面とも磨滅するがナデ調整とみられる。

赤黄色土出土遺物 (Fig. 8)

SX003



SX006



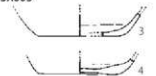
SX008



SX013



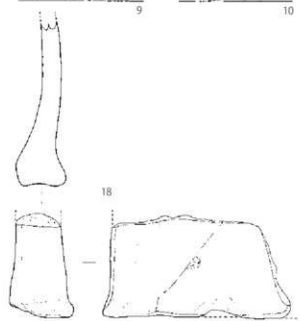
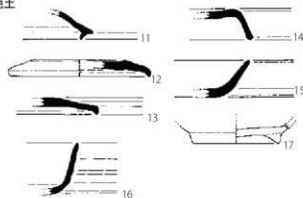
SX005



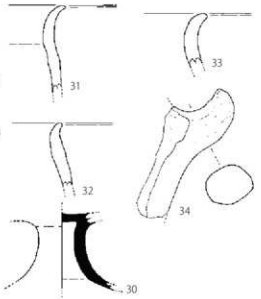
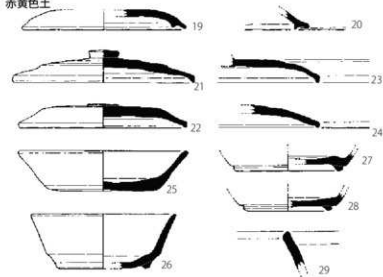
SX017



暗黄色土



赤黄色土



表土



Fig. 8 第 97 次調査出土遺物実測図 (1/3)

須恵器

蓋 1 (19, 20) 19は復元口径 13.0cm. やや丸味のある体部で、外面は磨滅するが、内面上半部はナデ調整、その他は回転ナデ。色調は黄灰色や白灰色を呈する。20は口縁端部で内外面回転ナデ。色調

は暗灰色を呈する。

蓋 c3 (21～23) 21は復元口径 14.4cm、器高 2.55cm。外面上半部は回転ヘラケズリ、内面上半部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ。色調は淡灰色を呈する。22は扁平で雑なツマミを貼付する。口径 13.3cm、器高 1.9cm。外面上半部は回転ヘラケズリ、内面上半部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ。色調は暗青灰色を呈する。23の外面上半部は回転ヘラケズリ、内面上半部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ。色調は暗灰色や淡赤茶色を呈する。

蓋 3 (24) 口縁端部は僅かにつまみ出している。内面上半部は不定方向のナデ、その他は回転ナデだが、外面は磨滅し調整不明。色調は白灰色を呈する。

坏 a (25) 復元口径 13.4cm、器高 3.2cm、復元底径 8.4cm。底部は回転ヘラ切り後未調整。その他は回転ナデ。色調は灰色を呈する。

坏 c (26～28) 全体的に低い高台を貼付する。26は復元口径 11.4cm、器高 4.3cm、復元高台径 7.2cm。底部は一定方向のナデで、その他は回転ナデ。色調は淡灰色を呈する。27は復元高台径 8.5cm。色調は暗青灰色を呈する。底部内面ナデ、外面回転ナデ調整。28は低い外跳ねの高台で、復元高台径 7.0cm。外面底部はヘラ切り後未調整。色調は淡灰色を呈する。

鉢 (29) 口縁部で内外面とも回転ナデ。色調は淡灰色を呈する。

高坏 (30) 脚部で、内外面ヨコナデ。坏部内面はナデ調整。色調は暗灰色を呈する。

土師器

甕 (31～33) 全体的に緩やかに外反する口縁部で、磨滅が目立ち調整不明。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は淡橙褐色や淡黄橙色を呈する。

把手 (34) 甕もしくは甎の把手である。ナデ調整がみられる。色調は淡橙黄色を呈する。

表土出土遺物 (Fig. 8)

須恵器

蓋 c3 (35) 復元口径 11.0cm、器高 2.5cm。宝珠形のツマミを貼付する。外面回転ヘラケズリ、内面上半部ナデ、その他は回転ナデ。色調は暗灰色を呈する。

皿 a (36) 歪んでおり、反り上がった底部となっている。復元口径 15.6cm、器高 1.1cm、復元底径 13.8cm。外面底部は回転ヘラケズリで、底部中央部はナデ調整で、ヘラ記号のようなものがみられる。内面底部はナデ調整。

瓶 (37) 破片で器種は特定しづらいが、瓶類の口縁部とみられる。内外面ヨコナデ。還元不良で色調は暗橙色を呈する。復元口径 9.0cm。

(5) 小結

遺構はピットや土坑ばかりで、建物などは検出されなかった。主要遺構である焼土坑は、骨片等は検出されず火葬施設と決定づけるものはない。斜面地という立地から積極的な土地利用は難しいが、この丘陵上面には平坦面があったため（造成済）、その利用とセット関係にあったと考えるべきだろう。

土地利用の時期について、古墳時代の遺物が僅かに見られるものの、8世紀～9世紀にかけてのものがほとんどであり、この時期が主たる土地利用の時期とみられる。なお、僅かであるが須恵器の蓋 1 が出土しているため、7世紀後半頃の土地利用があった可能性も考えられる。

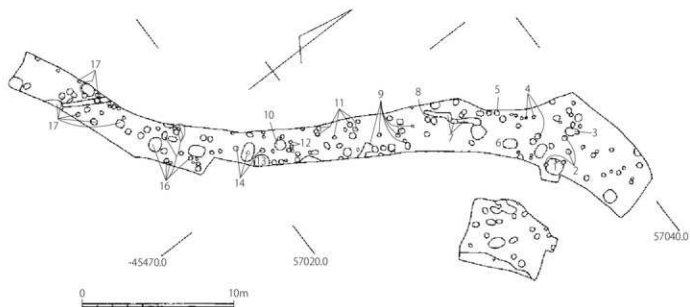


Fig. 9 第 97 次調査遺構略測図 (1/250)

表 1 第 97 次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	97SK001	焼土坑			
2		ピット群		古代	
3	97SX003	ピット			
4		ピット群			
5	97SX005	ピット			
6	97SX006	土坑			
7		土坑群?	赤黄色土		
8	97SX008	ピット			
9		ピット群			
10	97SK010	焼土坑			
11		ピット群		古代	
12		ピット群		古代	
13	97SX013	土坑			
14		ピット群			
15		土坑			
16		ピット群		古代?	
17	97SX017	ピット群		8世紀代	
18		ピット群		古代	
19		ピット			

表 2 第 97 次調査 出土遺物一覧表

S-2 須 恵 銅鑿 土 師 銅鑿 黒色土器A銅鑿 瓦 銅鑿	S-10 土 師 銅鑿、破片	S-18 土 師 銅破片 黒色土器A銅鑿 瓦 銅破片
S-3 須 恵 銅鑿、鏃 土 師 銅大鍬、文高杯	S-11 須 恵 銅杯 古式土師器方蓋×鏃	S-19 瓦 銅瓦瓦(破片)
S-4 須 恵 銅鍬、杯、鏃 土 師 銅鑿、破片 肥前系陶器銅破片	S-12 須 恵 銅蓋、杯蓋、杯 土 師 銅破片	赤黄色土 須 恵 銅 蓋1、蓋3、H6、杯c、鏃、鏃蓋 土 師 銅杯、鏃、鏃蓋 土 師 銅鑿、鏃、鏃蓋 肥前系陶器銅破片 瓦 銅平瓦(橋子目、無文)、平瓦(横し瓦)
S-5 土 師 銅杯a	S-13 須 恵 銅蓋、蓋1、杯身 土 師 銅杯、鏃 瓦 銅平瓦(横目)、瓦瓦(破片)	赤黄色土 須 恵 銅 蓋1、蓋3、蓋c、杯c3、杯a、杯a 土 師 銅杯、杯c(?)、高杯、杯c、鏃、鏃蓋 古式土師 銅鑿 白 銅 破片 (1) 瓦 銅平瓦(横目)、瓦瓦(横目) 石 製 品玉石
S-6 須 恵 銅杯蓋 土 師 銅破片	S-14 須 恵 銅破片 土 師 銅鑿文蓋、破片	表土 須 恵 銅蓋、蓋3、蓋c3、杯、杯c、蓋a、鏃 土 師 銅杯、杯c、鏃、破片 肥前系陶器 銅破片 銅鑿片 銅蓋 鏃 銅蓋 鏃 瓦 銅平瓦(横目、橋子目)、平瓦(横し瓦) 土 師 瓦(無文)、破片 その 他石瓦
S-7 須 恵 銅杯蓋 土 師 銅鑿、鏃×鏃	S-15 須 恵 銅鑿、破片 土 師 銅鑿	
S-8 須 恵 銅高杯	S-16 須 恵 銅蓋、破片 土 師 銅鑿、破片	
S-9 須 恵 銅破片 土 師 銅破片	S-17 須 恵 銅蓋3、杯、杯c、蓋a、鏃 土 師 銅蓋 土 製 品焼土塊	

2、第143次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市坂本2丁目164-1、164-2、165-6で、松倉丘陵の南側に位置する。

1990(平成2)年4月から共同住宅建築に先立ち、文化財の取り扱いについて問い合わせが行われるようになった。1990(平成2)年8月1日に試掘調査を実施し、対象地の南西部で遺構を確認した。その後、積水ハウス(株)より鉄骨造の共同住宅の建築計画が出され、基礎構造から工事立会となった。1993(平成5)年10月1、2日に工事立会したが、遺構に影響を及ぼすような状況となったため、工法について再検討することとなった。その後協議を重ね、遺構に影響がある建物部分について調査することとなった。

発掘調査は1993(平成5)年10月20日～11月3日に実施し、調査は塩地潤一が行った。開発対象面積1400㎡、調査面積200㎡である。調査地以外は未調査であるため、遺跡は保存されている。

(2) 基本層位 (Fig. 11)

調査直前まで田圃として利用されていた。耕作土を含む表土が厚さ0.5m前後あり、その下に黄灰色土が厚さ0.3m程ある。これらを除去した面を遺構面(上面)としている。それより下層はSX020の整地層があり、整地の下にSX010(流路)、最下層にSX015(流路)がある(下面)。なお、地山は明茶色土であるが、流路部分は淡灰色シルトである。

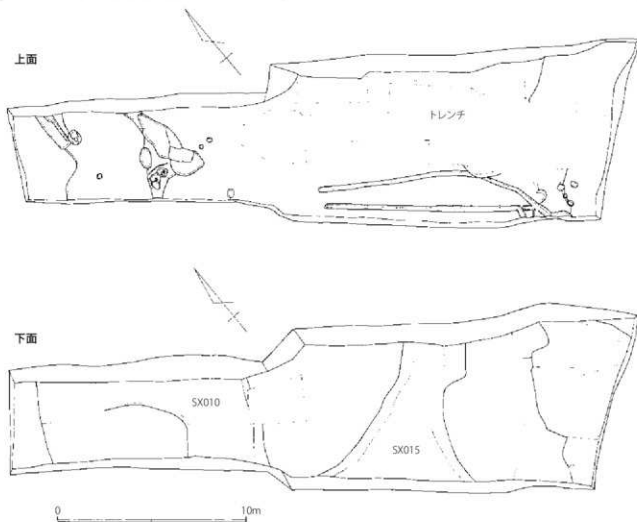


Fig. 10 第143次調査遺構全体図 (1/200)

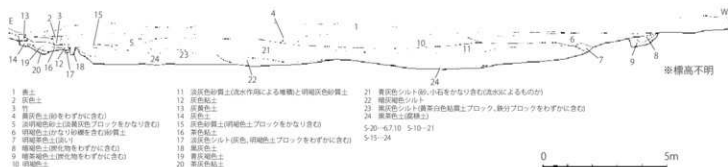


Fig. 11 第 143 次調査区南壁土層実測図 (1/150)

(3) 検出遺構

流路

143SX010

調査区の大半を占める自然流路で、大きく南北方向を示す。幅は約 27m、深さは現地表面から約 1.8m である。埋土は淡灰色砂土や青灰褐色シルト層で、流水作用による堆積状況を示していた。

143SX015

143SX010 の東側下層で確認された流路で、SX010 によって切られている状況を示す。幅 1.05 ~ 3.4m、深さ 0.05m、埋土は黒茶色の腐食土である。小田編年Ⅲ A 期 (6 世紀中頃) の須恵器が出土しているが、坏身と蓋が付着しているなど完成品より未製品が多くみられる。

その他の遺構

143SX020

厚さ 0.3m 前後の明褐色土で、SX010 や SX015 の最終埋没となる整地層である。西側は砂礫を多く含む砂質土である。埋土からはⅦ期 (9 世紀中～後半) の土器が出土し、「佐」銘の文字瓦も出土している。

(4) 出土遺物

流路

143SX010 青灰色粘土出土遺物 (Fig. 12)

須恵器

蓋 c3 (1) 復元口径 13.3cm、器高 1.75cm、外面上半部は回転ヘラケズリ、内面上半部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ。色調は灰色を呈する。

蓋 c (2、3) やや潰れた擬宝珠のツマミを貼付する。3 は外面回転ヘラケズリ後未調整。

皿 a (4) 外面底部は回転ヘラケズリ後粗いナデ調整で、外面には僅かに、内面底部には全体的に墨痕がみられる。焼成還元良好で、色調は暗青灰色を呈する。復元口径 17.0cm、器高 1.65cm、転用碗か。

大皿 c (5) 断面方形の高台を貼付し、復元高台径 15.6cm、底部外面ヘラケズリ、内面不定方向のナデ。焼成還元良好で、色調は灰色を呈する。

坏 c (6 ~ 8) 6・7 は底部端に低い断面方形の高台を貼付する。6 は復元高台径 9.0cm、8 は細く高い高台を貼付し、復元高台径 7.8cm、外面回転ヘラケズリ、内面底部は不定方向のナデ、他は回転ナデ。焼成還元良好で、色調は灰色を呈する。

提瓶 (9) 外面は回転ヘラケズリで、カキ目も施し、上部はヨコナデ調整がみられる。肩部に折り曲げた把手を貼付する。内面ヨコナデ調整。色調は暗灰色や淡灰色を呈する。

土師器

坏 a (10) 内外面とも回転ナデで、内外面に油煙の煤が付着する。色調は灰黄色を呈する。

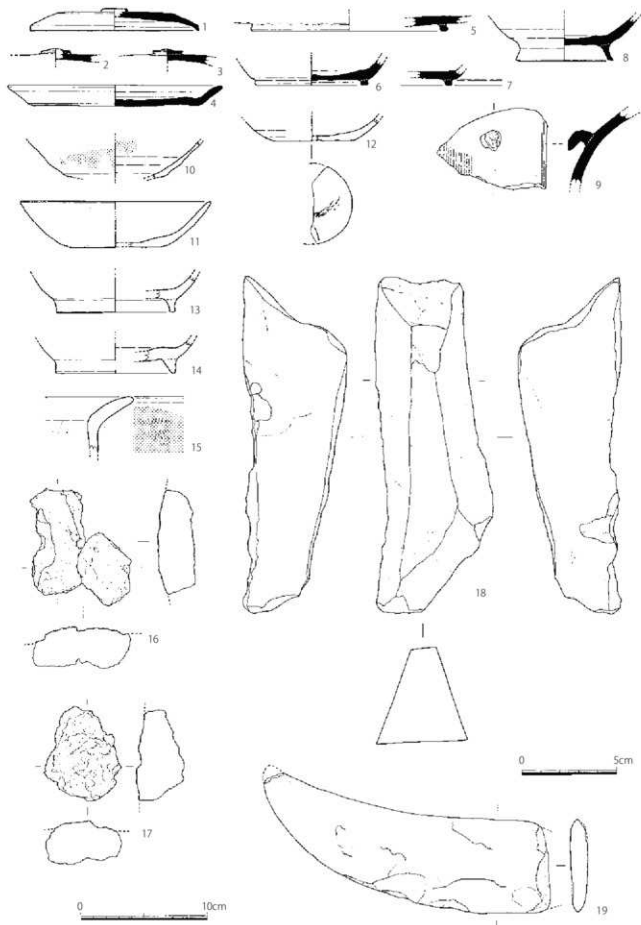


Fig. 12 143SX010 青灰色粘土出土遺物実測図 (1/3、18・19は1/2)

杯 d (11、12) 色調は共に淡黄灰色を呈する。11 は復元口径 15.1 cm、器高 3.6 cm、復元底径 7.2 cm。内外面にミガキ a を施すが、内面は劣化し分かりづらい。12 は復元底径 6.0 cm。外面は回転ヘラケズリで、僅かにミガキ a が残る。外面底部には墨書が残るが、字体は不明である。

碗 c (13、14) 断面方形状の高台を貼付する。復元高台径は 13 が 9.2 cm、14 は 9.6 cm。

甕 (15) 体部外面はタテハケ、内面はヘラケズリ。外面には煤が付着する。

土製品

炉壁 (16、17) 炉壁の一部とみられる。一面が若干面を持っている。胎土は白色砂粒を多く含む。16 は黄灰色や暗灰色を呈する。17 は平坦面が熱を受け溶解し、暗灰色を呈する。

石製品

砥石 (18) 大きさは縦 17.75 cm、幅 5.5×5.6 cm。研磨面は 5 面あるが、主に 3 面使用している。砂岩製。

石鎌 (19) 基部と最先端部を欠損し、現存長 15.2 cm、幅 5.0 cm、厚さ 0.9 cm。全面研磨され、両側面を両刃状に加工している。石材は片岩とみられる。

143SX015 黒茶色土出土遺物 (Fig. 13)

須恵器

杯蓋 (1~10) 復元口径 12.6~14.2 cm、器高 4.1~4.8 cm。全体として外面中位に段を有し、口縁端部内面に段もしくは沈線を有している。外面上半の平坦部は回転ヘラケズリで、その他は回転ナデ調整。内面天井部には当て具痕やナデ調整痕が残る。色調は青灰色や灰色を呈する。1 の天井部は丸味が目立ち、ヘラ記号が施されている。4 は外面上部にヘラ記号のような痕跡がみられる。1・2・5・6 は外面灰かぶりが目立つ。8 は中位が回転ヘラケズリで、天井部の平坦面はナデ調整。

杯身 (11~16) 復元口径 10.3~14.5 cm。全体として口縁端部内面に浅い沈線もしくは段を有している。外面下半は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ調整。色調は青灰色や灰色を呈する。11~13 は重ね焼きの痕跡として、受け部に蓋の一部が付着し取り残されている。11~14 は外面が灰かぶり。14 の内面には当て具痕が残る。

甕 (17) 全体的に歪みが大きい。復元口径 13.6 cm。内外面とも灰かぶりで白くなり、調整不明。

古式土師器

高坏 (18) 坏部の破片で、中位で緩やかに屈曲し外反する。内面はヨコハケが確認できるが、その他は磨減し調整不明。焼成不良で、色調は橙色を呈する。

土師器

杯 (19) 外面下半はヘラケズリ、上半部はミガキ a、内面には暗文を施す。口縁端部内面には浅い沈線が巡る。胎土は微細な白色砂粒を含み、色調は黄橙色を呈する。畿内系。

整地層

143SX020 淡灰褐色砂質土出土遺物 (Fig. 14)

土師器

杯 a (1) 復元底径 7.4 cm。全体的に磨減する。色調は暗茶色を呈する。

碗 c (2、3) 2 は磨減した高台を貼付し、復元高台径 7.1 cm。色調は淡橙色を呈する。3 は断面台形の高台で復元高台径 8.6 cm。全体的に磨減する。色調は淡橙黄色を呈する。

甕 (4) 内外面磨減し調整不明。

143SX020 明褐色土出土遺物 (Fig. 14)

須恵器

皿 a (5) 復元口径 16.1 cm、器高 1.35 cm、復元底径 13.4 cm。底部内外面とも薄い墨痕が残り、内面

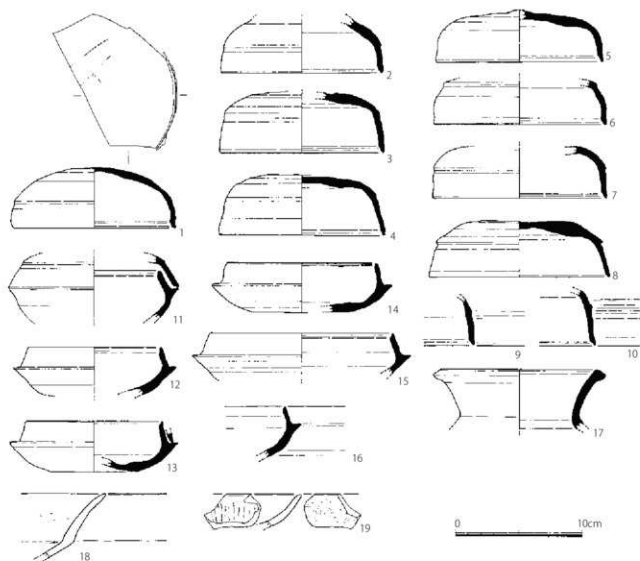


Fig. 13 143SX015 黒茶色土出土遺物実測図 (1/3)

は平滑となり、硯として転用されていたと考えられる。

坏 a (6) 復元口径 14.5cm、器高 3.5cm、復元底径 11.3cm。外面底部は回転ヘラケズリで、内面には薄く漆が付着する。

坏 c (7～10) 復元高台径 7.3～9.0cm。内面底部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ。色調は灰色や淡灰色を呈する。8 は低い高台を貼付する。10 は外開きの低い高台を貼付する。還元不良で、色調は白灰色を呈する。

小壺 (11) 復元高台径 5.6cm。内外面とも回転ナデ。底部外面には同心円の当て具のような痕跡が残る。色調は明青灰色を呈する。

土師器

蓋 3 (12) 復元口径 14.1cm。外面上半部は回転ヘラケズリ、その他は磨減し調整不明。

皿 a (13) 復元口径 18.1cm、器高 2.2cm、復元底径 13.4cm。外面底部は回転ヘラケズリで、外面にはミガキ a が僅かに残る。色調は淡橙色を呈する。

坏 a (14～21) 復元底径 7.0～8.0cm。全体的に外面底部はヘラ切りで、平坦または若干丸味を持っている。色調は淡灰色や灰黄色等を呈する。

甕 (22, 23) 22 は復元口径 24.9cm、外面はタテハケで煤が付着する。内面は口縁部ヨコハケ、体部

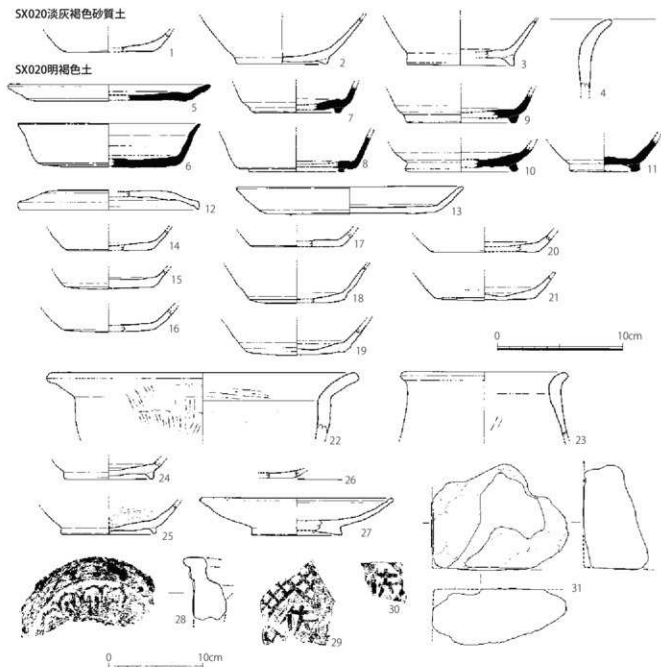


Fig. 14 143SX020 淡灰褐色砂質土・明褐色土出土遺物実測図 (1/3、28～30は1/4)

は縦方向のヘラケズリである。23は口縁部を肥厚させる。復元口径13.3cm。体部内面はヘラケズリ、それ以外は磨滅。色調は橙茶色を呈する。

黒色土器

椀c (24、25) 大きくない低い高台を貼付する。内面にはミガキを施す。A類。24は復元高台径7.2cm。25は高台径7.65cm。

灰軸陶器

皿 (26) 胎土は精製され、色調は灰白色を呈する。外面は回転ヘラケズリで、内面には薄い灰緑色釉を施す。軸には細かい貫入がある。

緑軸陶器

皿 (27) 復元口径15.4cm、器高3.0cm、復元底径7.2cm。口縁部内面と内面底部に沈線を巡らす。

底部はケズリ出し高台。胎土は硬質に焼成され、青灰色を呈し、暗緑色釉を全面に施す。京都産か。

瓦類

軒丸瓦(28) 複子葉弁で、やや楕円形の珠文を巡らす。外縁は素文縁である。磨滅が目立つ。

平瓦(29、30) 斜格子や正方形の格子に「佐」の正字の叩きを施す。

埴(31) 大きく欠損し、現存する大きさは10.7×8.4cm、厚さ5.2cm。胎土は0.4cm以下の砂粒を多く含み、色調は灰白色や暗灰色を呈する。

その他の遺構

143SX004 出土遺物 (Fig. 15)

瓦類

平瓦(1～6) 斜格子や正方形の格子に「佐」の正字の叩きを施す。焼成は良好で、色調は灰色や黒灰色を呈する。

黄灰色土出土遺物 (Fig. 15)

遺構検出時に出土した遺物で、文字瓦のほか調査地の下限に近い遺物や上限の遺物を掲載している。

須恵器

坏c(7) 底部端に高台を貼付するが、焼成不良で劣化し丸くなっている。復元高台径7.9cm。

甕(8) 内面に同心円の当て具があり、外面は叩きの後部分的に粗いナデ調整を行う。外面には丁寧なナデ調整された把手が貼付されている。

土師器

坏a(9、10) 9は復元底径8.8cm、色調は白黄色を呈する。10は磨滅し調整不明。色調は淡橙色を呈する。

碗c(11～13) 11は復元口径14.6cm、器高6.2cm、復元高台径8.4cm。全面磨滅し調整不明。色調は暗黄褐色を呈する。12は復元高台径7.0cm。13は高台径7.1cm。色調は黄白色を呈する。

長沙窯系青磁

水注(14) 注口部で、注口部下には貼り付け文様を施す。外面には茶褐色釉が部分的に残るだけで、明白色の化粧土が露出している。胎土は精製され、色調は淡赤茶色を呈する。

弥生土器

蓋(15) この調査地では最も古い遺物で、小片で明確にし難いが、弥生中期にみられる蓋と推測される。胎土は精製され、色調は淡橙色や暗黄色を呈する。外面には細かく指頭圧痕が残る。

瓦類

平瓦(16～22) 16～20は斜格子や正方形の格子に「佐」の正字の叩きを施す。21は斜格子に「佐」の正字の叩きを施す。22は斜格子に「佐」の左字の叩きを施す。

丸瓦(23) 斜格子に文字を刻んだ叩きを施す。「佐瓦」の異体字か。

表土出土遺物 (Fig. 15)

須恵器

坏c(24) 低い高台を貼付する。底部外面に墨書が2文字残るが、1文字目が「相」もしくは「和」、2文字目が「戎」か。

瓦類

軒平瓦(25) 均整唐草文のような文様であるが、唐草文の中央付近から左行、右行となっている。焼成不良で色調は乳白色を呈する。

丸瓦(26～28) 26は斜格子や正方形の格子に「佐」の正字の叩きを施す。27はやや大きい格子に「佐」の左字の叩きである。28は枠を作り、その中に文字か記号がみられるが不明瞭。

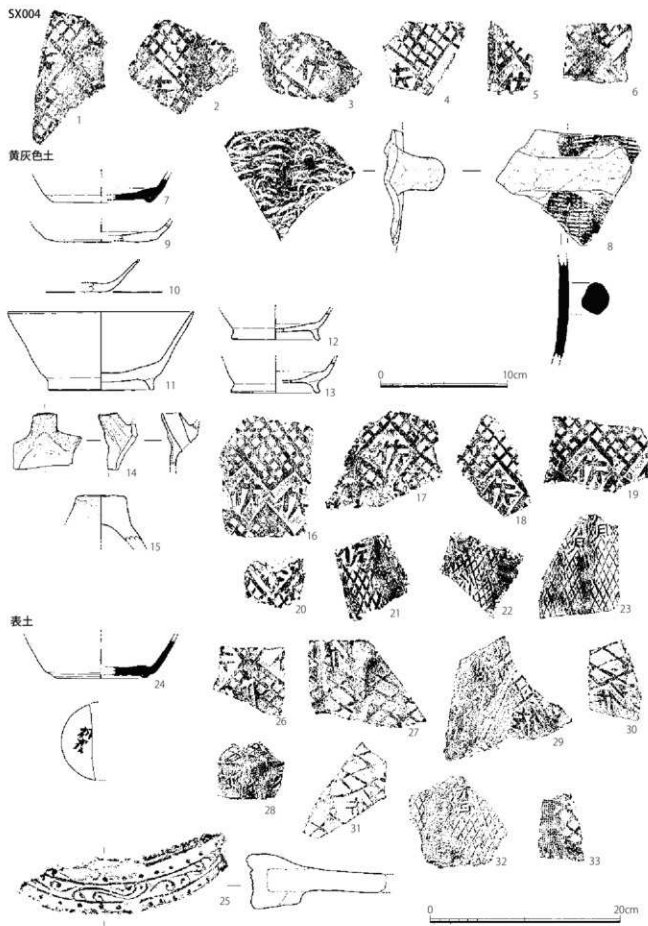


Fig. 15 143SX004・黄灰色土・表土出土遺物実測図 (1/3、瓦は1/4)

平瓦 (29～33) 29 は斜格子や正方形の格子に「佐」の左字の叩きを施す。30・31 はやや大きい格子に「佐」の左字の叩きを施す。32 は斜格子に文字を刻んだ叩き。「佐瓦」の異体字か。33 は桶巻きの布目が格子叩きの方にも残されている。

(5) 小結

今回の調査の主な所見は以下の通りである。

- ・ 流路の検出 (6 世紀中頃～9 世紀)。
- ・ 6 世紀中頃の未製品の須恵器の出土。
- ・ 「佐」銘文字瓦の出土。

調査の結果、調査地のほとんどが自然流路の埋没・整地で形成された土地であったことがわかった。ただし、整地面には顕著な遺構は展開せず、この地での目立った活動痕跡は確認できなかった。

整地 (SX020) から出土する土器の年代は、9 世紀中頃～後半と考えられ、調査地全体から出土する遺物も、10 世紀まで下るような土器は出土していない。SX020 をはじめ調査地からは「佐」銘文字瓦が約 20 点出土している。この文字瓦は調査地の北西 70m 付近にある松倉瓦窯で多く出土しているため、松倉瓦窯で生産された瓦のひとつと考えられている。松倉瓦窯については、窯の形態から 10 世紀前半と推測されているが、今回の調査から、瓦窯の時期は若干時期が通り、9 世紀代となる可能性が考えられる。

また、6 世紀中頃に埋没した溝 (SD015) からは、須恵器が多く出土したが、坏蓋と坏身が焼き付いたものや歪んだものなど未製品のものが多く出土している。これは北側の松倉丘陵に 6 世紀中頃の須恵器焼成窯が存在している可能性を考えさせる結果と言える。

参考文献 太宰府市『太宰府市史 考古資料編』1992

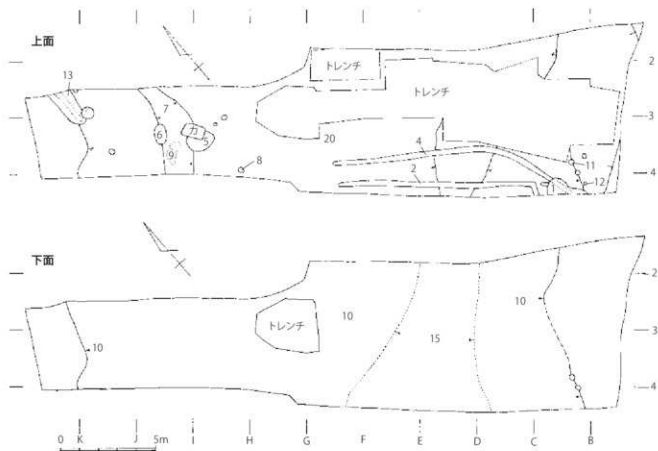


Fig. 16 第 143 次調査遺構略測図 (1/200)

表 3 第 143 次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1		カクラン	暗灰色砂土	平安以降	B4
2		溝(掘抜き)	竹使用	現代?	B~F4
3		?	暗褐色砂土(地山バ ^ツ 土を使用していると考え)		
4	143SX04	溝(掘ぬき?)	明褐色砂土(石、瓦列)		B~F3
5		土坑	暗灰色粘土		B3
6		土坑	暗褐色砂土	奈良時代?	I3
7		たまり	黄灰色砂土	平安前期	Iライン
8		ピット	淡茶色粘土	平安時代	B3
9		ピット			I3
10	143SD010	自然流路		8世紀後半~末頃	B~J
11		ピット		古代	B3
12		ピット			B4
13		溝			K2
14		杭列	暗灰色シルト	6世紀	
15	143SX015	自然流路	黒茶色土 木片多数	6世紀中頃	DE2・3
20	143SX020	整地層	明褐色土で調査	9世紀中頃~後半	E~J
	黄灰色土	第1面上層	遺構検出時の土色。瓦多い。	平安前期	
	淡灰色土		明褐色土+淡灰色土		
	淡灰色砂土			平安前期	

表 4 第 143 次調査 出土遺物一覧表

S-1	須 恵 器 羽環蓋、坏身、坏、坏c、甕、破片
	土 師 器 坏a、甕、甕?、破片
	国 産 磁 器 破片
	瓦 類 平瓦(調目、格子)、丸瓦(格子)
S-2	須 恵 器 羽環蓋、坏c、甕、鉢?
	土 師 器 坏a、坏c、破片
	国 産 磁 器 破片
	瓦 類 平瓦(調目、格子)
S-3 明褐色砂土	須 恵 器 羽環蓋、坏身、坏c、甕、甕x鉢
	土 師 器 坏a、坏c、破片
	肥前系陶磁器 破片(焼印?)
	瓦 類 平瓦(調目)
S-4	須 恵 器 羽環蓋、坏身、坏c、甕、甕?
	土 師 器 坏a、坏c、甕、破片
	国 産 陶 器 甕
	国 産 磁 器 陶、破片
	弥生土 甕
	瓦 類 平瓦(調目、格子)、平瓦(焼し瓦)、丸瓦(格子、無文)、破片
S-5 暗灰色土	須 恵 器 坏c、破片
	土 師 器 陶c、破片
	瓦 類 平瓦(調目)
S-6 暗褐色砂土	須 恵 器 甕
	土 師 器 坏a、坏c
	瓦 類 平瓦(調目)
S-7	須 恵 器 蓋1、蓋3、坏c、坏c、甕、甕、フタミ、破片
	土 師 器 坏a、坏c、甕、破片
	瓦 類 平瓦(調目、破片)、丸瓦(破片)
	金 属 製 品 銅淨
S-8 淡茶色粘土	須 恵 器 坏a、破片
	褐色土 土師A型 陶
	瓦 類 平瓦(調目)
S-9	瓦 類 平瓦(調目)
S-10 青灰色粘土	須 恵 器 蓋1、蓋3、甕c、甕c3、甕a、坏蓋、坏身、坏c
	土 師 器 坏a、坏a、坏c、甕、甕、甕、甕
	褐色土 土師A型 陶
	越州産高青磁 陶:1-2~(1)
	弥生土 甕
	瓦 類 平瓦(調目、格子、無文)、丸瓦(調目、無文)
	金 属 製 品 銅淨、9号
	石 製 品 碇石、石碇
	木 製 品 柱材?、曲物底板、板、木片
	そ の 他 炭
S-11	土 師 器 坏
S-12	須 恵 器 甕3

S-14 暗灰色シルト	須 恵 器 羽環蓋、甕
	土 師 器 破片
	木 製 品 木杭

S-15 黒茶色土	須 恵 器 羽環蓋、坏身、高坏?、甕
	土 師 器 坏(甕内赤)
	古式土 土師 器 高坏、甕
	弥生土 甕
	木 製 品 木片、チップ

S-20 淡灰色砂土	須 恵 器 羽環蓋、坏身、坏、甕、鉢?
	土 師 器 坏a、坏c、甕
	瓦 類 平瓦(調目)、丸瓦(調目、格子)、丸瓦(破片)

S-20 明褐色土	須 恵 器 蓋1、蓋3、甕c、甕a、坏蓋、坏a、坏c、甕、小甕、甕b
	土 師 器 甕3、甕a、坏a、坏c、陶c、甕、鉢?、破片
	褐色土 土師A型 陶
	灰 精 陶 器 甕
	緑 釉 陶 器 甕、破片
	越州産高青磁 陶:1-1b(1)、1-3x(4)(1)
	瓦 類 平瓦(調目、格子)、斜丸瓦、埴
	金 属 製 品 銅片(黒曜石)、軽石
	そ の 他 炭

黄灰色土	須 恵 器 蓋1、蓋3、坏蓋、坏身、坏a、坏c、高坏、高坏b
	甕、甕、甕c、鉢、フタミ
	土 師 器 坏a、坏c、鉢、甕
	坏、坏a、坏c、高坏、陶、陶c、甕、把手、把手?
	フタミ、甕、カマド?
	古式土 土師 器 破片
	緑 釉 陶 器 破片
	越州産高青磁 陶:1-5(1)、II(1)
	淡砂 高青磁 水注(1)
	肥前系陶磁器 破片
	国 産 陶 器 破片
	弥生土 甕
	瓦 類 平瓦(調目、格子、無文)、平瓦(焼し瓦)
	金 属 製 品 銅淨
	木 製 品 木片
	そ の 他 木炭

表土	須 恵 器 蓋3、甕c、坏身、坏a、坏c、高坏、甕、甕
	土 師 器 坏a、坏c、甕
	国 産 陶 器 陶(現代?)、甕、レンガ
	龍泉窯系青磁 大甕(1)
	国 産 陶 器 破片(1)
	瓦 類 平瓦(調目、格子、無文)、平瓦(焼し瓦)
	石 製 品 石炭

出土地不明	須 恵 器 甕、坏蓋、坏身、坏a、坏c、高坏、甕
	土 師 器 甕4、甕、甕
	褐色土 土師A型 破片
	瓦 類 平瓦(調目、格子、無文)
	そ の 他 木炭

3、第 161 次調査

(1) 調査に至る経緯

周知の遺跡である大宰府条坊跡内に所在する坂本 2 丁目 152-5 において、専用住宅建設の計画が地権者より提出され、建築物基礎構造から遺構面に到達する恐れがあったことから、遺構状況を確認する調査を事前に行った。結果として、現地表面下 0.54m に遺構面を確認したことから、文化財保護法第 57 条（当時）に基づき、記録保存のための調査を行った。

調査期間は、1994（平成 6）年 9 月 20 日から同年 10 月 2 日。開発対象面積は 142.62 m²、調査面積は 47.5 m² を測る。調査は中島恒次郎が担当した。

(2) 基本層位

現地表面下 0.54m に遺物包含層である黄茶色土が堆積し、その下位に茶黄色土の遺構形成面が確認できた。遺構面は 1 面で、その下位は基盤層として考えている。

(3) 検出遺構

極めて狭小な範囲の調査であったことから、検出できた遺構群の相互の関係まで掴むことはできなかった。

掘立柱建物

161SB001 (Fig. 17・18)

略四角形の掘方を有し、柱穴残存状況が極めて浅く、柱痕跡をかりうじて確認したものが 3 基、確認できなかったものが 3 基で、全ての柱穴から正確な柱間を計測することができていない。また、調査区の両端に確認した柱列について、柱 a と柱 e が平行していることを根拠に一括して建物としているが、別棟の可能性も残している。今後の隣接地における調査に委ねたい。

柱心々間の距離は、1.8m ～ 2.0m を測り、柱痕跡と認識した柱 a、柱 d、柱 e からは一つの柱痕跡のみが観察できている。他の 3 つの柱穴において柱痕跡が観察できていないことから、柱抜き取りによる廃絶の可能性も残す。

161SB005 (Fig. 17・18)

調査区東部に確認したもので、調査区東部に展開すると考えられるため、櫓の可能性も残す。なお、遺構延長が想定される南部分を拡張したが、柱痕跡が確認できていない。遺構残存状況によるものか、本来の形状であるのか掴み難いため、隣接地の調査に委ねたい。

161SB010 (Fig. 17・18)

調査区西域において検出したもので、略円形の掘方を有している。建物北東隅部分と考えられ、その規模については明らかにし難い。161SB005 同様に櫓である可能性も残す。残存する遺構から計測できる柱間は、0.9m ～ 1.1m を測る。柱痕跡を確認できたものは、柱 e だけであり、他の柱穴には確認できていない。

その他の遺構

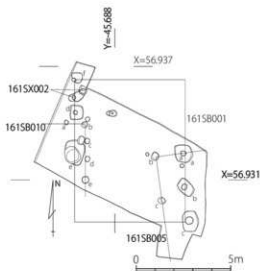


Fig. 17 第 161 次調査遺構全体図 (1/200)

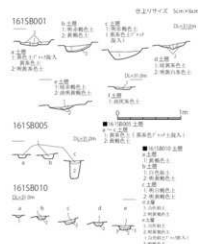


Fig. 18 第 161 次調査掘立柱建物土層実測図 (1/60)

161SX002

調査区北西部にて検出した小穴。性格は不明。

(4) 出土遺物

出土した遺物の多くは、奈良期に帰属するものと考えられる。遺物包含層からは窯壁の破片と考えられるものも出土していることから付近に所在している松倉瓦窯跡との関係が考えられる。その多くは、図示できるだけのものではなかったため、詳細は出土遺物一覧(表6)をご参照いただきたい。

掘立柱建物

161SB005c 出土遺物 (Fig. 19)

土師器

坏 d (1) 底部のみの破片資料で、焼成不良のため内外面の成形・調整痕跡は不明。色調が黄橙色系を呈し、器体が外方へ開く特徴を有する。

瓦類

丸瓦 (2) 玉縁部分のみの破片資料。凸面は回転ナデによって調整され、叩き痕跡を観察することはできない。凹面に布痕跡が観察できる。還元はやや良好で、色調は凸面・凹面ともに灰白色を呈している。

(5) 小結

狭小な面積の調査であったことから、遺構性格については掘立柱建物と考えられるもののみを検出した。土層観察からも分かるように、残存状況も極めて悪く、柱穴の形状のみから掘立柱建物と推定した。なお、出土した遺物からは、奈良後期に帰属するものと考えられるが、遺構形状から161SB001と161SB005・161SB010では想定される機能面から異なった建物であることが想定できる。

本調査区東方で確認している大宰府条坊跡第264次調査では、官衙域内に奈良末期に新たな条路が形成されるなど、官衙域から宅地としての機能転換が想定されているが、本調査区内では、奈良後期における掘立柱建物が発出されるなど、条坊跡の時間変化とともに官衙域と宅地としての機能転換の在り方について条坊域内の土地利用状況を細かく検討していく必要がある(大宰府市教委、2008)。

※遺構配置図において座標を記載しているが、座標値自体はCad図から入れ込んだものであり誤りはないものの、遺構図と座標の関係は遺構全体写真より遺構配置図を入れ込んだものであるため、各遺構の座標上での位置については大まかな位置として見ていただきたい。

【引用文献】 大宰府市教委『大宰府条坊跡 37』大宰府市の文化財第101集 2008

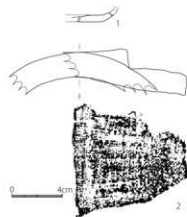
表5 第161次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	161SB001	掘立柱建物		奈良	C2ほか
2	161SX002	ピット群		奈良	C4
5	161SB005	掘立柱建物	161SB001→161SB005	奈良後期	B2ほか
10	161SB010	掘立柱建物	161SB001→161SB010	奈良	B3ほか

表6 第161次調査 出土遺物一覧表

S-1c	土 師 器破片
瓦	類破片(縄目)
S-2	土 師 器 類
S-5b	土 師 器 環、甕

S-5c	土 師 器 環
瓦	類丸瓦
黄褐色土	
須 恵	器 環、環a、壺b、窯壁?
土 師	器 破片
瓦	類破片

Fig. 19 第161次調査出土遺物
実測図 (1/3)

4、第190次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市坂本2丁目173-1、165-1、165-5で、小字「松倉」の低丘陵上に位置する。

1995(平成7)年6月16日、エース建設(株)より、共同住宅及び宅地造成の際の埋蔵文化財の取り扱いについての照会があった。1995(平成7)年7月26日確認調査前に雑木林の伐採を指示。1995(平成7)年12月21日に確認調査を行い、僅かに遺構を確認した。1995(平成7)年12月25日から調査開始時期、費用、残土の処理の問題等について協議を重ね、1996(平成8)年3月1日に費用については合意した。1996(平成8)年12月11日エース建設(株)より計画の変更に伴う費用の問題について再度協議を重ねた。そして、開発者の費用負担で1997(平成9)年3月3日から発掘調査を開始した。調査が進行するにしたがい、確認調査の結果とは異なり、掘立柱建物と並ぶなど遺構密度の濃い現場になり、調査進行は慌ただしいものとなったが、1997(平成9)年5月23日に終了した。調査対象面積2923.66㎡、調査面積1665㎡を測る。調査は宮崎亮一が担当した。

1997(平成9)年5月8日、調査成果についてマスコミに発表し、5月9日新聞に掲載された。5月10日には一般市民を対象とした現場説明会を行い、約90人の参加があった。

(2) 基本層位

調査地は、四王寺山から南西方向に派生する丘陵の先端部に位置し、標高43m前後であるものの、調査地からは遠く久留米の耳納連山まで見ることができる。

地形は調査区中央が高く(上段)、南北両側に段造成がある。北側には中段・下段の2段、南側は下段のみである。上段は西から東に向かって下がっており、上段の両端で3mの高低差がある。

表土は上層から順に、腐食土層0.2m、その下に暗赤褐色土が0.2m、さらにその下に明灰茶色土で、それを除去すると遺構がある明赤茶色土となる。遺構検出時の取り上げは明茶色土で行っている。なお、これら表土除去中に灰釉陶器の短頸壺が出土したが、バックホウで掘り返した後で、出土地点は特定できない。

(3) 検出遺構

竪穴住居

190S1020 (Fig.21)

調査区北側の丘陵下段で検出されたもので、東側が削平され、大きさは南北5.0m、東西3.1m以上である。最も良好に残る部分で深さ0.54mである。

カマドが住居の南辺で検出された。東側が削平され全形は不明だが、西寄りにカマドが設けられているようである。カマド壁は0.2m前後の厚さで、西壁に紫色に変色した部分があり、熱を受けたものと理解できるが、それ以外で焼け焦げた痕跡は確認できない。カマド内は幅0.9mの広さで、埋土は下層に炭が混じっていて、その上層には明灰土色がのっぺりして、カマド壁が崩落したものと推測される。カマド周囲には炭や灰、焼土が広がっているが、特にカマドの西側0.8mの空間には厚さ0.14m程の炭層が堆積し、須恵器も混じっている。炭層はカマドから掻き出され、集められたものと推測される。

床面は白っぽい土を含む赤褐色土で、その直上に草の根のようなものが張っていたため、埋土との差が明瞭であった。住居内床面にはピットが検出されたが、主柱穴と呼べるような明瞭なものは見当たらない。

住居側壁下には幅0.22m、深さ0.08mの溝が巡っている。この溝はカマド横の炭層の真下にも通り、カマド除去後もカマド中央付近まで続いている。カマドが後から取り付けられた可能性が高い。

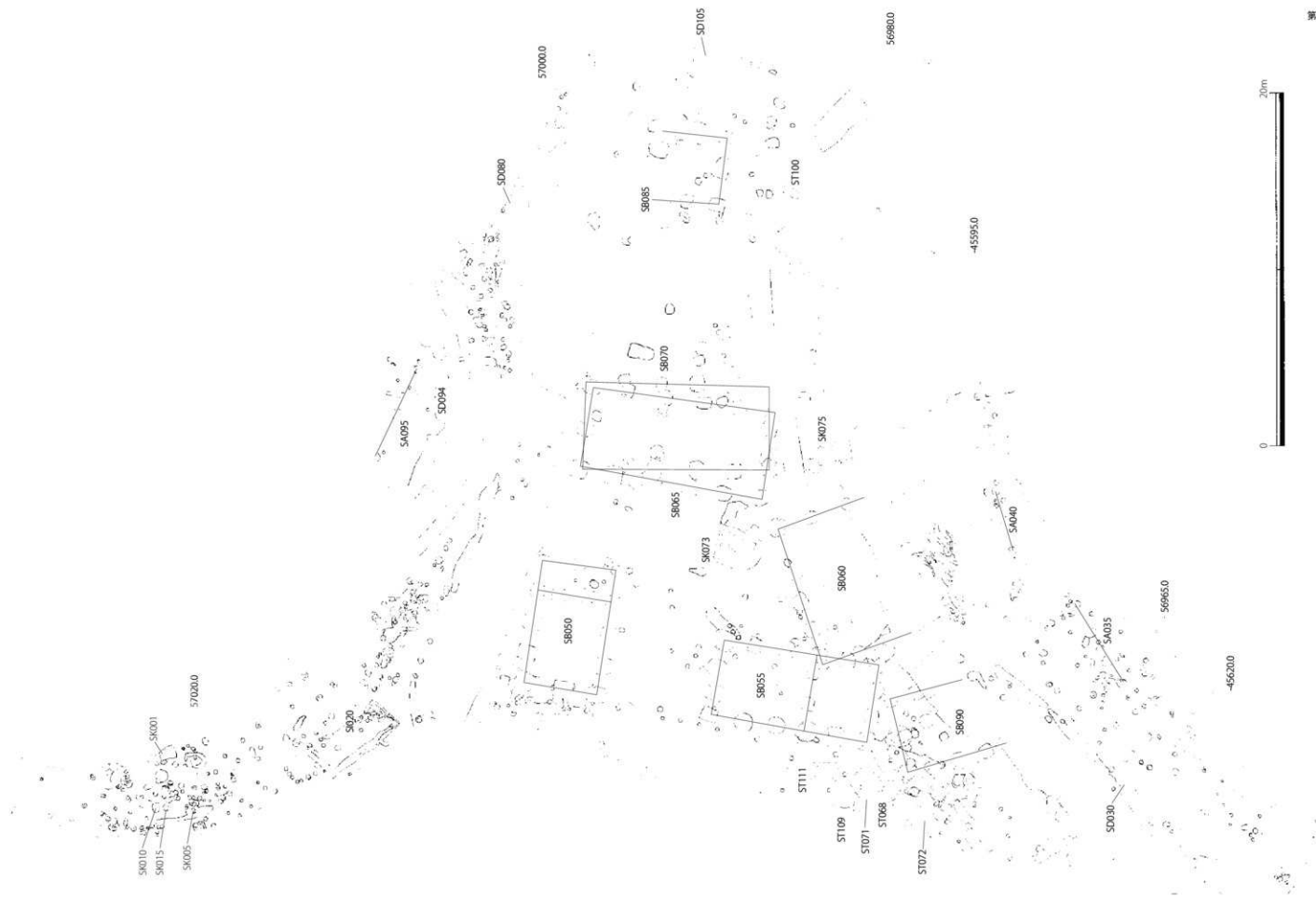


Fig. 20 第 190 次調査遺構全体図 (1/200)

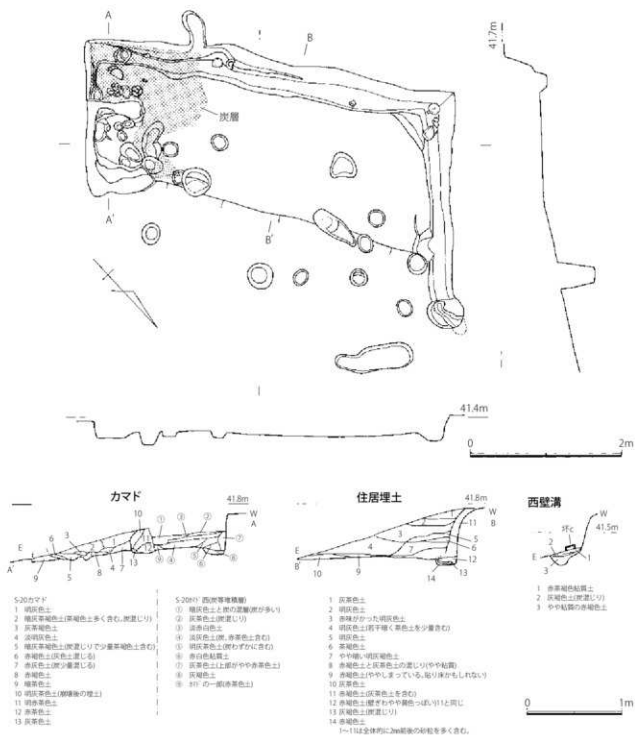


Fig. 21 190S1020 遺構実測図 (1/50, 1/40)

掘立柱建物

190S050 (Fig. 22)

東から1間目に間仕切りがある2×4間の東西棟の建物。振れはE-9° 9' 44" -S程度で、掘り方はほぼ方形で一辺0.5～1.12mで、東側ほど小さい。遺構面は東に向かって下がっているため、深さは西側が最も深く1.17mあり、東側で0.25m前後だが、掘り方底の標高は42～42.2mでおおよそ合っている。柱痕は明確に捉えることができなかったが、径0.15m前後と推測される。掘り方の埋土は全体として

茶灰色系の赤褐色土である。柱間は梁間約2.2m、桁行約1.8mで、全体として約4.4×7.2mの建物となる。間仕切りは柱間約1.46mの3間である。なお、北西隅の掘り方(a)上面で須恵器がまとまって出土しているが、ちょうど切株があったため、埋土との関係が不明である。また、建物の西側1m程には溝(SD045)が掘られている。北側にも一部続いている。溝幅は0.42～0.8m、深さは0.1～0.2m、溝両端の底面のレベルが遺構面より下がっているため、建物を囲んでいた可能性も考えられ、雨落ち溝や区画溝と考えられる。

190SB055 (Fig. 23・24)

北から3間目に間仕切りがある3×5間の南北棟の建物。振れはN-10° 53' 8" -E程度で、掘り方は方形や隅丸方形で大きさは一辺0.66～1.2m、遺構面は東に向かって下がっており、深さは最深0.98mで、掘り方底の標高は42m前後の高さで合わせてある。柱痕は径0.15m前後で、確認できた柱痕跡の状況から柱の抜き取りは行っておらず、丁寧に固めた埋土の状況も確認できる。柱間は梁間3間のうち中央が約1.2m、両側が約1.6mである。桁行は約1.8mで、全体として約4.5×9.1mの建物となる。間仕切りは他の掘り方よりやや小さく一辺0.65前後の方形である。

190SB060 (Fig. 25)

丘陵上段の南端に位置し、南辺は削平され未確認であるが、南側の丘陵下の遺構検出状況から丘陵は7m前後広がったと推測され、3×4間の東西棟の建物と推測される。振れはE-19° 1' 32" -N程度で、掘り方は不定円形で大きさは0.65～1.06m、深さは最深0.995mで、掘り方底の標高は41～41.5mの高さである。柱痕は径0.15m前後である。柱間は梁間約2.1m、桁行約2.0mと考えられるが、東側2間の柱間が約1.4mと2.6mとばらつきがみられる。全体として約6.3×8.1mの建物と推測される。190SB055によって切られている。

190SB065 (Fig. 26)

2×5間の南北棟の建物。振れはN-9° 49' 9" -E程度で、掘り方は方形もしくは不定円形で大きさは0.7～1.26m、全体的に削平され、深さは最深0.5mで、掘り方底の標高は41.2～41.7mである。柱痕は未確認である。柱間は梁間約2.4m、桁行約2.1mで、全体として約4.8×10.5mの建物となる。ほぼ同規模の190SB070によって切られている。

190SB070 (Fig. 27)

2×5間の南北棟の建物。振れはN-1° 31' 39" -E程度で、掘り方は方形や不定円形で大きさは0.42～1.3m、深さは最深0.35mで、掘り方底の標高は41.3m前後である。柱痕は明確ではないが径0.15m前後と推測される。柱間は梁間約2.45m、桁行約2.1mで、全体として約4.9×10.5mの建物となり、切り込んでいる190SB065とほぼ同規模である。

190SB085 (Fig. 27)

掘り方が削平されており、現状から2×2間以上の建物であるが、全形は不明である。おそらく南北棟と推測される。振れはE-3° 31' -S程度と推測される。掘り方は方形または不定円形で大きさは0.7～0.96m、深さは最深0.4mで、柱痕は径0.2m前後である。柱間は東西約1.9m、南北約1.8mである。

190SB090 (Fig. 28)

丘陵上段の南端に位置し、南辺は削平され未確認であるが、2×3間分の建物を確認した。南側の丘陵下の遺構検出状況から丘陵は4m前後広がったと推測され、建物は2×4間の南北棟と推測される。振れはN-11° 55' 15" -W程度で、掘り方はほぼ方形または円形で大きさは0.76～1.22m、深さは最深0.94mで、掘り方底の標高は41.3m前後である。柱痕は径0.15m前後で、柱の抜き取りは行われていない。柱間は梁間2.1m前後、桁行1.5mで、全体として4.1×6mの建物になると推測される。

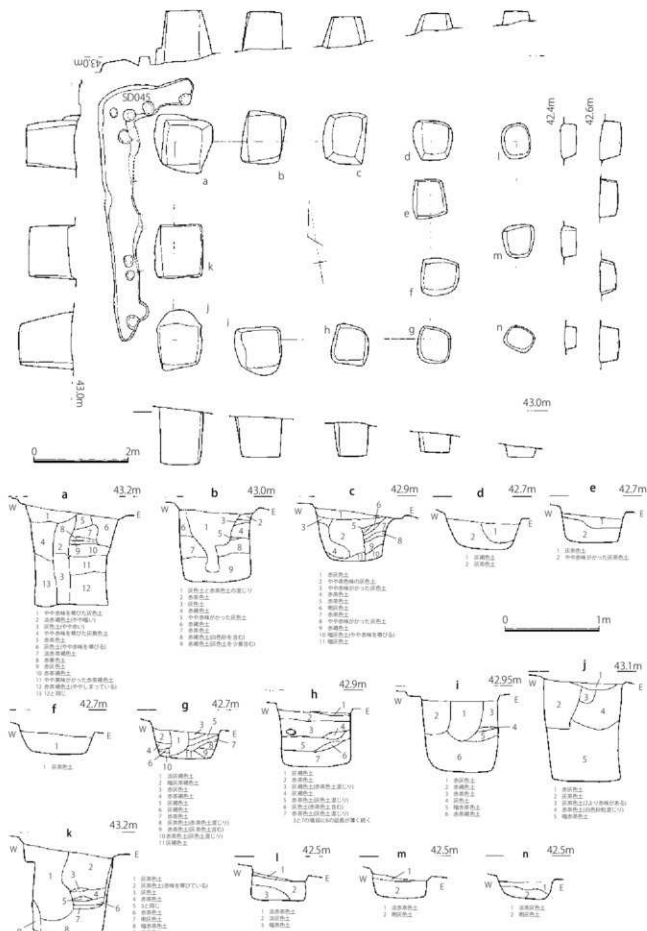


Fig. 22 190SB050 遺構実測図 (1/80, 1/40)

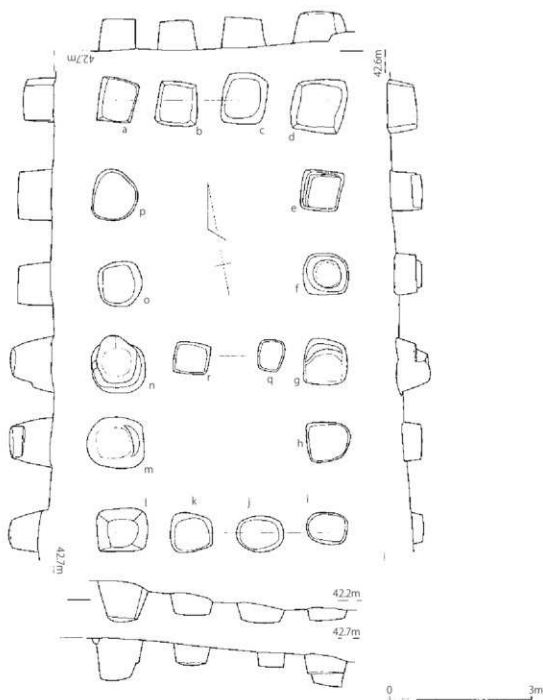


Fig. 23 190SB055 遺構実測図 (1/80)

柵列

190SA035 (Fig. 29)

南側下段で検出した3間の柵列で、柱間は1.6mと1.8m、振れはE-29° 34' -N程度である。掘り方は不定円形で径0.4～0.9m、深さは最深0.43～0.6mである。

190SA040 (Fig. 29)

南側下段で検出した2間の柵列で、柱間は1.8と1.7m、振れはE-16° 3' -N程度である。掘り方は円形で径0.4～0.5m、深さは最深0.4m前後である。

190SA095 (Fig. 29)

北側下段で検出した2間の柵列で、柱間は2.6m、振れはE-25° 54' -S程度である。掘り方は円形

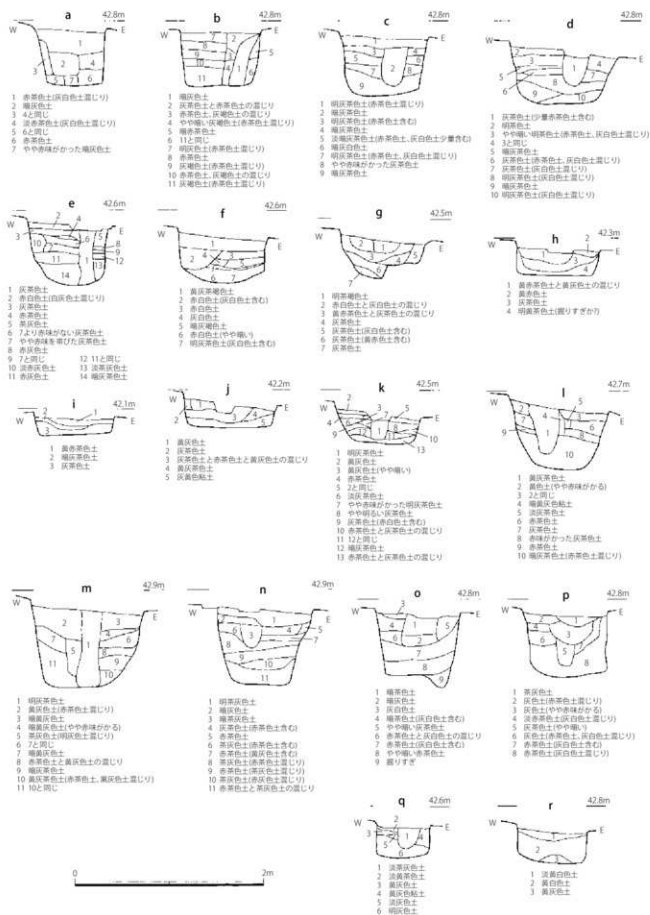


Fig. 24 190SB055 土層実測図 (1/40)

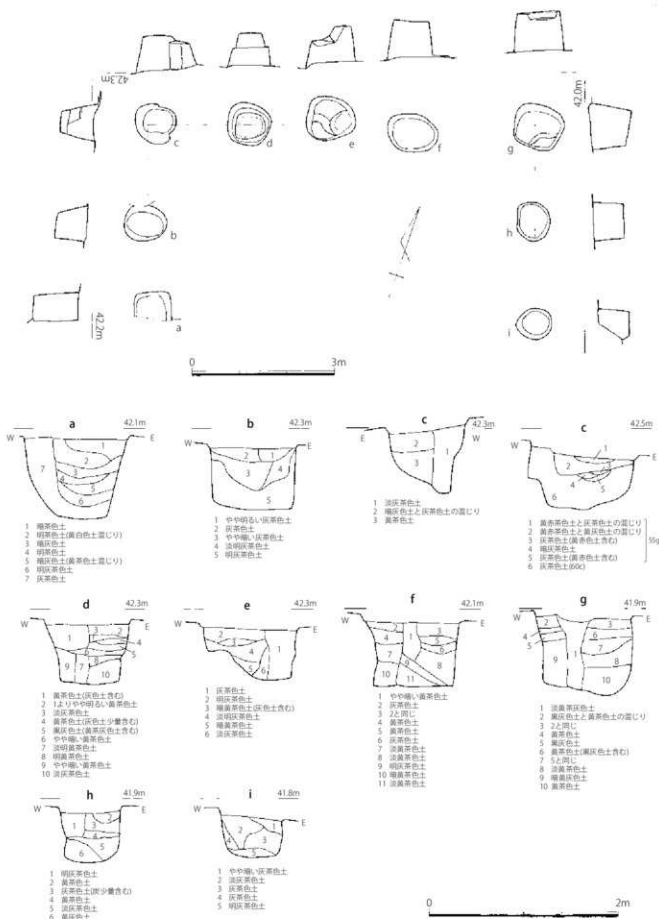


Fig. 25 190SB060 遺構実測図 (1/80、1/40)

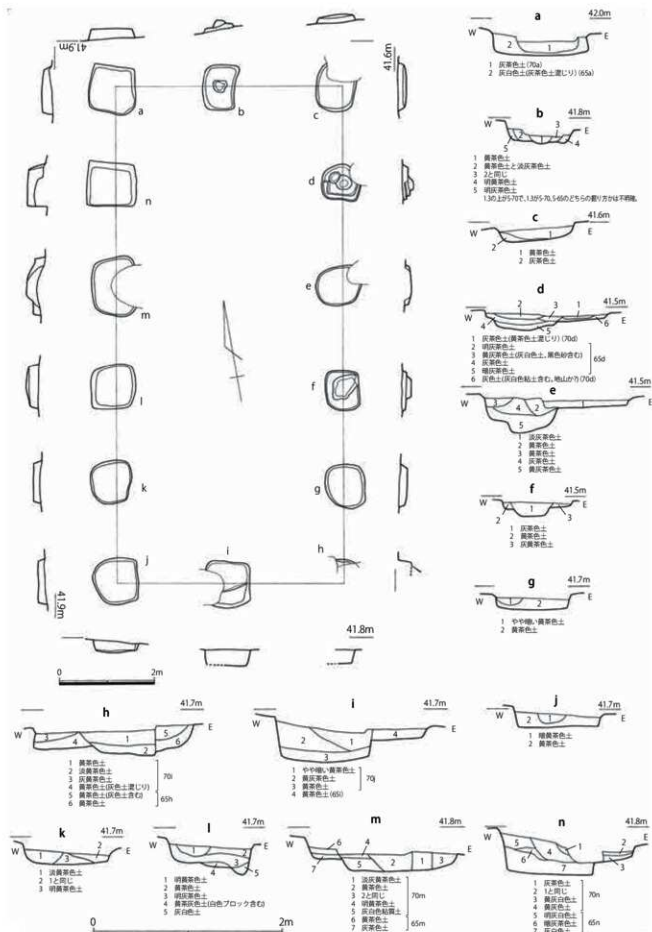


Fig. 26 190SB065 遺構実測図 (1/80、1/40)

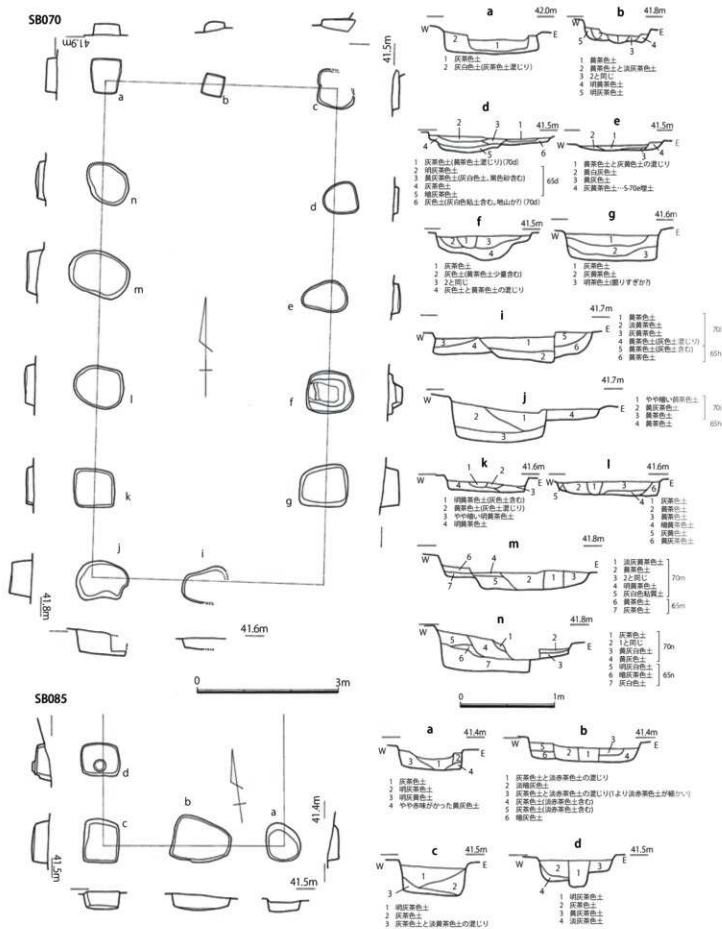


Fig. 27 190SB070・085 遺構実測図 (1/80、1/40)

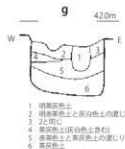
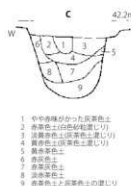
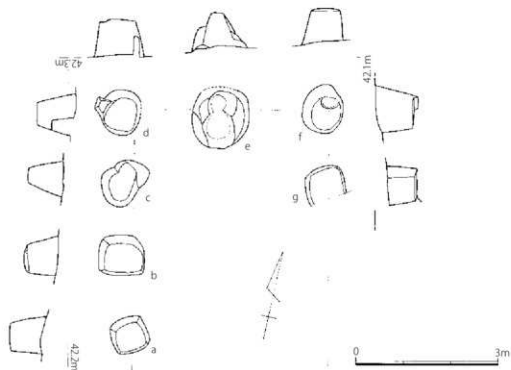


Fig. 28 190S090 遺構実測図 (1/80, 1/40)

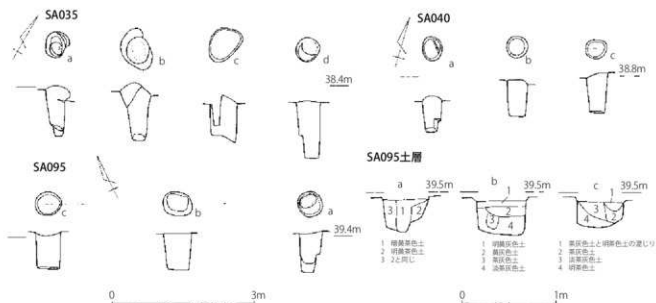


Fig. 29 190SA035・040・095 遺構実測図 (1/80、1/40)

で径0.48～0.6m、深さは最深0.47mで、柱痕は径0.15m前後である。

溝

190SD030

調査区南側の丘陵裾で検出された溝で、検出長17.6m、幅は一部広い部分もあるが、およそ0.4～0.6m、深さ0.15m前後である。等高線に対し若干横切って掘削されている。

190SD080

調査区北側の丘陵下段で検出された溝で、若干湾曲している。検出長5.6m、幅0.46～0.7m、深さ0.25mである。

190SD094

調査区北側の丘陵下段で検出された溝で、湾曲している。検出長10m、幅0.7～1.2m、最深0.2mで、底面は東に向かって僅かに下がっている。

190SD105

190SB085を横切る形で検出した東西溝で、溝は東に向かって広くなり、深くなっている。検出長11.0m、幅0.55～1.2m、深さ0.06～0.5mである。斜格子瓦が比較的多く出土した。

土師器甕棺

190ST100 (Fig. 30)

丘陵上面東側で確認した。3個の土器を縦半分分割り連結している。3つの甕はまず南北両側の甕を離して置き、その間を埋めるようにもうひとつの甕を置いている。3つ合わせた甕の長さは0.9m、幅0.47mで、甕を除去すると長さ0.9m、幅0.45～0.47m、深さ0.18m前後の楕円形状の土坑が確認されたが、特に目立った造作は行っていない。

土葬墓

190ST068 (Fig. 30)

大きさは1.3×0.9m、深さ0.86mの長方形の墓塚で、さらに底面には大きさ0.9×0.46m、深さ0.2mの長方形の掘り込みがあり、方形棺が納められていた痕跡と推測される。

190ST071 (Fig. 30)

大きさは1.44×1.36m、深さ1.53mの方形の墓塚である。

190ST072 (Fig. 30)

大きさは1.66×1.3m、深さ1.54mの方形の墓壇である。

190ST109 (Fig. 30)

調査区際で全形を捉えきっていないが、大きさは検出時1.6m×1.06m以上だが、深さ0.1m程で1.28×1.06m以上となり、深さ1.89mの隅丸方形の墓壇である。埋土は赤白色土の単一層で締まりがあまりない。底面近くで、僅かな人骨片と歯を確認した。人骨の残り具合は悪く、竹が腐ったような脆い状態であった。人骨の周囲は、埋土の赤白色土と異なり、円形に近い黒色土で、桶棺の痕跡と推測される。

190ST111 (Fig. 30)

大きさは1.58×1.16m、深さ1.06mの方形の墓壇である。さらに底面には径0.76～0.9m、深さ0.85mの円形土坑が掘られており、桶棺を設置していたものと推測される。

火葬墓**190ST115 (Fig. 35)**

掘立柱建物群が検出された丘陵上面の表土を、重機で除去中に灰釉陶器の壺が発見された。樹根や腐葉土等に混ざって見つかったため、正確な出土地点は不明である。その後の調査でも火葬墓の掘り方と認識できる遺構は確認されなかったため、上面が大きく削平された現況面から深さ0.5m未満の浅い位置に蔵骨器が置かれたものと推測される。内部は重機でローリングされたにも関わらず、炭、骨片が半分ほど残っていて、土師器碗の底部も入っていた。土師器碗については、蔵骨器の蓋として使用されたものと推測される。

焼土坑**190SK001 (Fig. 30)**

調査区北側の丘陵下段で検出されたもので、長辺0.91m、短辺0.46～0.63m、深さ0.22mの隅丸方形である。土坑の周壁は0.02～0.03mの厚さで焼けていて、内面は灰褐色に焼き固まっている。その外側は赤茶色で外側になるほど黄ばんでいく。埋土には炭層や焼壁が落下したような土質が検出され、最下層には0.03～0.06mの厚さで炭が堆積している。これら埋土を持ち帰り洗浄したが、鉄片など鍛冶に関係するものは出土していない。

190SK005

調査区北側の丘陵下段で検出されたもので、大きさは不定形で0.8×0.8m、深さ0.07m。埋土はやや粘質の暗茶褐色土や灰茶色土で、埋土には赤褐色土を多く含み、炭も少量含む。

190SK010 (Fig. 30)

調査区北側の丘陵下段で検出されたビットで、大きさは0.4×0.52m、深さ0.11mの楕円形。埋土の暗灰茶色土は炭を少量含み、最上層には赤褐色土ブロックも含んでいる。

190SK015 (Fig. 30)

調査区北側の丘陵下段で検出されたビットで、大きさは0.38×0.3m、深さ0.09mで、底面が2ヶ所さらに0.08m程窪んでいる。埋土の暗灰褐色土は炭を少量含む。

土坑**190SK073**

調査区上段の中央付近で検出された土坑で、大きさは2.65×2.2m、深さ1.06mで、埋土は黄灰色土であるが、側面等が不規則に乱れており、風倒木痕と推測される。

190SK075 (Fig. 30)

南側は削平されている。長さ2.22m以上、幅1.12m、深さ0.82mの南北に長い長方形土坑で、底面か

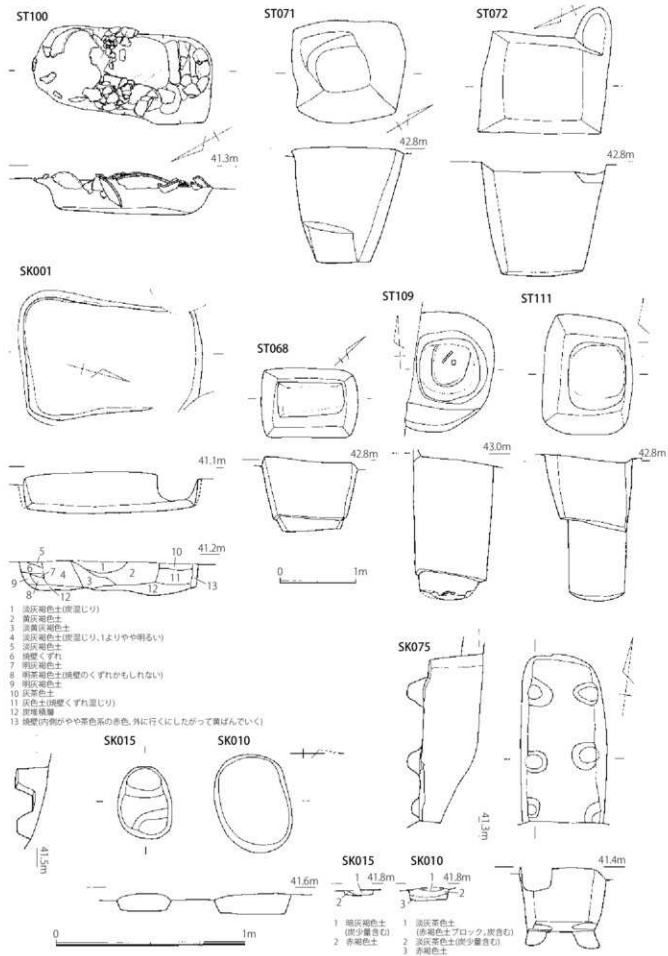


Fig. 30 第 190 次調査墓・土坑実測図 (1/50、土葬墓は 1/20)

らは径0.3m前後、深さ0.27m前後の6個のピットが確認された。ピットの埋土は土坑の埋土に比べ、しまりがなく軟らかい。

(4) 出土遺物

竪穴住居

190SI020 出土遺物 (Fig. 31)

須恵器

蓋 c3 (1) 復元口径 15.6cm、器高 2.8cm。内外面磨減し調整は不明瞭。口縁端部は僅かに掘んだ程度。0.3cm以下の白色砂粒を含み、色調は黄白色を呈する。

石製品

紡錘車 (2) 半分欠損する。径 5.0cm、厚さ 0.65cm、中央に径 0.7cmの円孔を穿つ。石材は緑青色の滑石製で、全面研磨するがややザラザラしている。

190SI020 北出土遺物 (Fig. 31)

須恵器

坏蓋 (3) 復元口径 14.0cm、器高 4.0cm。口縁部内面に僅かに段を有する。外面上半部が回転ヘラケズリ、その他内外面は回転ナデ調整。色調は暗灰色を呈する。

坏身 (4) 内外面回転ナデで胎土は 0.5cm以下の白色砂粒を含み、色調は黄灰色を呈する。

蓋 3 (5) 外面上部は磨減するが、それ以外の内外面は回転ナデ調整。色調は淡灰色を呈する。

土師器

蓋 3 (6) 内外面磨減し調整不明。胎土は 0.5cm以下の白色砂粒を僅かに含み、色調は淡橙黄色を呈する。

190SI020 南出土遺物 (Fig. 31)

須恵器

蓋 3 (7) 復元口径 13.0cm、器高 2.0cm。外面上半部がやや粗い回転ヘラケズリ、外面頂部ナデ、その他内外面は回転ナデ調整。色調は黄灰色を呈する。

坏身 (8、9) 8は口縁部内面にごく僅かに沈線が巡る。胎土は精製され、色調は黄灰色や灰白色を呈する。9は内外面回転ナデ調整。

土師器

小壺 (10) 口縁部は僅かに外反する程度。磨減し調整不明。色調は淡橙茶色を呈する。

190SI020 北西隅出土遺物 (Fig. 31)

須恵器

蓋 c3 (11) 復元口径 14.0cm、器高 3.55cm。全面磨減が著しい。胎土は 0.4cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は黄灰色を呈する。

蓋 3 (12、13) 12は復元口径 14.2cm、器高 2.0cm。外面上部は回転ヘラケズリ、内面上半部は不定方向のナデ、その他は回転ナデで、口縁端部は僅かに摘まむ。焼成不良で、色調は黄灰色を呈する。13の胎土は 0.5cm以下の白色砂粒を含み、色調は白灰色を呈する。

蓋 (14、15) 14は外面が回転ヘラケズリ、内面ナデ、胎土は 0.1cm以下の白色砂粒を含むが精製され、焼成還元やや不良で、色調は淡赤茶色や灰色を呈する。15の外面は回転ヘラケズリで、頂部に近い所は未調整。内面は回転ナデで、上部に近い部分はナデ。色調は黄灰色を呈する。

坏 (16、17) 内外面とも回転ナデ。胎土は精製されている。16の色調は暗灰色を呈する。17は還元不良で色調は淡赤茶色を呈する。

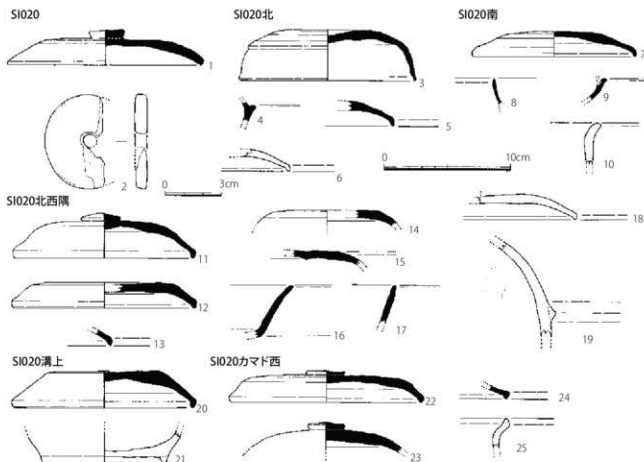


Fig. 31 190SI020 出土遺物実測図 (1/3, 2は1/2)

土師器

蓋 c3 (18) 口縁端部は摘まんだ程度。内外面磨減し調整不明。色調は淡橙黄色を呈する。

弥生土器

壺 (19) 内外面磨減するが内面はヨコハケと指頭圧痕が残る。胎土は0.2cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は黄褐色を呈する。断面三角形の突帯を貼付する。

190SI020 溝上出土遺物 (Fig. 31)

須恵器

蓋 a3 (20) 口径9.0cm、器高2.9cm。外面上部は回転ヘラ切り後強いナゲ調整。内面の3/4が一方方向のナゲ、その他は回転ナゲ調整。胎土は0.3cm以下の砂粒を含み淡灰色を呈する。

土師器

椀 c (21) 底部端に三角形の高台を貼付する。復元口径9.8cm。全体的に磨減し調整不明。色調は暗黄褐色を呈する。

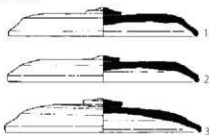
190SI020 カマド西出土遺物 (Fig. 31)

須恵器

蓋 c3 (22) 口径15.0cm、器高2.5cm。潰れたツマミを貼付し、外面上面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナゲの後一方方向のナゲ、口縁端部のみ回転ナゲ。胎土は0.3cm以下の白色砂粒をやや多く含み、色調は灰色を呈する。

蓋 c (23) 外面ツマミ近くが回転ヘラ切り後粗いナゲ、その他は回転ナゲ、内面上部は回転ナゲの後一方方向のナゲ。胎土は0.1cm以下の白色砂粒や黒色粒を多く含み、色調は淡灰色を呈する。

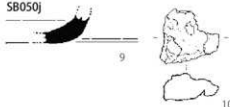
SB050a



SB055d



SB050j



SB055i



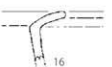
SB060d



SB060c



SB060i



SB065f



SB070f



SB070i



SA035b



0 10cm

Fig. 32 190SB050・055・060・065・070、SA035 出土遺物実測図 (1/3)

蓋 3 (24) 胎土は 0.1cm 以下の白色砂粒をやや多く含み、色調は暗灰色を呈する。

土師器

壺 (25) 口縁部は外反させながら端部を内湾させ立ちあげる。内外面磨減し調整不良。胎土は 0.1cm 以下の白色砂粒を含み、色調は暗黄茶色を呈する。

掘立柱建物

190SB050a 出土遺物 (Fig. 32)

須恵器

蓋 c3 (1~3) 口径 14.8~15.4cm、器高 2.1~2.6cm。胎土は 0.2cm 以下の白色砂粒をやや含み、色調は淡灰色を呈する。外面上面は回転ヘラケズリ、内面上部はナデ、その他は回転ナデ調整。

杯c(4~8) 復元口径13.9~14.8cm、器高4.15~5.3cm、復元高台径8.6~10.4cm。胎土は白色砂粒をやや多く含み、色調は淡灰色や暗灰色を呈する。内面底部ナデ、体部内外面回転ナデ。4・6は外面底部回転ヘラ切り後粗いナデ。5は外面底部回転ヘラ切り後未調整。8はかなり歪んでいる。

190SB050j 出土遺物 (Fig. 32)

須恵器

壺(9) 小片で全形が不明だが、外面底部はナデか、その他内外面は回転ナデ。胎土は0.2cm以下の白色砂粒や黒色粒を少量含み、色調は青灰色を呈する。

金属製品

鉾滓(10) 大きさ4.4×4.65cm、厚さ2.2cm。

190SB055d 出土遺物 (Fig. 32)

須恵器

甕(11) 外面ハケ状の平行叩き、内面当て具で、その上部は当て具をヨコナデで消している。胎土は0.5cm以下の白色砂粒を含み、色調は暗灰色を呈する。

190SB055l 出土遺物 (Fig. 32)

須恵器

坏蓋(12) 外面上半部回転ヘラケズリ、内面上部は一方のナデ、その他は回転ナデ。色調は暗灰色を呈する。

190SB060c 出土遺物 (Fig. 32)

須恵器

甕(13) 外面叩き、内面同心円の当て具痕が残る。胎土は0.2cm以下の白色砂粒をやや多く含み、焼成はやや不良で土師質。色調は暗黄褐色や暗灰黒色を呈する。

190SB060d 出土遺物 (Fig. 32)

須恵器

坏蓋(14) 外面上部は回転ヘラケズリ、その他内外面は回転ナデ。口縁部内面には段を有する。色調は暗灰色を呈する。

190SB060i 出土遺物 (Fig. 32)

古式土師器

壺(15) 胎土は0.2cm以下の白色砂粒を含み、色調は暗黄色を呈する。内外面磨減し調整不明。

甕(16、17) 16は磨減するが、体部内面はヨコハケのように見える。胎土は0.2cm以下の白色砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。17は頸部もしくは体部下半の一部と推測される。外面は細かいタテハケ、内面は磨減。胎土は0.2cm以下の白色砂粒を含み、色調は暗黄褐色を呈する。

190SB065f 出土遺物 (Fig. 32)

土師器

甕(18) やや薄い器面で、胎土は0.5cm以下の白色砂粒を含み、色調は黄灰色を呈する。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ調整。

190SB070f 出土遺物 (Fig. 32)

須恵器

甕(19) 外面ハケ状の叩き、内面は当て具痕が残る。色調は内面暗灰色、外面明灰色を呈する。

古式土師器

鉢(20) 胎土は0.1cm以下の白色砂粒を含み、色調は暗黄色を呈する。焼成不良で磨減するが内面

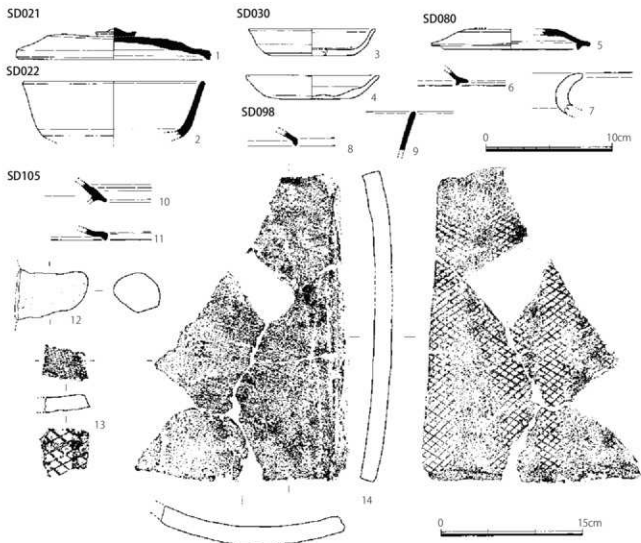


Fig. 33 第 190 次調査溝出土遺物実測図 (1/3、13・14 は 1/4)

には細かいタテハケが残る。

甕 (21) 口縁部内外面ヨコナデ。胎土は 0.3cm 以下の白色砂粒を多く含み、色調は淡橙黄色を呈する。

櫛列

190SA035b 出土遺物 (Fig. 32)

須恵器

高坏 (22) 脚部径 10.85cm、内外面とも回転ナデ。色調は暗青灰色を呈する。

土師器

甕 (23) 磨減が目立つが、内外面ともヨコナデのように見える。胎土は 0.3cm 以下の白色砂粒や茶色粒を含み、色調は淡黄茶色を呈する。

溝

190SD021 出土遺物 (Fig. 33)

須恵器

蓋 c3 (1) 若干歪んでいるが、口径 15.4cm、器高 2.45cm。外面上半部は回転ヘラケズリ、内面上半部は不定方向のナデ、その他内外面は回転ナデ。胎土は 0.4cm 以下の白色砂粒を含み、色調は暗青灰色を呈する。

190SD022 出土遺物 (Fig. 33)

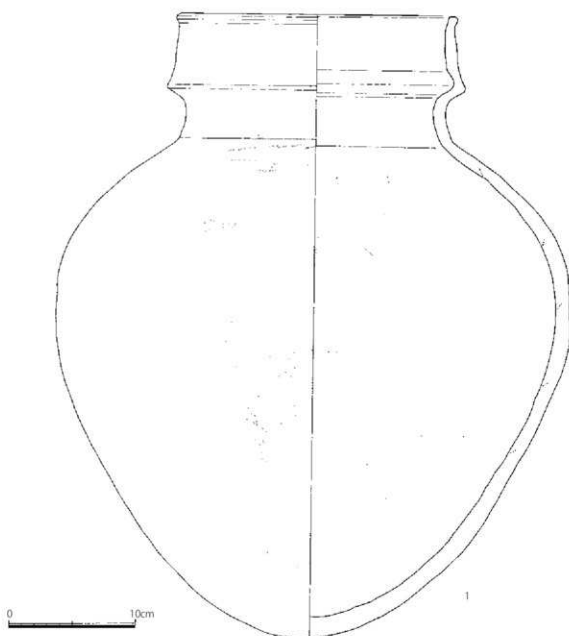


Fig. 34 190ST100 出土遺物実測図 (1/3)

須恵器

坏 c (2) 胎土は0.2cm以下の白色砂粒を含み、色調は灰茶色で、内外面とも回転ナデ。

190SD030 出土遺物 (Fig. 33)

土師器

小皿 a (3, 4) 3は復元口径10.0cm、器高2.15cm、復元底径7.4cm。底部は回転ヘラ切りでその内外面は回転ナデ。色調は淡黄茶色や暗灰色を呈する。4は口径10.6cm、器高1.9cm、底径7.4cm。内面に回転ナデを残すが、その他は磨減し調整不明。色調は淡黄橙色を呈する。

190SD080 出土遺物 (Fig. 33)

須恵器

蓋 1(5,6) 胎土は0.1cm以下の白色砂粒を含む。5は復元口径10.6cm。外面上半部は回転ヘラケズリ、それ以外は回転ナデ。色調は淡灰色を呈する。6は内外面回転ナデで、色調は暗灰色を呈する。

土師器

甕 (7) 胎土は 0.4cm 以下の白色砂粒を含む。内外面磨減し調整不明。色調は淡橙黄色を呈する。

190SD098 出土遺物 (Fig. 33)

須恵器

蓋 3 (8) 胎土は 0.5cm 以下の白色砂粒を含み、内外面回転ナデで、色調は灰色を呈する。

坏 (9) 胎土は 0.5cm 以下の白色砂粒を含み、内外面回転ナデで、色調は淡灰色を呈する。

190SD105 出土遺物 (Fig. 33)

須恵器

蓋 1 (10) 胎土は 0.1cm 以下の白色砂粒を含み、色調は暗黄灰色を呈する。口縁部は回転ナデでその上面は回転ヘラケズリ。

蓋 3 (11) 胎土は精製され、色調は暗黄灰色を呈する。内外面とも回転ナデ調整。

土師器

把手 (12) 胎土は 0.2cm 以下の白色砂粒をやや多く含み、色調は淡橙色を呈する。ナデ調整。

瓦類

平瓦 (13、14) 13 は菱形の格子叩きで内面粗い布目痕。色調は淡灰色を呈する。14 はやや小さな格子叩き。内面布目痕。色調は灰色を呈する。側面は半分までヘラ切りし切断している。

甕棺

190ST100 出土遺物 (Fig. 34)

古式土師器

甕 (1) 現場では割った状態で利用されていたが接合するとほぼ 1 個体となる。復元口径 22.2 cm、器高 49.0 cm。底部はやや尖り気味に丸く自立はできない。口縁部は二重口縁となる。口縁部内外面はヨコナデ、頸部外面はタテハケ後ナデか。胴部外面は細かいハケ、内面上半部はタテハケ、下半部はヘラケズリで、内面は全体的に煤が付着する。胎土は 0.3 cm 以下の白色砂粒を多く含み、色調は薄黄褐色を呈する。4 世紀代。

火葬墓

190ST115 出土遺物 (Fig. 35)

土師器

甕 (1) 壺内部から出土したもので、蔵骨器の蓋に利用されていたものと推測される。高台径 8.5cm。胎土は精製され、色調は黄灰色を呈する。

灰釉陶器

四耳壺 (2) 蔵骨器として使用されていたもの。内部には炭と骨片が入っていた。口径 7.7cm、器高 16.4cm、高台径 14.5cm、耳と口縁部の一部でごく僅かに欠損がみられるがほぼ完形である。胎土は 0.4cm 以下の砂粒を少量含み、やや黄色味を帯びた灰色を呈する。外面は肩部から口縁部そして内面にかけては回転ナデ、胴部外面は回転ヘラケズリ、高台は回転ヨコナデ、底部外面は回転ヘラケズリ。口縁部直下の外面には口縁部を絞り込み、成形する際についたとみられるヒビ割れ痕跡が巡る。軸は厚い

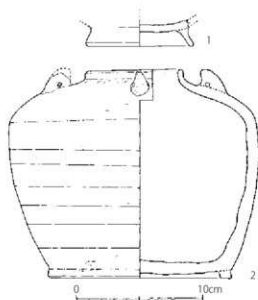


Fig. 35 190ST115 出土遺物実測図 (1/3)

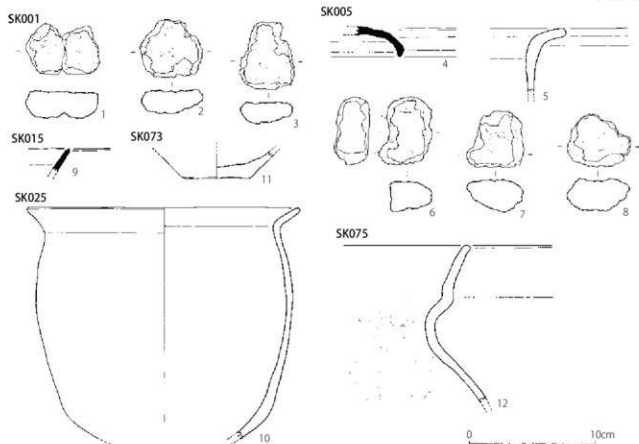


Fig. 36 第190次調査土坑出土遺物実測図 (1/3)

部分では黄色味の強い灰緑色で、薄い部分では黄灰色を呈する。口縁部外面から肩部にかけては軸が厚く、胴部以下は薄く軸が垂れ、ムラがある。内面底部には軸が掛かるが自然軸か施軸したものかは判別できない。底部外面には粘土が付着する。これは焼成時の窯具痕の可能性も考えられる。肩部には4ヶ所耳を貼付する。耳には0.3cm前後の円孔が穿たれている。

土坑

190SK001 出土遺物 (Fig. 36)

土製品

土壁 (1～3) 胎土は0.4cm以下の白色砂粒を多く含み、茶色粒を含む。色調は薄黄茶色や薄橙茶色を呈する。平らな面が土壁の外面の可能性が考えられる。

190SK005 出土遺物 (Fig. 36)

須恵器

蓋3 (4) 外面上半部は回転ヘラケズリ後ナデか。その他内外面は回転ナデ。胎土は0.3cm以下の白色砂粒や黒色粒を含み、色調は淡灰色を呈する。

土師器

甕 (5) 胎土は0.4cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は黄褐色を呈する。磨減し調整不明。

土製品

土壁 (6～8) 胎土は0.4cm以下の白色砂粒を多く含み、茶色粒やササも混じる。色調は薄黄茶色や薄橙茶色を呈する。平らな面が土壁の外面の可能性が考えられる。

190SK015 出土遺物 (Fig. 36)

須恵器

坏 (9) 内外面回転ナデ調整で、色調は明灰色を呈する。

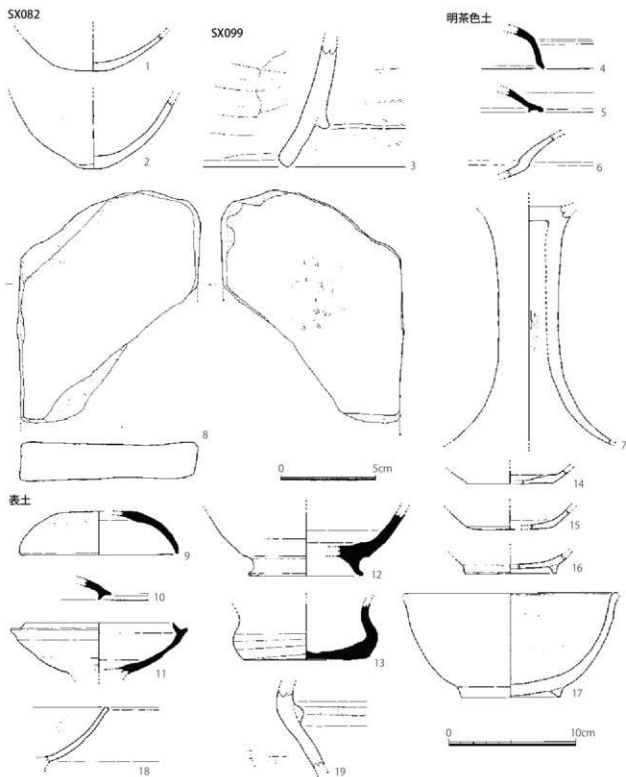


Fig. 37 第 190 次調査その他の遺構・表土出土遺物実測図 (1/3、8は 1/2)

190SK025 出土遺物 (Fig. 36)

土師器

甕 (10) 口径 21.6cm。胎土は 0.5cm 以下の白色砂粒を含み、色調は橙茶色を呈する。内外面磨滅し調整不明。

190SK073 出土遺物 (Fig. 36)

弥生土器

甕 (11) 胎土は0.3cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は暗黄色を呈する。内外面磨減し調整不明。

190SK075 出土遺物 (Fig. 36)

古式土師器

二重口縁壺 (12) 外面は磨減が目立つが、口縁部ヨコナデ、頸部はタテハケの後ヨコナデ、体部はミガキのような痕跡が見える。口縁部内面はヨコナデ、頸部内面は指頭圧痕のあとヨコハケ、体部内面はヘラケズリの後丹塗りしている。胎土は0.3cm以下の白色砂粒を含み、色調は暗黄褐色を呈する。

その他の遺構

ここでは、主要遺構に伴わないもので、この丘陵の利用した年代幅を知る手がかりとなる資料や用途が不明瞭な遺物を中心に抽出し報告する。

その他の遺構出土遺物 (Fig. 37)

古式土師器

甕×壺 (1、2) 2点ともSX082より出土。胎土は0.2cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は暗黄色や黒灰色を呈する。全体的に磨減し調整不明。1は丸い底部。2の底部はわずかに出っ張った底部。外面の一部にはタテハケが残る。

弥生土器

用途不明品 (3) SX099より出土。胎土は0.5cm以下の白色砂粒を多く含む。弥生土器として報告するが、円筒埴輪にも似た胎土や焼成具合でもあり、破片ゆえに全形が不明瞭である。色調は淡橙黄色を呈する。内面はヘラケズリ、外面にはヨコハケで、突帯とは言い難い段のようなものが付いている。

明茶色土出土遺物 (Fig. 37)

須恵器

坏蓋 (4) 口縁端部内面と外面には段を有する。内外面とも回転ナデ。色調は淡灰色や黒灰色を呈する。

蓋1 (5) 外面上部は回転ヘラケズリ、その他内外面は回転ナデ。色調は明灰色を呈する。

弥生土器

高坏 (6、7) 6は坏部の屈曲部で、内外面磨減し調整不明。色調は暗黄褐色を呈する。7は脚部で内外面磨減し、内面上部に工具痕が残る。胎土は0.2cm以下の白色砂粒を含み、色調は淡黄褐色を呈する。

石製品

砥石 (8) 砂岩のような扁平な石材で幅は14.1cm、厚さは最大3.0cm。側面は僅かに研磨痕があり、表裏面は明確に研磨され、片面には工具が当たったような痕跡を残す。

表土出土遺物 (Fig. 37)

須恵器

坏蓋 (9) 復元口径12.6cm、器高3.4cm。外面上半部は手持ちヘラケズリ、内面頂部はナデ、その他は回転ナデ。色調は暗灰色を呈する。

蓋1 (10) 内外面とも回転ナデ。胎土は0.1cm以下の白色砂粒を含み、色調は暗灰色を呈する。

高坏 (11) 復元口径14.0cm。外面下半はカキ目、内面底部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ調整。胎土は精製され、色調は明灰色を呈する。

壺 (12、13) 12は外開きの高台を貼付し、復元高台径9.0cm。体部内外面は回転ナデ。色調は青灰色や黒灰色を呈する。13は底径9.9cm。胎土は0.2cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は淡灰色を呈する。外面底部は回転ヘラ切り後粗いナデ。その他内外面は回転ナデ調整。

土師器

杯 a (14、15) 2点とも磨滅し調整不明。色調は暗黄色を呈する。14は復元底径6.8cm、15は復元底径7.0cm。

碗 c (16) 復元高台径7.3cm、内外面磨滅し調整不明。色調は淡黄色を呈する。

黒色土器

碗 c (17) 復元口径17.2cm、器高8.2cm、高台径7.3cm。胎土は淡橙黄色を呈し、高台は断面三角形、口縁部はごく僅かに外反する。内面は黒化しミガキ c を施す。A類。

碗(18) 磨滅が目立つが内面にはミガキ c が僅かに残る。胎土は0.5cm以下の白色砂粒を僅かに含み、色調は黄褐色を呈する。A類。

弥生土器

壺(19) 壺の頸部付近とみられ、頸部外面には刻み目のある突帯を貼付する。内面は細かいヨコハケ。胎土は0.2cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は暗黄褐色を呈する。

(5) 小結

今回の主な調査所見は以下のとおりである。

- ・奈良時代の掘立柱建物7棟検出。
- ・奈良時代の堅穴住居1棟検出。
- ・灰釉陶器の蔵骨器の出土。

○土地利用の変遷

【古墳時代】

この丘陵の土地利用の初見は、4世紀後半の土師器甕棺墓(ST100)、土坑(SK075、SK082)など丘陵上面の南側を中心に遺構が見られる。

【7世紀～8世紀】

掘立柱建物群の時期である。掘立柱建物は7棟確認されたが、SB050以外出土する遺物は少なく、建物の時期を特定するのは難しい状況である。よって、建物の方向や切り合い等から建物の時期は以下の3時期に分かれるものと考えられ、年代も廃絶年代と推測される。

(7世紀後半?)・・・SB060、SB090、SA035

方位は西よりやや南に振れる建物で、丘陵の南辺部に立ち並ぶ。7世紀中頃～後半の僅かな遺物からではあるが、白村江の戦い直後に掘立柱建物を建てたものと推測される。

(8世紀前半～中頃)・・・SB050、SB055、SB065、SB085、SI020

方位はすべて北に對しやや東に振れる。この建物の規模が最も大きくなる。堅穴住居もこの頃である。大宰府政庁Ⅱ期と同様に官衙施設の再整備にあたり、この地の建物も建て替えられたのではないかと推測される。

(8世紀後半?)・・・SB070、(SB050?、SB055?、SB085?)

方位は真北より若干東に振れる。SB065を建て替えたSB070が確認されている。他の建物は前代のまま残されていた可能性が高い。

調査地の西側の土地は、調査地から約18°の角度で約1m高くなっている。現在住宅が建っているが、古地形図から平坦面が宅地以前から存在していたようで、古代に人為的に造成され、建物を配していた可能性が高い。これは今回検出した建物群が調査地内で収まっていることから理解できる。よって、

この松倉丘陵西側の未調査部分には同様の掘立柱建物が建ち並んでいたものと推測される。

調査地のある松倉丘陵は、大宰府政庁周辺にみられる低丘陵の中で最も西側に突き出た見渡しの効く丘陵であり、周辺では御笠軍団と遠賀軍団の軍団印が出土しているため、大宰府の防衛に関連した施設のひとつではないかと想像したいところであるが、調査地の出土遺物は少なく、また特異な遺物もみられないため、建物群の性格を決めることは難しい。

【9世紀以降】

9世紀になると官衙的な遺構は全くなくなり、灰釉陶器の蔵骨器にみるように墓地として利用できる立地となっている。よって、官衙的な土地利用は、100年間もなかったということになる。また、平安初期に条坊内のこの場所に墓地が造られることに一見違和感がある。しかし、調査地は、鏡山猛氏の条坊案では条坊内に位置するものの、近年の調査事例から導き出された井上信正氏の条坊案では、政庁Ⅱ期の右郭は8坊までしか存在しなかったと推測されており、条坊一区画90m四方の井上条坊案からすると、この丘陵はちょうど条坊外ということになる。また、近年条坊の北東部、つまり筑前国分寺を囲む丘陵や周辺部で奈良・平安時代の墳墓（妙見遺跡第1次、堀田遺跡第2次、サコ遺跡第1次）が確認されていることから、墳墓が都市部周辺に点在している様子が窺える。

また、平安時代には、丘陵上面や裾部に溝（190SD105・190SD030）が掘られ、調査地南側を大きく削るような造成が行われたものと考えられる。

○近現代の調査地一帯の状況

調査地の丘陵と周辺状況について、地元の古老の話を聞き取ることができたので、記録しておきたい。

- ・この丘陵上面には村立の伝染病隔離施設（避病院）が昭和30年代くらい？（戦前までという人もいる）まであったという。平屋建ての建物が1棟あったが、大きな建物ではなく、国分寺へ向かう南北道路からは全く見えなかった。
- ・調査地南側を通る市道は、昔はなくて、調査区内の南側の下段に小道が続いていた。
- ・調査地の丘陵は南側にも続いていた。その続きの丘陵は、昭和7年に国道3号線（現県道112号線）建設に伴う土取りで半分ほど削平された。その後残った山に地権者が信濃梅を植えていたことから地元の人々は「梅山」と呼称していた。今回の調査地はその梅山の北側に位置しており、梅山ではないという。
- ・古老から聞いた話だとこの山にはお墓があったと言っていたらしい。
- ・梅山は山が高く、また、調査地の丘陵は樹木がうっそうと茂っていた。また、国分寺から国道までは人家もなかったため怖かったという。
- ・国分寺前の通りは、戦前はトラックが1台通るくらいの道幅4mくらいだった。道は真っ直ぐだった。
- ・調査区東側を南北に続く市道は戦前からあったが、道幅は現在の1/3程であった。戦後すぐに調査区側の丘陵を削り拡幅したといい、拡幅工事の際は土砂崩れ事故が起き、女性1人が亡くなったという。
- ・梅山と第190次調査地の間に昭和の中頃まで小さな池があった。近所の畑用の池だろう。水は湧いてないし、池の名前もない。雨が降ればちょっと溜まる程度だった。
- ・伝染病の隔離施設のある山の東側道端には、大きなヤマモモが道路に覆いかぶさっていた。それには実がいっぱいになっていた。



Fig. 38 第190次調査遺構略測図 (1/200)

表7 第190次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	190SK001	焼土坑			OP25
2		土坑	灰茶色土	古代	P25・26
3		ビット群			Q26・27
4		ビット			P26
5	190SK005	焼土坑		8世紀前半?	Q24
6		ビット群			P25
7		ビット			P25
8		ビット		古代	P25
9		ビット		奈良時代?	P24
10	190SK010	焼土坑		古代?	Q25
11		土坑		古代	Q24
12		ビット		奈良時代	N22・23
13		土坑			P24
14		ビット		平安前期	P24
15	190SK015	焼土坑		古代	Q25
16		ビット	S-11土坑の中のビット	古代	Q24
17		ビット群			P25
18		ビット群		古代	MN21
19		ビット群			P26
20	190S1020	竪穴住居		8世紀前半	OP21・22
21	190SD021	溝もしくは土坑	S-22の続き?	8世紀前半	Q24
22	190SD022	溝		8世紀	Q24・25
23		ビット		8世紀前半	Q24
24		土坑			M20
25	190SK025	土坑		8~9世紀	M20
26		土坑		古代	M20
27		ビット群		奈良時代	M20
28		土坑		古代	M20
29		土坑			M21
30	190SD030	溝	赤褐色土	X期頃(10c後~11c前)	R~P・5~7
31		ビット群	灰茶色土	古代	N20・21
32		溝	灰茶色土		NO20
33		ビット群	灰茶色土		P22
34		ビット	灰茶色土	平安	O7
35	190SA035	欄列	灰色土	7世紀後半	MN7
36		ビット	灰茶色土		O8
37		ビット	灰茶色土		N8
38		ビット	灰茶色土		N9
39		ビット	灰色土		P6
40	190SA040	欄列	灰色土	古代	KL9
41		ビット群	灰色土	8世紀	N6
42		ビット群	灰色土	8世紀	N7
43		土坑	灰色土	古代	L9
44		ビット	灰色土		M8
45	190SD045	溝	S-50に伴うもの		O17・18
46		ビット	灰色土	古代?	L9
47		ビット	灰色土	古代	M8
48		ビット群	灰色土		K9
49		ビット	灰色土	9世紀初頭	K9
50	190SB050	掘立柱建物	2×4間の東西棟	8世紀前半~中頃	L~O・16~18
51		ビット	灰色土		J9
52		ビット	灰色土	現代	J9
53		ビット	灰色土		I9
54		土坑		奈良時代	O17
55	190SB055	掘立柱建物	3×5間の南北棟、S-60-65	8世紀前半~中頃?	NO11~15
56		土坑			O18
57		ビット群			NO15

58		ビット群			OP13
59		ビット群			MN13・14
60	190SB060	掘立柱建物	3×4間の東西棟 S-60→55	7世紀?	K-N・11~14
61		柱穴の掘り方			M12
62		ビット			N11
63		土坑			N11
64		ビット			O11
65	190SB065	掘立柱建物	2×5間の南北棟 S-65→70	8世紀前半~中頃?	I-K・13~17
66		ビット			P12
67		ビット			M13
68	190ST068	墓		近世~近代?	P11
69		ビット群			L16
70	190SB070	掘立柱建物	2×5間の南北棟 S-65→70		IJ・13~17
71	190ST071	墓		近世~近代?	P12・13
72	190ST072	墓		近世~近代?	Q10・11
73	190SX073	土坑	黄灰色土、炭混じり	弥生時代?	L14
74		土坑	黒灰色粘土含む	古代?	M14
75	190SK075	土坑	灰褐色土	4世紀後半	J12
76		掘り方			O11
77		掘り方			MN11
78		ビット			P10
79		ビット群			H18・19
80	190SD080	溝		7世紀中頃~後半	EF18
81		ビット	茶黄褐色土		I15
82	190SX082	ビット		4世紀	H14
83		ビット			H14
84		溝もしくは土坑		奈良時代	D17・18
85	190SB085	掘立柱建物	2×2間以上		DE14・15
86		ビット群			E13
87		ビット群		奈良時代	F19
88		土坑		8世紀前半	G19
89		土坑		奈良時代	H18・19
90	190SB090	掘立柱建物	2×3間	7世紀?	NP9~11
91		土坑			J13
92		ビット			C16
93		ビット群			H20
94	190SD094	溝		古代	H~K・19, 20
95	190SA095	櫛列? 灰色土			H~J20・21
96		ビット		8~9世紀	M20
97		溝			KL19
98	190SD098	溝	明灰色土	8世紀	R8
99	190SX099	溝もしくは土坑			Q10
100	190ST100	土師器甕棺墓		4世紀後半	E13
101		溝		奈良時代~	P10・11
102		掘り方			O10
103		掘り方			H14
104		掘り方			H15
105	190SD105	溝		平安時代	B~F15
106		掘り方			P10
107		掘り方			P10
108		掘り方			P10
109	190ST109	墓	人骨残存	近世~近代?	Q12
111	190ST111	墓		近世~近代?	P12
115	190ST115	火葬墓	表土出土。蔵骨器は灰釉陶器。	9世紀	出土地点不明

表 8 第 190 次調査 出土遺物一覽表

S-1	須 惠 銅破片		S-20南	須 惠 銅蓋、蓋3、环身		
土 師 銅破片		土 師 銅环c、小環		古式土 師 銅蓋?、破片		
土 師 品族土塊		瓦 類 平瓦(破片)		石 製 品割片(黑曜石)		
S-2	須 惠 銅破片		S-21	須 惠 銅蓋c3		
土 師 銅破片		土 師 銅破類		S-22	須 惠 銅环c	
S-3	土 師 銅破片		土 師 銅蓋		S-23	須 惠 銅蓋3
S-4	土 師 銅破片		土 師 銅破片		S-24	土 師 銅蓋
白 銅 銅柄、破片(1)		S-25	土 師 銅蓋		S-25	土 師 銅蓋
S-5	須 惠 銅蓋3		S-26	須 惠 銅蓋、破片		
土 師 銅蓋、破片		土 師 銅破類		S-27	須 惠 銅环、环c、環	
石 製 品割片(黑曜石)		S-28	須 惠 銅环、环c、環		土 師 銅破類	
土 師 品土塊		S-29	須 惠 銅环		土 師 銅破類	
S-6	土 師 銅破片		S-30	土 師 銅小皿a(9?)		
S-7	須 惠 銅破片		S-31	須 惠 銅环		
土 師 銅破片		土 師 銅破類		S-32	土 師 銅破類	
S-8	須 惠 銅环		S-33	土 師 銅破類		
土 師 銅蓋		S-34	土 師 銅环a			
S-9	須 惠 銅蓋、蓋、破片		S-35a	須 惠 銅高环、破片		
土 師 銅破片		土 師 銅蓋		S-35c	須 惠 銅蓋	
S-10	土 師 銅蓋		土 師 銅破類、破片		S-36	土 師 銅环
金 属 製 品破片?		S-37	土 師 銅破類		S-37	土 師 銅破類
S-11	土 師 銅环		S-38	土 師 銅环a、破類		
S-12	土 師 銅环c、環		S-39	土 師 銅破片		
S-13	土 師 銅破類		S-40b	土 師 銅环		
S-14	須 惠 銅蓋3、環		S-40c	土 師 銅环、環		
土 師 銅柄c		S-41	土 師 銅环c、破片			
S-15	須 惠 銅环		石 製 品(平玉石)		S-42	須 惠 銅盖c
S-16	土 師 銅环、柄?		土 師 銅破片		土 師 銅破片	
S-17	土 師 銅破類		S-43	土 師 銅环、破類		
S-18	須 惠 銅蓋		S-44	土 師 銅破片		
土 師 銅蓋、破片						
S-19	須 惠 銅蓋、蓋3、蓋c、环、环c					
土 師 銅破類						
S-20	須 惠 銅蓋c3					
石 製 品割種表						
S-20横上	須 惠 銅蓋c3、破片					
土 師 銅柄c						
S-20方々下西	須 惠 銅蓋3、蓋c、蓋c3、环、環、破片					
土 師 銅蓋、破類、蓋						
S-20西壁部	須 惠 銅环					
S-20北西隅	須 惠 銅蓋3、蓋c、蓋、蓋c3、环、環、破片					
土 師 銅蓋3、蓋c3、柄c、破類						
弥 生 土 銅蓋						
S-20北	須 惠 銅蓋3、环蓋、环身、環、小蓋?					
土 師 銅蓋、蓋3、环、破類、破片						

S-46	土 師 器 杯?、壺類
S-47	土 師 器 杯
S-48	土 師 器 杯?、壺類
S-49	須 恵 器 蓋c 土 師 器 杯a、壺類
S-50a	須 恵 器 蓋c3、杯c 土 師 器 杯c、壺?、破片
S-50b	土 師 器 壺類
S-50c	土 師 器 杯、杯?、壺類
S-50d	土 師 器 破片
S-50e	土 師 器 破片
S-50f	土 師 器 破片
S-50j	須 恵 器 杯、壺、破片 土 師 器 陶、破片 金 属 製 品 銅 押
S-50k	土 師 器 破片
S-50n	土 師 器 破片
S-51	土 師 器 杯、壺類
S-52	土 師 器 杯a?、壺 陶 産 陶 器 破片
S-53	須 恵 器 蓋 土 師 器 陶c、壺 石 製 品 銅 片(安山岩)
S-54	須 恵 器 蓋 土 師 器 破片
S-55d	須 恵 器 壺 土 師 器 破片
S-55g	須 恵 器 破片 土 師 器 壺類
S-55h	土 師 器 壺類
S-55i	須 恵 器 杯蓋
S-55n	土 師 器 破片
S-55q	土 師 器 破片
S-55r	土 師 器 壺類
S-56	土 師 器 壺
S-57	土 師 器 破片
S-58	土 師 器 破片 瓦 類 破片
S-59	土 師 器 杯
S-60a	土 師 器 杯?、壺類、破片

S-60b	土 師 器 壺、破片
S-60c	須 恵 器 壺 土 師 器 破片
S-60d	須 恵 器 杯 片蓋 土 師 器 壺類
S-60e	土 師 器 壺類、破片
S-60g	須 恵 器 壺 土 師 器 杯?、壺類
S-60j	須 恵 器 破片 土 師 器 壺、壺類、破片
S-61	須 恵 器 壺、壺 土 師 器 壺類
S-62	土 師 器 破片
S-63	土 師 器 杯
S-64	土 師 器 破片
S-65c	土 師 器 壺
S-65d	土 師 器 壺類
S-65e	土 師 器 壺
S-65f	土 師 器 杯?、壺
S-66	須 恵 器 蓋c3
S-67	土 師 器 破片
S-68	須 恵 器 破片 陶 産 陶 器 破片
S-69	土 師 器 杯?、壺類
S-70b	土 師 器 破片
S-70f	須 恵 器 壺? 土 師 器 杯 古 式 土 師 器 壺?
S-70g	土 師 器 杯?、壺類
S-70i	土 師 器 杯 古 式 土 師 器 壺
S-70n	土 師 器 破片
S-70o	土 師 器 壺類
S-71	瓦 類(平瓦(無文))
S-72	須 恵 器 壺 土 師 質 土 器 杯? 瓦 類(平瓦(調目))
S-73	須 恵 器 破片 陶 産 土 師 器 石 製 品 銅 片(黒曜石)
S-74	土 師 器 壺類、破片

S-75	土 部 器(燧石)
古式土師 器(三重口鉢)	

S-76	土 部 器(破片)
------	-----------

S-77	土 部 器(杯、雙瓶、破片)
------	----------------

S-78	土 部 器(雙瓶)
------	-----------

S-79	土 部 器(蓋?)
------	-----------

S-80	須 恵 器(蓋1、破片)
土 部 器(雙、破片)	

S-81	土 部 器(杯)
------	----------

S-82	土 部 器(杯)
古式土師 器(雙×蓋、蓋)	
石 製 品(剥片(黒曜石))	

S-83	土 部 器(蓋)
------	----------

S-84	須 恵 器(蓋3)
土 部 器(破片)	

S-85a	土 部 器(雙瓶)
-------	-----------

S-85b	土 部 器(杯?)、破片
-------	--------------

S-85c	土 部 器(輪?)
-------	-----------

S-85d	土 部 器(杯?)、雙瓶
-------	--------------

S-86	土 部 器(破片)
土 製 品(燒土塊)	

S-87	須 恵 器(蓋、蓋1、杯)
土 部 器(杯、破片)	
石 製 品(剥片(黒曜石))	

S-88	須 恵 器(蓋3、杯c)
土 部 器(杯、破片)	

S-89	須 恵 器(杯)
土 部 器(雙瓶)	

S-90d	土 部 器(杯?)
-------	-----------

S-90e	土 部 器(破片)
-------	-----------

S-91	土 部 器(雙、破片)
------	-------------

S-92	土 部 器(杯、破片)
------	-------------

S-93	土 部 器(破片)
------	-----------

S-94	土 部 器(破片)
瓦 製 破片	

S-96	土 部 器(輪c、破片)
------	--------------

S-97	土 部 器(破片)
瓦 製 破片(格子目)	

S-98	須 恵 器(蓋3、杯)
瓦 製 破片(欄目)	

S-99	土 部 器(破片)
弥 生 土 部 不明品	

S-100東	弥 生 土 部 雙
--------	-----------

S-100南	弥 生 土 部 雙
--------	-----------

S-100西織	弥 生 土 部 雙
---------	-----------

S-100西	弥 生 土 部 雙
--------	-----------

S-100北	弥 生 土 部 雙
--------	-----------

S-100上	古式土師 器(雙)
--------	-----------

S-100	弥 生 土 部 雙
-------	-----------

S-101	須 恵 器(蓋)
土 部 器(破片)	
石 製 品(剥片(安山岩))	

S-102	土 部 器(破片)
-------	-----------

S-105	須 恵 器(蓋1、蓋2、雙、破片)
土 部 器(杯、把手)	
瓦 製 平瓦(格子目、無文)、丸瓦(無文)	
石 製 品(平玉石)	

S-109	須 恵 器(蓋)
土 部 器(小皿a)	

明灰色土	須 恵 器(蓋1、蓋3、蓋4、蓋c、杯蓋、杯、杯c、雙、蓋、破片)
土 部 器(高杯、杯a、高杯、碗c、雙、雙瓶、破片)	
藍色土器A 類(輪、破片)	
瓦 瓦 土 部 破片	
信 濃 陶 器(破片)	
越 州 京 浜 青 陶(輪:B-2(1))	
弥 生 土 部 高杯	
瓦 製 平瓦(欄目、格子目)	
金 風 製 品(剥片)	
石 製 品(砂心、右瓶、剥片(安山岩))	
土 製 品(土塊、土鈴?)	

明灰色土	須 恵 器(杯)
土 部 器(雙瓶)	

表土	須 恵 器(蓋1、蓋3、蓋c、杯蓋、杯、杯身、杯a、杯c、高杯、雙、大雙、蓋、蓋b)
土 部 器(杯c、雙、雙瓶、破片)	
藍色土器A 類(大輪c)	
灰 輪 陶 器(内瓦蓋)	
國 産 陶 器(蓋×鉢)	
弥 生 土 部 蓋	
瓦 製 平瓦(欄目、格子目、無文)	
瓦 製 丸瓦(欄目、格子目、無文)、燒し瓦	
石 製 品(剥片(安山岩))	

表層	須 恵 器(杯、雙)
土 部 器(雙瓶)	
白 陶(黒破片(1))	

出土地不明	須 恵 器(蓋3、雙)
土 部 器(杯、破片)	
瓦 製 平瓦(格子目、破片)	

5、第 269 次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は大宰府市観世音寺 3 丁目 94-1 で、大宰府政庁跡から西に 700m 程の場所である。

2006(平成 18)年 11 月 20 日、筑紫農業協同組合から店舗の建て替えに伴う文化財の取り扱いについて問い合わせがあった。2007(平成 19)年 1 月 6・17 日に確認調査を実施し、GL-0.5～0.9m で遺構が確認された。その後、提出された店舗の設計と照らし合わせたところ、遺構に影響を及ぼすことが明らかであったため、店舗の解体後に、建物新築部分についてのみ調査をすることとなった。発掘調査は 2007(平成 19)年 4 月 23 日～8 月 20 日に実施し、調査は下高大輔が行った。開発対象面積 490 m²。調査面積 360 m²である。調査地以外は未調査であるため、遺構は保存されている。

(2) 基本層位 (Fig. 40)

表土は上面からアスファルト、客土、灰色土(耕作土)、黄茶色土(床土)の順であり、これらを除去すると茶褐色土に遺構が展開する。深さは 0.4～0.7m である。全体的に直前まで建っていた建物の基礎が地山まで深く入っているところが多く見られた。

全体的に整地があり、遺構面は 2 面存在したが、部分的に整地と認識せずに掘り下げた部分がある。第 1 面の遺構検出時の取り上げ土色は灰カツ色土、第 1 面の基盤層は灰褐色土や茶褐色土で、遺物の取り上げは灰褐色土で行っている。

なお、地山(明黄色粘土、黄灰色土)を部分的に掘削したが、石製品等は確認できなかった。

(3) 検出遺構

○第 1 面

掘立柱建物

269SB075

遺構検出時には南北棟とみられる東西 3 間、南北 2 間以上の建物のプランを検出しているのだが、遺構掘削時に認識せずに掘削しているため、桁行状況が不明瞭となっている。南辺梁間のプランは明確で、梁間 6.38m、振れは約 E-3° 35' 15" -S で、柱間は東西両側が 2.16m、中央が 2.06m。掘り方は径 0.8m 前後の円形で、深さ 0.3～0.6m、土層に残る柱痕から径約 0.2m 前後の柱材と推測される。

柵列

269SA015 (Fig. 41)

調査区東端で検出された南北 3 間の柵列で、振れは約 N-1° 23' 19" -E である。掘り方は一辺 0.6m 前後の方形状を呈するが、柱間は北から 2.4m、2.0m、2.8m とばらつきがあるため、柵ではない可能性もある。また、周囲に攪乱が多いため、別の建物として成立することも考えられる。

溝

269SD010 (Fig. 41)

調査区南辺部で検出された東西溝で、振れは約 E-5° 42' -S である。攪乱で分断されているが、検出長 5.35m、幅 0.5～0.6m、深さ 0.16～0.2m で、断面逆台形を呈している。埋土は炭混じりの灰茶色土と灰黄色土の 2 層である。

269SD020 (Fig. 41)

調査区西側で検出された南北溝で、振れは約 N-1° 25' 6" -E である。検出長 5.9m、幅 0.5～1.0m、深さ 0.15m 前後で、断面はおおよそ逆台形を呈している。埋土は炭混じりの黒灰色土である。

その他の遺構

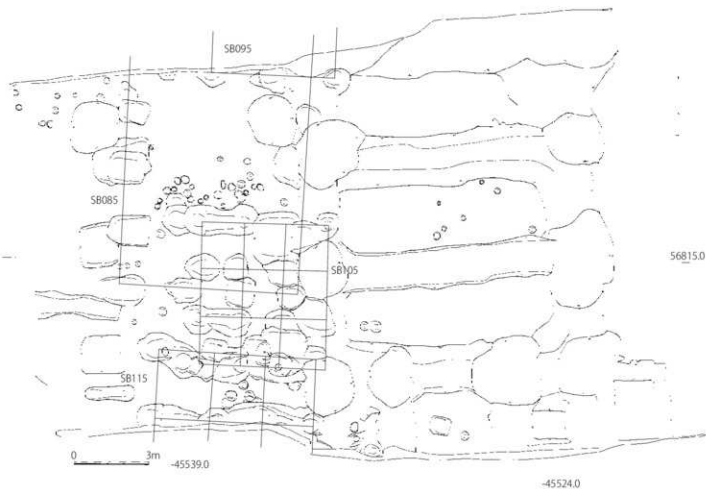
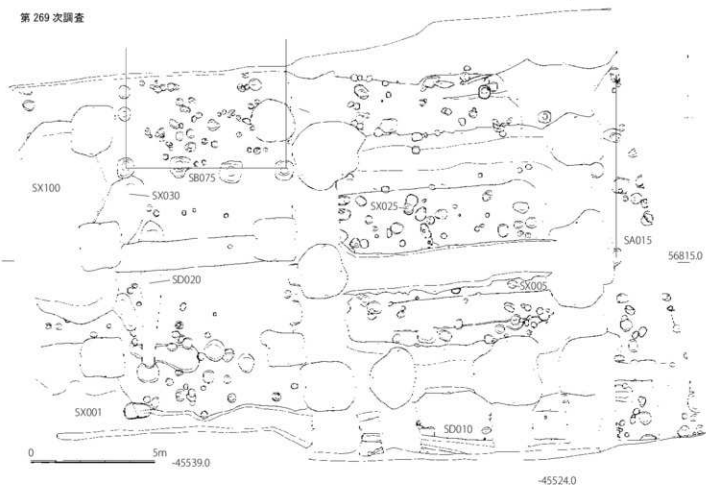


Fig. 39 第 269 次調査遺構全体図 (上が第 1 面・下が第 2 面、1/150)

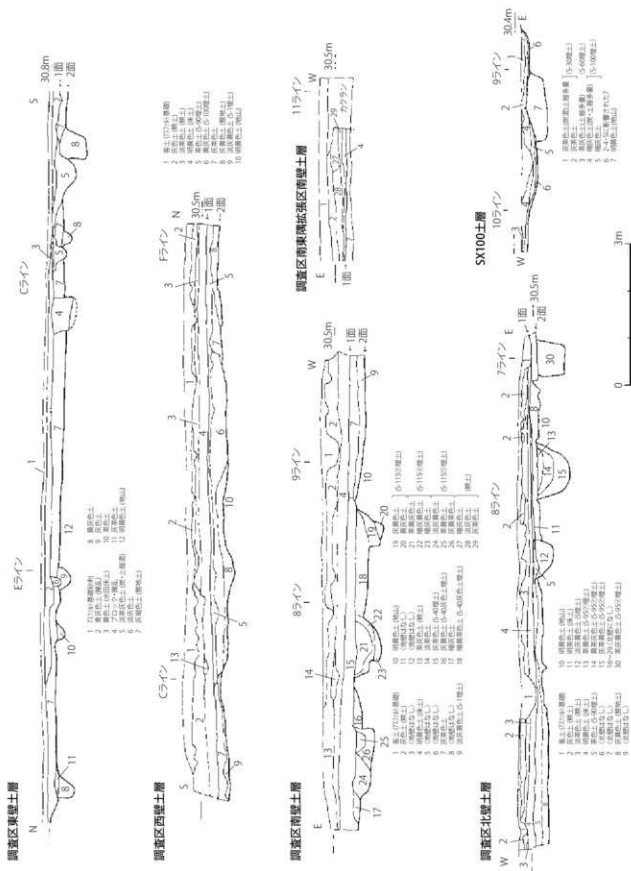


Fig. 40 第 269 次調査調査区・SX100 土層実測図 (1/80)

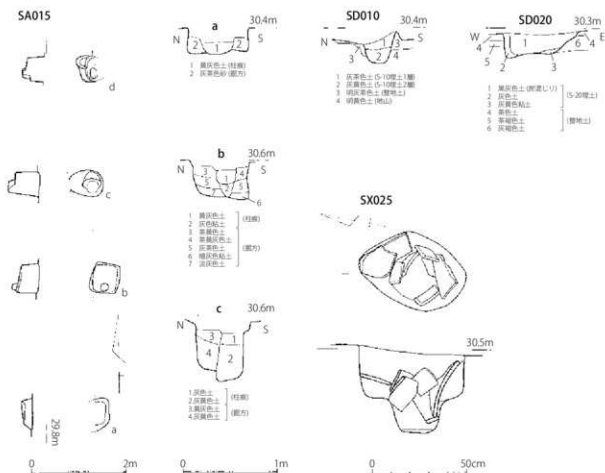


Fig. 41 269SA015、SD010・020、SX025 遺構実測図 (1/80、1/40、1/20)

269SX001

調査区南西端に広がる窪みで、南北 3.6m 以上、東西 3.3m 以上、深さ 0.2m 前後で、埋め戻し直前に西側の広がりを確認したところ、さらに約 4m 続いていることがわかった。埋土は炭混じりの茶褐色土で、土器を多く含んでいる。

269SX005

大きさ 0.32 ~ 0.36m、深さ 0.28m の円形ピットで、柱を平瓦で根固めされたとみられる柱穴であるが、建物として成立していない。

269SX025 (Fig. 41)

縄目の平瓦により根固めされた柱穴で、大きさは 0.58 × 0.38m の楕円形で、全体の深さ 0.42m であるが、途中に段が造られている。建物として復元することはできなかった。

269SX030

長さ 2.6m、幅 1.7m、深さ 0.2m 前後の窪みである。埋土は炭混じりの黒灰色土で遺物を多く含む。

269SX035

大きさは 0.63 × 0.44m、深さ 0.8m の楕円形ピットで、埋土に径 0.15cm 程の柱痕を確認した。

269SX080

長さ 2.85m、最大幅 1.05m、深さ 0.1m 前後の溝状の窪みである。

269SX100 (Fig. 40)

調査区西端に広がる窪みで、上面で検出された SX060・070・090 は同一遺構と推測される。南北 8.15m、東西 3.4m 以上、深さ 0.2m 前後で西側調査区外に続いている。埋土は炭混じりの灰青色土や暗

灰色土で、土器を多量に含んでいる。

○第 2 面

269SB085 (Fig. 42・43)

梁間 3 間、桁行 4 間以上の南北棟で、北側調査区外に続いている。振れは約 N-3° 19' 39" -E である。掘り方は 0.85 ~ 1.8m の方形状のプランで、柱材の基部付近が明瞭に残っていて、柱材は径 0.15 ~ 0.3m 前後である。柱間は梁間が西から 2.66m、2.28m、約 2.4m、桁行が南から 2.16m、2.44m、2.28m である。

269SB095 (Fig. 44)

調査区北端で検出した掘り方で、東西 2 間であるが、調査区北側に展開する掘立柱建物と推測される。調査時は 1 面目で確認されているが、調査区土層を観察すると、2 面目まで下げ過ぎていたことがわかった。振れは約 E-3° 26' 50" -S である。掘り方は大きさ 1.0 ~ 1.2m の不定円形で、柱間は 2.52m 間隔である。

269SB105 (Fig. 45)

3×3 間の総柱建物で、振れは約 N-1° 38' 11" -E である。掘り方は大きさ 0.55 ~ 1.8m の不定円形で、一部で掘り方底面に根石や礎盤が確認された。また、部分的に掘り方周辺が布掘り状に掘られている部分もあった。

269SB115 (Fig. 44)

調査区南端で検出した掘立柱建物で、調査区南側へ続いている。東西 3 間、南北 2 間以上の総柱建物と推測される。振れは約 E-3° 26' 1" -S である。掘り方は大きさ 1.0 ~ 1.58m の不定円形で、柱間は西から 2.2m、2.0m、2.08m である。

(4) 出土遺物

○第 1 面

掘立柱建物

269SB075a 出土遺物 (Fig. 46)

土師器

高坏 (1) 内外面ともナデ調整。焼成良好で、色調は暗灰褐色を呈する。

269SB075d 掘方出土遺物 (Fig. 46)

瓦類

平瓦 (2) 凸面は縄目叩き。凹面は布目。色調は灰白色や黒色を呈する。

櫛列

269SA015b 出土遺物 (Fig. 46)

須恵器

坏 (3) 内外面とも回転ナデ調整。色調は淡灰色を呈する。

溝

269SD010 出土遺物 (Fig. 47)

土師器

碗 (1) 復元口径 12.4cm。口縁部を若干外反させる。

碗 c (2~4) 坏部は若干丸味のある底部に高台を貼付する。色調は淡橙色や灰褐色を呈する。

黒色土器

碗 c (5) 復元高台径 7.8cm。内面にミガキがあるが磨滅する。A 類。

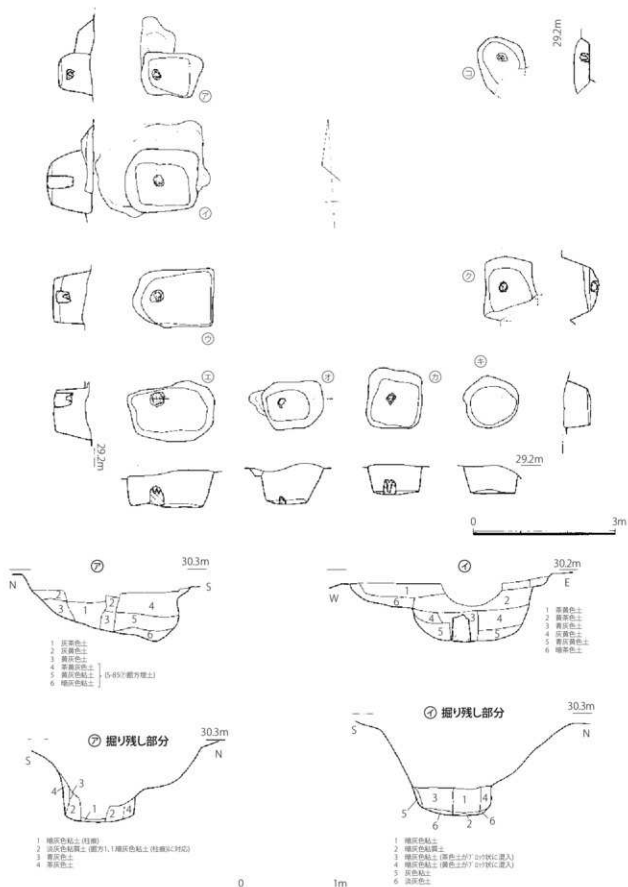


Fig. 42 269S8085 遺構実測図 (1/80、1/40)

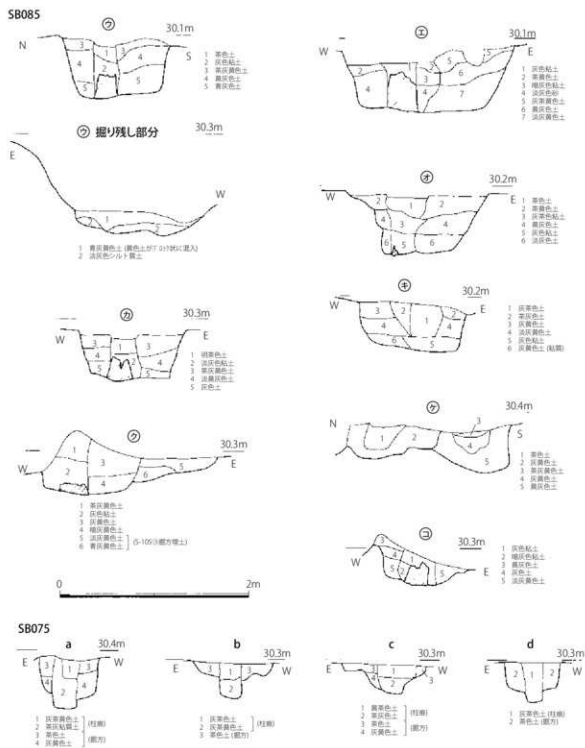


Fig. 43 269SB085・075 土層実測図 (1/40)

中国陶器

鉢 (6) 復元口径 20.4cm。胎土は精製され、茶褐色を呈する。内面には暗褐色釉、外面には緑灰色釉を施す。口縁屈曲部には釉が回らず、一部露胎となる。

瓦類

瓦玉 (7) 大きさは 2.1×2.2cm、厚さ 2.35cm。

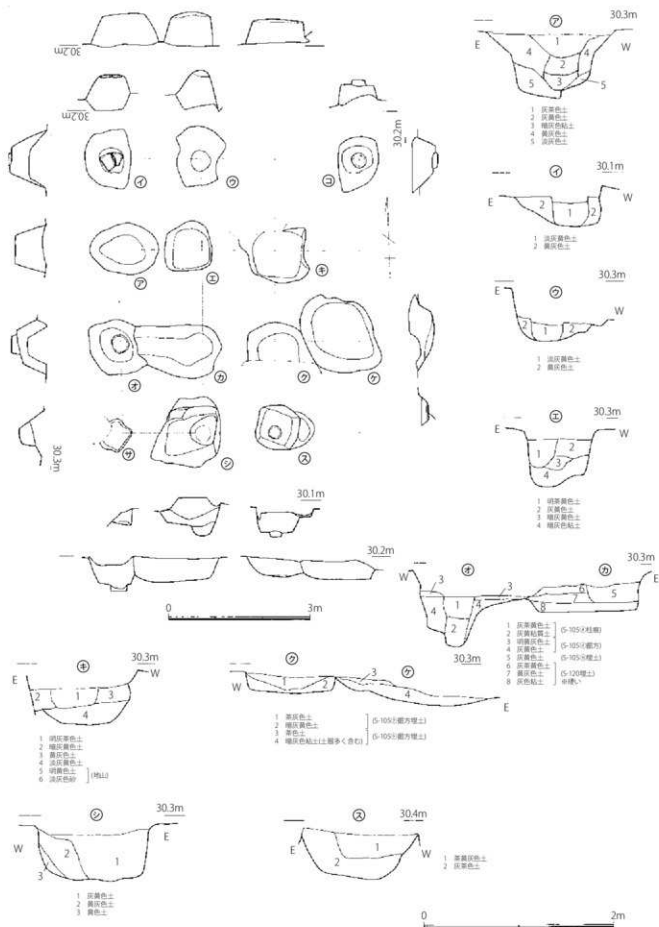


Fig. 45 269SB105 遺構実測図 (1/80, 1/40)

丸瓦 (8) 1×1.3 cmの横長格子叩きに、「介」の文字瓦。

平瓦 (9～11) 9は0.6×1cm前後の横長格子叩き。10は0.8×1.7cm前後の横長格子叩き。全体的に磨滅する。11は2×3cmの横長二重格子叩き。

269SD020 出土遺物 (Fig. 47)

須恵器

坏 a (12) 体部が緩やかに外反する。外面底部は回転ヘラ切り、体部は回転ナデ調整。色調は白灰色を呈する。搬入品か。

土師器

小皿 a×坏 a (13) 復元口径 10.0cm、器高 1.55cm、復元底径 7.2cm、底部はヘラ切り。色調は黄白色を呈する。

坏 a (14～21) 復元底径 6.8～8.4cm。底部と体部の境付近は若干丸味がある。底面は 18 が僅かに丸味がある以外平坦である。底部切り離しは回転ヘラ切り。色調は黄白色や淡灰色を呈する。

碗 c (22～29) 復元高台径 7.2～10.3cm。22・27・28 の底部は平坦だが、それ以外はやや丸味を帯びる。22・27 は断面逆台形の高台を貼付する。色調は黄橙色や黄白色を呈する。

緑釉陶器

碗 c (30～33) 低い高台を貼付する。復元高台径 6.2～7.1cm。全て軟質で、色調は 31 が黄白色で断面黒灰色、他は黄橙色を呈する。内外面とも黄緑色釉を施すが剥落が著しい。全て防長産。

瓦類

平瓦 (34、35) 34は0.5×0.8前後の横長格子叩き。35は1×1.4cm前後の横長格子叩き。

丸瓦 (36) 1×1.4cm前後の横長格子叩き。

269SX001 出土遺物 (Fig. 48)

須恵器

壺 (1) 内外面に叩き、外面に突帯を巡らす。焼成良好で色調は灰色を呈する。

土師器

皿 a (2、3) 2は口径 13.0cm、器高 1.75cm。外面底部は回転ヘラ切り、内面底部は不定方向のナデ。色調は淡黄白色を呈する。3は器高 1.55cm。色調は黄白色を呈する。

坏 a (4～17) 復元口径 11.4～12.8cm、器高 3.0～3.6cm、復元底径 6.4～8.2cm。底部と体部の境は僅かに丸味があり、底部は平坦に作る。色調は黄白色や暗灰色を呈する。

小甕 (18) 口縁部外面はミガキ、その他はナデ調整。

甕 (19) 胎土は砂粒を多く含み、色調は橙灰色を呈する。内面ヨコハケ、外面タテハケ。

黒色土器

碗 c (20) 復元高台径 8.4cm。全体的に磨滅し調整不明。A類。

碗 (21) 内面ミガキ、外面ナデ調整。A類。

緑釉陶器

碗 (22～23) 2点とも軟質で、胎土は黄橙色を呈する。内外面に緑色釉を施すが、剥落が著しい。全て防長産。

土製品

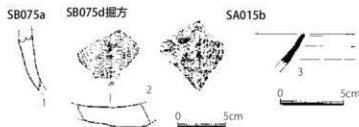
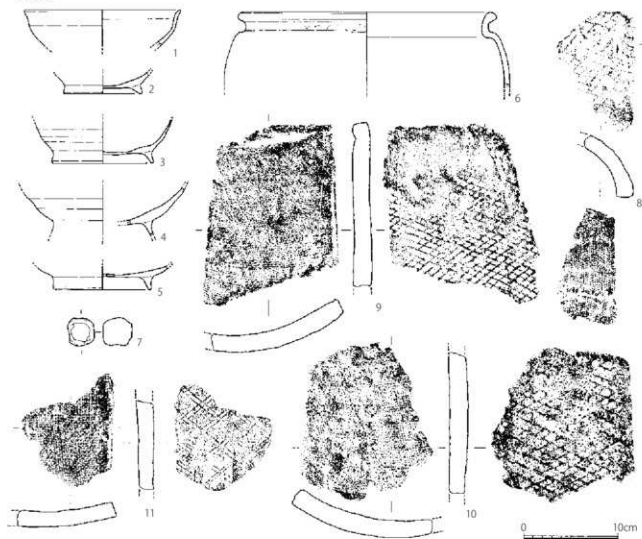


Fig. 46 269SB075・SA015 出土遺物実測図 (1/3)

SD010



SD020

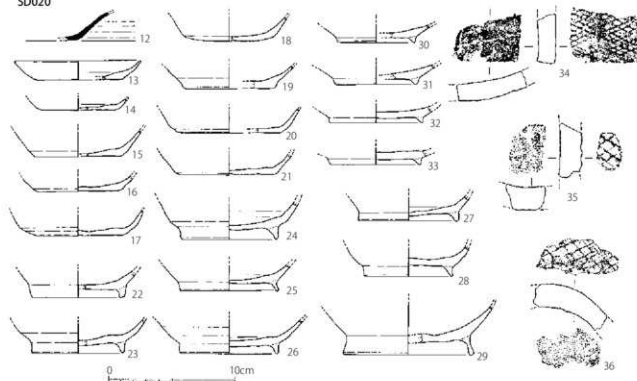


Fig. 47 269SD010・020 出土遺物実測図 (1/3、瓦は 1/4)

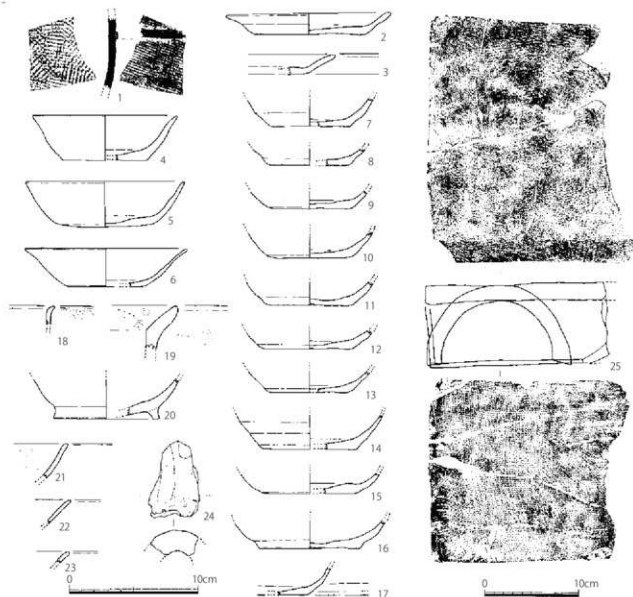


Fig. 48 269SX001 出土遺物実測図 (1/3、瓦は 1/4)

輪羽口 (24) 先端部に近い破片で、被熱で暗灰色に変色する。

瓦類

丸瓦 (25) 凸面は縄目叩きをナゲ消している。断面部は分割線で割っている。

269SX025 柱痕出土遺物 (Fig. 49)

土師器

坏 a (1) 磨滅するが、色調は橙黄色を呈する。

269SX025 出土遺物 (Fig. 49・50)

瓦類

平瓦 (2~10) 凸面が縄目叩き、内面は布目と糸切り痕が残る。2・3 はやや粗い縄目叩き。厚さは 1.7~2.3cm で、色調は 2・3 が橙色、それ以外は白灰色を呈する。全体的に磨滅している。

269SX030 出土遺物 (Fig. 51)

土師器

皿 a (1) 復元口径 15.4cm、器高 1.35cm、復元底径 11.4cm。色調は暗黄灰色を呈する。

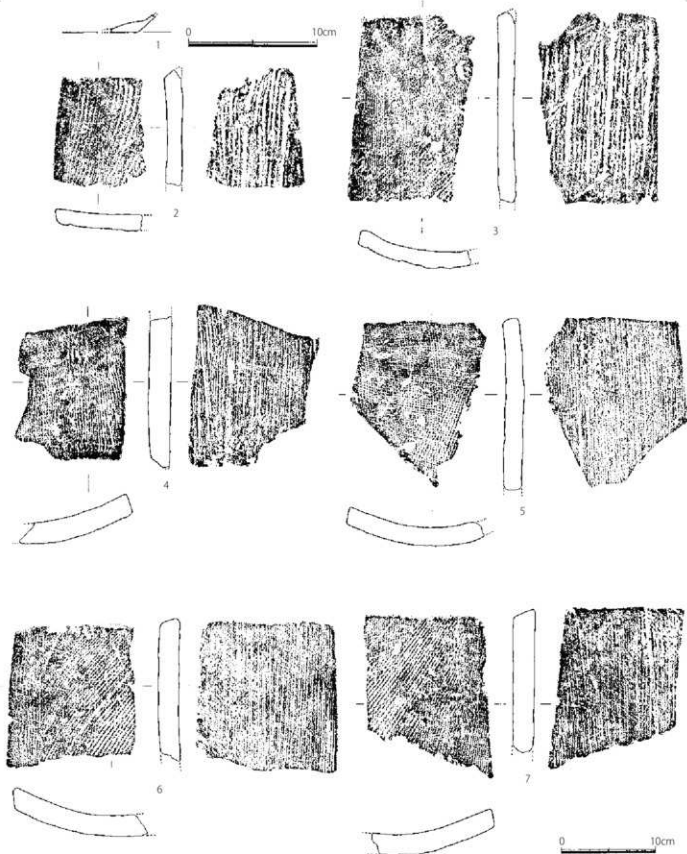


Fig. 49 269SX025 出土遺物実測図① (1/4)

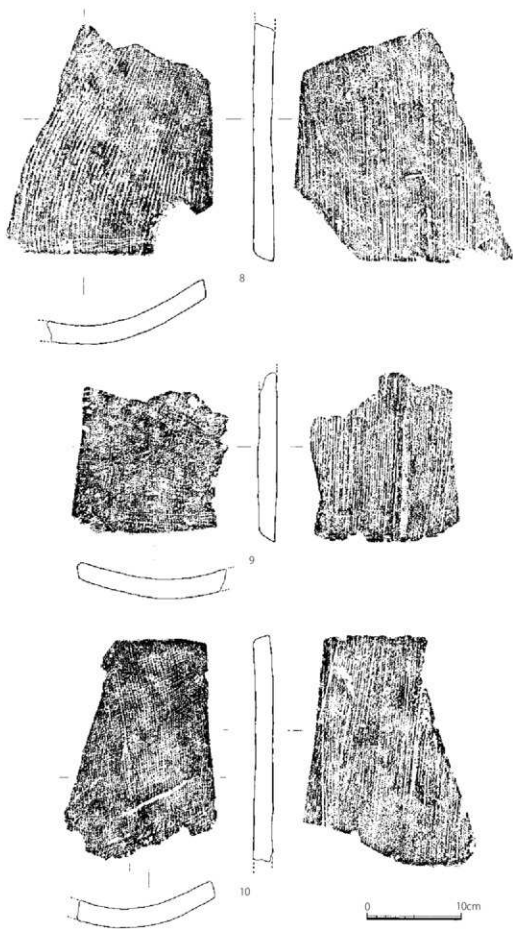


Fig. 50 269SX025 出土遺物実測図② (1/4)

SX030

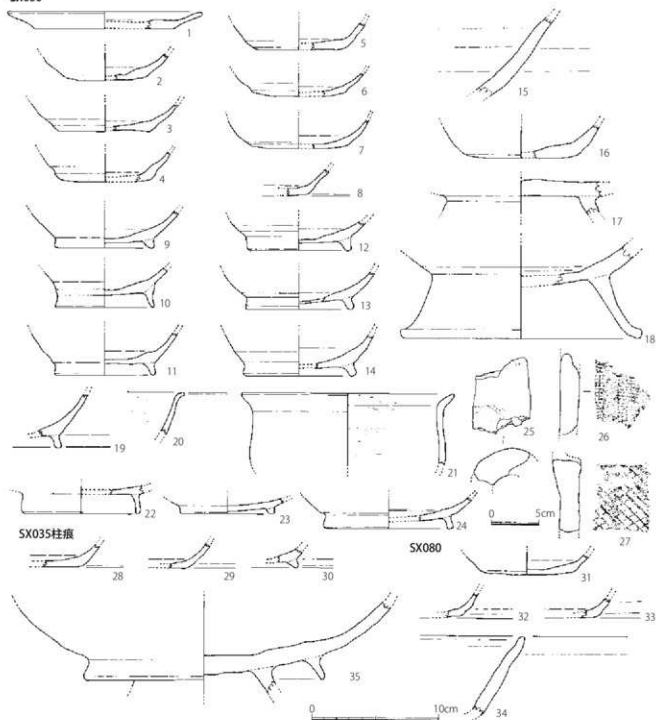


Fig. 51 269SX030・035・080 出土遺物実測図 (1/3、瓦は 1/4)

坏 a (2～8) 復元底径 6.8～7.8cm。底面は 3・5 が平坦であるが、それ以外は丸味がある。色調は淡橙色や黄白色を呈する。

碗 c (9～14) 坏部は丸味のある底部で、復元高台径 7.9～9.0cm。色調は淡橙色を呈する。全体的に磨滅している。9 の胎土は赤色粒を多く含む。

鉢 (15、16) 15 は内面に煤が付着する。胎土は砂粒や赤色粒を多く含む。色調は橙色を呈する。16 は丸味のある底部で、全体的に磨滅する。

脚付鉢 (17、18) 17 は全体的に磨滅する。18 は脚部復元径 19.0cm。全体的に磨滅するが、脚部外面回転ナデ、脚部内面端部には沈線が巡る。胎土は 0.2cm 以下の白色砂粒を多く含み、色調は淡橙色を

呈する。

黒色土器

碗 c (19) 丸味のある体部で、がっちりとした高台を貼付する。全体的に磨滅する。A 類。

碗 (20) 口縁端部を外反させる。内面にはミガキが残る。A 類。

甕 (21) 復元口径 16.8cm、A 類。

灰釉陶器

碗 c (22) 高い高台を貼付する。復元高台径 9.4cm。内面に淡灰緑色釉が薄くみられるが、内面底部は釉を拭き取り露胎となる。K90 窯式とみられる。

緑釉陶器

皿 (23) 低い高台を貼付する。高台径 7.4cm。焼成は軟質で、色調は黄白色を呈する。内外面に明緑色釉を施したと推測されるが、剥落が目立ち、内面の釉は全く残っていない。

碗 c (24) 方形の高い高台を貼付する。復元高台径 10.2cm。内面には沈線を巡らす。焼成は軟質で淡灰黄色を呈する。光沢のある淡緑色釉を施し、高台内は濃緑色釉を施す。防長もしくは猿投（東海）産とみられるが、猿投（東海）産の可能性が優位とみる。

土製品

輪羽口 (25) 被熱で淡灰色や橙色に変色する。

瓦類

平瓦 (26) 0.4cm 四方の正格子叩き。

丸瓦 (27) 0.9×1cm 前後の格子叩き。焼成還元不良で、色調は淡橙色を呈する。

269SX035 柱痕出土遺物 (Fig. 51)

土師器

坏 a (28、29) 全体的に磨滅し、色調は淡灰茶色を呈する。

碗 c (30) 全体的に磨滅し、色調は淡黄色を呈する。

269SX080 出土遺物 (Fig. 51)

土師器

坏 a (31～33) 31 は僅かに丸味を持つ底部で、淡黄色を呈する。

鉢 (34) 全体的に磨滅するが、口縁部内面は強いヨコナデで窪んでいる。胎土は 0.3cm 以下の砂粒を多く含み、赤色粒も多く含む。色調は淡橙色を呈する。35 の口縁部の可能性がある。

脚付鉢 (35) 脚部と口縁部を欠損する。胎土は 0.3cm 以下の砂粒を多く含み、赤色粒も多く含む。色調は淡橙色を呈する。全体的に磨滅する。特大の香炉のようなものとなる可能性が推測される。

269SX100 (SX060) 出土遺物 (Fig. 52)

須恵器

壺 (1) 内外面とも叩きで外面に突帯を巡らす。色調は淡灰色を呈する。

土師器

坏 a (2) 平坦な底部で、色調は淡黄橙色を呈する。

碗 c (3) 底部と体部の境は若干丸味がある。復元高台径 6.6cm。

用途不明品 (4) 中央に 0.6cm 程の孔を穿つ。胎土は砂粒を多く含み、色調は淡灰茶色を呈する。

鉢 (5) 口縁部を外側に屈曲させる。外面は磨滅するが、内面はミガキを残す。胎土は 0.3cm 以下の砂粒を含み、色調は橙色を呈する。

黒色土器

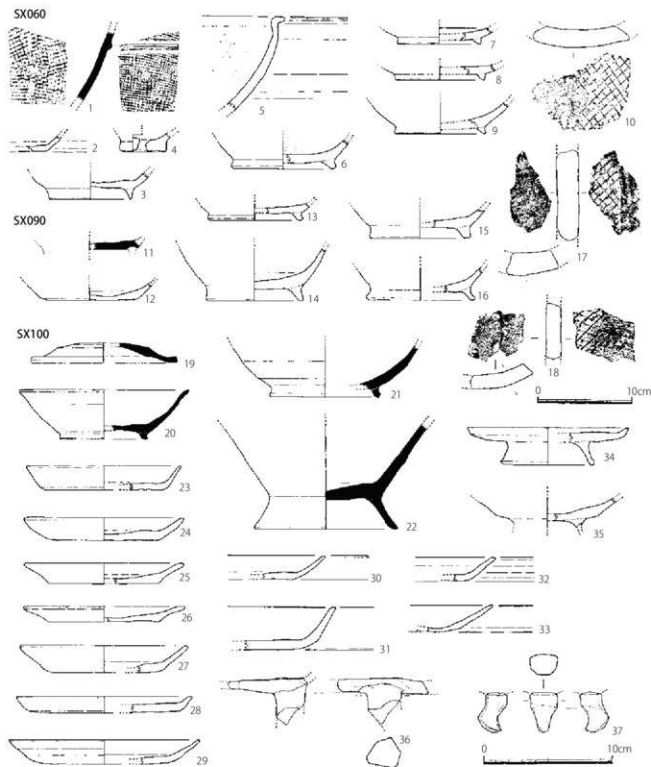


Fig. 52 269SX060・090・100 ①出土遺物実測図 (1/3、瓦は1/4)

碗 c (6) 復元高台径 8.3cm. A 類。

緑釉陶器

皿 × 碗 (7, 8) 2 点とも軟質で、防長産とみられる。7 の色調は淡橙色を呈する。内面に沈線を巡らす。内外面とも淡緑色釉を施すが、外面はほとんど剥落する。復元高台径 6.6cm。8 の色調は淡橙色を呈する。内外面とも淡緑色釉を施すが、ほとんど剥落する。復元高台径 7.1cm。

碗 (9) 焼成は軟質で、色調は淡灰白色、断面の一部は黒灰色を呈する。内外面とも釉を施したとみ

られるが、外面に軸は残っていない。内面には薄く淡緑灰色軸が残る。復元高台径 7.2cm。防長産。

瓦類

平瓦 (10) 1×0.8cm 前後の縦長格子叩き。

269SX100 (SX090) 出土遺物 (Fig. 52)

須恵器

坏 c (11) 外面底部は回転糸切り。色調は淡灰色を呈する。

土師器

坏 a (12) 平坦な底部で、復元底径 7.4cm。外面回転ヘラ切り、内面不定方向のナデ。

碗 c (13～16) 復元高台径 7.3～8.6cm。色調は黄橙色や黄白色を呈する。15 はがっちりとした高台を貼付する。

瓦類

平瓦 (17, 18) 17 は 1×1cm 前後の格子叩き。18 は 0.8×1.2cm 前後の横長格子叩き。

269SX100 出土遺物 (Fig. 52～57)

須恵器

蓋 3 (19) 復元口径 7.0cm。口縁端部内面には僅かに沈線が巡る。外面上半部は回転ヘラケズリ、内面上半部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ調整。

坏 c (20) 復元口径 13.4cm、器高 3.9cm、復元高台径 6.9cm。色調は灰青色を呈する。

碗 c (21, 22) 21 は丸味のある体部で、復元高台径 8.7cm。白色砂粒をやや含み、若干空洞があり焼きしまりがやや悪い。胎土は淡黄灰色に淡灰色が混じる。肥後産か。22 は高い高台を貼付し、復元高台径 11.4cm。焼成はやや不良で、色調は淡灰色を呈する。

土師器

皿 a (23～32) 復元口径 12.2～15.0cm、器高 1.2～3.4cm、復元底径 8.7～11.8cm。23 はやや深い皿である。28 は浅い体部である。31 は深い体部で、胎土は精製され、色調は橙色を呈する。内外面磨減し調整不明。

坏 d (33) 器高 2.1cm。若干歪みがある。胎土は精製され、色調は橙黄色を呈する。

小皿 c (34) 復元口径 12.7cm、器高 2.9cm、復元脚部径 7.4cm。内面はナデ、その他はヨコナデ調整。色調は黄橙色を呈する。

皿 c (35) 碗 c の可能性があるが、碗 c に比べ高台径が小さいため皿 c として報告する。

脚付皿 (36) 胎土は精製され、色調は橙色を呈する。皿部分は内外面ともナデ調整。脚部は断面七角形に面取りする。

脚部 (37) 脚部のみだが、皿の脚部と推測される。断面八角形に面取りする。胎土は精製され、色調は橙黄色を呈する。

坏 a (38～70) 復元口径 10.6～14.2cm、器高 2.7～4.15cm、復元底部径 5.4～8.2cm。底部は僅かに丸味を持つものがあるが、全体的に平坦なものが多い。底部と体部の境は丸味がある。色調は淡橙色・淡黄茶色・黄白色等を呈する。45 は内面底部に漆が付着する。49 の口縁端部には煤が付着する。54・56 の内面には漆が付着する。57 は内面に漆が膜状にべっとり残る。62 の胎土は白色砂粒を多く含む。

坏 (71) 内面には漆が付着している。胎土は淡黄灰色を呈する。

大碗 (72) 体部中で僅かに屈曲している。内外面ともヨコナデだが、外面下半は回転ヘラケズリのような痕跡を残す。

碗 c (73～88) 復元高台径 6.9～8.7cm。74 は丸味のある体部で黒色土器に見えるが、黒色化して

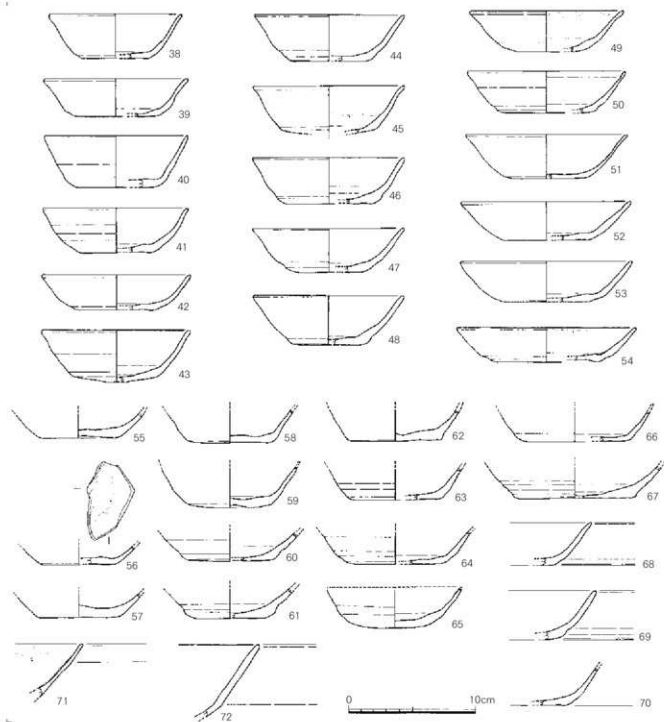


Fig. 53 269SX100 出土遺物実測図② (1/3)

いない。高台は断面三角形の低い高台で、内外面には細かく丁寧なミガキを施す。76は内面にヘラ調整したような痕跡を残す。77は底部外面に漆が点在している。82は外面下半の一部に煤が付着する。84は底部に2.1cmほどの孔を穿っている。85～87はやや高い高台を貼付する。88は内面にべっとり漆が付着する。

脚付皿(89～91) 坏部は欠損しているが、皿形態と推測する。89は脚部径9.2cm。内面不定方向のナデ、その他は磨減。色調は白黄色を呈する。90の色調は淡橙黄色を呈する。内面磨減するが他はヨコナデ調整。91は黄橙色を呈する。

鉢×高坏(92) 口縁部を大きく外反させる。胎土は砂粒をやや含み、色調は淡橙色を呈する。内外

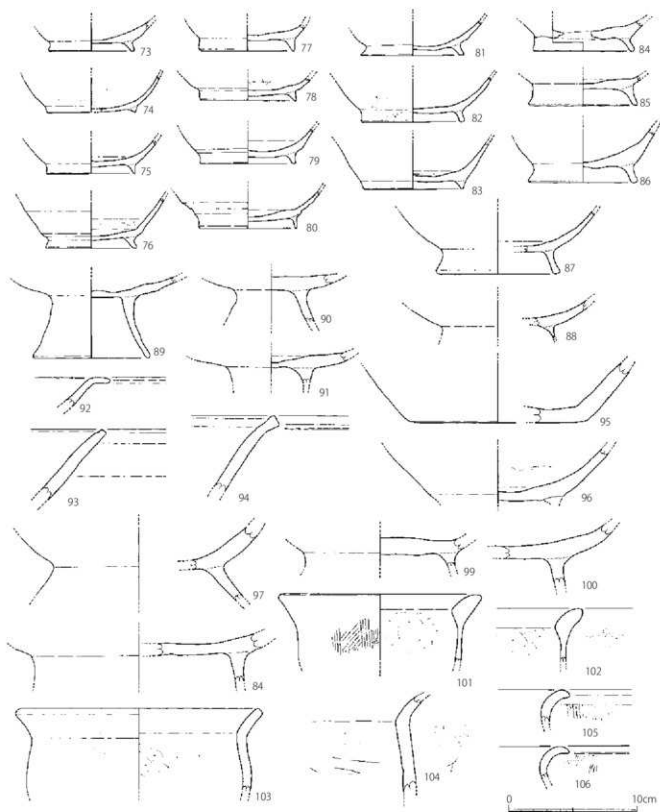


Fig. 54 269SX100 出土遺物実測図③ (1/3)

面とも磨滅する。

鉢 (93～95) 93は口縁端部内面に沈線が巡る。胎土は0.2cm以下の砂粒を多く含み、色調は淡黄色を呈する。94の胎土は0.2cm以下の白色砂粒や茶色粒を多く含み、色調は黄白色や淡灰色を呈する。内外面ヨコナデ、口縁部外面に浅い沈線が巡る。95は復元底径14.0cm。胎土は0.2cm以下の砂粒を多

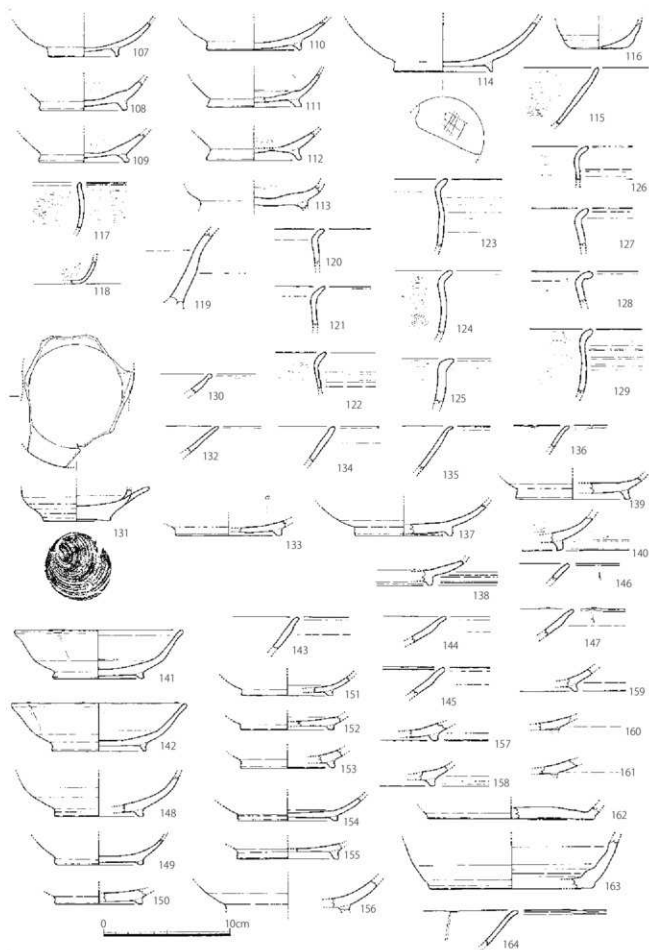


Fig. 55 269SX100 出土遺物実測図④ (1/3)

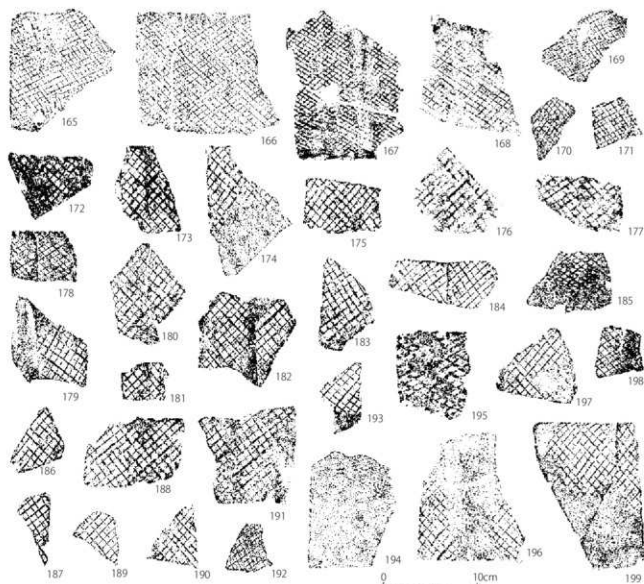


Fig. 56 269SX100 出土遺物実測図⑤ (1/4)

く含み、色調は橙黄色を呈する。磨滅し調整不明瞭。

脚付鉢 (96 ~ 100) 96 は高台が欠損し磨滅もするが、外面底部に板状圧痕が残る。内面には漆が薄くべっとりとう付着する。97 は黄白色や橙色を呈する。全体的に磨滅する。98 の胎土は 0.2cm 以下の砂粒を多く含み、色調は黄橙色を呈する。内面は不定方向のナデ。99 は内面不定方向のナデ、外面底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。100 の胎土は 0.2cm 以下の砂粒を多く含み、色調は淡橙黄色を呈する。

甕 (101 ~ 106) 101・102 は肥厚した口縁部である。同一個体か。103 は復元口径 19.6cm。体部内面はヘラケズリ、外面タテハケが磨滅する。104 は体部内面ヘラケズリ、外面タテハケ。色調は橙灰色を呈する。106 は口縁部を丸く外反させる。外面はタテハケ、内面ヨコナデ調整。

黒色土器

碗 c (107 ~ 114) 全て A 類。内面ミガキ、外面ヨコナデ調整。復元高台径 5.6 ~ 7.8cm。114 は丸味のある体部で、底部外面にヘラ記号が施される。

碗 (115) A 類。内面は細かいミガキを施す。外面上部まで黒化している。

小碗 (116) A 類。復元底径 4.4cm。内面ミガキが残るが、外面は磨滅する。胎土は 0.5cm 以下の白色砂粒を含み、色調は白橙色を呈する。

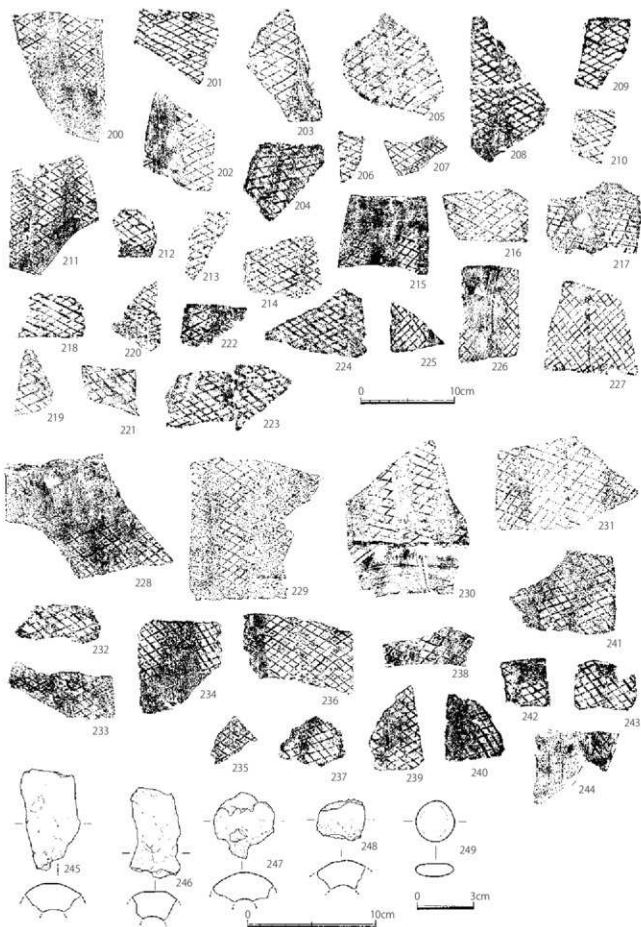


Fig. 57 269SX100 出土遺物実測図⑥ (瓦は 1/4、1/3)

小鉢 (117、118) 117 は口縁部に向かって若干内湾する。内外面には細かく丁寧なミガキを施す。118 は内面に丁寧なミガキを施す。

鉢 (119) A 類。胎土は 0.1cm 以下の白色砂粒を含み、淡褐色を呈する。内外面ともヨコナデだが、内面は黒色化する。下端には高台が付いていた可能性がある。

小甕 (120～128) 全て A 類。口縁部を緩やかに外反させる。内面は黒化しミガキを施す。外面はヨコナデ。122 の外面は強いヨコナデ調整。

甕 (129) A 類。内面ミガキ、外面ヨコナデ調整。胎土は暗茶黒色を呈する。

灰釉陶器

皿 (130) 口縁端部を若干玉縁状に仕上げる。胎土は淡灰色を呈する。釉は残っていない。

緑釉陶器

耳皿 (131) 焼成は硬質で、色調は灰色を呈する。底部外面は回転糸切りで露胎、内面下半はミガキ、内面上半部から外面は回転ナデ、その後光沢のある深い緑色釉を薄く施す。底径 5.3cm。

皿 (132) 焼成は硬質で灰白色を呈する。内外面とも淡緑灰色釉を薄く施す。東海もしくは洛西産。

碗×皿 (133) ややしまっているが軟質で、色調は白黄色を呈する。貼り付け高台の復元高台径 8.4cm。内外面に薄く白っぽい釉を施し、ごく一部に緑色釉が残り、白釉緑彩の可能性ある。内面にトチン痕のような痕跡を残す。

碗 (134～162) 134～139 は硬質。134～136 は東海もしくは洛西型。134 は緑灰色釉を薄く施す。135 の胎土は灰白色を呈し、緑黄色釉を施す。136 は口縁端部に輪花を作る。釉は緑灰色釉で、口縁端部内面に鮮やかな緑色釉を重ねている。137 は削り出し高台で、復元高台径 7.7cm。光沢のある深い緑色釉を全面に薄く施す。洛西型。138 は削り出し高台で、内面底部には浅い沈線を巡らす。内外面に深い緑色釉を薄く施す。洛西型。139 は貼り付け高台で、復元高台径 9.0cm。高台畳付には僅かな沈線が巡る。内面にトチン痕が残る。緑色釉を薄く施す。狼投(東海)産。140 は内外面ミガキの後薄緑色釉を施す。貼り付け高台。狼投(東海)産。141～161 は軟質で、胎土は淡褐色を呈するものが多い。釉は明るい緑色釉で、剥落が著しい。高台が残るものは貼り付け高台。全て防長産と推測される。141 と 142 はほぼ同形で、体部中位で若干屈曲する。外面には縦ヘラ押圧文を 5ヶ所施す。外面下半はヘラケズリ、内面ミガキの後全面施釉する。141 は復元口径 13.3cm、器高 3.85cm、高台径 7.2cm、142 は復元口径 13.8cm、器高 3.85cm、復元高台径 7.5cm。143 は明るい緑色釉を施すが剥落が目立つ。剥落面にはミガキのような痕跡がみえる。145 の口縁端部内面に浅い沈線を巡らす。146 の口縁部に縦ヘラ押圧文を施す。釉は明るい緑色だが、口縁部内面には濃緑色釉を施す。147 の口縁部に縦ヘラ押圧文を施す。148 は丸味のある体部で、復元高台径 7.0cm。釉はほとんど剥落する。149 の胎土は褐色を呈し、全体的に淡緑白色釉を施すが、剥落し釉は点在する。150 は復元高台径 7.0cm。151 は復元高台径 7.2cm。高台畳付に浅い段が巡る。152 は復元高台径 7.4cm。内面底部に沈線が巡る。153 は復元高台径 7.5cm。高台にトチン痕残る。154 は高台径 7.9cm。内面底部に浅い沈線が巡る。高台畳付にはごく浅い段が巡る。釉は内面はよく残るが外面はほとんど剥落する。内面にトチン痕残る。155 は復元高台径 8.0cm。明るく白っぽい緑色釉を施すが剥落が著しい。156 はやや大きめの碗である。釉は全面剥落する。157 の胎土は淡灰茶色を呈する。160・161 の外面は器面も荒れている。

壺 (162、163) 2点とも軟質で、洛北もしくは防長産で、洛北産の可能性が高い。162 は復元底径 13.2cm。胎土は白茶色や淡茶灰色を呈する。釉は明るい緑色釉で、底部外面はミガキの後施釉、内面は回転ナデの後施釉するが、内外面とも剥落が著しい。底部外面には浅い沈線が巡る。163 は復元底径 12.8cm。内外面とも回転ナデで、明るい緑色釉を薄く施すが剥落が著しい。底部外面には浅い沈線が巡る。

灰カツ色土

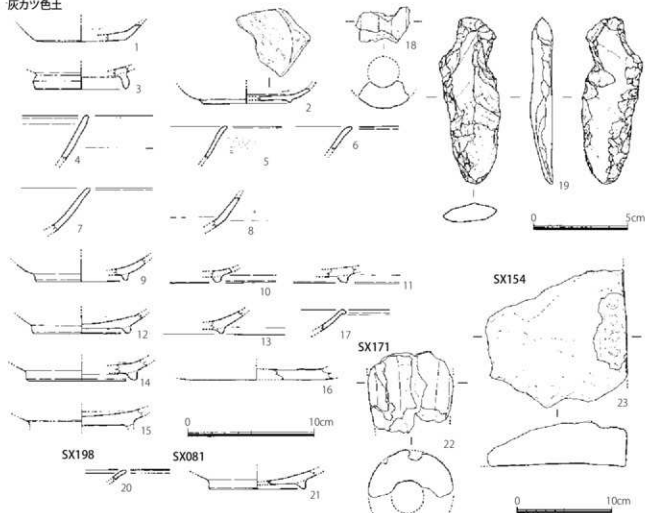


Fig. 58 第 269 次調査灰カツ色土・その他の遺構出土遺物実測図 (1/3, 19 は 1/2, 23 は 1/4)

白磁

碗 (164) 胎土は精製され、白色釉で全面に施釉し、口縁端部に輪花、内面に隆線を施す。

瓦類

遺物年代がほぼ 9 世紀までに取まっていたため、9 世紀代までの格子目の形状や大きさを知るために、できる限り拓本を採り掲載した。

平瓦 (165 ~ 227) 165 ~ 199 は横が 1cm 未満の横長格子叩きで、一部正格子に近いものがある。200 ~ 224 は横が 1cm 以上の横長格子叩きで、ほとんど 1.6cm 以内である。225 ~ 227 はやや縦長の格子叩き。全体的に厚さ 1.7cm 前後である。

丸瓦 (228 ~ 244) 横が 1cm 以上な格子叩きで、1cm 未満のものは出土していない。

土製品

襦羽口 (245 ~ 248) 両端は欠損するが、炉に近い破片とみられ、外面が被熱で融解し、暗灰色に変色している。

石製品

平玉石 (249) 大きさは 2.2 × 2.05cm、厚さ 0.7cm。

その他の土層

灰カツ色土 (第 1 面遺構検出時) 出土遺物 (Fig. 58)

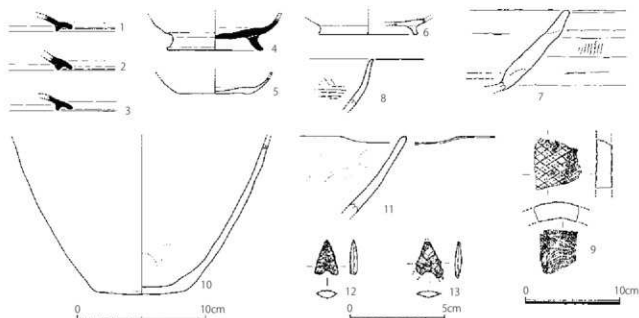


Fig. 59 第269次調査灰褐色土出土遺物実測図 (1/3、12・13は1/2、9は1/4)

土師器

杯 a (1) 復元底径7.0cm。内面に輪状の型が並んでいる。色調は薄橙色を呈する。

黒色土器

碗 c (2) 低い三角形の高台を貼付する。復元高台径7.0cm。丸味のある体部で胎土は茶灰色を呈する。内面には細かく丁寧なミガキを施す。A類。

灰軸陶器

碗 c (3) 復元高台径7.2cm。焼成は良好で、胎土は淡灰色を呈する。内外面とも薄く施釉し、内面は円形状に拭き取る。K90 窯式。

緑釉陶器

碗 (4～8) 4は硬質で、胎土は淡灰色を呈する。内面ミガキ、外面上半部回転ナデ、下半はヘラケズリ内外面に薄い緑色を施す。京都もしくは猿投産とみられるが、京都産の可能性が高い。5～8は防長産とみられる。5は軟質で、胎土は薄黄茶灰色を呈する。内外面ともミガキがみられ、鮮やかな緑色を施すが、上部以外は剥落が著しい。6は軟質で、胎土は白黄茶色で、芯部分は黒灰色を呈する。内外面とも明るい緑色釉を施すが剥落が著しい。7は軟質で、胎土は黄茶灰色を呈する。内外面とも鮮やかな緑色釉を施し、部分的に濃い緑色釉がみられる。全体的に剥落が著しい。8は軟質で、胎土は薄茶色を呈する。外面には縦ヘラ押圧文を施す。内外面に鮮やかな緑色釉を施すが、剥落が著しく、押圧文部分によく残る。

碗 c (9～15) 9～14は貼り付け高台で、防長産とみられる。9は軟質で、胎土は淡橙灰色を呈する。内外面には明るくやや白味のある緑色釉を施すが、剥落が著しい。復元高台径7.3cm。10は軟質で、胎土は茶灰色を呈する。内外面には鮮やかな緑色釉を薄く施すが、剥落が著しい。11は軟質。12は高台径7.8cm。焼成は軟質で、胎土は白茶色を呈する。内外面ともミガキの後明るい緑色釉を施すが剥落が著しく、底部外面はブツブツに荒れている。13は軟質で、胎土は白茶色を呈する。内外面とも明るい緑色釉を施すが剥落が著しい。14は軟質で、胎土は薄茶色を呈する。内外面には鮮やかな緑色釉を薄くが、剥落が著しい。復元高台径8.8cm。15はケズリ出し高台でやや硬質。内外面に薄い黄緑色釉を施し、一部に緑色釉が施す。洛北型か。

壺 (16) 焼成は軟質で、薄橙白色を呈する。内面回転ナデ、外面調整不明。内外面とも薄緑色釉を施すが、外面底部は剥落し、釉が点々と残る。洛北もしくは防長産。

灰釉陶器

皿 (17) 口縁端部を曲げる。内外面に若干青みがかかった透明釉を施す。

土製品

襷羽口 (18) 胎土は 0.3cm 以下の白色砂粒を多く含む。外面は融解している。

石製品

石匙 (19) 両側面を中心に細かく加工する。縦 8.8cm、横 3.15cm、厚さ 1.15cm。安山岩製。

その他の遺構出土遺物 (Fig. 58)

緑釉陶器

皿 (20, 21) 20 は口縁部内面に沈線を巡らす。焼成は硬質で、光沢のある黄緑色釉を施す。京都もしくは狼投産。SX198 より出土。21 は復元高台径 7.7cm。胎土は軟質で淡橙色を呈する。内外面とも明緑色釉を施すが、剥落が著しい。SX081 より出土。防長産。

土製品

襷羽口 (22) 復元外径約 6.7cm。胎土は 0.4cm 以下の白色砂粒を多く含む。SX171 より出土。

瓦類

鬼瓦 (23) 欠損磨滅し残りは悪いが、周縁分の珠文が 5 個確認できる。色調は灰色、断面は黒灰色を呈する。SX154 より出土。

灰褐色土 (第 1 面基盤層) 出土遺物 (Fig. 59)

須恵器

蓋 1 (1～3) 色調は淡灰色を呈する。

坏 c (4) ハ字形に開いた高台を貼付する。復元高台径 7.6cm。色調は灰青色を呈する。

土師器

坏 a (5) 底部切り離しは回転ヘラ切り、復元底径 5.6cm。色調は黄白色を呈する。

碗 c (6) 復元高台径 7.8cm。色調は黄白色を呈する。

鉢 (7) 胎土は 0.4cm 以下の白色砂粒を多く含む、色調は黄白色を呈する。外面にハケのような痕跡がある。粘土帯の状況が残る。

古式土師器

碗 (8) 口縁端部が僅かに外反する。内面にハケ目が残る。色調は黄白色を呈する。

瓦類

丸瓦 (9) 0.7×1.1cm 前後の横長格子叩き。

弥生土器

甕 (10) 若干丸味のある底部で、復元底径 7.2cm。底部外面には叩きもしくはハケ調整が残る。全体的に磨滅するが、内面ハケ調整とみられる。色調は茶褐色を呈する。

鉢 (11) 意図的か明確ではないが、口縁部を凹ませている。胎土は砂粒を多く含む、茶灰色を呈する。内面細かいハケ、外面は工具痕が残るが、調整不明瞭。

石製品

石鏃 (12, 13) 12 は縦 1.85cm、横 1.25cm、厚さ 0.4cm、黒曜石製。13 は両端を欠損し、縦 1.95cm、横 1.45cm、厚さ 0.35cm、黒曜石製。

○第 2 面

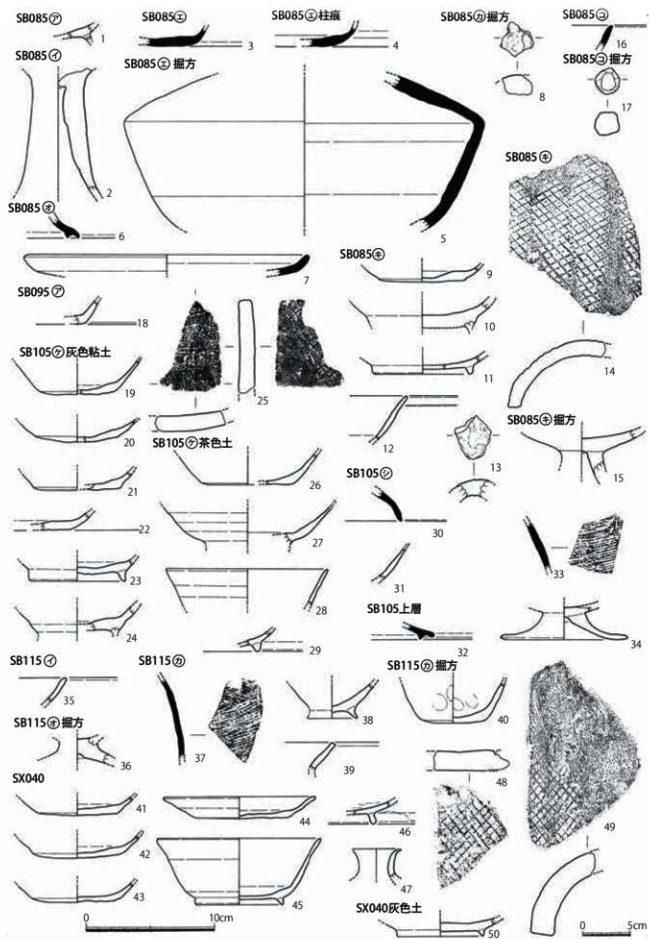


Fig. 60 269SB085・095・105・115、SX040 出土遺物実測図 (1/3、瓦は1/4)

掘立柱建物

269SB085 ㊸出土遺物 (Fig. 60・61)

黒色土器

椀 c (1) 内外とも磨滅するが、内面は黒化する。胎土は橙色を呈する。

木製品

柱材 (51) 掘り方に遺存していた掘立柱建物の柱材で、高さ 37.8cm、径 18.3～22.6cm。全面腐食し表面は残っていない。

269SB085 ㊹出土遺物 (Fig. 60・61)

土師器

高坏 (2) 内外面とも磨滅する。胎土は 0.5cm 以下の砂粒を含み、色調は黄白色を呈する。

木製品

柱材 (52) 掘り方に遺存していた掘立柱建物の柱材で、高さ 60.8cm、径 16.0～18.6cm。全面腐食するが、約 9 面に面取り加工している。

269SB085 ㊺出土遺物 (Fig. 61)

木製品

柱材 (53) 掘り方に遺存していた掘立柱建物の柱材で、高さ 52.8cm、径 20.5～29.6cm。

269SB085 ㊻出土遺物 (Fig. 60)

須恵器

椀 a (3) 底部と体部との境に若干丸味がある。内面底部ナデ、底部外面は回転ヘラ切り後、粗いナデ調整。焼成還元良好で、色調は淡灰色を呈する。

269SB085 ㊼柱痕出土遺物 (Fig. 60・61)

須恵器

椀 a (4) 底部と体部との境に若干丸味がある。内面底部ナデ、その他は回転ナデ。底部外面は回転ヘラ切り後未調整。焼成還元良好で、色調は淡灰色を呈する。胎土は白色砂粒を含む。蓋の可能性もある。

木製品

柱材 (54) 掘り方に遺存していた掘立柱建物の柱材で、高さ 50.8cm、径 25.2～30.2cm。断面部はでこぼこしているが、腐食し加工痕とは明確に言い切れない。側面部は幅 5～10cm 程の幅で面取り加工している。

269SB085 ㊽掘方出土遺物 (Fig. 60)

須恵器

壺 b (5) 還元不良で赤茶色を呈する。外面下半が回転ヘラケズリ、その以外は内外面とも回転ナデ調整。

269SB085 ㊾出土遺物 (Fig. 60)

須恵器

蓋 1 (6) 内外面とも回転ナデ調整。色調は淡灰色を呈する。

高坏 (7) 復元口径 22.6cm。外面は灰かぶり、内面は回転ナデ調整する。

269SB085 ㊿出土遺物 (Fig. 61)

木製品

柱材 (55) 掘り方に遺存していた掘立柱建物の柱材で、高さ 56.0cm、径 28.0～30.4cm。側面部は腐食するが面取り加工がみられる。断面部には伐採時の加工痕が残る。

269SB085 ㊽掘方出土遺物 (Fig. 60)

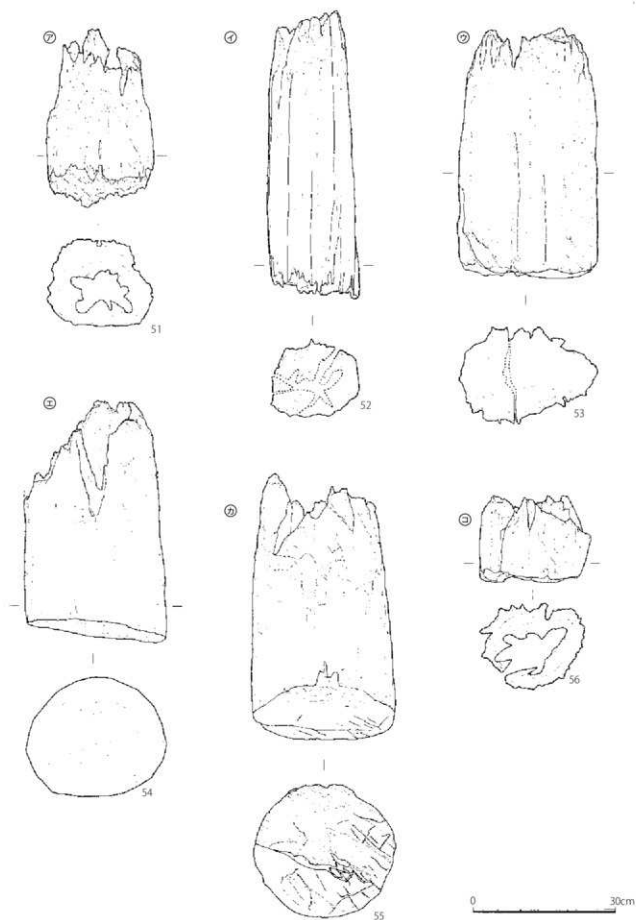


Fig. 61 269SB085 柱材実測図 (1/8)

土製品

籬羽口 (8) 外面は被熱で灰色となる。

269SB085 ㊤出土遺物 (Fig. 60)

土師器

坏 a (9) 底部は回転ヘラ切り後に板状圧痕が残す。復元底径 7.0cm。色調は淡橙色を呈する。

碗 c (10) 色調は灰茶色を呈する。

黒色土器

碗 c (11) A 類。復元高台径 8.0cm。

緑釉陶器

碗 (12) 胎土は暗灰色の硬質で、体部中位で若干屈曲する。わかりづらいがミガキが少々確認できる。内外面に暗緑色釉を薄く施す。洛西もしくは東海産とみられるが、洛西型の可能性が高い。

土製品

籬羽口 (13) 外面は被熱で融解し、灰色に変色する。

瓦類

丸瓦 (14) 0.8×1.2cm の横長格子叩き。色調は青灰色を呈する。

269SB085 ㊤掘方出土遺物 (Fig. 60)

土師器

高坏 (15) 胎土は精製され、色調は淡橙色を呈する。内外面とも磨減し調整不明。

269SB085 ㊤出土遺物 (Fig. 60・61)

須恵器

坏 (16) 口縁端部の破片で、内外面とも回転ナデ、色調は淡灰色を呈する。

木製品

柱材 (56) 掘り方に遺存していた掘立柱建物の柱材で、高さ 18.3cm、径 18.2～23.3cm。

269SB085 ㊤掘方出土遺物 (Fig. 60)

瓦類

瓦玉 (17) 大きさは 2.1×1.95cm、厚さ 1.85cm。

269SB095 ㊤出土遺物 (Fig. 60)

土師器

坏 (18) 内外面とも磨減する。胎土は橙色を呈する。内面が灰黒色のため黒色土器の可能性もある。

269SB105 ㊤灰粘土出土遺物 (Fig. 60)

土師器

坏 (19～22) 復元底径 6.0～7.0cm。19・20 は若干丸味のある底部で、色調は白橙色や淡橙色を呈する。21・22 は平坦な底部である。

碗 c (23, 24) 23 は高台径 7.7cm。内外面ともヨコナデで、底部には板状圧痕も残る。24 は内外面ともヨコナデで、色調は白橙色を呈する。

瓦類

平瓦 (25) 0.8×0.7cm 前後のやや縦長の格子叩き。

269SB105 ㊤茶色土出土遺物 (Fig. 60)

土師器

坏 a (26) 復元底径 7.4cm。色調は黄橙色を呈する。

碗 c (27) 若干丸味のある体部に高台を貼付する。内外面ヨコナデ。色調は黄白色を呈する。

椀 (28) 復元口径 12.8cm。色調は暗茶色を呈する。内外面ともヨコナデ。

黒色土器

椀 c (29) 胎土は橙色を呈する。内面は黒化する。

269SB105 ㊟ (125) 出土遺物 (Fig. 60)

須恵器

坏蓋 (30) 胎土は白色砂粒を含み、色調は灰色を呈する。内外面とも回転ナデ調整。

土師器

坏 (31) 内外面ともヨコナデ調整。色調は黄白色を呈する。

269SB105 上層 (120) 出土遺物 (Fig. 60)

須恵器

蓋 1 (32) 内外面とも回転ナデ。色調は淡灰色を呈する。

甕 (33) 外面叩きで部分的にナデ、内面粗いヨコナデ。色調は暗灰色を呈する。

古式土師器

高坏 (34) 低い脚部で、復元脚部径 10.0cm。坏部は粘土接合部で剥落する。

269SB115 ㊤ 出土遺物 (Fig. 60)

土師器

坏 (35) 磨減し調整不明。色調は橙色を呈する。

269SB115 ㊤ 掘方出土遺物 (Fig. 60)

古式土師器

高坏 (36) 脚部内面上部にハケ目痕が残る。色調は淡橙黄色を呈する。

269SB115 ㊤ 出土遺物 (Fig. 60)

須恵器

甕 (37) 外面叩きで部分的にナデ、内面粗いヨコナデ。色調は暗灰色を呈する。

古式土師器

小椀 (38) 復元高台径 4.0cm。内外面とも磨減し調整不明。色調は淡黄色を呈する。

甕 (39) 胎土は 0.1cm 以下の砂粒を含み、色調は淡灰茶色を呈する。内外面ともヨコナデ。

小鉢 (40) 丸味のある底部で復元底径 5.0cm。内外面ともナデ調整で指頭圧痕が残る。

269SB115 上層 (SX040) 出土遺物 (Fig. 60)

土師器

坏 a (41~43) 底部が若干丸味を帯びている。復元底径 6.4~7.1cm。磨減し調整不明瞭。

皿 a (44) 口径 12.1cm、器高 1.75cm、底径 7.5cm。底部回転ヘラ切りだが全体的に磨減する。色調は淡黄橙色を呈する。

椀 c (45) 復元口径 13.0cm、器高 5.25cm、復元高台径 6.0cm、色調は淡黄橙色を呈する。

灰釉陶器

椀 (46) 胎土は灰白色で、内面は輪状に釉を施していない。内外面とも施釉するが、高台から底部にかけては露胎である。K90 窯式。

越州窯系青磁

小壺 (47) 小片で全形が分かりづらい。胎土は淡灰色を呈し、光沢があり貫入のある茶緑色釉を内外面に施す。

瓦類

平瓦 (48) 0.8×0.8cm 前後の格子叩き。色調は灰色を呈する。

丸瓦 (49) 1×0.8 cm前後の縦長格子叩き。色調は灰色を呈する。

269SB115 上層 (SX040 灰色土) 出土遺物 (Fig. 60)

緑釉陶器

皿 (50) 復元高台径 6.9cm。焼成は軟質で、色調は淡橙色を呈する。内外面に淡緑色釉を施したと思われるが、剥落著しく内面は残っていない。防長産。

(5) 小結

今回の調査の主な所見は、以下のとおりである。

- ・掘立柱建物 5 棟、柵 1 条を検出。
- ・出土遺物の多くが 9 世紀代のもので、10 世紀以降の遺物はごく僅かである。
- ・奈良時代の遺物では、縄目叩きの瓦は多いが、須恵器や土師器は極めて少ない。
- ・緑釉陶器が多く出土 (102 点)。

○掘立柱建物について

調査地は攪乱が各所に入っている上に、調査段階で一部整地を除去してしまっている。また、夏場の降雨により遺構が荒れる状況であったため、遺構の新旧の検証が不十分なところがみられ、1 面目の基盤層にも遺物が混入している可能性がある。1 面と 2 面分けて報告しているものの、逆の面の遺構である可能性もあるため、遺構面にとらわれず、遺構の切り合いや出土遺物等から遺構の状況についてまとめてみたい。

遺構の切り合いや建物の方位から検討すると、SB085 は遺物量が少ないものの、他よりひとまわり大きいいため、奈良時代には建築されたものと推測される。遺構の切り合いからも、最も古い建物であることは明瞭である。掘り方の遺物から 8 世紀前半～中頃に建築されたものと推測される。その後 SB085 には SB105 が切り込み、さらに SB105 には SB115 が切り込んでいる。それ以外の建物の切り合いはないが、建物の振れ等から推測すると、全体として以下の 3 時期に分かれると推測される。しかし、これらの建物群もほぼ 9 世紀代で途絶え、10 世紀以降に建物を伴う土地利用は見ることができない。

【掘立柱建物の変遷】

- ① 8 世紀前半～中頃建築 ② 9 世紀中～後半廃絶 ③ 9 世紀後半廃絶
SB085 ⇒ SB075・105 ⇒ SB095・115、SA015

○条坊路について

調査区西辺付近に井上条坊案の右郭 8 坊路が推定されているが、調査区内で右郭 8 坊路に該当するような明確な道路痕跡は確認できていない。しかし、1 面目の遺構状況を見ると SD020 を境に東側にピットが多く、西側に大きな溜まりや土坑 (SX001・100 等) が多く展開する。SX001・100 などが敷地境界部に近い廃棄土坑や窪みと考えるならば、現在調査区西側を南北に走る市道付近に 8 坊路が通るものと推測される。

○緑釉陶器について

第 269 次調査で 102 点という多くの破片が出土した。山本信夫氏の協力のもとその産地について検討した。判断が難しい破片もあったが、以下のように約 8 割が防長産と推測される緑釉陶器であった。

防長産…80 点

防長もしくは京都産洛西型…3 点

防長もしくは東海 (猿投) 産…2 点

京都産洛北型…2 点

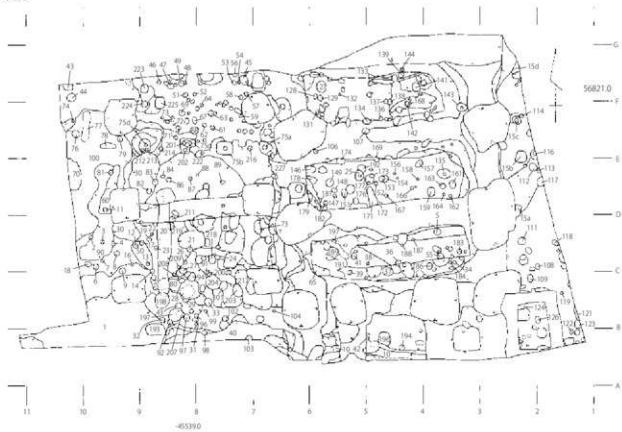
京都産洛西型…3 点

京都産洛西型もしくは東海 (猿投) 産…9 点

東海 (猿投) 産…3 点

※ 下線の産地の方が可能性が高い。

1面目



2面目

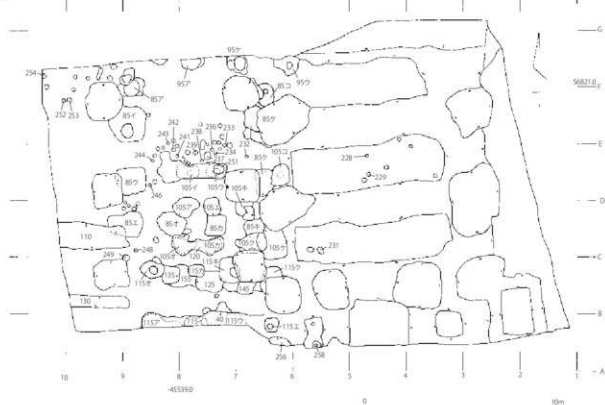


Fig. 62 第 269 次調査略測図 (1/200)

表 9 第 269 次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	269SX001	窪み	炭混じり茶褐色土	Ⅷ期(9c中～後)前後	AB8～10
2		ビット	灰色土	9世紀	C9
3		ビット	灰色土	平安前期	C9
4		ビット	灰色土	平安前期	C9
5	269SX005	ビット	茶色土		C3
6		ビット	灰色土		C9
7		ビット	灰色土	9世紀	C9
8		ビット	灰色土	9世紀	C9
9		ビット	灰色土		C9
10	269SD010	溝	黒灰色土	10世紀代	A4～6
11		ビット	灰色土	9世紀	D9
12		ビット			C9
13		ビット		古代	C8
14		ビット			C8
15	269SA015	掘列	柱痕は灰色土 堀方は茶色土		D～F2
16		ビット	灰色土		C9
17		ビット	茶色土	古代	C8
18		ビット	灰色土		C9
19		ビット	茶色土		C8
20	269SD020	溝	黒灰色土 S-80→20	Ⅷ～Ⅸ期	B～D8
21		ビット	灰色土	古代	C8
22		ビット	灰色土		C8
23		ビット	灰色土		C8
24		ビット	茶色土		C3
25	269SX025	ビット	柱痕は灰色土 堀方は黄色土	9世紀	D5
26		ビット	茶色土		C3
27		ビット	灰色土		C8
28		ビット	黄灰色土		B8
29		ビット	灰色土		B8
30	269SX030	落ち込み	黒灰色土 S-85→75→30	Ⅷ期	C・D8-9
31		ビット	灰色土		B8
32		ビット	灰色土	平安時代	B8
33		ビット	灰色土		B7
34		ビット	灰色土	9世紀	C3
35	269SX035	ビット	柱痕は茶色土 堀方は黄色土	9世紀後半前後	D3
36		ビット	灰色土	平安時代	C4
37		ビット	茶色土		C4
38		ビット	灰色土		C4
39		ビット	灰色土		C5
40	269SX040	溝×落ち込み	269SB105の上面 灰褐色土	9世紀	A6～8
41		ビット	灰色土	古代	C5
42		ビット	灰色土		A4
43		ビット	茶色土	古代	F10
44		ビット	灰色土		F10
45		ビット	灰茶色土		F7
46		ビット	灰色土		F8
47		ビット	灰色土		F8
48		ビット	灰色土		F8
49		ビット	灰色土		F8
50	落ち込み	明灰色土		9世紀	C8-9
51		ビット	灰色土	古代	F8
52		ビット	灰色土		F8
53		ビット	灰色土		F7
54		ビット	灰色土		F7
55		ビット	茶色土		C3
56		ビット	灰色土		F7
57		ビット	灰色土		F7
58		ビット	灰色土	古代	F7
59		ビット	灰色土		E7
60	269SX100	落ち込み	茶黄色土 S-100→90→60	Ⅷ期(9c中～後)前後	D9
61		ビット	灰色土		E7
62		ビット	灰色土	古代	E7
63		ビット	灰色土		E7
64		ビット	灰色土		E7
65		ビット×落ち込み	黒灰色土(炭混じり)	9世紀中～後半	C5
66		ビット	灰色土		E7
67		ビット	灰色土	古代	E8
68		ビット	灰色土		E8
69		ビット	灰色土		E8
70	269SX100	落ち込み	茶黒色土	平安前～中期	D10
71		ビット	灰色土		E8
72		ビット	灰色土		E8
73		ビット	灰色土		C6-E8
74		ビット	灰色土		E10
75	269SB075	掘立柱建物	S-85→75→30	9世紀?	E6～8
76		ビット	灰色土	9世紀	F10
77		落ち込み×溝	灰色土	平安前期	E9
78		落ち込み×溝	灰色土	平安時代	E9
79		ビット	灰色土	9世紀	E9
80	269SX080	溝×落ち込み	灰色土 S-80→20	9世紀	B8

81		ビット	灰色土			D9
82		ビット	茶色土		9世紀	D8
83		ビット	灰色土		10世紀?	D8
84		ビット	灰色土		古代	D8
85	269SB085	竪立柱建物	S-85→105→115		8世紀前～中頃? 建築 9世紀埋没	C～F、6～9
86		ビット	灰色土		平安時代	D8
87		ビット	灰色土			D8
88		ビット	茶色土			D7
89		ビット	灰色土			D7
90	269SX100	落ち込み	茶色土	S-100→90→60		Ⅷ期(9c～後)前後
91		ビット	灰色土		平安時代	B7
92		ビット	灰色土		9世紀	B8
93		ビット	灰色土			B8
94		ビット	灰色土			B8
95	269SB095	竪立柱建物			9世紀	F6-7
96		ビット	灰色土			B8
97		ビット	灰色土			B8
98		ビット	灰色土		平安時代	A7
99		ビット	灰色土			B7
100	269SX100	落ち込み	黒灰色土	S-100→90→60		Ⅷ期(9c～後)前後
101		ビット	黄灰色土			B7
102		ビット	灰色土		平安時代	B7
103		ビット	灰色土		平安時代	A7
104		ビット	灰色土			B6
105	269SB105	総柱建物	S-85→105→115			Ⅷ期前後
106		ビット	淡灰色土			E5
107		ビット	淡灰色土		平安時代	E5
108		ビット	茶色土			C1
109		ビット	灰色土		古代	B2
110		溝×落ち込み	灰黄茶色土		9世紀	C9
111		ビット	茶色土			C2
112		ビット	茶色土			D2
113		ビット	茶色土			D1
114		ビット	茶色土			E2
115	269SB115	総柱建物	S-85→105→115			Ⅷ～Ⅷ期
116		ビット	灰色土		9世紀	ABE～8
117		ビット	黄灰色土		9世紀	D1
118		ビット	灰色土		9世紀	C1
119		ビット	灰色土			B1
120	269SB105	廻り方	SB105の廻り方 茶灰黄色土			Ⅷ期前後
121		ビット	茶色土			B1
122		ビット	灰色土			A1
123		ビット	灰黄色土			B1
124		ビット	灰色土			B2
125	269SB105	廻り方	S-125→115			Ⅷ期前後
126		ビット	灰色土			B2
127		ビット	灰色土		古代	F5
128		ビット	灰色土			F5
129		ビット	灰色土			F5
130		溝×落ち込み	灰色土		9世紀	B9
131		ビット	灰色土		9世紀	E5
132		ビット	灰色土		古代	F5
133		ビット	灰色土		9世紀	F4
134		ビット	灰色土		平安時代	E4
135		ビット	灰黄色土			B8
136		ビット	灰色土		平安時代	E4
137		ビット	灰色土		平安時代	E4
138		ビット	灰色土		古代	E4
139		ビット	灰色土		9世紀	F4
141		ビット	灰色土			F4
142		ビット	灰色土			E4
143		ビット	柱痕は灰色土 廻りは黄灰色土		平安時代?	E4
144		ビット	灰色土		平安時代	F4
145		ビット	淡灰黄色土			B6
146		ビット	灰茶色土		平安時代	D5
147		ビット	灰黄色土			D5
148		ビット	灰黄色土			D5
149		ビット	灰黄色土			D5
151		ビット	茶色土			D5
152		ビット	灰色土		平安時代	D4
153		ビット	灰黄色土		古代	D4
154		ビット	黄色土			D4
155	269SB105	廻り方	SB105の一部 茶灰黄色土			B6-7-8
156		ビット	灰色土		平安時代	D4
157		ビット	灰黄色土		古代	D4
158		ビット	灰色土		古代	D4
159		ビット	茶色土		古墳時代?	D3
161		ビット	茶色土		古墳時代?	D3
162		ビット	茶色土			D3
163		ビット	灰色土			D3
164		ビット	茶色土			D3
166		ビット	灰色土		古代	D4

167	ビツト	灰色土		D4
168	ビツト	黄色土		E4
169	ビツト	灰色土	古代	D4
171	溝	茶色土		D4
172	ビツト	灰色土		D4
173	ビツト	灰色土		D4
174	ビツト	灰色土		D5
176	ビツト	灰色土	平安時代	D4
177	ビツト	灰色土	古代	D4
178	ビツト	茶色土	古代	D5
179	ビツト	灰黄色土		D5
181	ビツト	灰黄色土		D5
182	ビツト	灰色土		D5
183	ビツト	茶色土		C3
184	ビツト	灰色土	9世紀	C3
186	ビツト	茶色土	古代	C3
187	ビツト	灰色土		C4
188	ビツト	茶色土		C4
189	ビツト	茶色土		C5
191	ビツト	灰黄色土		C5
192	ビツト	灰色土	古代	D5
193	ビツト	灰黄色土		A8
194	ビツト	灰色土	平安時代	A4
196	ビツト	茶色土		A4
197	ビツト	黒灰色土		C5
198	ビツト	灰黄色土	9世紀	B8
199	ビツト	灰黄色土	古代	B8
201	ビツト	灰色土		E8
202	ビツト	灰色土		E8
203	ビツト	灰黄色土	古代	B7
204	ビツト	茶色土		B7
206	ビツト	灰色土		B7
207	ビツト	黒灰色土		B8
208	ビツト	黒灰色土		B8
209	ビツト	灰色土		C8
211	ビツト	灰色土		C8
212	ビツト	灰色土	平安時代	E8
213	ビツト	灰色土		E8
214	ビツト	灰色土	平安時代	E8
216	ビツト	灰色土		E7
217	ビツト	茶黄色土		C7
218	ビツト	茶色土		C7
219	ビツト	黒灰色土		C8
221	ビツト	茶色土		C7
222	ビツト	灰色土		E7
223	ビツト	茶色土		F8
224	ビツト	灰色土		E8
226	ビツト	灰色土		E8
227	ビツト	灰色土		D6
228	ビツト	灰黄色土		D4
229	ビツト	灰黄色土		D4
231	ビツト	茶灰色土		C5
232	ビツト	灰色土		D6
233	ビツト	灰色土		D7
234	ビツト	灰色土		D7
236	ビツト	灰色土		D7
237	ビツト	灰色土		D7
238	ビツト	灰色土		D7
239	ビツト	灰色土		D7
241	ビツト	灰色土		D8
242	ビツト	灰色土		D8
243	ビツト	灰色土		D8
244	ビツト	灰色土		D8
246	ビツト	灰色土		D8
247	ビツト	灰色土		C8
248	ビツト	灰色土		C8
249	ビツト	灰色土	古代	C8
251	ビツト	茶色土		D7
252	ビツト	灰色土		E10
253	ビツト	灰色土		E9
254	ビツト	灰色土	9世紀?	F10
256	落ち込み?	灰色土		A6
258	ビツト	漆灰色砂 灰色土	平安時代	A5

表 10 第 269 次調査 出土遺物一覽表

5-1 須 惠 器蓋、蓋c、環c、鏤、鏤? 土 師 器蓋、环、环a、鏤c、鏤c、鏤、小鏤 黑色土器A類陶、陶 綠 釉 陶 器胎、破片(防長古) 瓦 類平瓦(格子)小、磨り消し(織目、無文) 早瓦(織目)、瓦五	5-21 須 惠 器蓋 土 師 器蓋	5-40灰土 土 師 器环、环c、鏤 綠 釉 陶 器胎(防長古)
5-2 土 師 器环、环c、鏤、鏤	5-22 瓦 類破片	5-41 須 惠 器蓋 土 師 器片、环c、鏤 黑色土器A類陶、陶 瀬州黄系青磁破片Ⅱ(I) 瓦 類破片
5-3 須 惠 器蓋3、破片 土 師 器片、环c、鏤、鏤 黑色土器A類陶、破片 綠 釉 陶 器胎(防長古)	5-23 土 師 器破片	5-42 土 師 器环c、破片 瓦 類平瓦(織目)
5-4 土 師 器环、环c、破片 瓦 類平瓦(格子)、破片	5-24 土 師 器环	5-43 土 師 器环c、破片 瓦 類破片
5-5 瓦 類平瓦(織目、格子(小))	5-25 土 師 器破片 瓦 類平瓦(織目)	5-44 土 師 器环
5-6 須 惠 器蓋×鏤	5-25特焼 土 師 器环c、陶、破片 瓦 類平瓦(織目)	5-45 土 師 器破片 瓦 類平瓦(織目)
5-7 須 惠 器蓋、破片 土 師 器片、陶 黑色土器A類陶、破片 瓦 類平瓦(格子)	5-26 土 師 器环	5-46 土 師 器蓋
5-8 土 師 器环、环c、破片 瓦 類破片	5-27 須 惠 器蓋3 土 師 器破片 石 製 品平玉石	5-47 土 師 器破片
5-9 土 師 器破片	5-28 須 惠 器蓋 土 師 器蓋	5-48 土 師 器破片
5-10 須 惠 器环、鏤 土 師 器环、环c、鏤、鏤、鏤 黑色土器A類陶 中 須 陶 器胎(I) 瓦 類平瓦(織目、二重格子、破片) 丸瓦(格子(小))、瓦五	5-29 須 惠 器蓋 土 師 器蓋	5-49 土 師 器破片
5-11 土 師 器环、环c、鏤 瓦 類平瓦(織目)	5-30 須 惠 器蓋7、环、环c、鏤、鏤、鏤、破片 土 師 器环、环c、环a、大直c、陶、鏤 黑色土器A類陶、陶、鏤 綠 釉 陶 器胎、皿、破片(防長古、東海×防長古) 灰 陶 器胎 瓦 類平瓦(織目、格子(小)、無文、破片)、丸瓦 金 属 製 品平玉石 石 製 品平玉石 土 製 品輪背口	5-50 須 惠 器蓋 土 師 器环、环c、鏤 黑色土器A類破片 瓦 類平瓦(織目)、丸瓦
5-12 土 師 器环c、破片	5-31 土 師 器环	5-51 土 師 器环、鏤
5-13 土 師 器环 黑色土器A類陶	5-32 須 惠 器破片 土 師 器陶c、破片	5-52 土 師 器破片
5-14 土 師 器环	5-33 土 師 器环、环c、鏤	5-53 黑色土器A類破片
5-15a 須 惠 器环 土 師 器破片	5-34 土 師 器环、环c	5-54 土 師 器破片
5-15b 土 師 器破片	5-35 土 師 器环、环c、鏤 瓦 類平瓦(織目)	5-55 須 惠 器蓋 土 師 器环 瓦 類平瓦(織目)、丸瓦(無文)
5-15c 須 惠 器环 土 師 器蓋、破片	5-35a 土 師 器环	5-56 土 師 器破片
5-15d 土 師 器蓋	5-35b 土 師 器环、环c、鏤 瓦 類平瓦(織目)、丸瓦(無文)	5-57 土 師 器破片
5-16 土 師 器破片	5-35c 土 師 器环、环c、鏤、鏤 瓦 類平瓦(織目)、丸瓦	5-58 土 師 器环
5-17 土 師 器环、陶c	5-36 須 惠 器蓋 土 師 器蓋、破片 瓦 類平瓦(織目)	5-59 土 師 器破片
5-18 土 師 器环、鏤?	5-37 土 師 器破片 金 属 製 品器背	5-60 須 惠 器蓋3、蓋c、环c、鏤、鏤 土 師 器环、环c、环(今石川)、环c、鏤c 陶、鏤、鏤、形成不物品、破片 黑色土器A類陶、陶 瀬州黄系青磁陶(I)、I-II(I) 緑破片Ⅱ(I) 綠 釉 陶 器胎、陶c、直×陶、破片(防長古) 瓦 類平瓦(織目、格子、無文)、丸瓦(格子、無文) 金 属 製 品器背
5-19 土 師 器破片 石 製 品洞片(安山岩)	5-38 土 師 器环	5-61 土 師 器破片
5-20 須 惠 器蓋1、蓋3、环、环c、鏤、破片 土 師 器蓋2、小皿a×环a、环、环c、陶、鏤 黑色土器A類陶、陶 瀬州黄系青磁陶(土字(I)、緑破片(I)) 綠 釉 陶 器胎、破片(防長古) 瓦 類平瓦(織目)、丸瓦(格子、破片) 金 属 製 品器背 木 の 製品	5-39 土 師 器破片	5-62 土 師 器环 瓦 類平瓦(織目)
	5-40 須 惠 器蓋、鏤、破片 土 師 器环、环c、环a、陶c 黑色土器A類陶 綠 釉 陶 器破片(東海) 灰 陶 器胎 瀬州黄系青磁小皿 陶、生土、器蓋 瓦 類平瓦(織目、格子(小))、破片 金 属 製 品器背 石 製 品磁石、平玉石	5-63 土 師 器蓋

S-101 土 師 器 破片	S-115 土 師 器 破片 土 師 器 破片 古 式 土 師 器 高杯	S-136 須 惠 器 破片 土 師 器 破片 黒色土器 3 類陶
S-102 土 師 器 破片 黒色土器 3 類陶c	S-116 土 師 器 破片	S-137 須 惠 器 破片 土 師 器 破片a、b、c、破片
S-103 須 惠 器 破片 土 師 器 破片、F/a 黒色土器 3 類破片 瓦 類平瓦(格子中)、破片 土 製 品 輪郭口	S-117 須 惠 器 破片 土 師 器 破片、F/a、F/b 古 式 土 師 器 小瓶、壺	S-138 土 師 器 破片 瓦 類平瓦(溝目)
S-104 土 師 器 破片	S-118 須 惠 器 破片 古 式 土 師 器 小鉢	S-139 土 師 器 破片、F/a、破片
S-105a 土 師 器 破片、壺	S-119 土 師 器 破片、壺類	S-141 土 師 器 破片、壺 弥 生 土 師 器 × 壺
S-105b 土 師 器 破片 黒色土器 3 類破片	S-120 須 惠 器 破片 土 師 器 破類、破片 石 製 品 磁石?	S-142 土 師 器 破片
S-105c 土 師 器 破片	S-121 須 惠 器 破片	S-143 土 師 器 破片
S-105d 土 師 器 破片	S-122 土 師 器 破片、F/a、b、c	S-144 土 師 器 破片 黒色土器 3 類破片
S-105e 土 師 器 破片、破片	S-123 土 師 器 破片	S-145 古 式 土 師 器 7、破片
S-105f 土 師 器 破片、壺、破片	S-124 土 師 器 破片、F/a、b、c 瓦 類破片	S-146 土 師 器 破片、F/a、壺類
S-105g 土 師 器 破片、壺	S-125 須 惠 器 破片 土 師 器 破片、壺、破片	S-147 土 師 器 破片
S-105h 土 師 器 破片 土 師 器 破片、壺、破片	S-126 須 惠 器 破片、F/a 古 式 土 師 器 高杯	S-148 土 師 器 破片
S-105i 土 師 器 破片 土 師 器 破片、壺、破片	S-127 土 師 器 破片	S-149 土 製 品 輪郭口?
S-105j 土 師 器 破片 土 師 器 破片、壺、破片	S-128 土 師 器 破片	S-151 土 師 器 破片
S-105k 土 師 器 破片 土 師 器 破片、壺、破片	S-129 須 惠 器 破片 土 師 器 破片、破片	S-152 土 師 器 破片、b、c 瓦 類丸瓦
S-105l 土 師 器 破片 土 師 器 破片、壺、破片	S-130 須 惠 器 破片 土 師 器 破片、F/a、b、c 黒色土器 3 類陶 瓦 類平瓦(溝目)、丸瓦	S-153 土 師 器 破片、b、c 瓦 類破片
S-105m 土 師 器 破片 土 師 器 破片、壺、破片	S-131 須 惠 器 破片 土 師 器 破片、F/a、b、c、破片	S-154 土 師 器 破片 瓦 類平瓦(溝目、格子小)、丸瓦
S-105n 土 師 器 破片 土 師 器 破片、壺、破片	S-132 土 師 器 破片	S-155 石 製 品 破片(黒磁石)
S-105o 土 師 器 破片 土 師 器 破片、壺、破片	S-133 土 師 器 破片、F/a 黒色土器 3 類破片	S-156 土 師 器 破片
S-105p 土 師 器 破片 土 師 器 破片、壺、破片	S-134 土 師 器 破片、F/a 黒色土器 3 類陶	S-157 須 惠 器 破片 土 師 器 破片、破片 瓦 類破片(溝目)
S-105q 土 師 器 破片 土 師 器 破片、壺、破片	S-135 須 惠 器 破片 土 師 器 高杯、壺類、破片	S-158 土 師 器 破片、破片
S-105r 土 師 器 破片 土 師 器 破片、壺、破片		S-159 古 式 土 師 器 壺、破片
S-105s 土 師 器 破片 土 師 器 破片、壺、破片		S-161 古 式 土 師 器 壺
S-105t 土 師 器 破片 土 師 器 破片、壺、破片		S-162 土 師 器 破片
S-105u 土 師 器 破片 土 師 器 破片、壺、破片		S-163 土 師 器 破片、破片 石 製 品 磁石?
S-105v 土 師 器 破片 土 師 器 破片、壺、破片		S-164 土 師 器 壺類
S-105w 土 師 器 破片 土 師 器 破片、壺、破片		S-166 土 師 器 破片、F/a、b、c、壺 瓦 類破片
S-105x 土 師 器 破片 土 師 器 破片、壺、破片		S-167 土 師 器 破片
S-105y 土 師 器 破片 土 師 器 破片、壺、破片		S-168 土 師 器 破片

表 11 第 269 次調査 土師器・黒色土器計測表

A：内径×高さ B：底径×底高

種別	器種	遺物番号	図番	口径	底径	底高	A	B
土師器	甕	→	K-001	Fig. 49-2	13.8	1.36	8.7	—
	甕	→	K-002	Fig. 49-3	1.65	—	—	—
	甕	→	K-001	Fig. 49-14	2.75	1.7	—	—
	甕	→	K-002	Fig. 49-10	2.9	1.8	0	—
	甕	→	K-003	Fig. 49-11	2.6	1.6	0	0
	甕	→	K-004	Fig. 49-4	(11.4)	3.35	16.8	—
	甕	→	K-006	Fig. 49-8	(13.8)	3.2	16.4	—
	甕	→	K-008	Fig. 49-7	2.25	1.4	0	0
	甕	→	K-009	Fig. 49-13	1.75	1.3	0	0
	甕	→	K-010	Fig. 49-12	1.85	1.4	0	0
	甕	→	K-011	Fig. 49-9	1.8	1.4	0	0
	甕	→	K-012	Fig. 49-12	1.7	1.4	0	0
黒色土器	甕	→	K-013	Fig. 49-17	2.25	1.4	0	0
	甕	→	K-016	Fig. 49-16	2.3	1.4	0.2	—
	甕	→	K-021	Fig. 49-5	(12.0)	3.4	17.4	0
	甕	→	K-023	Fig. 49-15	1.65	1.3	0	0
	甕	→	K-018	Fig. 49-21	2.4	1.6	0	0
	甕	→	K-024	Fig. 49-20	3.2	1.8	0	0

種別	器種	遺物番号	図番	口径	底径	底高	A	B
土師器	甕	→	K-001	Fig. 47-1	(14.4)	2.9	—	—
	甕	→	K-002	Fig. 47-4	3.4	—	—	—
	甕	→	K-003	Fig. 47-3	3.4	—	—	—
黒色土器	甕	→	K-005	Fig. 47-2	1.9	1.4	0	0
	甕	→	K-006	Fig. 47-5	3.4	1.8	0	0

種別	器種	遺物番号	図番	口径	底径	底高	A	B
土師器	小甕×大甕	→	K-020	Fig. 47-13	(16.0)	1.65	17.2	0
	甕	→	K-001	Fig. 47-19	2.2	1.6	0	0
	甕	→	K-002	Fig. 47-18	1.9	1.7	0	0
	甕	→	K-002	Fig. 47-17	1.75	1.7	0	0
	甕	→	K-016	Fig. 47-20	2.4	1.6	0	0
	甕	→	K-017	Fig. 47-21	1.6	1.4	0	0
	甕	→	K-018	Fig. 47-19	1.7	1.4	0	0
	甕	→	K-019	Fig. 47-22	3.1	1.7	0	0
	甕	→	K-022	Fig. 47-14	1.9	1.6	—	—
	甕	→	K-004	Fig. 47-22	2.65	1.7	0	0
	甕	→	K-007	Fig. 47-23	1.9	1.6	0	0
	甕	→	K-010	Fig. 47-28	2.3	1.8	0.56	0
甕	→	K-011	Fig. 47-22	2.4	1.7	0	0	
甕	→	K-012	Fig. 47-29	2.6	1.8	0	0	
甕	→	K-013	Fig. 47-29	4.2	1.9	—	—	
甕	→	K-014	Fig. 47-24	2.75	1.7	0	0	
甕	→	K-015	Fig. 47-30	2.7	1.7	0	0	

種別	器種	遺物番号	図番	口径	底径	底高	A	B
土師器	甕	→	K-002	Fig. 49-1	1.4	—	—	—

種別	器種	遺物番号	図番	口径	底径	底高	A	B
土師器	甕	→	K-001	Fig. 51-1	(15.4)	3.25	—	—
	甕	→	K-010	Fig. 51-8	—	1.15	—	—
	甕	→	K-011	Fig. 51-4	—	2.0	17.3	—
	甕	→	K-012	Fig. 51-2	—	2.2	17.0	—
	甕	→	K-018	Fig. 51-4	—	2.2	17.2	—
	甕	→	K-019	Fig. 51-3	—	2.2	16.8	—
	甕	→	K-021	Fig. 51-7	—	2.4	17.4	—
	甕	→	K-022	Fig. 51-5	—	2.35	17.4	—
	甕	→	K-008	Fig. 51-13	—	2.35	16.8	—
	甕	→	K-007	Fig. 51-9	—	2.4	16.9	—
	甕	→	K-009	Fig. 51-10	—	3.15	17.0	—
	甕	→	K-009	Fig. 51-12	—	2.4	16.2	—
甕	→	K-016	Fig. 51-14	—	2.3	16.0	—	
甕	→	K-017	Fig. 51-11	—	2.4	16.0	—	
甕	→	K-024	Fig. 51-20	—	2.4	16.0	—	
甕	→	K-023	Fig. 51-19	—	4.25	—	—	

種別	器種	遺物番号	図番	口径	底径	底高	A	B
土師器	甕	→	K-001	Fig. 51-28	—	3.0	—	—
	甕	→	K-002	Fig. 51-28	—	1.9	—	—
	甕	→	K-003	Fig. 51-30	—	1.4	—	—

種別	器種	遺物番号	図番	口径	底径	底高	A	B
土師器	甕	→	K-001	Fig. 60-14	(11.1)	1.75	7.8	—
	甕	→	K-003	Fig. 60-43	—	1.7	7.1	—
	甕	→	K-004	Fig. 60-42	—	1.7	6.5	—
	甕	→	K-007	Fig. 60-41	—	1.4	6.4	—
	甕	→	K-005	Fig. 60-49	(13.0)	2.25	16.0	—

種別	器種	遺物番号	図番	口径	底径	底高	A	B
土師器	甕	→	K-002	Fig. 62-2	—	1.25	17.0	—
	甕	→	K-007	Fig. 62-3	—	2.3	16.8	—
	甕	→	K-008	Fig. 62-6	—	2.3	16.3	—

種別	器種	遺物番号	図番	口径	底径	底高	A	B
土師器	甕	→	K-004	Fig. 61-33	—	1.6	—	—
	甕	→	K-004	Fig. 61-31	—	1.9	17.0	—
	甕	→	K-005	Fig. 61-32	—	2.0	—	—

種別	器種	遺物番号	図番	口径	底径	底高	A	B
黒色土器	甕	→	K-001	Fig. 60-1	—	1.1	—	—

種別	器種	遺物番号	図番	口径	底径	底高	A	B
土師器	甕	→	K-001	Fig. 60-9	—	1.2	17.0	—
	甕	→	K-002	Fig. 60-10	—	1.9	—	—
	甕	→	K-003	Fig. 60-11	—	2.1	16.0	—

種別	器種	遺物番号	図番	口径	底径	底高	A	B
土師器	甕	→	K-005	Fig. 62-12	—	1.4	17.4	—
	甕	→	K-001	Fig. 62-13	—	1.3	16.3	—
	甕	→	K-002	Fig. 62-14	—	1.2	17.0	—
	甕	→	K-003	Fig. 62-13	—	1.4	17.4	—
	甕	→	K-004	Fig. 62-16	—	2.4	16.0	—

種別	器種	遺物番号	図番	口径	底径	底高	A	B
土師器	甕	→	K-001	Fig. 60-18	—	1.9	—	—

A：内径×高さ B：底径×底高

種別	器種	遺物番号	図番	口径	底径	底高	A	B
土師器	小甕	→	K-001	Fig. 52-28	(13.1)	1.3	7.4	—
	甕	→	K-002	Fig. 52-28	(13.1)	1.3	(11.8)	—
	甕	→	K-007	Fig. 52-23	(12.2)	1.3	(10.1)	—
	甕	→	K-018	Fig. 52-26	(12.8)	1.2	(8.8)	—
	甕	→	K-008	Fig. 52-30	—	1.9	—	—
	甕	→	K-015	Fig. 52-29	(16.0)	2.45	19.0	—
	甕	→	K-009	Fig. 52-27	(13.8)	1.4	16.4	—
	甕	→	K-016	Fig. 52-24	(12.8)	1.4	16.0	0
	甕	→	K-024	Fig. 52-21	—	1.4	—	—
	甕	→	K-011	Fig. 52-25	(12.4)	1.4	(8.7)	—
	甕	→	K-028	Fig. 52-27	(13.1)	1.5	(10.8)	0
	甕	→	K-029	Fig. 52-25	—	2.5	—	—
	甕	→	K-020	Fig. 52-20	—	2.5	—	—
	甕	→	K-023	Fig. 52-43	—	2.5	17.0	—
	甕	→	K-019	Fig. 52-70	—	3.0	—	—
	甕	→	K-080	Fig. 52-47	(12.0)	1.5	16.2	—
	甕	→	K-079	Fig. 52-60	—	1.7	16.1	—
	甕	→	K-082	Fig. 52-66	—	1.4	16.0	—
	甕	→	K-091	Fig. 52-44	(11.9)	1.35	16.4	—
	甕	→	K-092	Fig. 52-53	(13.4)	1.3	(1.4)	—
	甕	→	K-100	Fig. 52-69	(12.2)	1.2	16.0	—
	甕	→	K-101	Fig. 52-42	(11.9)	1.2	16.0	—
	甕	→	K-102	Fig. 52-41	(11.4)	1.2	16.0	—
	甕	→	K-103	Fig. 52-41	(11.4)	1.35	16.1	—
甕	→	K-104	Fig. 52-42	—	2.3	—	—	
甕	→	K-105	Fig. 52-43	—	2.35	16.2	—	
甕	→	K-123	Fig. 52-61	(13.0)	1.5	17.4	—	
甕	→	K-125	Fig. 52-60	—	2.3	—	—	
甕	→	K-124	Fig. 52-66	—	2.3	16.0	—	
甕	→	K-138	Fig. 52-61	—	2.4	17.0	—	
甕	→	K-137	Fig. 52-67	—	2.45	16.0	—	
甕	→	K-136	Fig. 52-68	(12.4)	2.4	16.0	—	
甕	→	K-140	Fig. 52-64	—	2.4	16.0	—	
甕	→	K-141	Fig. 52-65	(11.4)	2.7	16.0	—	
甕	→	K-142	Fig. 52-65	(11.4)	2.8	16.0	—	
甕	→	K-176	Fig. 52-67	—	1.9	16.0	0	
甕	→	K-180	Fig. 52-48	(11.0)	1.9	16.0	—	
甕	→	K-181	Fig. 52-48	(11.0)	1.65	16.2	—	
甕	→	K-187	Fig. 52-69	—	3.0	—	—	
甕	→	K-188	Fig. 52-58	—	2.4	—	—	
甕	→	K-189	Fig. 52-58	(10.8)	1.3	(5.4)	—	
甕	→	K-190	Fig. 52-59	(11.4)	1.3	(7.0)	—	
甕	→	K-191	Fig. 52-50	(11.4)	1.4	16.0	—	
甕	→	K-192	Fig. 52-52	(11.4)	1.1	16.0	0	
甕	→	K-227	Fig. 52-68	—	3.4	—	—	
甕	→	K-229	Fig. 52-71	—	3.9	—	—	
甕	→	K-231	Fig. 52-84	(14.1)	1.7	(8.2)	—	
甕	→	K-180	Fig. 52-23	—	2.1	—	—	
甕								

②五条地区

1、第78次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市五条1丁目2453-3で、いわゆる五条交差点の北西角に当たる。

1988(昭和63)年8月11日、(株)三興住宅企業から共同住宅建築に伴う埋蔵文化財の問い合わせがあり、その後諸々協議を行い、1988(昭和63)年10月8日に発掘調査は実施した。開発対象面積は182.07㎡であったが、対象地西側は以前建っていた寿司屋の生け簀やトイレなどで深さ1.2m程が破壊されており、調査を行ったのは対象地の東側で、調査面積は16㎡である。調査は緒方俊輔が担当した。

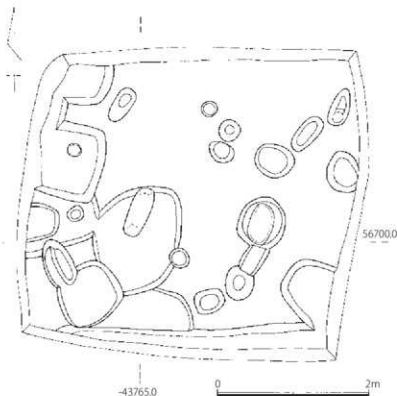


Fig. 63 第78次調査遺構全体図(1/50)

(2) 基本層位と検出遺構

調査対象地は南側県道とほぼ同じレベルにあり、表土が約0.3mあり、その直下が明茶色砂の地山で、それに遺構が掘削されている。

遺構はピットや土坑であったが、目立った遺構は検出されておらず、遺物の出土量も少なく小片が多い。埋土のほとんどが暗褐色土であった。

(3) 出土遺物

全体として遺物量は極めて少なく、器形などが明確な遺物を報告する。

第78次調査出土遺物 (Fig. 64)

須恵器

蓋3 (1) 復元口径18.0cm。口縁端部付近は重ね焼きのため色調が分かれ、内側が薄茶色、外側が淡灰白色を呈する。外面上半部は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ。SX003より出土。

土師器

蓋3 (2) 胎土は精製され、色調は橙色を呈する。内面ミガキa、外面回転ナデ調整。SX004より出土。黑色土器

椀c (3) A類。復元高台径8.4cm。内外面にミガキを丁寧な施す。胎土は橙色を呈する。SX007より出土。

瓦類

平瓦 (4) 縄目叩きで、凹面は布目痕が残る。厚さ2.3cm前後。焼成良好で色調は淡灰色を呈する。SX004より出土。

表土出土遺物 (Fig. 64)

土師器

蓋 3 (5) 復元口径 16.0cm, 内外面回転ナデ調整。胎土は微細な砂粒を多く含み、色調は橙褐色を呈する。

坏 a (6) 底部切り離しは回転ヘラ切りで、その他は回転ナデ調整。色調は淡橙色を呈する。復元底径 7.4cm。

坏 d (7) 口縁部の破片で全形が個めにくい、やや浅い坏と推測される。内外面ミガキだが、内面は使用のためやや磨滅する。色調は橙褐色を呈する。

(4) 小結

極めて狭い範囲のため全容は不明であるが、奈良時代を中心とした古代前期を中心とした遺構が展開していた可能性が高い。また、比較的浅い位置で遺構が確認されており、当時は現地表面に近いレベルで生活していた可能性が高い。

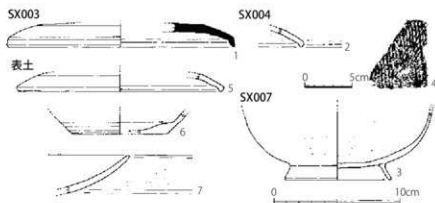


Fig. 64 第78次調査出土遺物実測図 (1/3, 4は1/4)

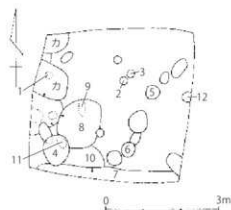


Fig. 65 第78次調査遺構略測図 (1/100)

表12 第78次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1		ビット	擾乱の下層のビット	古代	
2		ビット		古代?	
3	78SX003	ビット		奈良時代	
4	78SX004	窪み		奈良時代?	
5		ビット			
6		ビット		古代	
7	78SX007	溝or段落ち?		平安前期	
8		窪み		古代	
9		ビット	S-8の下層のビット	古代?	
10		窪み		古代	
11		ビット	S-4の下層のビット	古代	
12		ビット		奈良時代?	

表13 第78次調査 出土遺物一覧表

S-1 土 師 器 蓋	S-4 土 師 器 蓋	S-11 土 師 器 蓋 破 片
S-2 土 師 器 蓋	S-7 顔 色 土 師 器 蓋 破 片	S-12 土 師 器 蓋 破 片
S-3 表 土 師 器 蓋 3 坏 土 師 器 蓋 破 片	S-8 須 恵 器 蓋 破 片	表 土 須 恵 器 蓋 破 片 土 師 器 蓋 3 坏 a, 坏 d, 壞 土 製 出 土 塊
S-4 須 恵 器 蓋 破 片 土 師 器 蓋 3 坏 瓦 類 平 瓦 (須 田)	S-9 土 師 器 蓋	出 土 塊 本 埋 (S-6a-7) 土 師 器 蓋 破 片 白 磁 瓦 類 : B-1a(1)
	S-10 土 師 器 蓋 破 片	

2、第167次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市五条2丁目5-6、2985-12で、藍染川の下流の南岸に位置する。

1994(平成6)年11月1日、(株)ふじわらから埋蔵文化財の問い合わせがあった。11月10日に確認調査を実施し、希薄ではあったものの1.7m前後で遺構が確認された。その後1995(平成7)年5月、RC4階建の店舗兼共同住宅の建築計画の届出が出されたため、発掘調査をすることとなった。発掘調査は、開発者の調査費用負担のもと、1995(平成7)年5月8日～5月18日に実施した。開発対象面積で130㎡、調査面積は60㎡である。調査は城戸康利が担当した。

(2) 基本層位 (Fig. 67)

調査地は真砂土が約1.6～2mと厚く盛土され、その下に耕作土と床土が厚さ0.25m程広がっている。その下には全体ではないものの、茶灰色土の包含層や水成層が0.2m程あり、その下の明黄色砂の地山で遺構が確認される。遺構検出時の遺物取上げは茶色砂で行っている。

また、明黄色砂の地山については、一部トレンチを設定し掘削を行った。全体として粗砂や微細砂層、また拳大の礫層等が堆積し、2m程下がったところで堅い地盤にいたる。この砂礫層からは縄文土器や剥片が出土していることから、その頃の河川堆積により地盤が形成されたことが理解できた。

(3) 検出遺構

井戸

167SE001 (Fig. 68)

調査区西南隅で検出された井戸で、掘り方は東西1.2m以上、南北1.8m以上、深さ1.2mの円形とみ

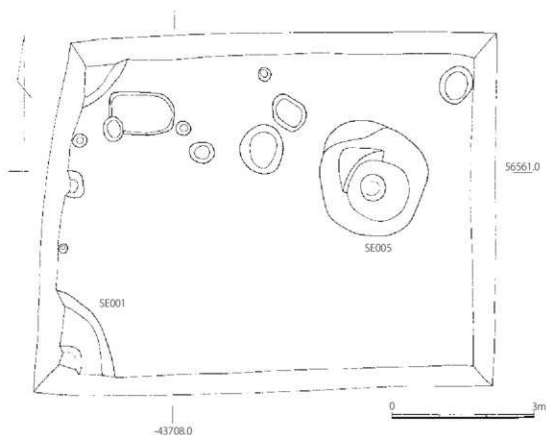
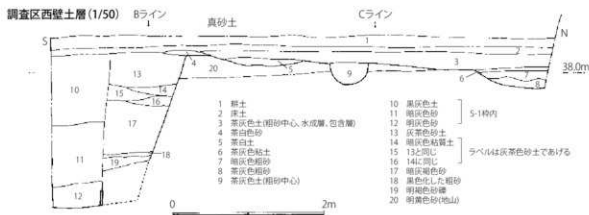


Fig. 66 第167次調査全体図 (1/80)



地山トレンチ模式図(約1/50)

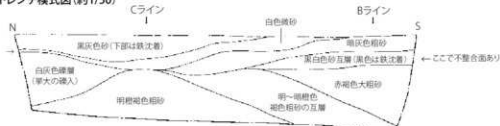


Fig. 67 第167次調査土層実測図(1/50)

られる。検出時に掘り方の円形プランとそれより小さい井戸枠痕跡とみられる円形プランを確認できた。その後の掘削で、検出プラン通りに堆積状況が確認でき、さらに掘り方底面中央付近では0.5m掘り下がった円形状の土坑が検出され、僅かに桶材の残骸が検出されている。これらのことから径0.7m程の円形の結桶を井戸枠として使用していたと推測される。

167SE005 (Fig. 68)

掘り方は東西2.3m、南北2.45m、深さ1.14mの円形で、掘り方底面中央には曲物を据えたと考えられる径0.54m、深さ0.3m程の円形土坑が掘られている。埋土は明茶色土で、曲物痕跡とみられる底面の円形土坑のみが明灰色粘土であった。

(4) 出土遺物

井戸

167SE001 黒灰色土出土遺物 (Fig. 69)

土師器

坏a (1, 2) 底部切り離しは回転系切りで、板状圧痕が残る。1は復元口径14.3cm、器高2.75cm、復元底径9.7cm。2は復元口径14.4cm、器高2.5cm、復元底径10.6cm。

須恵質土器

鉢(3) 片口の鉢。内外面とも回転ナデで、色調は青灰色を呈する。東播系。

167SE001 暗灰色砂出土遺物 (Fig. 69)

土師器

小皿a (4) 口径9.4cm、器高1.3cm、復元底径7.9cm。底部切り離しは回転系切りで、板状圧痕が残る。内面底部は回転ナデの後ナデ調整。

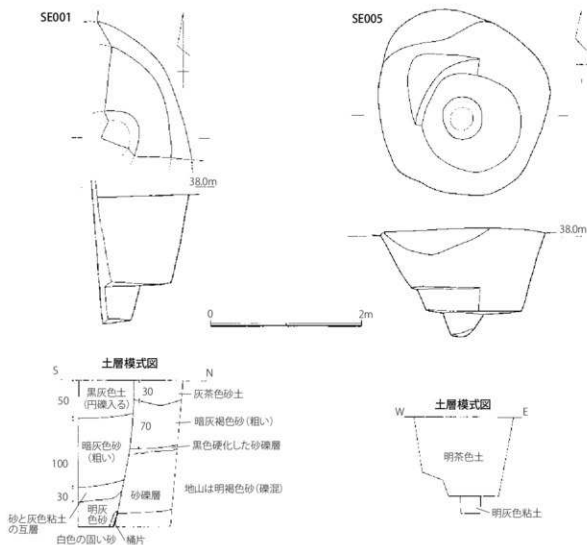


Fig. 68 第167次調査 SE001-005 遺構実測図 (1/50)

坏 a (5, 6) 底部切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。内面底部は回転ナデの後ナデ調整。5は復元底径9.2cm。6は復元口径13.2cm、器高2.1cm、復元底径9.9cm。

須恵質土器

鉢 (7) 外面底部は糸切り。内外面は回転ナデ。色調は暗灰色や灰色を呈する。東播系。

石製品

石鍋 (8) 石鍋の底部で、復元底部径16.3cm。内面は擦痕があり、外面はケズリで煤が付着する。外面底部には径0.03cm程の穴が20個程あけられている。滑石製。

167SE001 明灰色砂出土遺物 (Fig. 69)

石製品

砥石 (9) 大きさは長さ13.8cm、幅9.7cm、厚さ6.6cm。使用面は4面。砂岩製。

167SE001 灰茶色砂土出土遺物 (Fig. 69)

土師器

小皿 a (10~12) 底部切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。色調は薄橙茶色や淡灰茶色を呈する。復元口径9.2~9.6cm、器高1.0~1.2cm、復元底径7.3~8.4cm。

坏 a (13) 底部切り離しは回転糸切り。器高2.75cm。

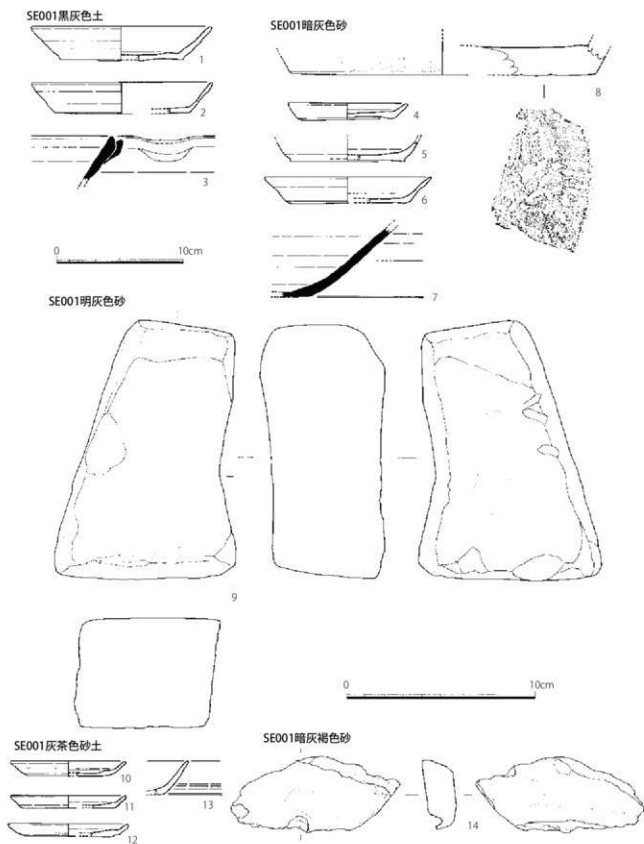


Fig. 69 167SE001 出土遺物実測図 (1/3、石製品は1/2)

167SE001 暗灰褐色砂出土遺物 (Fig. 69)

石製品

石鍋 (14) 内外面にケズリ痕跡があり、外面には煤が付着する。内面に穴があるが、石材そのもの

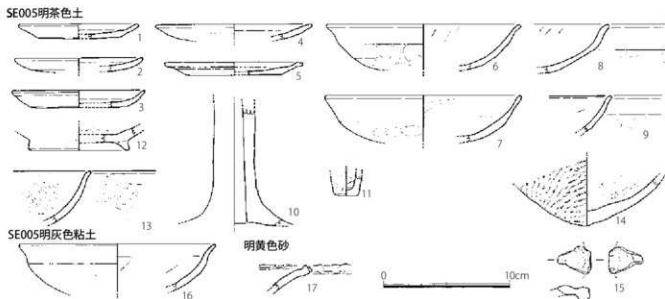


Fig. 70 167SE005、明黄色砂出土遺物実測図 (1/3)

にあったものである。

167SE005 明茶色土出土遺物 (Fig. 70)

土師器

小皿 a (1～4) 復元口径 9.6～12.4cm、器高 1.2～1.4cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。

小皿 a2 (5) 復元口径 11.0cm、器高 1.1cm、復元底径 7.6cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。

丸底坏 a (6～8) 内面ミガキ b、外面底部は押し出でて、指頭圧痕を残す。色調は黄白色を呈する。
6は復元口径 15.4cm、7は復元口径 15.6cm。

丸底坏 (9) 内面ミガキ b、外面下半には指頭圧痕を残す。

器台 (10) 脚部で縦方向のナデ。胎土は砂粒を多く含み、色調は黄白色を呈する。

小碗 (11) 丁寧な手捏ね土器とみられる。復元底径は 2.0cm。内外面ナデ調整。胎土は精製され、色調は淡灰黄色を呈する。

黒色土器

碗 c (12) B 類。ミガキの単位は磨滅し不明瞭。復元高台径 8.0cm。

碗 (13) B 類。口縁端部を僅かに外反させる。内外面ともミガキ c を施す。外面は上半部だけ黒化している。

製塩土器

甕 (14) 尖り気味の底部で、外面には叩きで、内面はナデ調整。焼成は良好で劣化せず、固く締まっている。色調は橙茶色や黒灰色を呈する。

土製品

鋳型 (15) 小片で分かりづらいが、花卉状の浮き彫りがみられる。胎土は砂粒を多く含み、粒子は粗い。色調は明灰色や暗灰色を呈する。

167SE005 明灰色粘土出土遺物 (Fig. 70)

土師器

丸底坏 (16) 復元口径 15.6cm。内面ミガキ c を施す。外面は指頭圧痕をナデ消している。

その他の遺物

第167次調査明黄色砂出土遺物 (Fig. 70)

縄文土器

3、第 297 次調査

(1) 調査に至る経緯

対象地は、太宰府市五条 2 丁目 2983 番 11 である。遺跡包蔵地区内で店舗兼住宅を建築するため、事前に埋蔵文化財の調査を行った。

太宰府市建設産業課から道路拡張に伴う店舗兼住居の移転のための問い合わせがあり、平成 24 (2012) 年 3 月 27 日に確認調査を行ったところ、遺構・遺物が確認された。その後の協議の結果、建物の基礎構造として杭を打ち込むため埋蔵文化財が破壊されることが明らかになった。そのため文化財保護法 93 条を同年 6 月 20 日に提出して、記録保存のための発掘調査を行うことになった。遺跡包蔵地区では名称は大宰府条坊跡となる。鏡山条坊案では左郭 5 条 11 条にあたり、井上信正氏の条坊案では条坊外となる。調査期間は平成 24 (2012) 年 7 月 6 日～同年 7 月 10 日。開発対象面積は 154.66 m²で調査面積は 28 m²。調査担当者は高橋学である。

(2) 基本層位

太宰府平野の東端に近く、御笠川が白川地区から南方向へ流れて、その後南西へ流れを転ずる地点より、東へ 150m ほどの地点に位置する。現地表面の高さは、標高 39m 程度である。現地表面から 180cm ほど下位に、10cm ほどの厚みの包含層があり、その下に暗灰色砂が地山として堆積している。今回検出した小穴 1 つは、この暗灰色砂に掘られている。

(3) 検出遺構

その他の遺構

297SX001 (Fig. 72)

小穴。遺構は北東方向の調査区外に伸びているため、全容は明らかではない。調査区内では少なくとも半径 0.5m の円形の掘り方を確認した。遺構面からの深さは 0.4m を測る。出土遺物は少なく、わずかに土器片が出土した。土器の色調が白色系のため奈良時代ではなく、平安時代以降のものと推定した。よってこの遺構は平安時代以降に埋没したと推定できる。

(4) 小結

この現場での遺構の出土状況と 2 軒東隣りの調査成果 (第 167 次調査) を比較すると、砂層の基盤に小穴が点在する状況が酷似している。第 167 次調査の出土遺構の年代観を参考にすると、当該地の遺構も同じく鎌倉～室町時代の可能性が考えられる。

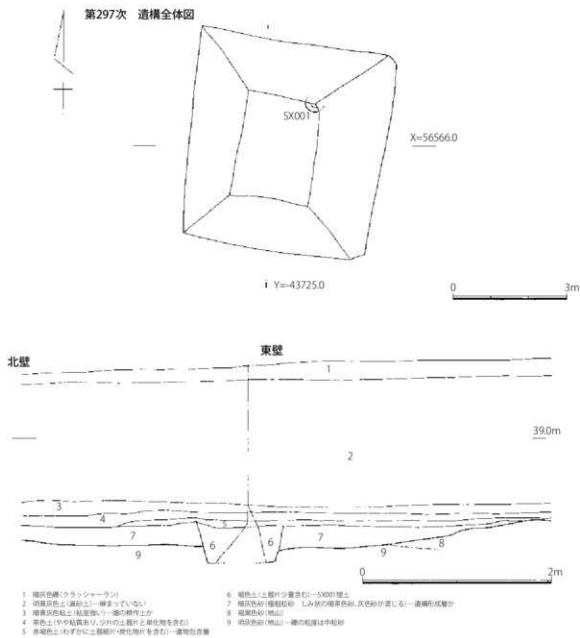


Fig. 72 第 297 次調査遺構全体図 (1/100)・調査区土層図 (1/40)

4、第298次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市五条2丁目2983-7で、遺構面は標高31.5～33mで南西に向かって下がる立地である。

2010(平成22)年10月18日、太宰府市建設産業課より、五条口線道路整備工事(歩道新設)に伴う埋蔵文化財についての照会があった。建物解体後の2013(平成25)年1月28日に確認調査を行い、1.3mで遺構が確認された。道路工事の工期が3月末という状況であったため、太宰府市建設課と協議し、対象地での工事を調査終了まで行わないことで合意すると同時に、早急に発掘調査の段取りを行うこととなった。

発掘調査は2013(平成25)年1月30日～1月31日に実施した。開発対象面積は98.83㎡であったが、対象地では直前に建っていた鉄筋コンクリート

4階建の基礎が厚く残存していた。基礎については、今回の工事で除去する予定がないこと、撤去するにはかなりの時間と労力を要すること、近接地で遺構が希薄であることなどから基礎の撤去は行わず、調査可能な対象地南側を調査することとなった。土砂置き場を加味しながら表土除去を行ったところ、確認調査を行った場所以外で全く遺構が確認できなかったため、その遺構のみ調査を行った。調査面積は4.8㎡である。調査は宮崎亮一が担当した。

(2) 基本層位

調査直前には付近一帯は過去の試掘調査から盛土を行い現在の地形を造り上げていることが多い。地表面から約1.2mが現代の盛土で、その下に旧耕作土とみられる暗灰色土と茶色土(床土)があり、遺構はそれらを除去した淡黄灰色の細かい砂質土で検出された。なお、この砂質土は脆い土質であった。

(3) 検出遺構

井戸

298SE001 (Fig. 74)

掘り方は1.85m×1.54m、深さ1.5mの楕円形で、北東から南西方向に長い形状をなしている。埋土は遺構検出時点で中央付近に黒灰色土が目立つ状態で、断面土層やその後の井戸枠検出位置から考えると井戸枠の埋没土であったことがわかった。この黒灰色土には上面で花崗岩礫が少量出土していたが、全体を通して遺物の出土量は少なかった。掘削途中に木質は未確認であった。黒灰色土が途切れた深さ2m付近から隅丸方形に白灰色砂と淡灰色砂の堆積が互層に確認され、井戸使用時に堆積したものと判断できる。ただし、それにも遺物はほとんど含まれていない。そして、その砂に混じるように井戸枠材の最下部が検出された。枠は内法南北0.48m、東西約0.52mで、部材は全て腐食し、状態は良くなか

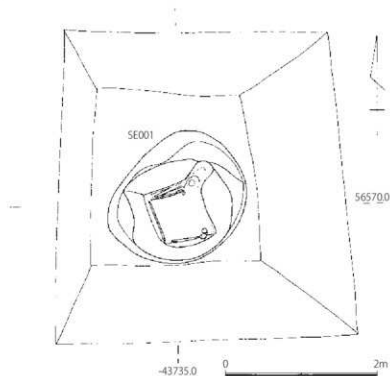


Fig. 73 第298次調査遺構全体図 (1/50)

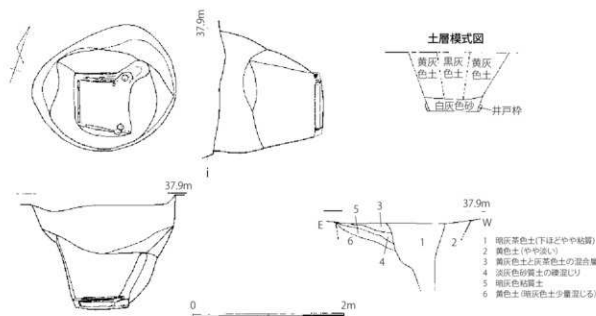


Fig. 74 298SE001 遺構実測図 (1/50)

ったが薄い横板が重なった状態であった。特に北辺は6重となっていた。板材の状態は、厚さ0.2cm前後と薄く、最も残りが良いものが高さ10cm、厚さ0.8cmであった。また砂に埋没していたことから井戸枠の底部に設置した木枠の可能性が高い。また、隅柱痕は東側のみ確認でき、北東隅には径8cmの木質が辛うじて残っていた。また、北東側には一辺3cm程の三角錐の木片が刺さっていて、南東隅には隅柱痕が2ヶ所検出された。木片付近から南側にかけて木質が確認できたことから、井戸枠の修復が行われた可能性が高い。

掘り方の埋土は黄色土に暗灰色土が混じるもので、地山の砂質土との境は明瞭であった。その土質が地山と全く異なるため、自然堆積ではなく客土である可能性が高い。また、遺物の包含も少ない。

(4) 出土遺物

井戸

298SE001 黒灰色土出土遺物 (Fig. 75)

須恵器

蓋3 (1, 2) 外面上半部は回転ヘラケズリ、内面上半部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ。色調は灰色や暗灰色を呈する。1は復元口径14.8cm、2の口縁端部断面は小さく摘まんだような形状である。

壺(3) 外面高台近くはヘラケズリで、外面はナデ調整だが、タタキがうすら残る。内面は同心円の叩きの後ナデ調整。色調は内面が暗灰褐色、外面は茶褐色を呈する。

土師器

坏(4) 外面はヨコナデ、内面は回転ナデの後一部ミガキを施す。胎土は微細な白色砂粒を多く含み、色調は淡黄褐色を呈する。

甕(5) 体部内面には薄く煤のようなものが付着する。胎土は白色砂粒を含み、色調は黄灰色を呈する。

瓦類

平瓦(6) 太めの格子叩きで、胎土は白色砂粒を多く含む。焼成良好だが、還元不良で、色調は橙色や淡黄灰色を呈する。

298SE001 黄灰色土出土遺物 (Fig. 75)

須恵器

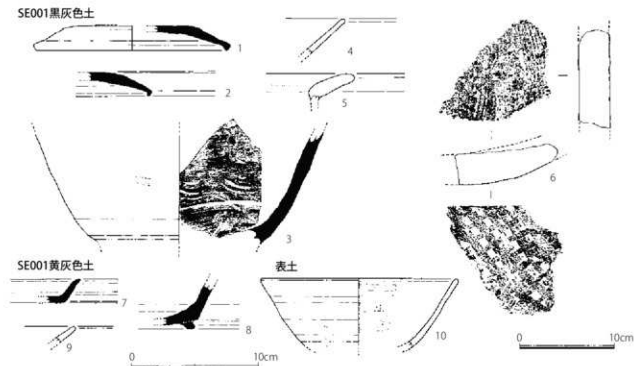


Fig. 75 第298次調査出土遺物実測図 (1/3, 6は1/4)

皿 a (7) 底部はナデ、体部は回転ナデ調整。色調は暗灰色を呈する。器高1.35cm。
 椀 c × 壺 (8) 胎土は0.3cm以下の白色砂粒を多く含む。体部最下部付近は回転ヘラケズリ、内面底部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ。色調は暗灰色を呈する。

土師器

坏 (9) 口縁端部で全形は不明。焼成は良好で黄橙色を呈する。内外面とも回転ナデ調整。

その他の遺構

表土出土遺物 (Fig. 75)

黒色土器

椀 (10) A類。外面下半は回転ヘラケズリ、上半部は回転ナデ、内面はミガキcを施す。胎土は0.1cm以下の白色砂粒を多く含む、色調は淡黄橙色を呈する。

(5) 小結

対象地は井上条坊案 12 坊路のライン上に位置する。今回は道路に関する痕跡は全く確認できなかった。第217次調査例から推測するとこの井戸は条坊外に位置する。298SE001以外に遺構が全く残っていない状況は、周辺の調査例と一致する。しかし、今回の遺構検出は平安初期からこの付近にも宅地があったことを伺わせる好例であり、周辺には今回の井戸のような深い遺構が残っている可能性が高い。

表16 第298次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	298SE001	井戸	黒灰色土	平安初期	

表17 第298次調査 出土遺物一覧表

S-1 黒灰色土	
製 器	器底3、高坏7、壺、壺、破片
土 師	器坏、坏、器
瓦	瓦半瓦(橋子)、破片
石	製 品(製片(黒曜石))

S-1 黄灰色土	
製 器	器底a、壺、壺
土 師	器坏、壺
表土	
黒色土器A類椀	

5、第 306 次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市五条一丁目 2445 番 3、2446 番の一部で、五条交差点の北 60m ほどに位置する。

2013(平成 25)年 6 月より、専用住宅の建て替えに伴って、文化財の問い合わせがあり、2013(平成 25)年 7 月 24 日に確認調査を行った。遺構は GL-30cm という浅いレベルで確認されたため、住宅の基礎工事が遺構に影響及ぼすことが明らかとなり、調査を行うこととなった。発掘調査は 2014(平成 26)年 9 月 22 日～11 月 6 日に実施した。開発対象面積は 403.3 m²で、住宅建築部分のみの調査であったため、調査面積は 151 m²である。調査は宮崎亮一が担当した。なお、11 月 2 日には近隣住民を対象に現場説明会を実施し、18 名の参加があった。

(2) 基本層位 (Fig. 76)

調査地は西側県道より 0.8m 程高い。表土は深さ 0.5m 程で東側ほどやや深くなり 0.7m 程となる。表土は主に 2 層で、現地表から深さ 0.3m の上層が昭和 40 年代の住宅建築の際に盛土した真砂土で、その下層が厚さ 0.2～0.4m の厚さで暗灰色土がある。これは主に近世～近代にかけての表土とみられる。遺構が残されている地山は砂質土で、水はけは良いが脆い地盤である。

(3) 検出遺構

柵列もしくは掘立柱建物

306SA030 (Fig. 78)

東西 2 間分確認でき、検出長 3.81m で、柱間が 1.93m と 1.88m。柱材は残っていないかったが、埋土で柱痕が確認でき、柱径は 0.17m である。振れはおおよそ E-0° 53' 17" -N でほぼ東西を向いている。調査区の南辺近くで確認されたため、南側調査区外に柱が続き建物になる可能性もある。

306SA045 (Fig. 78)

東西 3 間分確認でき、検出長 7.0m で、柱間が 2.3m 前後。柱材は残っていないかったが、埋土に柱痕の一部で明確に確認でき、柱径は 0.1m であった。振れはおおよそ E-0° 25' 28" -N でほぼ東西を向いている。南側調査区外に柱が続き建物になる可能性もある。

井戸

306SE010 (Fig. 79)

東西 3.9m、南北 3.1m 以上、深さ 2.45m の円形の掘り方で、中央付近は現在のコンクリート井筒を用いた井戸によって破壊され、井戸枠などは全く確認できなかった。形状や深さから井戸と推測される。埋土は褐色土や灰茶色土の砂礫混じり層で、調査で掘削したのは主に井戸の裏込め土と推測される。

306SE015 (Fig. 80)

東西 4.0m、南北 2m 以上、深さ 3.13m で、若干楕円形をした掘り方で、南側半分は SE010 に切られている。深さ 2.7m の掘り方中央付近で径 0.9m、深さ 0.35m の円形の掘り込みが検出されたが、木質は残存して



Fig. 76 第 306 次調査土層実測図 (1/40)

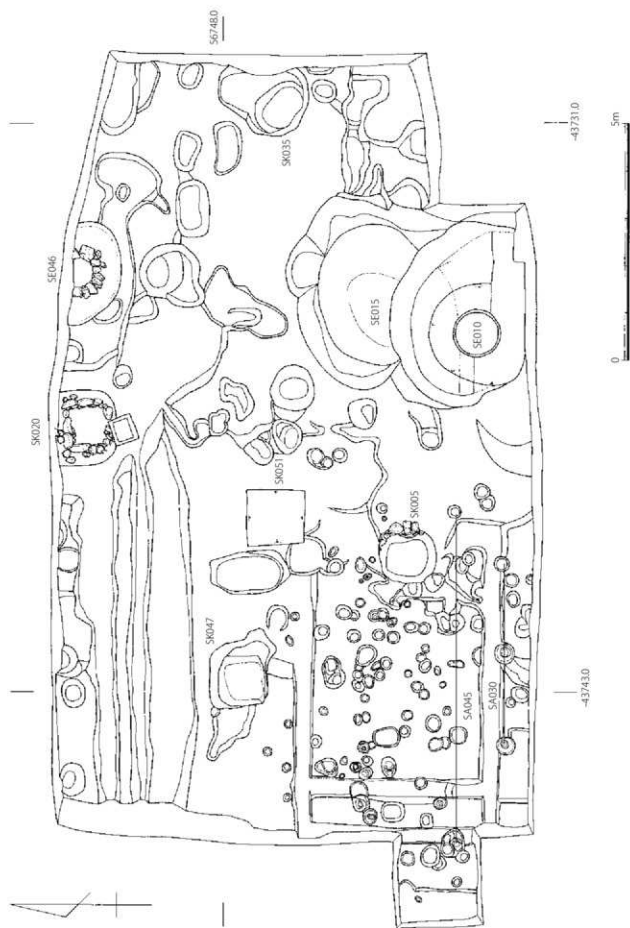


Fig. 77 第 306 次調査遺構全体図 (1/80)

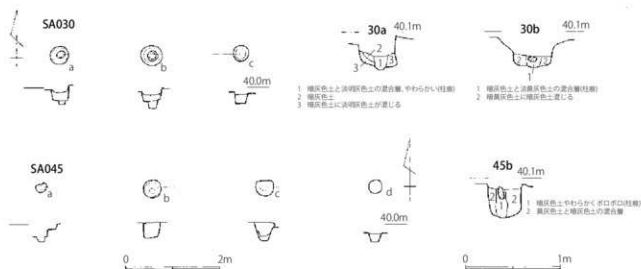


Fig. 78 306SA030・045 遺構実測図 (1/40、1/80)

いなかった。埋土は砂礫を多く含むが、ほとんどが井戸枠の裏込めに当たるためか木質は確認できなかった。埋土上部で井戸枠痕跡は確認できなかったため、枠材が腐食し崩落した可能性が考えられる。形状や时期的に井戸枠は桶を使用したものと推測される。井戸枠の裏込めは周囲と同じ砂礫であった。

306SE046 (Fig. 79)

調査区北辺にあり、掘り方は東西約2.15mで、径0.6m、深さ0.85m以上の円形石組み井戸。石積みは花崗岩を積んでいる。上面には現代物が埋没し、埋没時期は新しく完掘はしていない。近所の人々が、昭和の中頃まではこの井戸が存在したことを記憶されているため、最終埋没は昭和40年代以降と推測される。

土坑

306SK005 (Fig. 81)

東西1.14m、南北1.22m、深さ1.13mの方形土坑で、東側に石積みが4段ほどみられる。埋土は粗い明褐色土や1～2cmの砂礫層で、埋土に石積みと同様の礫は含まれておらず、石積みが崩れた状況がうかがえないため、埋没直前には現状に近い石積みだったと推測される。

306SK020 (Fig. 81)

東西1.6m、南北1.3m以上、深さ0.66mの掘り方に、花崗岩を内法0.8m四方に積んだ方形石組み遺構で、埋土は暗灰色土であるが目立った埋土状況ではない。深さから井戸とは考えられず、地下貯蔵庫の可能性が考えられる。

306SK035 (Fig. 81)

大きさは2.0m×1.62m、深さ0.92mの楕円形の土坑で南側が円形状に深くなる。埋土は暗灰色土で若干炭が混じっている。底面近くには橙黄色粘土が厚さ5cm程堆積している。これらは土壁やカマドなどの残骸の可能性もある。

306SK047 (Fig. 81)

当初の検出範囲は東西約1.6m、南北1.2mで、遺構検出時は赤茶色土や暗灰色土が混じった深さ約0.05m程の埋土で、とても古いとは思えない埋土であった。その下位で不定形だが赤茶色土が径約0.5m、深さ0.1m程堆積していた。この赤茶色土の半分の深さで若干埋土の色合いが異なり、一部硬化面もあった。それを除去すると白灰色砂を埋土とする方形土坑が確認できた。方形土坑は上部が若干崩れていたが、東西1.04m、南北1.18m、最終的に深さ1.15mを測る。底面近くは暗灰色土が混じるものの、地山と見間違えるような綺麗な白灰色砂である。白灰色砂の途中の北東隅に0.3m程の礫が約5個検出

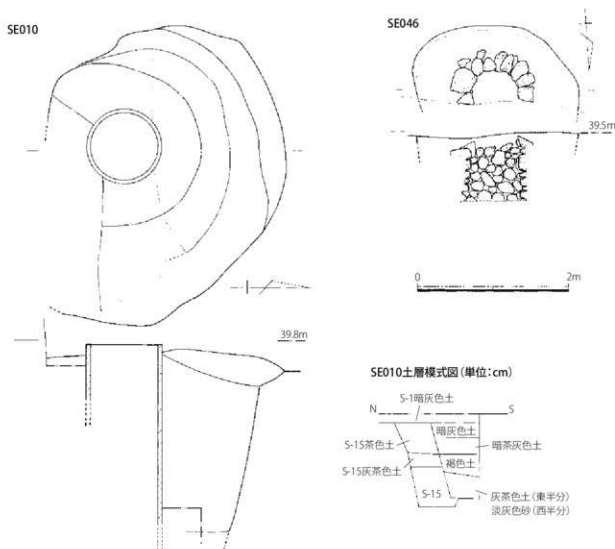


Fig. 79 306SE010・046 遺構実測図 (1/50)

された。白灰色砂の下位にはやや黄色のフサフサした有機質が0.1m前後全体的に堆積する。近隣住民の話によると、イモ類を貯蔵する方法として、地下に穴を掘り、もみ殻を敷きイモを地面に設置させないようにして保管するようなことを行っていたといい、土坑下で検出した黄色のフサフサした有機質は籾殻が腐食したものと推測され、この土坑はまさにイモの地下貯蔵庫と考えられる。なお、地元古老によれば、このような貯蔵庫を「イモガマ」と呼んでいたという。

306SK051

大きさは1.3m×0.8m、深さおよそ0.1～0.25mの楕円形土坑で、底面は凸凹でピット状になる。

(4) 出土遺物

掘立柱建物

306SB045b 出土遺物 (Fig. 82)

石製品

砥石 (1) 欠損が目立つが、平坦面が研磨され、側面も若干粗いが研磨されている。現存する大きさは16.9×9.6cm、厚さ3.3cm。

井戸

306SE010 暗灰色土出土遺物 (Fig. 83)

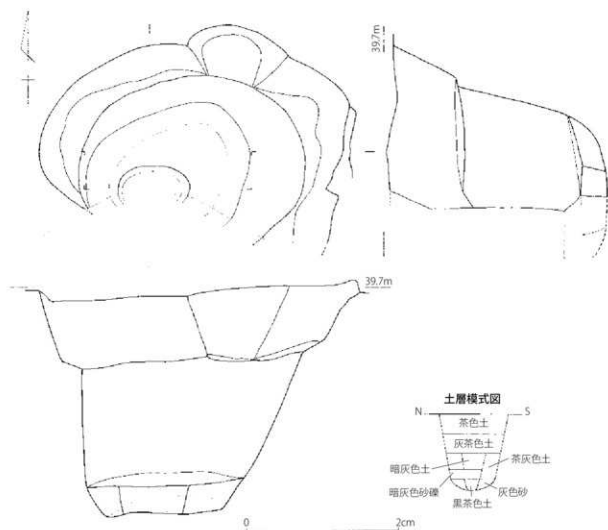


Fig. 80 306SE015 遺構実測図 (1/50)

土師質土器

焙烙 (1) 口縁部付近で、体部中位を肥厚させ、口縁部を折り曲げ玉縁状に作られている。焼成は良好で、色調は淡黄茶色を呈する。

肥前系磁器

蓋 (2) 返り径 6.2cm。内外面とも白灰色に施軸されるが、受け部分は露胎である。外面には朱色とくすんだ緑色軸で草花文を描く。

国産陶器

播鉢 (3) 方形の高台で、高台径 14.0cm。内面底部付近に摺り目が残るが、全体的に使用により平滑になる。色調は淡橙色を呈する。

瓦類

丸瓦 (4) 燻し瓦で、色調は暗灰色や黒色を呈する。外面ナデ、内面には布目痕が残る。

石製品

石鍋 (5) 滑石製の石鍋の胴部付近で、一部に方形の鏝部が僅かに残る。内外面にケズリ痕跡が明瞭に残る。

敲石 (6) 扁平の円形で、全面加工されており、人為的に整形したと推測される。表裏とも中央に敲

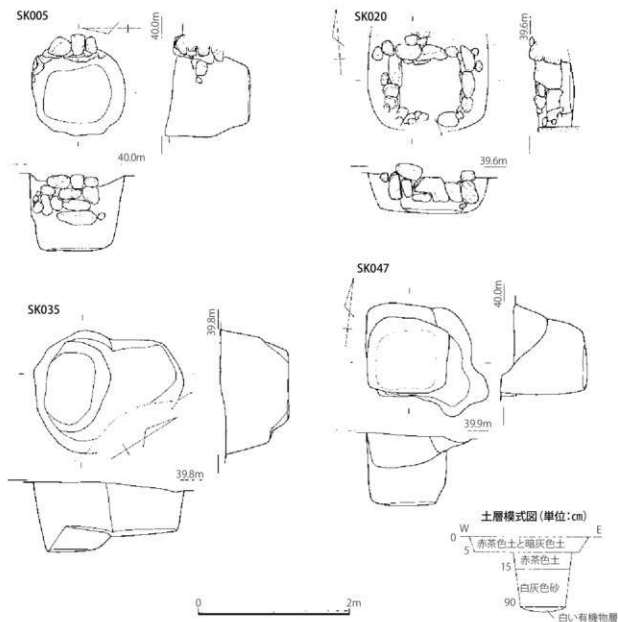


Fig. 81 第306次調査土坑遺構実測図 (1/50)

き痕があり、浅く窪んでいる。大きさは11.5×10.05cm、厚さ5.5cm。

306SE010 暗茶灰色土出土遺物 (Fig. 84)

土師器

小皿 a (7~10) 底部切り離しは回転糸切り。器高は0.95~1.3cm。色調は明橙黄色を呈する。7は復元口径8.9cm。

瓦器

椀 c (11, 12) 11は細く貧弱な高台を貼付する。復元高台径6.8cm。内外面にミガキcを施す。色調は灰白色を呈する。12は方形高台を貼付する。内外面ともミガキを施す。色調は灰白色を呈する。

須恵質土器

鉢 (13) 口縁端部を断面三角形に肥厚させる。内外面とも回転ナデで、内面上部はやや強くナデている。東播系。

瓦質土器

甕 (14) 内外面ともヨコナデ。胎土は微細な砂粒を含み、断面は白灰色、表面は黒色を呈する。

壺 (15) 外面は格子叩き、外面底部はナデ調整、内面は焼成時に弾けて荒れている。胎土は0.1cm前後の砂粒を多く含み、色調は黒色を呈する。

白磁

碗 (16, 17) 16はIX類。内面中位に細い沈線が巡る。17はIX-2a類。復元高台径4.8cm。

龍泉窯系青磁

碗 (18~20) 18はII-a類。復元口径14.8cm、器高6.0cm、復元高台径4.9cm。19はII-b類。20はIII-2C類。

杯 (21) III-3b類。復元口径13.0cm、器高3.5cm、復元高台径5.4cm。

中国陶器

鉢 (22) 外面底部は未調整、外面ナデ調整、内面は使用で平滑である。胎土は0.1cm以下の砂粒を多く含み、色調は茶褐色や黒灰色を呈する。

石製品

石鍋 (23) 滑石製石鍋の口縁部で、断面台形状の鐙が巡る。内外面ケズリ痕跡が残る。内面には貫通はしていないが孔が穿たれている。

平玉石 (24, 25) 24の大きさは2.45×1.9cm、厚さ0.9cm。色調は灰白色と黒白色を呈する。25の大きさは1.9×1.6cm、厚さ0.7cm。色調は黒灰色を呈する。

306SE010 褐色土出土遺物 (Fig. 84)

土師器

小皿 a (26~31) 復元口径8.5~9.6cm、器高1.0~1.1cm、復元底径7.0~7.2cm。底部切り離しは回転系切りで、27・28には板状圧痕が残る。色調は淡橙黄色や黄白色を呈する。

杯 a (32~37) 底部切り離しは回転系切り。色調は主に淡橙黄色を呈する。32は復元口径11.9cm、器高3.05cm、復元底径8.0cm。33は復元口径12.4cm、器高2.9cm、復元底径8.6cm。34はやや器形が外開きである。36は復元底径8.2cm。板状圧痕を残す。37は復元底径7.0cm。板状圧痕を残す。

碗 (38) やや丸味のある体部である。内外面とも回転ナデ調整。口縁端部は若干波打つ。

黒色土器

碗 c (39) B類。復元高台径7.0cm。内面に僅かにミガキが残る。

瓦器

小皿 a (40) 外面底部はヘラ切りか。内面ミガキc、外面は回転ナデ調整。

碗 c (41) 復元高台径6.0cm。内面はミガキ、外面は回転ナデ。色調は灰色を呈する。

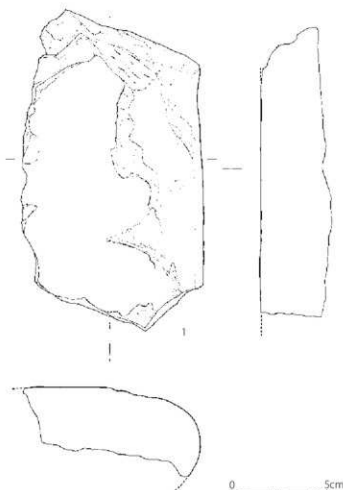


Fig. 82 306SB045 出土遺物実測図 (1/2)

SE010暗灰色土

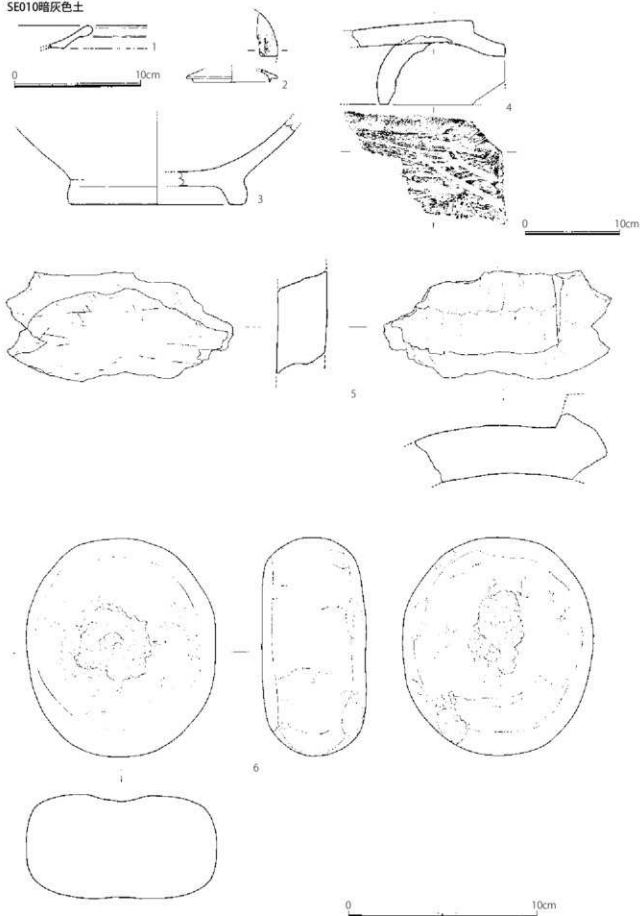
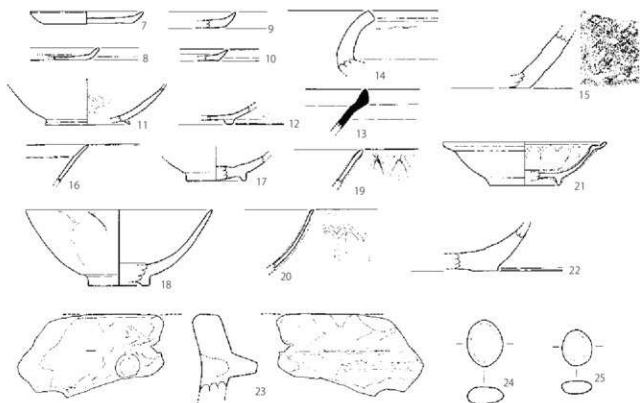
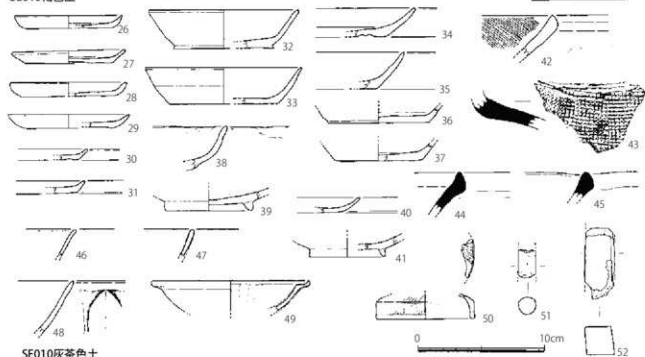


Fig. 83 306SE010 出土遺物実測図① (1/3, 4は1/4、5・6は1/2)

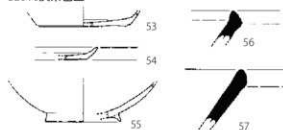
SE010暗茶灰色土



SE010褐色土



SE010灰茶色土



SE010淡灰色砂

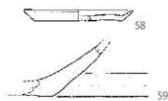


Fig. 84 306SE010 出土遺物実測図② (1/3、石製品は1/2)

瓦質土器

鉢 (42) 口縁部は若干肥厚させる。外面ヨコナデ、内面は細かい斜めハケを施す。

須恵質土器

甕 (43) 外面叩き、内面ヨコナデ調整。胎土は精製されている。色調は断面黒灰色と灰白色で、内面暗灰色、外面黒灰色を呈する。

鉢 (44、45) 内外面回転ナデ調整。東播系。44 の口縁端部外面は自然釉で黒灰色を呈する。45 は片口付近の破片である。

白磁

碗 × 皿 (46、47) 口禿げの白磁である。IX類。

龍泉窯系青磁

碗 (48) II -b 類。

坏 (49) III -3b 類。復元口径 12.6cm。

褐釉陶器

蓋 (50) 復元口径 7.8cm。胎土は淡茶褐色で、外面には文様を施し、外面茶褐色釉、内面上部は黄褐色釉を施すが、内面下半は露胎である。

土製品

棒状土製品 (51、52) 51 は径 1.4cm。上下を欠損する。焼成良好で色調は淡橙色を呈する。52 は一辺 2.3cm の断面方形で上下を欠損する。外面はナデ調整。胎土は白色砂粒を多く含む。焼成良好で色調は橙赤色を呈する。

306SE010 灰茶色土出土遺物 (Fig. 84)

土師器

小皿 a (53、54) 底部切り離しは回転系切り。53 は板状圧痕を残す。54 は器高 1.0cm。

瓦器

碗 c (55) 細い高台を貼付する。復元高台径 6.0cm。内面は丁寧なナデで、色調は灰色を呈する。

須恵質土器

鉢 (56、57) 内外面とも回転ナデ調整。口縁端部外面には自然釉で黒灰色を呈する。東播系。

306SE010 淡灰色砂出土遺物 (Fig. 84)

土師器

小皿 a (58) 復元口径 8.6cm、器高 0.85cm、復元底径 7.0cm。底部切り離しは回転系切りで、板状圧痕を残す。

中国陶器

鉢 (59) 胎土は 0.2cm 以下の砂粒をやや多く含み、色調は赤茶色や暗灰褐色を呈する。外面は粗いナデ、下端は回転ヘラケズリ、外面底部はナデ調整。内面は使用によりかなり平滑である。

306SE015 茶色土出土遺物 (Fig. 85)

土師器

小皿 a (1 ~ 10) 全ての底部切り離しが回転系切り。復元口径 7.8 ~ 10.9cm、器高 0.65 ~ 1.15cm、復元底径 6.0 ~ 8.4cm。色調は淡橙色を呈する。

坏 a (11 ~ 17) 11 の底部切り離しはヘラ切り後ナデ調整。復元口径 11.4cm、器高 1.55cm、復元底径 9.2cm。12 は復元口径 13.0cm。13・15 は丸味のある体部である。13 は復元口径 14.0cm。14 は復元口径 15.2cm、15 は復元口径 16.4cm。17 の外面底部はやや丸味があり、ナデ調整される。

大坏 a (18) 器高3.4cm。やや厚い体部で、底部切り離しは不明瞭。色調は淡橙黄色を呈する。

碗 (19) 内外面にミガキ c を施すが、全く燻されてはなく、色調は橙黄色を呈する。体部中位で若干屈曲する。復元口径 16.4cm。

瓦器

小皿 a (20, 21) 底部切り離しは回転糸切り。色調は暗灰色を呈する。20 は復元口径 8.3cm、内面の一部にミガキを施す。21 は復元口径 10.6cm、器高 1.05cm、復元底径 9.0cm。内面底部にはミガキを施す。

碗 c (22, 23) 22 は復元高台径 6.8cm。内面は単位不明瞭だがミガキを施す。外面はヨコナデ。23 の色調は内面灰白色、外面暗灰色を呈する。復元高台径 6.4cm。破片であるが 2ヶ所に孔が穿たれている。

土師質土器

鍋 (24) 口縁部を L 字に曲げる。外面は粗いタテハケ、内面は粗いヨコハケ。胎土は 0.3cm 以下の白色砂粒をやや含み、色調は暗黄茶色を呈する。

須恵質土器

甕 (25) 外面叩きの後ナデ調整。胎土は 0.1cm 以下の砂粒をやや多く含み、色調は暗灰色を呈する。

鉢 (26～28) 内外面とも回転ナデ。東播系。

白磁

皿 (29) IX類。

青白磁

皿 (30) 内外面に光沢のある淡水色釉を施軸する。内面には文様を描く。

龍泉窯系青磁

碗 (31) I-3a 類。高台内面に墨痕があるが、文字にはなっていない。

高麗青磁

碗 (32) 胎土は精製され、灰色を呈する。内外面に青緑色釉を施し、内面に濃淡で文様を描く。

黒釉陶器

壺 (33) 壺の体部で、胎土は微細な黒色粒を含む。内面は強いナデ、外面は暗褐色釉を施す。

石製品

石鍋(34,35) 滑石製石鍋の底部付近の破片である。内外面はヘラケズリ、外面底部は粗い削りである。

平玉石 (36, 37) 36 は石英製で、大きさ 2.2×1.6cm、厚さ 0.9cm。37 は黒色で、大きさ 2.1×1.6cm、厚さ 0.9cm。

滑石加工品 (38) 破片で全形が不明瞭である。舟底形で内面に径 0.5cm 前後の円孔を開けるが貫通はしていない。外面には人為的な条痕がみられる。

土製品

炉壁(39) 溶解した平坦面がある。胎土は 0.6cm 以下の白色砂粒を多く含み、色調は暗灰色を呈する。

金属製品

鉄釘 (40) 両端を欠損する。現存長 7.8 cm、断面方形で 0.5×0.6 cm である。

306SE015 灰茶色土出土遺物 (Fig. 86)

土師器

小皿 a (41～43) 底部切り離しは回転糸切り。復元口径は 41 が 8.0 cm、42 が 8.2 cm、43 は 10.1 cm。

坏 a (44) 復元底径 10.4 cm。底部切り離しは回転糸切り。

瓦器

SE015茶色土

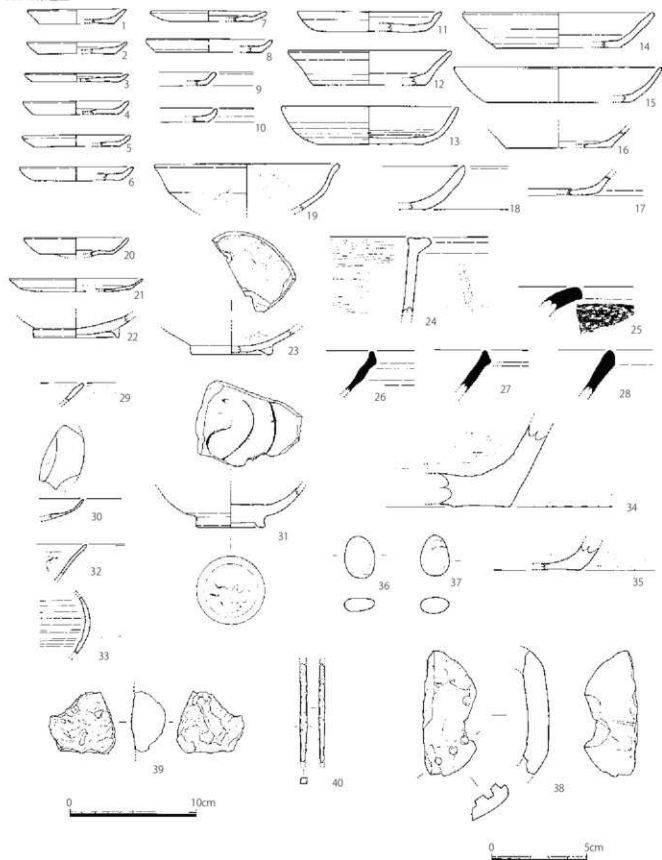
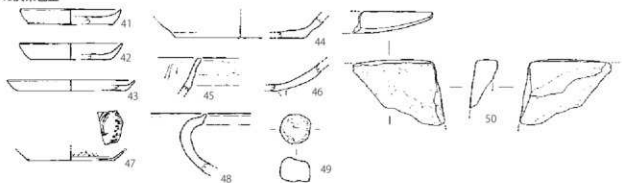
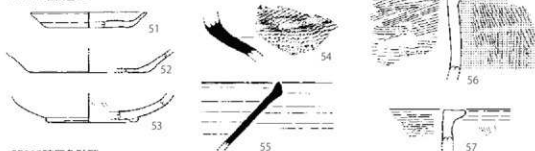


Fig. 85 306SE015 出土遺物実測図① (1/3、石製品は 1/2)

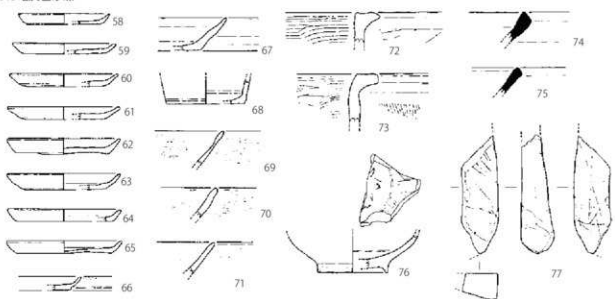
SE015 灰茶色土



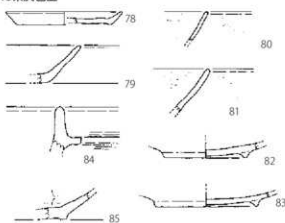
SE015 暗灰色土



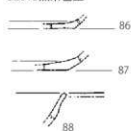
SE015 暗灰色砂礫



SE015 茶灰色土



SE015 黒茶色土



0 5cm

0 10cm

Fig. 86 306SE015 出土遺物実測図② (1/3、石製品は1/2)

碗(45) 高台は欠損する。外面には僅かにミガキが残る。内面は使用により磨滅する。

碗c(46) 内外面ともミガキだが、外面は回転ナデの凹凸が目立ち、ミガキは部分的である。

白磁

小皿(47) 復元底径7.0cm。内外面とも乳白色釉を施し、内面には文様を浮き彫りしている。

国産陶器

甕(48) 胎土は精製され色調は灰色を呈する。回転ナデのあと内外面とも褐色釉や緑灰色釉を薄く施す。常滑産とみられる。

瓦類

瓦玉(49) 大きさは2.3×2.4cm、厚さ1.9cm。

石製品

滑石加工品(50) 滑石製の石鍋を再加工したもので、石鍋製作時の小刻みなケズリに加え、断面部を加工している。用途不明。

306SE015 暗灰色土出土遺物 (Fig. 86)

土師器

小皿a(51) 底部切り離しは回転糸切り。復元口径9.2cm。

坏a(52) 底部切り離しは回転糸切りで、板状圧痕を残す。復元底径9.8cm。色調は淡黄褐色を呈する。

瓦器

碗c(53) 底部切り離しは回転糸切り。高台は潰れていて、畳付には板状圧痕が残る。内外面にはミガキを施す。復元高台径7.2cm。

須恵質土器

甕(54) 外面は叩きの後ヨコナデ、内面はヨコナデ調整。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は青灰色を呈する。

鉢(55) 口縁部を肥厚させる。内外面ともヨコナデ。東播系。

土師質土器

鍋(56,57) 口縁部をL字に屈曲させる。内面はヨコハケ、外面はタテハケ。外面には煤が付着する。胎土は0.2cm以下の砂粒を多く含み、色調は茶灰色や黄褐色を呈する。

306SE015 暗灰色砂礫出土遺物 (Fig. 86)

土師器

小皿a(58~66) 復元口径7.2~9.2cm、器高0.85~1.3cm、復元底径5.8~7.7cm。底部切り離しは61がへら切りで、それ以外は回転糸切り。

坏a(67) 底部切り離しは回転糸切り。器高2.6cm。色調は黄灰色を呈する。

小壺(68) 復元底径6.2cm。胎土は微細な砂粒を少量含み、色調は明褐色を呈する。底部切り離しは回転糸切り。内外面ともヨコナデで、外面には煤が付着する。

黒色土器

碗(69,70) 2点とも内外面ともミガキを小刻みに施す。B類。

瓦器

碗(71) 内外面ともミガキを施すが磨滅する。

土師質土器

鍋(72,73) 口縁部をL字に屈曲させる。内面はヨコハケ。72は外面がヨコナデで、工具痕がみられる。73はタテハケで煤が付着する。胎土は砂粒を多く含み、色調は黄褐色を呈する。

須恵質土器

鉢 (74, 75) 74 は口縁部が僅かに肥厚する程度である。色調は淡灰色を呈する。75 は口縁部を肥厚させる。色調は暗灰色を呈する。

青白磁

碗 (76) 復元高台径 5.6cm。内外面に薄緑白色釉を施すが、高台内面は露胎。内面底部にはスタンプ、体部には櫛目を施す。

石製品

砥石 (77) 3面使用する。欠損するが現存長 6.3cm、幅 2.0cm、厚さ 1.4cm。

306SE015 茶灰色土出土遺物 (Fig. 86)

土師器

小皿 a (78) 復元口径 9.2cm。底部切り離しは回転糸切り。

坏 a (79) 底部切り離しは回転糸切り。器高 3.0cm。

瓦器

碗 (80, 81) 内外面ともミガキ c を施す。

碗 c (82, 83) 2点とも断面三角形の高台を貼付する。82の内面は回転ナデで、ミガキは確認できない。色調は灰色や青灰色を呈する。復元高台径 6.6cm。83は内面ミガキで、外面底部には板状圧痕が残る。復元高台径 8.0cm。色調は黄白色を呈する。

瓦質土器

羽釜 (84) 胎土は 0.15cm 以下の白色砂粒を含み、色調は暗黄褐色を呈する。内外面とも回転ナデ調整。鏝の下面にはうっすらと煤が付着する。

青白磁

碗 (85) 低い高台を削り出している。内外面とも淡い水色釉を薄く施すが、高台部分は露胎。内面底部には文様を描く。

306SE015 黒茶色土出土遺物 (Fig. 86)

土師器

小皿 a (86) 底部切り離しは回転糸切り。

坏 a (87) 底部切り離しは回転糸切り。

瓦器

碗 (88) 口縁部外面はヨコナデだが、その他内外面はミガキ。色調は灰色や黒色を呈する。

土坑

306SK020 出土遺物 (Fig. 87)

須恵質土器

鉢 (1) 口縁端部を僅かに肥厚させる。内外面とも回転ナデで、色調は灰色や黒色を呈する。東播系。

肥前系磁器

碗 (2, 3) 2は内面中央に五弁花文のコンニャク印判を押し、その他内面にも淡い藍色で圏線を巡らし、四方禪文を描く。3は復元口径 12.0cm、器高 5.25cm。外面の一部に文様が確認できる。高台畳付は露胎。

小碗 (4~7) 4は復元口径 7.6cm、器高 3.2cm。内面底部に鮮やかな呉須で文様を描く。高台畳付は露胎。5は口径 7.0cm、器高 5.7cm。外面に呉須で草花文を描く。高台畳付は露胎。6は復元口径 7.6cm。外面に鮮やかな呉須で草花文を描く。7は復元口径 7.6cm。外面には呉須で草花文を描く。

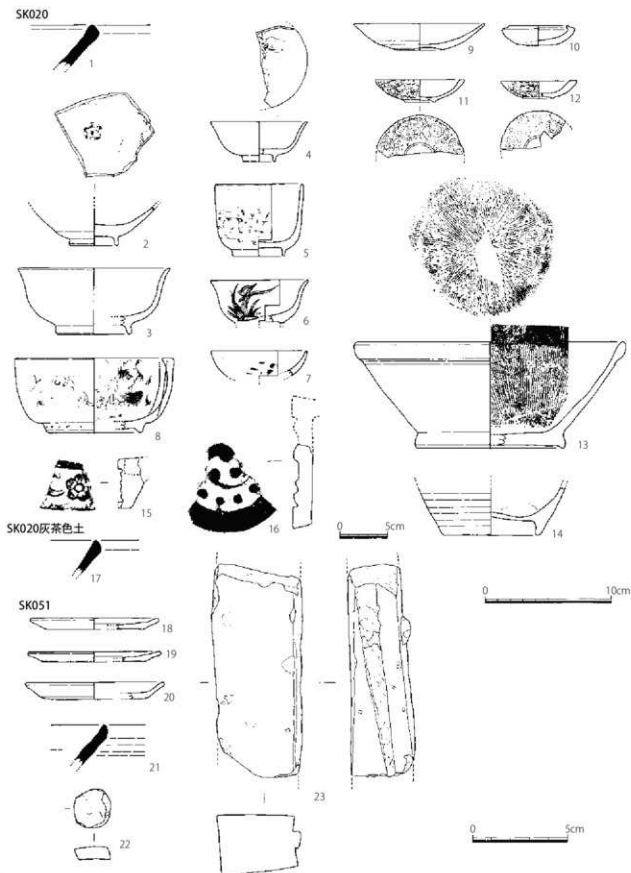


Fig. 87 306SK020・051 出土遺物実測図 (1/3、23は1/2、瓦は1/4)

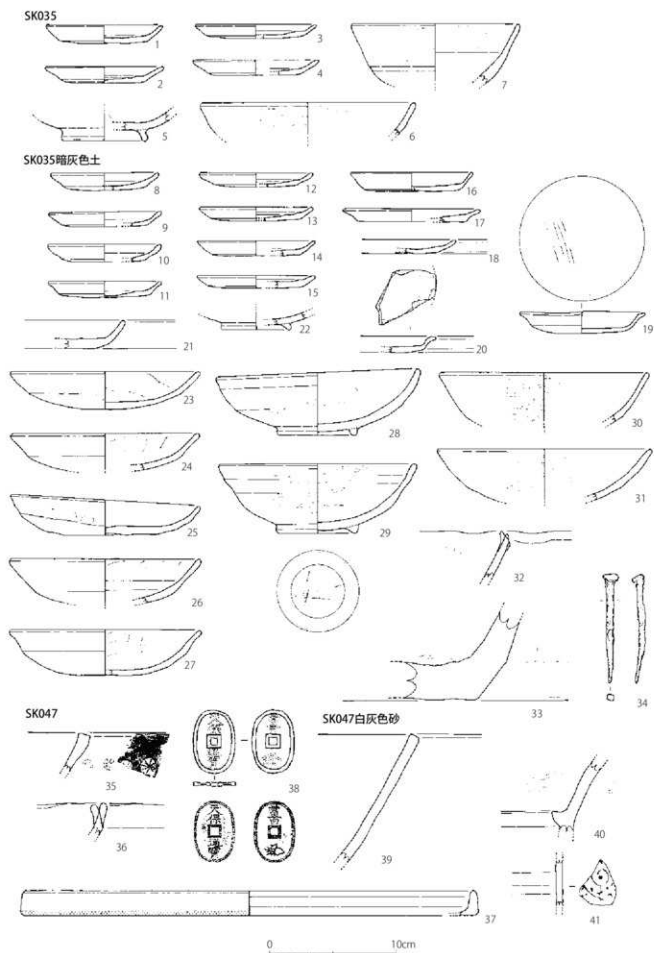


Fig. 88 306SK035・047 出土遺物実測図 (1/3)

鉢 (8) 復元口径 12.6cm、器高 5.95cm、復元高台径 7.6cm。体部は輪花を作る。外面底部以外には淡青白色釉を施し、内外面に鮮やかな藍色でぼんやりとした文様を描く。

国産磁器

皿 (9) 復元口径 10.2cm、器高 2.05cm、底径 3.6cm。若干上げ底気味の底部で、内面は施釉されるが、外面は露胎で、上半部は回転ナデ、下半は回転ヘラケズリ。外面上部には煤が点在し、内面底部付近にはハリ痕が残る。

合子身 (10) 復元口径 4.65cm、器高 1.6cm。口縁の受け部と外面底部は露胎で、その他は透明釉を施す。

紅皿 (11、12) 小さな高台を作り、外面には蛸唐草文を型押しする。11は復元口径 7.0cm、器高 1.8cm、12は復元口径 6.0cm、器高 1.4cm。

播鉢 (13) 復元口径 21.4cm、器高 8.4cm、復元底部径 11.4cm。底部外面は回転ナデで露胎。体部内外面に茶褐色釉を施す。内面の播り目は隙間なく施している。

壺 (14) 胎土は精製され、色調は黄褐色を呈する。外面は回転ナデの後茶黒色釉を施すが、高台畳付は釉を掻き取る。内面はヨコナデで露胎であるが、釉垂れがみられる。高台径 7.6cm。

瓦類

軒平瓦 (15) 燻し瓦で、中央部に梅鉢文を浮き彫りしている。

軒丸瓦 (16) 燻し瓦で、巴文とその周りに珠文を巡らす。

306SK020 灰茶色土出土遺物 (Fig. 87)

須恵質土器

鉢 (17) 胎土は精製され、色調は灰色を呈する。東播系。

306SK035 出土遺物 (Fig. 88)

土師器

小皿 a (1～4) 復元口径 9.2～10.0cm。底部切り離しは 4 が不明瞭だが、他は回転ヘラ切りである。黒色土器

碗 c (5、6) 共に B 類。5 は復元高台径 6.8cm。外面は回転ヘラケズリ、内面はミガキ c を施す。6 は復元口径 17.0cm、内外面にミガキ c を施す。

瓦器

碗 (7) 復元口径 13.3cm。体部中位付近が若干肥厚する。内外面ともミガキ c を施す。

306SK035 暗灰色土出土遺物 (Fig. 88)

土師器

小皿 a (8～18) 復元口径 8.6～10.9cm、器高 1.0～1.5cm、復元底部径 6.6～8.6cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。内面底部はナデ調整。

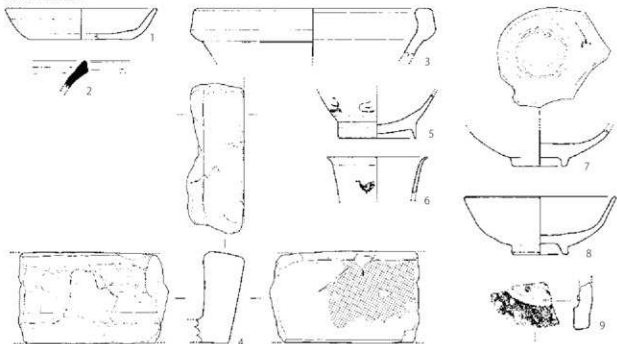
小皿 a2 (19、20) 口縁部を折り曲げ、端部に沈線はないが若干凹んでいる。また、底部内面にはハケのようなナデ調整。底部切り離しは回転ヘラ切り後ナデ調整。19は口径 9.9cm、器高 1.7cm、底径 8.0cm、20は器高 1.25cm。

坏 a (21) 底部切り離しは回転ヘラ切り後ナデ調整。その他は回転ナデ。器高 2.25cm。

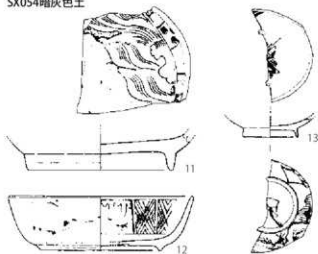
碗 c (22) 復元高台は 5.6cm。高台畳付に板状圧痕が残る。内面ミガキ、外面回転ナデ調整。色調は黄灰色を呈する。

丸底坏 a (23～27) 復元口径 15.0～15.2cm、器高 2.75～3.6cm。底部押し出しで外面下半には指頭圧痕が残る。底面には板状圧痕が僅かに残り、内面はミガキ b を丁寧に施す。25の外面はナデで凸凹する。

SX001暗灰色土



SX054暗灰色土



SX038

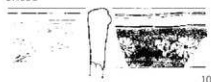


Fig. 89 第306次調査その他の遺構出土遺物実測図 (1/3)

瓦器

碗 c (28, 29) 28は復元口径16.1cm、器高4.95cm、復元底径6.3cm。高台畳付には板状圧痕が残る。内面にはミガキを施すが、外面には指頭圧痕がみられるが、ミガキはみられない。色調は青灰色を呈する。29は復元口径15.6cm、器高5.4cm、復元底径6.2cm。内外面ともミガキを施し、外面底部にはヘラ記号を施す。色調は灰色や暗灰色を呈する。

碗 (30, 31) 30は復元口径16.1cm。内外面ともミガキを施すが、外面は器面が凸凹でミガキがまだらである。31は復元口径17.0cm。内外面ともミガキを施すが、内面は使用により若干磨減する。

瓦質土器

播鉢 (32) 片口部分で、内面には播り目が確認できる。外面ナデ調整。色調は暗青灰色を呈する。

石製品

石鍋 (33) 内外面ケズリで、内面は使用で若干研磨されている。外面には煤が付着する。滑石製。金属製品

鉄釘(34) 頭が折り曲げられている。長さ8.6cm、断面方形で頭の下付近で0.6×0.5cmである。

306SK047 出土遺物 (Fig. 88)

瓦質土器

鉢(35) 口縁部を若干肥厚させ、外面には花文スタンプを施す。胎土は微細な砂粒を僅かに含み、色調は灰色や淡黒灰色を呈する。

土師質土器

鉢(36) 片口状になった口縁部で内外面回転ナデ。胎土は微細な砂粒を僅かに含み、色調は淡橙黄色を呈する。

焙烙(37) 復元口径35.8cm、器高2.0cm、復元底径36.2cm。内外面とも回転ナデで、外面底部は火をかなり受け、煤も付着する。胎土は微細な砂粒をやや含み、色調は黒灰色を呈する。

金属製品

銅銭(38) 天保通宝で、縦5.0cm、横3.35cm、厚さ0.3cm。表裏に「天保通寶」「當百」とある。

306SK047 白灰色砂出土遺物 (Fig. 88)

土師質土器

鉢(39) 内面は丁寧なヨコナデ、外面は指押さえと浅いタテハケが残る。

火鉢(40) 内外面ともヨコナデで、タタキのような痕跡も残る。胎土は精製されているが微細な雲母を多く含む。色調は淡橙色を呈する。

肥前系磁器

椀(41) 内外面とも施釉され、外面には淡い呉須で蛸唐草文を描く。

306SK051 出土遺物 (Fig. 87)

土師器

小皿a(18~20) 復元口径10.2~11.0cm、器高0.8~1.25cm、復元底径7.6~8.6cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。色調は黄白色や暗黄色を呈する。

須恵質土器

鉢(21) 口縁端部は殆んど肥厚しない。色調は青灰色で、口縁端部外面のみ黒灰色を呈する。東播系。

瓦類

瓦玉(22) 大きさは3.1×2.4cm、厚さ1.0cm。瓦の布目痕とその反対側の面は若干削っている。

石製品

砥石(23) 両端を欠損する。現存長11.2cm、厚さは4.3×3.1cm。砂岩製。4面加工しているが、2面は研磨、1面は粗い削りのみ、もう1面は両側から切り込みを入れ折っている。

その他の遺構

306SX001 暗灰色土出土遺物 (Fig. 89)

土師器

坏a(1) 復元口径12.0cm、器高2.5cm、復元底径8.0cm。底部切り離しは回転糸切り後ナデ調整。

須恵質土器

鉢(2) 口縁部を若干肥厚させる。内外面回転ナデ。東播系。

瓦質土器

火消し壺(3) 復元口径18.8cm。口縁部を肥厚させる。胎土は0.1cm以下の白色砂粒を含み、色調は暗黄灰色を呈する。内面回転ナデ、外面は磨減し調整不明瞭。

土師質土器

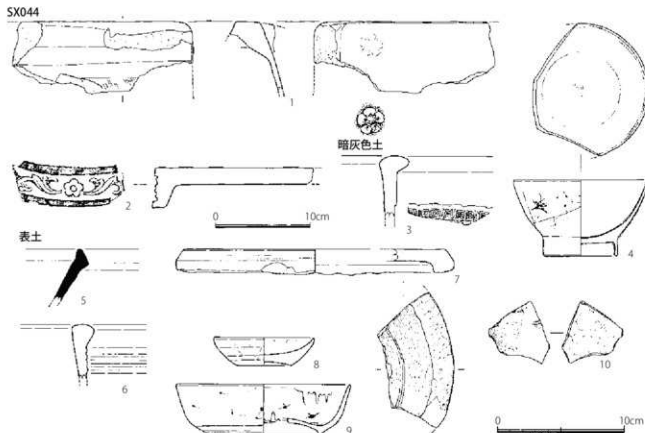


Fig. 90 306SX044, 暗灰色土、表土出土遺物実測図 (1/3, 2は1/4)

火鉢 (4) 破片であるが全体として、脚付きの直方体をなしていたと推測される。胎土は微細な砂粒を多く含み、色調は赤灰色や灰褐色を呈する。内面には突起が取れた痕跡が残る。外面底部にも脚部が取れた痕跡がある。内面ヨコハケ調整、外面は丁寧なミガキを施す。器高7.2cm。

肥前系磁器

碗 (5～7) 5は細い高台で復元高台径6.2cm。釉調は半透明釉で貫入が入る。外面には青緑色釉で文様を描く。6は復元口径8.0cm。外面に薄い呉須で文様を描く。7は復元高台径4.4cm。内面底部は輪状に釉を掻き取り目跡が残る。高台畳付も釉を掻き取る。内面には薄い水色で文様を描く。

肥前系陶器

碗 (8) 復元口径12.0cm、器高4.55cm、復元高台径4.4cm。胎土は茶灰色を呈し、内外面とも緑白色釉を施すが、外面下半は茶褐色釉を施す。高台畳付と内面底部の釉を円形に掻き取る。唐津産か。

瓦類

軒丸瓦 (9) 燻し瓦で、大きく欠損し珠文と外区部分が残る。

306SX038 出土遺物 (Fig. 89)

瓦質土器

火鉢 (10) 内面に細かいヨコハケ、外面に低い突帯を巡らせ、花文スタンプを施す。胎土は0.1cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は灰白色を呈する。

306SX054 暗灰色土出土遺物 (Fig. 89)

肥前系磁器

碗 (11～13) 11は復元高台径11.5cm。高台畳付は露胎。内面は呉須の濃淡で文様を描く。一部薄青緑色を使う。外面には呉須で圏線を描く。12は復元口径14.6cm。器高4.3cm、復元高台径9.4cm。底部は蛇の目状につくり、露胎である。内外面には呉須で文様を描く。13は復元高台径4.4cm、内外面に

鼻須の濃淡で山水を描く。

国産磁器

紅皿 (14) 口径 4.7cm、器高 1.45cm、低い高台径 1.3cm、内面と外面上部を施釉する。

攪乱・土層

306SX044 出土遺物 (Fig. 90)

土師質土器

風炉 (1) 口縁部は厚く、体部は薄い。胎土は 0.2cm 以下の白色砂粒や雲母を含み、色調は暗橙色を呈する。内外面ともヨコナデの後ミガキを施し、外面に花文のスタンプを施す。

瓦類

軒平瓦 (2) 燻し瓦。梅鉢文を中央に唐草文を浮き彫りしている。明治以降のものとみられる。

暗灰色土出土遺物 (Fig. 90)

瓦質土器

火鉢 (3) 口縁部外面をし字形に肥厚させる。胎土は微細な雲母を多く含み、色調は外面が黒色で、他は暗黄色を呈する。内面回転ナデ、外面はミガキで、雷文をスタンプする。

肥前系磁器

椀 (4) 復元口径 10.2cm、器高 6.0cm、復元高台径 6.0cm。口縁部内面に圏線、外面には灰緑色釉で文様を描く。高台壘付には砂粒が付着する。

表土出土遺物 (Fig. 90)

須恵質土器

鉢 (5) 内外面とも回転ナデ。色調は暗灰色を呈する。口縁部外面には自然釉が付着する。

土師質土器

鉢 (6) 口縁部を断面三角形に肥厚させる。内面丁寧な回転ナデで、外面は工具により成形される。胎土は雲母を多く含み、色調は暗黄褐色を呈する。

瓦質土器

火消し壺蓋 (7) 復元口径 22.0cm、器高 1.9cm。胎土は雲母を多く含み、断面は暗黄褐色で、内外面は黒色を呈する。内面にはカキ目、外面は丁寧なミガキを施す。

国産陶器

小皿 (8) 口径 8.0cm、器高 2.2cm、底径 4.3cm。胎土は赤褐色で、底面と外面は回転ヘラケズリ、内面は赤茶色釉を薄く施す。

皿 (9) 底部を上げ底状に盛り上げる。復元口径 13.8cm、器高 4.05cm、復元高台径 8.3cm。高台内面は露胎。内面は緑灰色釉で、外面は薄青色釉で文様を描く。

土製品

人形 (10) 顔面の一部で、細い線で頭髪や目を描いている。胎土は精製され、内面は指頭圧痕が残る。

(5) 小結

今回の調査の主な所見は以下の通りである。

- ・ 検出した遺構は、11 世紀後半以降の遺構のみである。
- ・ 中世～現代の井戸の検出。
- ・ 近世以降の町家関連遺構の検出。

今回の調査区は井上条坊案の 12 坊の推定ライン上に位置するため、西側調査区際まで調査を行ったものの、条坊に関連する溝や道路痕跡は確認できなかった。今回の遺構検出面が、西側県道より 0.3m

程高いため、坊路が県道と重複していたならば、坊路痕跡が削平された可能性は十分考えられる。しかし、調査区内を第224次調査で検出した道路東側溝の延長ラインが通ることや、調査地の北側約30mで行った第105次調査や南方約40mの第224次調査2・5区でも条坊の道路痕跡は確認できていないことからすると、推定4条路（現在の五条交差点）より北側には、当初から側溝を伴う道路は存在しなかった可能性が考えられる。

そして、今回の調査では11世紀後半より古い遺構がなく、遺物も少ないことから、居住空間としての利用は11世紀後半以降、特に中世以降の条坊廃絶後と考えられる。西側の県道に近い位置でピットが多く検出され、井戸などの大きな掘り込みが県道から離れた位置で検出されているため、12世紀以降に太宰府天満宮に対し地割りが形成されていく中で、道路に面して家屋が建ち並び、家屋の裏手に井戸が掘られた町屋の景観が想像でき、現代に至るまでほぼ変化なく街路とそれに面した土地利用が行われたと推測される。

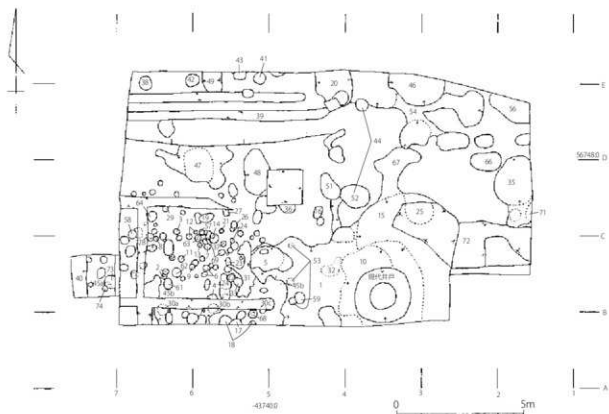


Fig. 91 第306次調査遺構略測図 (1/150)

表 18 第 306 次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	306SX001	たまり	S-10・15の上面を覆う層	近世～	A～C, 2～5
2		ビット群			B6
3		ビット群		12世紀以降	C6
4		ビット群		12世紀以降	B5
5	306SX005	土坑	明褐色土、1～2cmの砂雜層	近世～	A4・5
6		ビット群		近世～	B5
7		ビット		近世～	B5
8		ビット		平安時代～	B6
9		ビット			B6
10	306SE010	井戸	S-15→10	13世紀後半～14世紀前半	B3
11		ビット		中世～	B6
12		ビット群			C6
13		ビット		近世～	B5
14		ビット			B5
15	306SE015	井戸	S-15→10	12世紀後半～13世紀前半	C3
16		ビット群			C4
17		ビット		平安時代～	A5
18		ビット群			A5
19		ビット		中世～	C5
20	306SX020	石組土坑	暗灰色土	近代～	E4
21		ビット		中世	C5
22		ビット			B5
23		ビット		中世	B5
24		ビット		近世～	B5
25		石積み	S-15→25、竪内に煉瓦積み、竪長下は大石、		C3
26		ビット			C5
27		ビット		中世～	C5
28		ビット			B6
29		ビット		中世？	C6
30	306SA030	櫓列もしくは懸立柱建物		12世紀以降	A4～6
31		攪乱	褐色土	近現代	B5
32		土坑		近世～	B4
33		ビット		中世	B5
34		ビット	S-45も一部、灰色土に暗灰色土混じる。	中世	B5
35	306SX035	土坑		11世紀後半～12世紀初頭	C1
36		窪み		中世～	C4
37		ビット			B5
38	306SX038	ビット		近世～	E6
39		土管		近代～	D4～6
40		段落ち		近現代	B7
41		ビット	茶色土	中世～	E5
42		ビット	暗茶色土	近世～	E6
43		ビット	暗茶色土	近世～	E5
44	306SX044	攪乱	暗青灰色土	近世	D4
45	306SA045	櫓列もしくは懸立柱建物		中世？	B4～7
46	306SE046	石組井戸	S-54→46 埋没時期は昭和中期以降	近現代	DE, 2・3
47	306SX047	地下貯蔵穴	上面は現代遺物あり。	近世以降、最終埋没は近現代	CD, 5・6
48		土坑	灰含む。最下層に白い有機物	近世～	C5
49		土坑	暗灰色土	近現代？	E5
51	306SX051	土坑	暗灰色土	11世紀後半	C4
52		土坑		近世～	C3
53		ビット群		近世～	B4
54	306SX054	窪み	暗灰色土 底部が凸凹	近現代	D2・3
56		土坑	炭灰じり暗灰色土	近代～	D1
57		ビット			C5
58		ビット		中世？	C6
59		ビット			B4
61	306SX061	ビット	柱痕あり、径10cm、S-45の一部。		B6
62	306SX062	ビット	柱痕あり、径17.5cm。		B6
63	306SX063	ビット	柱痕あり、径11cm。		B5
64	306SX064	ビット	柱痕あり		C6
66		ビット	暗灰色土		D2・3
67		ビット		近世～	C3
68	306SX068	ビット	柱痕あり、径10cm。		A5
69		ビット		平安時代～	B5
71		ビット			C1
72		攪乱			B1・2
73		ビット	S-45の一部、暗灰色土に淡黄灰色土		B7
74		ビット	暗灰色土		B7

表 19 第 306 次調査 出土遺物一覧表

5-1 緑灰色土	
須志 器變	
土 師 器 器小瓶a(f)、杯、杯a(f)	
黒色土器B類陶	
瓦 器陶、破片	
肥前系青磁器片	
同安系青磁器	
土師質土器鉢、大鉢?、破片	
須志質土器鉢(東播磨)、破片	
瓦 質 土 器大甕し蓋、破片	
肥前系陶器鉢、碗、破片	
同安系陶器鉢、甕、漆鉢、サン、水甕、破片	
同安系陶器有蓋、瓶、蓋、破片	
白 磁 陶IV(1)、V-4(1)、破片(2) 白磁破片(2)	
龍泉窯系青磁陶1(2)、1-2(2)、II-2(2) 小瓶1-3(1)	
同安窯系青磁陶1-1b(2) 皿1(1)	
中 国 陶 器破片(2)	
瓦 類平瓦(格子)、横し瓦(平瓦、斜瓦)	
石 製 品銅片(安山岩)	
土 製 品レンガ?	
金 属 製 品機?、磨管(環口)、銅鏡	
5-2	
土 師 器杯	
5-3	
土 師 器 器小瓶a(f)、杯	
5-4	
土 師 器 器小瓶×杯a(f)	
5-5	
肥前系陶器破片	
同安系陶器鉢、鉢、破片	
土 製 品土塊	
金 属 製 品機?	
5-6	
土 師 器破片	
瓦 質 土 器鉢	
同安系陶器破片	
5-7	
土 師 器 器陶、破片	
白 磁 陶; 口縁外反(1)	
土 製 品土塊	
5-8	
土 師 器 器小瓶、破片	
白 磁 陶(1)	
5-9	
須 志 器破片	
5-10 緑灰色土	
須 志 器變	
土 師 器 器小瓶a(f)、杯	
瓦 器陶	
土師質土器鉢、磁鉢	
瓦 質 土 器鉢、鉢	
肥前系陶器鉢、蓋、陶	
同安系陶器鉢、漆鉢、漆鉢、破片	
同安系陶器	
白 磁 破片(1)	
瓦 類平瓦、横し瓦(平瓦、丸瓦)	
金 属 製 品漆洋	
石 製 品明石石、石鏡、銅片(黒曜石)	
5-10 緑灰色土	
須 志 器變	
土 師 器 器小瓶a(f)、杯、杯a(f)	
瓦 器陶	
須志質土器鉢、鉢(東播磨)、破片	
瓦 質 土 器鉢、甕、破片	
肥前系陶器鉢、破片	
同安系陶器鉢、土瓶?、破片	
同安系陶器破片	
陶: II(1)、III-1(1)、VII(1)、VIII-4(1)	
IX(1)、IX-2a(1)、破片(5)	
皿1-1a(1)、皿-1(1)、VI-1b(1)、IX-2a(1)、破片(1)	
蓋(1) 白磁破片(6)	
陶1-2(1)、1-2b(2)、1-2×3(1)、1-3a(1)、1-3(1)	
龍泉窯系青磁 1-4(1)、II-a(3)、II-b(6)、III-2C(3) 小瓶1(1)	
杯: III-3b(1) 龍泉窯片1(2)	
同安窯系青磁 陶1(1)、1-1a(4)、1-1b(4)、III-1e(1)	
皿1(1)、1-1(2) 同安破片(1)	
青 白 磁破片(1)	
中 国 陶 器(2) 鉢(1) 盤II(1) 破片(2)	
瓦 類平瓦(無文)、丸瓦(格子)、横し瓦(平瓦、丸瓦)	
金 属 製 品漆洋	
石 製 品平玉石、炭石、石鏡	

5-10 黒色土	
須 志 器變	
土 師 器 器小瓶a(f)、杯、杯a(f)、碗、陶	
黒色土器A類陶	
黒色土器B類陶	
瓦 質 土 器鉢、碗	
須志質土器鉢	
瓦 質 土 器鉢(東播磨)	
瓦 質 土 器鉢、漆鉢、蓋、破片	
同安系陶器破片	
白 磁 陶: II-4(1)、IV(3)、VII(1)、破片(1) 碗×皿×IX(2)	
皿: IV-1(1)、V-2(1)、IX(1) 白磁破片(2)	
龍泉窯系青磁 陶1-2(1)、1-2×3(1)、II-b(4) 杯: III-3b(1)	
龍泉窯片1(1)、皿(1)	
同安窯系青磁 陶1-1b(2)、III-1(1)、III-1e(1) 皿: 1-1b(1)、1-2(1)	
青 白 磁破片(1)	
中 国 陶 器破片(4)	
陶 類 陶 器 蓋	
瓦 類平瓦(格子)、横し瓦(平瓦)	
金 属 製 品漆洋	
土 製 品漆洋土製品	

5-10 緑灰色土	
土 師 器 器小瓶a(f)、杯、杯a(f)	
須志質土器漆鉢	
白 磁 陶(1)	
龍泉窯系青磁陶1-4b(1) 皿1-2b(2)	
中 国 陶 器鉢(1)	

5-10 灰青色土	
須 志 器變、陶	
土 師 器 器杯、杯a(f)、器台	
瓦 器 破片	
須志質土器鉢(東播磨)	
同安系陶器鉢	
龍泉窯系青磁陶1-1b(1)、1-2(2)	
土 製 品土塊	

5-11	
須 志 器變?	
土 師 器 器杯、杯a(f)	
白 磁 陶; IX(1)	

5-12	
土 師 器 器破片	

5-13	
土 師 質 土 器漆鉢	
同安系陶器大入?	

5-14	
土 師 器 器破片	
白 磁 破片(1)	
土 製 品土塊	

5-15 赤色土	
須 志 器變	
土 師 器 器小瓶a(f)、杯、杯a(f)、大鉢、陶	
瓦 器 器小瓶、碗、陶	
土師質土器鉢、鉢	
須志質土器鉢(東播磨)、甕	
瓦 質 土 器鉢	
須志質土器鉢	
肥前系無釉陶器	
黒 釉 陶 器 蓋(1)	

白 磁 陶: II-1(1)、IV(3)、V-4(1)、V-1×VII-2(1)	
VII-b(1)、VII(1)、破口縁(1)、口縁外反(1)、破片(15)	
皿: VI-1a(1)、VI-b(1)、IX(2)、I(東系(1))、破片(5)	
白磁破片(1)、蓋?(1) 白磁破片(3)	
白磁破片(1)、蓋?(1) 白磁破片(1)	
龍泉窯系青磁 陶1-1a(1)、1-2(1)、1-27(1)、1-3a(1)、1-4(1)	
1-6a(1)、II-a(1)、II-b(3)、小瓶1-1(1)、小瓶1-1b(1)	
皿1(2)、1-2a(1)	
陶1(1)、1-1(1)、1-1a(2)、1-1b(9)、皿(1)、	
皿-1b(1)、皿-c(1)、破片(1)	
皿: 1(1)、1-1(1)、1-2b(3) 同安破片(2)	
高 麗 青 磁 陶(1)	
瓦 類平瓦(無文?)、瓦瓦蓋(2)、蓋(1)、鉢(1)、	
中 国 陶 器 蓋(1)、小盤1-2(1)、陶器破片(17)	
青 白 磁皿(1)	
瓦 類 破片	
金 属 製 品漆洋、漆洋	
土 製 品土塊	
石 製 品石鏡、平玉石、滑石	

5-15 灰青色土	
須 志 器 器杯、甕	
土 師 器 器小瓶a(f)、杯、杯a(f)、甕、破片	
瓦 器 器陶	
須志質土器破片	
同安系陶器(東播)	
須志質土器鉢	
肥前系無釉陶器	
黒 釉 陶 器(2) V-2b(1)、直口縁(1)、破片(2)	
白 磁 陶: 口縁外反(1) 皿: X-b(1) 白磁破片(6)	
龍泉窯系青磁 陶1(2)、1-1(1)、1-2×3(1)、1-4(1)、II-b(2)	
同安窯系青磁 陶1-1(1)、1-1a(1)、1-1b(2)、II(1) 皿: 1(1)、1-1a(1)	
中 国 陶 器 V(1)、破片(1) 鉢(1) 蓋I×II(1)	
陶器破片(4)	
瓦 類平瓦(無文)、丸瓦(格子)、瓦瓦	
土 製 品滑石加工製品	

5-15 暗灰色土	
顕忠器	甕
土師器	小皿a(f), 杯, 杯a(f)
黒色土器A類	破片
瓦	筒c
土師質土器	甕, 鉢(東播磨)
須惠質土器	甕: II (f), IV (2), IX (1), 口縁外反 (1), 破片 (2)
白磁	皿: IV-1 (f), 破片 (1) 白磁破片 (2)
龍泉窯系青磁	碗: 1-2 (6)
同安窯系青磁	碗: 1-c (1), 皿-1a (1) 皿: 1 (2)
中国陶器	甕 (1), 陶器破片 (1)
石製	品石鏡

5-15 暗灰色砂織	
顕忠器	甕
土師器	小皿 (f), >9), 杯, 杯a (f), >9), 丸底杯a, 碗c
黒色土器	小皿, 甕類
瓦	筒c
土師質土器	甕
須惠質土器	甕, 鉢
国産陶器	高砂
白磁	皿 (f), IV (2), IV-1a (1), V~VII (1), 破片 (3) 皿: 1-2b (1), II-1 (f), IV-1b (1), VII-2 (1), VII-1 (1) IX (1), X-b (1), 破片 (1) 白磁破片 (4)
龍泉窯系青磁	碗: 1 (1), 1-2 (4), 1-2×3 (1), 1-4 (3), II-b (1)
同安窯系青磁	碗: 1-1 (1), 1-1a (2), 1-1b (3), 皿-1b (1), IV-1b (1) 皿: 1-1 (3), 1-1a (1)
中国陶器	甕 (1), 皿IV (1), 鉢1-2a (1), 甕 (1), 甕 (1) 陶器破片 (6)
青白磁	碗 (1)
石製	品磁石, 剥片 (黒曜石)

5-15 黒灰色土	
土師器	小皿a(f), 杯a(f), >9), 甕, 破片
瓦	筒a, 筒c
瓦質土器	羽釜
青白磁	筒c

5-15 灰色砂	
土師器	小皿a(f), 杯
黒色土器B類	破片
龍泉窯系青磁	碗: 1-2 (1)
中国陶器	甕 (1)

5-15 黒茶色土	
顕忠器	甕
土師器	小皿a(f), 杯a(f), 丸底杯?
黒色土器B類	破片
瓦	筒c
国産陶器	破片?
中国陶器	本注 (1)

5-16	
土師器	破片

5-17	
土師器	杯
瓦	筒c

5-18	
土師器	杯

5-19	
土師器	杯
瓦質土器	破片
白磁	破片 (1)
瓦	筒破片

5-20	
土師器	杯, 杯a (f)
土師質土器	鉢, 破片
須惠質土器	鉢(東播磨)
瓦質土器	破片
肥前系陶器	小皿, 小碗, 碗, 鉢, 破片
国産陶器	高, 皿, 甕, 鉢, 播鉢, 中>, 盃
国産磁器	紅藍, 合子身
白磁	碗: 内面磨目 (1)
龍泉窯系青磁	皿: 1 (1)
瓦	類平瓦 (平瓦, 丸瓦, 軒平瓦, 軒丸瓦, 枕瓦)
石製	品丸石
大工製	品粘土製品, 土壁
金属製	品鉄釘
その他	ガラス

5-20 灰茶色土	
顕忠器	土器(東播磨)
肥前系陶器	破片
国産陶器	播鉢

5-21	
土師器	小皿 (f), 杯, 甕
白磁	皿: 破片 (1)

5-22	
土師器	杯
金属製	品鉄釘

5-23	
土師器	破片
瓦質土器	器蓋a?, 破片

5-24	
土師器	杯a (f), 破片

5-25	
土師器	小皿a(f), 杯a(f), 破片
瓦	筒c
国産陶器	鉢
国産磁器	破片?
白磁	碗: IV (1) 皿: II-1a (1)
龍泉窯系青磁	破片: 1-2×3 (1)
瓦	類平瓦(格子), 類丸瓦(平瓦)
金属製	品鉄釘

5-26	
土師器	杯a (f), 破片
龍泉窯系青磁	碗: II-b (1)

5-27	
土師器	破片
瓦質土器	鉢?

5-28	
土師器	小皿a (f)

5-29	
土師器	杯, 筒c

5-30a	
土師器	杯a (>9), 破片
黒色土器B類	破片

5-30a 割方	
土師器	破片
黒色土器A類	破片

5-30b	
土師器	小皿a (f), 破片
金属製	品鉄釘
石製	品丸石

5-30b 柱穴	
瓦	筒破片

5-31	
顕忠器	破片
土師器	杯
土師質土器	破片
肥前系陶器	破片
龍泉窯系青磁	碗: 1-2~4 (1)
瓦	類平瓦(平瓦)
金属製	品近代硬貨

5-32	
顕忠器	甕, 破片
土師器	小皿a (>9), 破片
肥前系陶器	破片
国産陶器	破片
瓦	類丸瓦

5-33	
土師器	小皿a
瓦質土器	播鉢

5-34	
土師器	破片
瓦質土器	播鉢

5-35	
顕忠器	杯, 甕
土師器	小皿a (>9), 杯a (>9), 丸底杯a, 碗c
黒色土器A類	c
黒色土器B類	c
瓦	筒c, 筒a, 破片
瓦質土器	鉢
国産陶器	破片
白磁	碗: IV (1), 破口縁 (2)
中国陶器	破片 (1)

5-35 暗灰色土	
顕忠器	杯, 甕
土師器	小皿a (>9), 小皿a2, 杯a (f), >9), 丸底杯a, 碗c, 甕類
瓦	筒c, 筒a
土師質土器	鉢
肥前系陶器	破片
国産陶器	破片?
白磁	碗: IV (1), V-2a (1), V×XI-1b (1), 口縁外反 (1)
白磁	皿: II×III (1), V~VII (1), VI-1b (1)
中国陶器	破片 (1) 白磁破片 (3)
瓦	類平瓦(格子)
石製	品石鏡, 剥片 (黒曜石)
金属製	品鉄釘, 銅銭?

5-36	
土師器	破片

5-37
土 師 器破片
土 師 質 土 器鉢?
瓦 質 土 器鉢?
5-38
土 師 器环a×小皿a(1)、破片
瓦 質 土 器大鉢
瓦 類 丸瓦、埴し瓦(平瓦)
5-39
瓦 類 埴し瓦(平瓦)
5-40
須 恵 器變、樂加工品
土 師 器环a(1)、破片
龍泉窯系青磁破片(1)
土 師 質 土 器鉢
瓦 質 土 器漆鉢、破片
肥前系陶磁器破片
国産陶器破片
国産磁器破片(現代)
龍泉窯系青磁破片(1)
瓦 類 平瓦、埴し瓦(平瓦、軒平瓦)
金 属 製 品漆洋
石 製 品石鏡、平玉石
そ の 他石材
5-41
土 師 器小皿a、环
瓦 質 土 器鉢
5-42
土 師 器环
肥前系陶磁器破片
瓦 類 埴し瓦
5-43
土 師 器破片
瓦 類 器破片
5-44
土 師 質 土 器風炉
肥前系陶磁器
瓦 類 埴し瓦(平瓦、丸瓦、軒平瓦)
5-45
瓦 質 土 器漆鉢
国産陶器變、茶室?
瓦 類 埴し瓦(平瓦、丸瓦)
土 製 品レンガ
5-47
土 師 器小皿a(1)、环
土 師 質 土 器鉢、漆鉢
瓦 質 土 器鉢
国産陶器漆鉢
龍泉窯系青磁碗:1-2(1)
瓦 類 破片
金 属 製 品銅鏡(天保通宝)、銅製金具
5-47 白灰色砂
土 師 器小皿a(1)
土 師 質 土 器大鉢、破片
瓦 質 土 器大鉢
肥前系陶磁器鉢、破片
国産磁器碗
白磁碗:1(1)
瓦 類 埴し瓦(平瓦、丸瓦、軒丸瓦)
土 製 品土塊
そ の 他石炭
5-48
土 師 器小皿a(1)、环a(1)、碗c
土 師 質 土 器鉢
瓦 質 土 器大鉢
肥前系陶磁器鉢、破片
国産陶器サシ、土瓶?、破片
国産磁器紅葉
瓦 類 埴し瓦(平瓦)
土 製 品土人形?、土塊
金 属 製 品鉄片
5-49
須 恵 器變、壺
土 師 質 土 器鉢?
肥前系陶磁器鉢、壺
白磁皿:1(1)
瓦 類 埴し瓦(平瓦、丸瓦)
石 製 品石鏡
5-51
土 師 器小皿a(1)、乐加工品、丸底环a
褐色土器類小皿a
須 恵 質 土 器鉢(東福系)、鉢?
瓦 類 平瓦(磨子、鏡目)、丸瓦
石 製 品石鏡

5-52
肥前系陶磁器破片
国産陶器鉢
瓦 類 埴し瓦(平瓦)
金 属 製 品漆洋
5-53
土 師 器环、破片
国産磁器破片
瓦 類 埴し瓦(丸瓦)
5-54
土 師 質 土 器大鉢?
瓦 質 土 器大鉢
肥前系陶磁器破片
国産陶器破片
国産磁器破片
瓦 類 埴し瓦(丸瓦)
5-54 褐色土
須 恵 器鉢
土 師 器小皿a(1)、环a(1)、破片
褐色土器A磁器片
瓦 質 土 器鉢
肥前系陶磁器鉢、陶、破片
国産陶器變、サシ、破片
国産磁器鉢、碗
龍泉窯系青磁碗:1(1)
瓦 類 埴し瓦(平瓦)
金 属 製 品漆洋、鉄釘
土 製 品人形?
そ の 他石炭
5-54 褐色土
土 師 器小皿a(1)、环、壺
肥前系陶磁器
国産磁器破片
白磁碗(1) 皿:IV-2×V-2(1)
瓦 類 埴し瓦(平瓦)
5-55
肥前系陶磁器
龍泉窯系青磁碗:1(1)
瓦 類 埴し瓦(平瓦)
5-57
土 師 器环a(1)
5-58
土 師 器环
瓦 質 土 器鉢?
土 製 品土塊
5-59
土 師 器破片(1)
5-61 柱穴
石 製 品磁石
5-62
土 師 器环
5-63 柱穴
土 師 器环(1)?
土 製 品土塊
5-63 鋸方
土 師 器环
土 製 品土塊
5-64
土 師 器环
金 属 製 品漆洋
土 製 品土塊
5-64 柱穴
須 恵 器环
土 師 器环、破片
土 師 質 土 器破片
須 恵 質 土 器鉢?
5-66
龍泉窯系青磁碗:B-a(1)
5-67
土 師 器环、环a(1)
国産陶器鉢
白磁破片(1)
5-69
土 師 器环、环a(1)?
土 製 品土塊
5-71
龍泉窯系青磁碗:1(1)

S-72	
須 恵 器 器	
土 師 器	小皿a(f)、杯、環、環a(f)
土 師 器	磁片
土 師 質 土 器	鉢
瓦 質 土 器	漆器
陶 産 陶 器	サン
陶 産 磁 器	小瓶(i)
白	磁碗: IV(i) 小瓶(i) 黒平瓦(棒子)、黒し瓦(平瓦、丸瓦)
S-73	
土 師 器	杯
S-74	
須 恵 器 器	
土 師 器	環a(f)、磁片
増快色土	
須 恵 器 器	
土 師 器	小皿(a)、小皿a(f)、小皿a2、杯、環a(f)
黒色土 器	丸底杯a、磁片
瓦	磁片
土 師 質 土 器	鉢、磁片
須 恵 質 土 器	磁片
瓦 質 土 器	大鉢、漆器、鉢、漆器、磁片
肥 前 系 陶 器	皿、小瓶、磁碗、車輪、磁片
陶 産 陶 器	漆器、サン、磁片
陶 産 磁 器	皿、紅皿
白	磁碗: II-a(i)、IV-a(i)、磁片(f) 漆器(i) 磁碗: II-a(i)、IV-a(i)、III(i)、IX(i) 白磁碗片: 磁片(i)、磁皿(i)、白磁片反(i) 龍泉系青磁 磁碗: I(i)、I-3a(i)、II-a(i)、IV-a(i) 杯: 皿-2(i) 龍泉系(i) 肥 前 系 青 磁 磁碗: I-1(i)、I-1a(i)、I-1b(i) 皿: I(i) 中 国 陶 器
瓦	黒丸瓦(無文)、黒し瓦(平瓦、丸瓦)
石 製	品平玉石、滑石、瓦石
土 製	品レンガ7、土埴
金 属 製	品鉄釘

表 20 第 306 次調査 土師器計測表

A: 内底寸φ B: 板厚正取

S-7 増快色土		S-8 増快色土		S-9 増快色土		S-10 増快色土		S-11 黒色土		S-12 増快色土		S-13 黒色土		S-14 黒色土			
種別	器 種	遺物番号	同番号	口径	器高	底径	A	B	種別	器 種	遺物番号	同番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	杯	E-003	Fig.89-1	(12.0)	2.5	(8.0)	○	—	土師器	杯	E-004	Fig.89-2	(12.0)	2.5	(8.0)	○	—
土師器	小皿	E-007	Fig.89-10		0.95 _a				土師器	小皿	E-001	Fig.89-27	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-002	Fig.89-8	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—	土師器	小皿	E-003	Fig.89-30	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-014	Fig.89-9		1.3				土師器	小皿	E-004	Fig.89-31	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-013	Fig.89-31		1.05				土師器	小皿	E-005	Fig.89-32	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-001	Fig.89-27	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—	土師器	小皿	E-006	Fig.89-33	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-002	Fig.89-28	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—	土師器	小皿	E-007	Fig.89-34	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-003	Fig.89-30		0.9				土師器	小皿	E-008	Fig.89-35	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-011	Fig.89-29	(8.0)	1.1	(7.1)	○	—	土師器	小皿	E-009	Fig.89-36	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-012	Fig.89-29	(8.2)	1.1	(7.2)	○	—	土師器	小皿	E-010	Fig.89-37	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-013	Fig.89-31		1.05				土師器	小皿	E-011	Fig.89-38	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-004	Fig.89-34		2.3				土師器	小皿	E-012	Fig.89-39	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-014	Fig.89-37		1.4 _a	(7.0)	○	—	土師器	小皿	E-013	Fig.89-40	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-015	Fig.89-36		1.2 _a	(8.2)	○	—	土師器	小皿	E-014	Fig.89-41	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-016	Fig.89-33	(12.0)	2.9	(8.6)	○	—	土師器	小皿	E-015	Fig.89-42	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-017	Fig.89-35		2.9				土師器	小皿	E-016	Fig.89-43	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-018	Fig.89-32	(11.0)	3.05	(8.0)	○	—	土師器	小皿	E-017	Fig.89-44	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-019	Fig.89-38		3.4 _a				土師器	小皿	E-018	Fig.89-45	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-001	Fig.89-27	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—	土師器	小皿	E-019	Fig.89-46	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-005	Fig.89-34		1.0				土師器	小皿	E-020	Fig.89-47	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-001	Fig.89-27	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—	土師器	小皿	E-021	Fig.89-48	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-002	Fig.89-28	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—	土師器	小皿	E-022	Fig.89-49	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-003	Fig.89-30		1.0				土師器	小皿	E-023	Fig.89-50	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-004	Fig.89-34		1.65				土師器	小皿	E-024	Fig.89-51	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-005	Fig.89-34	(8.0)	0.9	(6.8)	○	—	土師器	小皿	E-025	Fig.89-52	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-012	Fig.89-31	(7.8)	1.15	(6.0)	○	—	土師器	小皿	E-026	Fig.89-53	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-015	Fig.89-36	(8.4)	1.15	(6.0)	○	—	土師器	小皿	E-027	Fig.89-54	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-016	Fig.89-36	(8.0)	1.1	(6.8)	○	—	土師器	小皿	E-028	Fig.89-55	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-021	Fig.89-48	(8.0)	0.9	(6.4)	○	—	土師器	小皿	E-029	Fig.89-56	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-022	Fig.89-49	(8.2)	0.85	(7.2)	○	—	土師器	小皿	E-030	Fig.89-57	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-023	Fig.89-50	(10.0)	1.05	(8.4)	○	—	土師器	小皿	E-031	Fig.89-58	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-024	Fig.89-51	(8.2)	0.9	(7.2)	○	—	土師器	小皿	E-032	Fig.89-59	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-011	Fig.89-38	(12.0)	2.75	(6.0)	○	—	土師器	小皿	E-033	Fig.89-60	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-025	Fig.89-52		1.3 _a	(8.4)	○	—	土師器	小皿	E-034	Fig.89-61	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-026	Fig.89-53	(11.0)	0.9	(7.2)	○	—	土師器	小皿	E-035	Fig.89-62	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-027	Fig.89-54	(8.4)	2.8	(11.0)	○	—	土師器	小皿	E-036	Fig.89-63	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-029	Fig.89-56	(14.0)	3.05	(8.4)	○	—	土師器	小皿	E-037	Fig.89-64	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-030	Fig.89-57	(10.0)	2.7	(10.0)	○	—	土師器	小皿	E-038	Fig.89-65	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-038	Fig.89-67		1.6 _a				土師器	小皿	E-039	Fig.89-66	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-032	Fig.89-55		3.4				土師器	小皿	E-040	Fig.89-67	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-028	Fig.89-59	(8.0)	3.6 _a				土師器	小皿	E-041	Fig.89-68	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-001	Fig.89-27	(8.0)	1.05	(7.0)	○	—	土師器	小皿	E-042	Fig.89-69	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-002	Fig.89-28		3.0				土師器	小皿	E-043	Fig.89-70	(8.0)	1.0	(7.0)	○	—

表土	
須 恵 器 器	
土 師 器	小皿a(f)、杯、環a(f)、杯、
土 師 器	磁碗、碗、磁片
土 師 質 土 器	鉢、漆器
須 恵 質 土 器	漆器(東漆系)
瓦 質 土 器	漆器7、大鉢7、大鉢、大鉢1直煮
緑 釉 陶 器	磁片
肥 前 系 陶 器	磁碗、碗、磁片、磁片
陶 産 陶 器	皿、漆器、漆器、土鍋、サン、磁片
陶 産 磁 器	磁片、磁片
白	磁碗: XI7(i)、磁片(i) 皿: IV-a(i)、XI(i) 白磁碗片: 磁片(i)、広東系(i)
龍 泉 系 青 磁	磁碗: I-2(i)、I-3(i)、I-2×3(2)、II-a(i)、II-b(7) 同 友 系 青 磁 磁碗: I(i) 青 磁 磁片(i)
中 国 陶 器	磁片(i)
瓦	黒平瓦(棒子)、黒し瓦(磁片)
金 属 製	品漆器
石 製	品平玉石、滑石
土 製	品人形
そ の 他 産 化 学	

S-15 黒色土		S-16 黒色土		S-17 増快色土		S-18 増快色土		S-19 増快色土		S-20 増快色土		S-21 増快色土					
種別	器 種	遺物番号	同番号	口径	器高	底径	A	B	種別	器 種	遺物番号	同番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿	E-001	Fig.86-62	(16.1)	0.85	(8.0)	○	—	土師器	小皿	E-001	Fig.86-62	(16.1)	0.85	(8.0)	○	—
土師器	小皿	E-002	Fig.86-64	(8.0)	1.25	(6.8)	○	—	土師器	小皿	E-002	Fig.86-64	(8.0)	1.25	(6.8)	○	—
土師器	小皿	E-003	Fig.86-62	(8.2)	1.3	(6.8)	○	—	土師器	小皿	E-003	Fig.86-64	(8.2)	1.3	(6.8)	○	—
土師器	小皿	E-004	Fig.86-64		1.3 _a	(10.4)	○	—	土師器	小皿	E-004	Fig.86-64		1.3 _a	(10.4)	○	—
土師器	小皿	E-001	Fig.86-66		0.9 _a				土師器	小皿	E-001	Fig.86-66		0.9 _a			
土師器	小皿	E-002	Fig.86-67		1.2 _a				土師器	小皿	E-002	Fig.86-67		1.2 _a			
土師器	小皿	E-001	Fig.86-62	(8.0)	1.3	(7.0)	○	—	土師器	小皿	E-001	Fig.86-62	(8.0)	1.3	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-002	Fig.86-65	(9.2)	1.0	(7.0)	○	—	土師器	小皿	E-002	Fig.86-65	(9.2)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-003	Fig.86-64	(9.0)	1.0	(7.0)	○	—	土師器	小皿	E-003	Fig.86-64	(9.0)	1.0	(7.0)	○	—
土師器	小皿	E-004	Fig.86-63	(9.0)	1.3	(8.0)	○	—	土師器	小皿	E-004	Fig.86-63	(9.0)	1.3	(8.0)	○	—
土師器	小皿	E-005	Fig.86-61	(8.0)	1.0	(6.8)	○	—	土師器	小皿	E-005	Fig.86-61	(8.0)	1.0	(6.8)	○	—
土師器	小皿	E-006	Fig.86-59	(8.2)	0.85	(6.8)	○	—	土師器	小皿	E-006	Fig.86-59	(8.2)	0.85	(6.8)	○	—
土師器	小皿	E-007	Fig.86-60	(8.0)	1.0	(6.8)	○	—	土師器	小皿	E-007	Fig.86-60	(8.0)	1.0	(6.8)	○	—
土師器	小皿	E-016	Fig.86-58	(7.2)	0.85	(6.0)	○	—	土師器	小皿	E-016	Fig.86-58	(7.2)	0.85	(6.0)	○	—
土師器	小皿	E-017	Fig.86-66		1.1 _a				土師器	小皿	E-017	Fig.86-66		1.1 _a			
土師器	小皿	E-018	Fig.86-67		1.2 _a				土師器	小皿	E-018	Fig.86-67		1.2 _a			

③朱雀地区

1、第 145 次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市大字太宰府字平野 2680（現在は朱雀 1 丁目）である。

1993（平成 5）年 4 月 20 日から、共同住宅建設について文化財の問い合わせが始まり、1993（平成 5）年 5 月 13 日に確認調査を実施し遺構を確認した。対象地は種々の事情から住宅が建った状態で調査が行われた。発掘調査は 1993（平成 5）年 11 月 12 日～11 月 19 日に実施した。開発対象面積は 1122 m²、調査面積は 200 m²。調査は城戸康利が行った。

(2) 基本層位 (Fig. 93)

標高 36m 程の微高地で、周辺の地形は南東側に高くなっている。また、北側は一段低くなっており、調査地は丘陵の先端部に位置していたと考えられる。表土は上面からおよそ真砂土や客土、耕作土、包含層の順で堆積している。西調査区では深さ 0.7m 前後で、東調査区では深さ 0.4m 程で遺構が確認された。地山は東調査区で黄茶色土や黄色土、西調査区で青灰白色グライ層や白色土であった。

(3) 検出遺構

ピットが散在するが、特記すべき遺構はなかった。ピット類は深さ 0.1～0.2m 程の浅いものがほとんどで、僅かに 0.4～0.5m 程の深いピットが検出された。遺構の残存状況などから上面は削平されている可能性がある。

(4) 出土遺物

第 145 次調査出土遺物 (Fig. 93)

遺構と同じく目立った遺物はないが、下記のような平安時代後期の遺物が散見される。

土師器

小皿 a (1) 復元口径 8.5cm、器高 0.9cm、復元底径 6.8cm。色調は淡黄白色を呈する。磨滅が著しく調整不明。SX009 より出土。

丸底杯 a(2) 磨滅が著しく調整不明瞭だが、外面中位に指頭圧痕がみられる。色調は黄白色を呈する。黄茶色土より出土。

須恵質土器

鉢 (3) 東播系。口縁部を肥厚させ、口縁部外面のみ黒色で、その他は灰色を呈する。表土より出土。

(5) 小結

今回の調査では、遺構の残りが良くなく、削平を受けていることがわかった。全容はわからないが、遺物の内容から平安後期の遺構が広がっていたものと推測される。

西調査区については、それを含む周囲一帯を第 238 次で調査を実施しているので、詳細はその報告を参照して頂きたい。

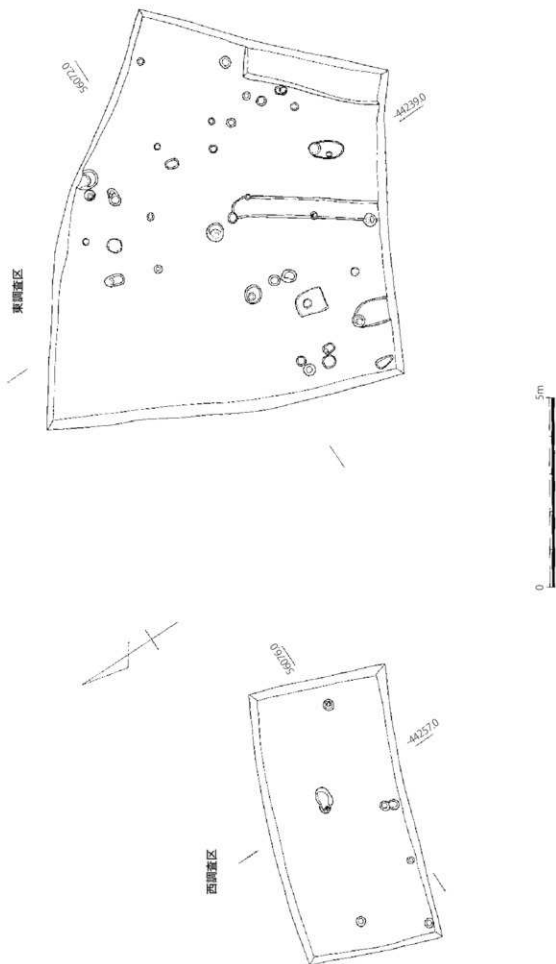


Fig. 92 第 145 次調査遺構全体図 (1/100)

2、第160次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市大字南字桜町151-1、152、158-3、158-4、153-6で、般若寺丘陵から派生する低丘陵の北辺部に位置する。

太宰府市建設課と地区道路整備事業の代替地整備について、1992(平成4)年5月から事前協議が始まり、1994(平成6)年5月13日、確認調査を実施し、深さ0.4～0.9mで僅かながら遺構を確認したため、調査を行うこととなった。発掘調査は1994(平成6)年8月17日～9月13日に実施した。西側調査区については、北辺部で建物跡の一部が検出されたため調査終了時に北側へ調査区を拡張した。開発対象面積は1651㎡、調査面積は300㎡。調査は重松麻里子が行った。

なお、対象地全面を調査していないため、その後提示された井上条坊案の左郭12条路の確認はできていない。また、北側拡張部については、遺構検出と若干の掘り下げを行ったのみで調査は完了し、現在は住宅地となっている。

また、整理作業のうち、遺物選別作業までは高橋学が行っていたが、報告時の整理・検討は宮崎亮一

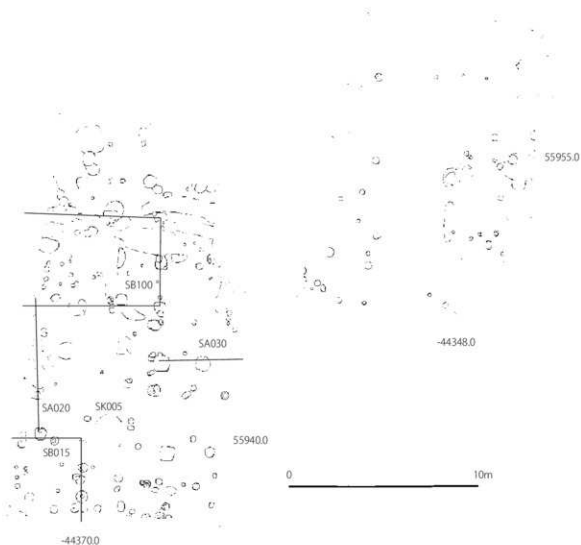


Fig.95 第160次調査遺構全体図(1/200)

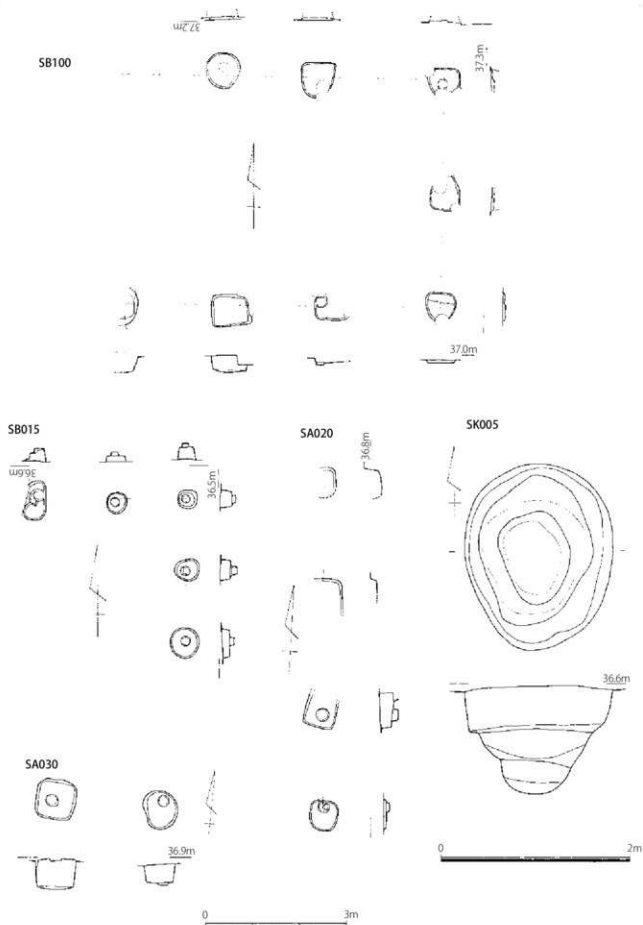


Fig. 96 160SB015・100、SA020・030、SK005 遺構実測図 (1/80、1/40)

が行った。

(2) 基本層位

調査地は、般若寺丘陵から派生する低丘陵の北辺裾部に位置している。表土は0.25～0.8mほどあり、その下に包含層が0.15m前後あり、その直下の淡黄白色シルトで遺構が確認できる。

(3) 検出遺構

掘立柱建物

160SB015 (Fig. 96)

2×2間以上の建物で調査区外に展開するとみられる。振れはほぼ正方位で、掘り方は円形で大きさは0.4～0.85m、深さは0.2～0.35mである。柱痕は径約0.18m前後であった。柱間は東西1.5～1.6m、南北1.5mで、全体として約3.1×3m以上の建物となる。

160SB100 (Fig. 96)

梁間2間×桁行3間以上の東西建物で調査区西側に展開するとみられる。振れは $W-0^{\circ} 31' 15'' -N$ 程度で、掘り方は方形や円形で大きさは0.6～0.8m、掘り方はひと下げで終了しているため、深さは不明である。柱間は梁間約2.15～2.7m、桁行約2.1～2.4mと推測され、全体として約4.8×6m以上の建物となる。

柵列

160SA020 (Fig. 96)

調査区西端で検出された柱列であるため、西側に展開する掘立柱建物の可能性は十分考えられる。掘り方は方形に近く、大きさは0.6m前後で、柱痕は径0.2m程である。柱間は約2～2.4mで、現状で6.8m分確認されている。振れは $N-3^{\circ} 10' 47'' -E$ 程度である。

160SA030 (Fig. 96)

南北に展開しないことから柵列と考えられる。掘り方は方形と円形で、大きさは西側が一辺0.85m、東側が径0.85m前後である。柱間は2.35mで、振れは $E-5^{\circ} 32' 43'' -N$ である。柱痕は径0.2m程である。他の建物よりしっかりとした掘り方であるが、調査区内でこれに対応する掘り方は検出されていない。

土坑

160SK005 (Fig. 96)

大きさは南北1.97m、東西1.55m、深さは1.16mの楕円形の土坑である。埋土は上面から褐色土、黄白色粘土、茶色粘質土の順で堆積している。

(4) 出土遺物

柵列

160SA020 出土遺物 (Fig. 97)

須恵器

蓋1 (1) 内外面とも回転ナデ調整。胎土は白色砂粒をやや多く含み、色調は淡茶灰色を呈する。

160SA030 出土遺物 (Fig. 97)

須恵器

蓋3 (2) 内外面とも回転ナデ調整。色調は明灰色を呈する。

土坑

160SK005 褐色土出土遺物 (Fig. 98)

須恵器



Fig. 97 160SA020・030 出土遺物実測図 (1/3)

杯蓋(1~3) 1は口径12.0cm、器高4.15cm。外面上部は回転ヘラ切り後未調整で、ヘラ記号を施す。内面上半部不定方向のナデ、その他は回転ナデ調整。色調は明灰色を呈する。2は復元口径13.0cm、内外面とも回転ナデで、外面上部にヘラケズリのような痕跡がみられる。色調は暗灰色を呈する。3は口縁部の破片で、外面にヘラ記号がみられる。

杯身(4~7) 4~6は、外面下半は回転ヘラケズリで、ヘラ記号を施す。内面底部は不定方向のナデ。その他は回転ナデ調整。4は復元口径9.2cm、器高3.5cm。色調は淡灰色を呈する。5は復元口径10.4cm、器高3.4cm、受け部には沈線が巡る。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は暗灰色を呈する。6は口径10.75cm、器高3.65cm。色調は暗紫色を呈する。7は杯身の上半部の破片で、復元口径12.25cm。現存範囲では全て回転ナデ。色調は暗灰色を呈する。

碗(8) 復元口径10.4cm、器高3.5cm、復元底径7.8cm。外面底部は回転ヘラケズリでヘラ記号を施す。内面底部は不定方向のナデ。その他は回転ナデで、中位は沈線状になる。色調は暗茶色を呈する。

甕(9) 口縁部で内外面とも回転ナデで、頸部上位には突帯が一条巡り、中位には斜め方向のヘラ文様を施す。色調は暗灰色や灰黒色を呈する。

土師器

皿×坏(10) 胎土は精製され、色調は明茶色を呈する。内面には暗文を施す。

古式土師器

甕(11) 磨滅しているがヨコナデか。胎土は白色砂粒を含み、色調は淡橙茶色を呈する。

製塩土器

甕(12) 内外面は剥落が目立つが、外面には叩き目が残る。胎土は0.3cmの白色砂粒を含み、色調は橙茶色や灰褐色を呈する。

弥生土器

器台(13) 破片だが下端部とみられる。内面ヨコハケ、外面タテハケで、端部はヨコナデ。胎土は白色砂粒を含み、色調は淡橙茶色を呈する。

用途不明土器(14) 破片で全形不明。内面は強いナデ調整。外面にはハケがみられる。色調は淡茶色を呈する。

160SK005 黄色粘土出土遺物 (Fig. 98)

古式土師器

鉢(15) 口縁端部はヨコナデ、内面はヘラケズリ、外面は磨滅し調整不明。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は橙茶色を呈する。

160SK005 茶色粘質土出土遺物 (Fig. 99)

須恵器

杯蓋(16~18) 16は口径12.1cm、器高3.55cm。外面頂部は回転ヘラケズリで、ヘラ記号を施す。内面の多くが不定方向のナデ。色調は淡灰色を呈する。17は内外面とも回転ナデ調整。外面はヘラ記号を施す。胎土は白色砂粒を含み、色調は暗灰色を呈する。18は復元口径11.6cm。外面上半部は回転ヘラケズリ、胎土は白色砂粒を含み、色調は暗灰色を呈する。

杯身(19~25) 19は口径10.4cm、器高3.9cm。外面下半は回転ヘラケズリで、ヘラ記号を施す。内面底部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ。色調は黒灰色を呈する。20は全て回転ナデ。色調は暗灰色を呈する。21は復元口径10.5cm。外面には回転ヘラケズリがみられる。22は復元口径10.0cm。外面下半は回転ヘラケズリ、内面底部は不定方向のナデ。23は復元口径10.0cm。内外面とも回転ナデで、外面は灰かぶりしている。24は復元口径13.4cm。外面は灰かぶり。25は口縁端部を欠損する。体部下

SK005褐色土

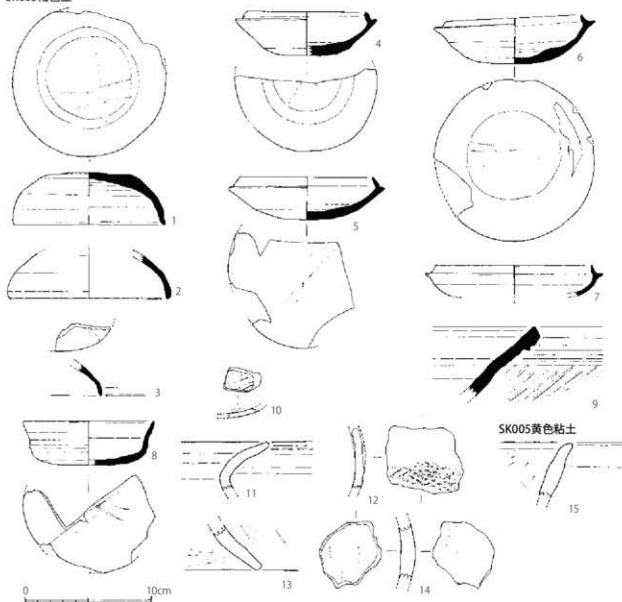


Fig. 98 160SK005 出土遺物実測図① (1/3)

半は回転ヘラケズリ、内面底部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ。

土師器

皿 (26) 胎土は精製され、色調は明茶色を呈する。外面は手持ちヘラケズリ、内面には暗文を施す。
高坏脚 (27) 小片で全形がわかりづらいが、高坏の脚部下端と推測される。外面端部には沈線が巡る。
全面磨減し調整不明瞭。

古式土師器

高坏 (28) 復元口径 11.0cm。胎土は精製され、色調は淡橙茶色を呈する。内外面とも磨減し調整不明。
甕 (29) 口縁部に向かって細くなる。全面磨減し調整不明。胎土は精製され、色調は淡橙茶色を呈する。
把手 (30) 甕部分に円形の突起を差し込むように作り出している。

弥生土器

甕 (31) 刻み目のある突帯を巡らせる。全面磨減するが、内面にはハケのような痕跡がみられる。
胎土は 0.1cm 以下の砂粒を含み、色調は黒灰褐色を呈する。

製塩土器

SK005茶色粘質土

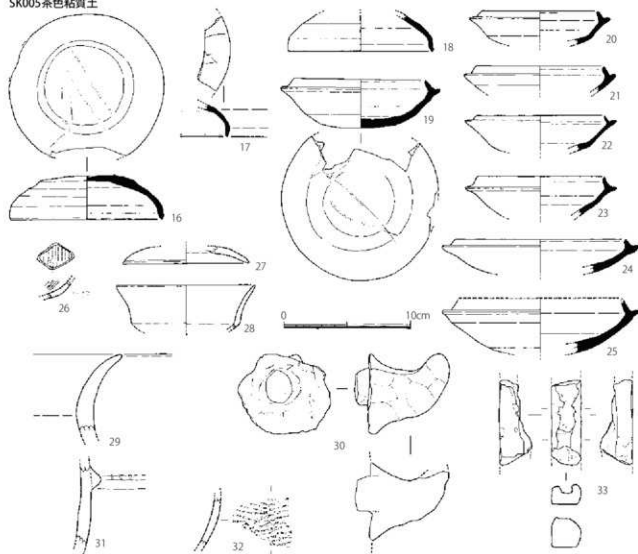


Fig. 99 160SK005 出土遺物実測図② (1/3)

甕 (32) 内面は磨滅するが、外面は叩き目が残る。色調は淡赤茶色や暗灰褐色を呈する。

土製品

用途不明土製品 (33) 両端を欠損する。幅は2.4×2.6cmの方形状であるが、挟り込み状の溝などあり用途不明。外面はナデ調整か。色調は明橙茶色を呈する。

(5) 小結

調査地は低丘陵の裾部に位置するため、若干高い箇所については遺構が希薄であるため削平された可能性が高いが、西側調査区では建物が多く確認されているにもかかわらず、建物の展開を検証しきれず調査が終了していることは残念であり、今回確認した掘立柱建物や柵列は5棟と報告したが、それ以外にも建物が建つ可能性は十分ある。遺物が少なく時期が明確にできない。

また、調査区北辺部を井上条坊案の左郭12条路が通っていた可能性があるが、残念ながら調査が及ばず確認すら行われていない。

以上のように調査が不十分であったが、条坊が施工される以前の7世紀初頭埋没とみられる土坑(SK005)があり、遺物もまとまって出土していることから、付近で生活域があったと推測され、掘立柱建物や柵列にこの時期のものも含まれている可能性がある。



Fig. 100 第 160 次調査遺構略測図 (1/200)

表23 第160次調査遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区番号
1		ピット群			A8
2		ピット群			A7
3		ピット群			A8
4		ピット			A8
5	160SK005	土坑	茶色粘質土→茶白色粘土→褐色土	7世紀初頭	B8
6		ピット		奈良時代	A8
7		ピット		奈良時代	A9
8		ピット			A10
9		ピット			C10
10	160SA030	櫛列	黄白色粘質土→茶色砂質土 S-10→23・24	奈良時代	C7
11		ピット			B7
12		ピット			B7
13		ピット群		8世紀代	B10
14		ピット群			A9
15	160SB015	独立柱建物	S-13の一部、S-52を含む		B9
16		ピット	S-43→16		D7
17		土坑	暗茶色粘質土 S-17→20		C10
18		ピット			D8
19		たまり状			D8
20	160SA020	櫛列	S-9・13の一部、S-54・78を含む S-100→20	7世紀中～後半?	B~D10
21		ピット			C9
22		ピット			C7
23		ピット群	S-10→23・24		C8
24		ピット	S-10→23・24		C7
26		ピット			D9
27		ピット			D8
28		ピット群			C7
29		ピット群			C7
30	160SA030	櫛列	S-10を含む	奈良時代	C7
31		ピット			C7
32		ピット			E1
33		ピット			E2
34		ピット			D2
36		ピット群			E4
37		ピット			E4
38		ピット			E4
39		ピット			E4
41		ピット			D7
42		ピット			D7
43		ピット	S-43→16		D7
44		溝状凹み			F2
46		ピット群			G1
47		ピット			H3
48		凹み			D6
49		ピット			D7
51		ピット	褐色土		A7
52		ピット			A9
53		ピット			C6
54		ピット			D10
56		ピット			F7
57		溝			F7~8
58		ピット			F7
59		ピット			G8
61		ピット			G8
62		土坑	S-62→64		G9
63		ピット			G8
64		ピット	S-62→64		G9
66		ピット			F9
67		ピット			F9
68		ピット			G8
69		ピット			F9
71		ピット群			F9
72		溝	S-73→72		F8
73		溝	S-73→72		E~F8
74		ピット群			E8
76		ピット			E8
77		ピット群			E7
78		ピット			D10
79		ピット			D10
100	160SB100	独立柱建物	S-49・79を含む 2×3間以上	7世紀代?	E~F8~9

表 24 第 160 次調査 出土遺物一覽表

S-1 須 志 器 壺、甕 土 師 器 皿a	S-28 土 師 器 陶c、环破片	S-68 須 志 器 甕 土 師 器 甕
S-2 土 師 器 环c、甕	S-29 土 師 器 环破片	S-69 土 師 器 破片
S-3 須 志 器 破片 土 師 器 破片	S-31 土 師 器 供膳具、煮沸具	S-71 須 志 器 环 土 師 器 破片
S-4 土 師 器 破片	S-32 土 師 器 破片	S-72 土 師 器 破片 因 産 陶 器 陶
S-5褐色土 須 志 器 环蓋、环身、柄、甕 土 師 器 甕、皿×环 古式土 師 器 甕 製 瓶 土 師 器 有底土器 物 有 土 師 器 器台、用途不明土器	S-33 土 師 器 破片	S-73 須 志 器 甕、甕 土 師 器 环、甕
S-5黄色粘土 須 志 器 环身 古式土 師 器 鉢	S-34 土 師 器 破片	S-74 土 師 器 甕
S-5灰色粘質土 須 志 器 甕、环蓋、环身 土 師 器 甕、环、皿c、高环甕、甕×飯匙平 古式土 師 器 高环、把子、甕 製 瓶 土 師 器 有底土器 土 製 品用途不明土製品	S-36 土 師 器 环破片	S-76 須 志 器 破片 土 師 器 破片
S-6 土 師 器 陶×环c	S-37 土 師 器 平瓦	S-77 土 師 器 破片
S-7 須 志 器 环c	S-38 土 師 器 环破片	S-78 須 志 器 盖1 土 師 器 甕
S-8 須 志 器 破片 土 師 器 破片	S-39 土 師 器 供膳具 瓦 類平瓦(格子)	S-79 瓦 類破片
S-9 須 志 器 破片	S-41 土 師 器 陶c、小柄、环a	灰色土 須 志 器 环身、环c、高环 土 師 器 环a(イ卜)、环、陶(ニヤキ) 陶、供膳具 古式土 師 器 高环 因 産 瓦系青磁陶、I (1)
S-10 須 志 器 蓋3 土 師 器 破片	S-42 須 志 器 破片 土 師 器 破片	灰色土 須 志 器 环c
S-11 須 志 器 高环 土 師 器 破片	S-43 須 志 器 破片 土 師 器 破片	表土 須 志 器 甕(飯甕) 土 師 器 陶c、环a 肥前系陶磁器破片 土 師 器 平瓦
S-12 須 志 器 环破片 土 師 器 皿b	S-44 土 師 器 破片	出土地不明 須 志 器 破片 土 師 器 破片
S-13 土 師 器 破片(ニヤキ)	S-46 須 志 器 蓋3 土 師 器 甕、环破片	
S-14 金 属 製 品 灰滓	S-47 土 師 器 破片	
S-16 土 師 器 环破片	S-48 土 師 器 环	
S-17 須 志 器 破片 土 師 器 煮沸具 赤 土 土 師 器 破片	S-51 土 師 器 环	
S-18 土 師 器 平瓦(格子)	S-52 須 志 器 甕 土 師 器 甕、环a、供膳具	
S-19 土 師 器 皿a、环破片	S-53 土 師 器 供膳具	
S-21 土 師 器 破片	S-56 須 志 器 蓋c 土 師 器 环	
S-22 土 師 器 破片	S-57 須 志 器 甕、环a、蓋3 土 師 器 甕、环c	
S-23 須 志 器 破片 土 師 器 破片	S-58 土 師 器 甕、破片	
S-24 土 師 器 食膳具、甕 土 製 品土器	S-59 土 師 器 破片	
S-26 土 師 器 破片	S-61 土 師 器 供膳具	
S-27 土 師 器 破片 瓦 類平瓦	S-62 須 志 器 环破片	
	S-63 土 師 器 破片	
	S-64 須 志 器 环c	
	S-66 土 師 器 破片	
	S-67 土 師 器 破片	

3、第 180 次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は、太宰府市朱雀 1 丁目 2681-1、2、3、15 番地に所在する。調査地は鏡山条坊案では左郭 10 条 5 坊・11 条 5 坊にあたり、井上信正氏の条坊案では左郭 11 条 6 坊となる。

この土地が、太宰府市の地区道路整備事業の事業対象地の代替地となり、1993（平成 5）年 10 月 22 日、当該地番に対して太宰府市役所建設課地区道路整備係から埋蔵文化財の取り扱いについて問い合わせがあった。文化財保護法第 57 条（当時）による周知の遺跡内（大宰府条坊跡）に所在していることから、埋蔵文化財の取り扱いが生じることならびに実務内容について説明を行った。その後協議をすすため、1993（平成 5）年 10 月 26 日に確認調査を行い、遺構密度は薄いながらも現地表面下約 1m で遺構が確認されたため、記録保存のために調査が必要となった。

開発対象面積は 1000 m²、調査面積は 700 m² を測る。調査期間は 1996（平成 8）年 4 月 8 日から同年 8 月 23 日である。調査は高橋学と中島恒次郎が実施した。

(2) 基本層位 (Fig. 102)

調査地は般若寺跡の所在する丘陵から、北側に派生する尾根の北側斜面下位（標高 34～35m）に位置する。遺構面は 1 層である。現状は耕地として利用されており、調査区北部には南部に比べて、約 0.7m 低い位置する約 105 m² の段落ち状地がある。現地表面から約 0.2m は耕作土、約 0.5～0.8m の造成土が検出された。この造成土により、段落ち状地の境界が造られている。以下、黄茶色土・茶色土の遺物包含層を除くと遺構が検出された。遺物包含層からは古代～中世の遺物が出土した。検出された遺構は古墳時代前期～鎌倉時代のものが多いが、すべての時期にわたって遺構が浅く、現代にいたるまで何度か削平されているものと考えられる。

(3) 検出遺構

柵列

180SA060

180SD020 の南東部で検出された杭列。北側に 0.9m の間隔で a、b の 2 本の杭が打ち込まれていた。3.3m ほど間隔を空けて、4m の間に 6 本の杭が打ち込まれていた。180SD020 の傾きと大略同じ方向に沿ってこの柵列は打ち込まれているので、本来護岸などのために利用されていたものと推測される。ただし、杭で固定したと考えられる横板は見つかっていない。

溝

180SD010

調査区西部北側で検出された南北方向の溝。東西長 3.1m、南北長 8.2m、深さ 0.1m を測る。振れは、N-10° 34' 51.16" -W。全体的に遺構の掘方が浅いため削平を受けているものと考えられる。埋土は灰茶色粘質土。180SD010 の埋土を除去すると下層から、S-11 等の南北方向の小さい溝状のものや小穴が検出されている。出土遺物から遺構の埋没は X III 期（12 世紀前半）以降と考えられる。

180SD020

調査区東側を中央から東へ振れた後、北へ大きく蛇行しながら展開する溝。東西長 2.4～7.7m、南北長 24.7m、深さ 0.7m を測る。当初の形状は不明だが、最終的には流路的な状況になっていたと考えられる。土層は上から、茶赤色土、茶灰色土（灰色砂が多く混じる）、灰色粘質土（埋土内に自然木片が少量混じる）、最下層が暗灰色粘質土（礫混じり砂を多く含む。南へ行くにしたがって砂質に変化していく）となる。出土遺物から X III～X IV 期（12 世紀前半）に埋没したと思われる。

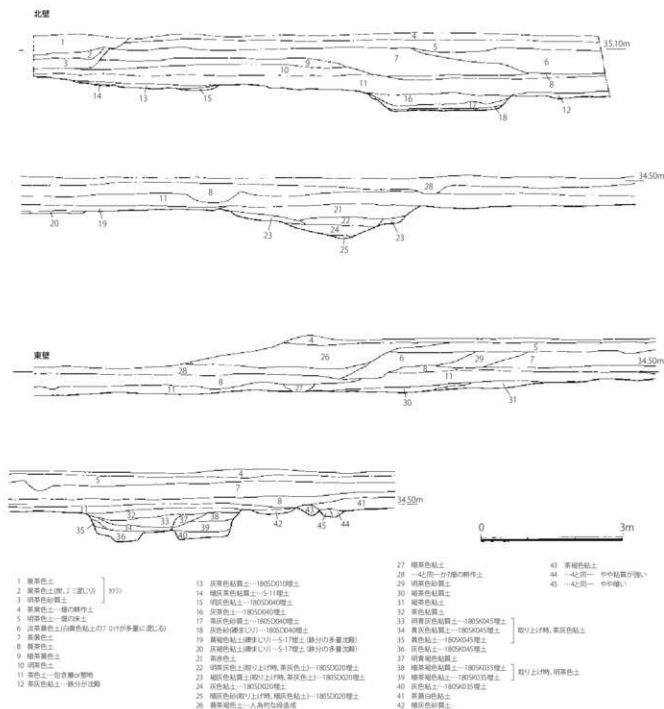


Fig. 102 第180次調査区土層実測図 (1/80)

調査区西部に位置する南北溝。東西長4m、南北長16m、深さ0.36mを測る。振れは、 $N-4^{\circ} 22' 54.9'' -W$ 。溝の断面形状は逆台形を呈す。埋土は上層から灰茶色土、茶灰色砂、最下層が灰色砂に礫が混じっていた。礫は歪角礫で、最大で縦10cm、横14cm、厚さ6cm、最小で縦5cm、横6cm、厚さ3cmで、平均的には縦8cm、横7cm、厚さ3cm程度のもので5cm程度の厚みで堆積していた。調査時点は検証する視点を欠いていたが、整理段階の目で見るといわゆる礫敷だった可能性が高い。また、180SD040に関しては、溝の東側に直径0.3~0.4m程度の楕円形をした小穴群(SX034・069・084)が南北方向に

連続して掘削されている。小穴は16個検出している。溝群はやや蛇行しながら南北方向に連なっている。小穴の深さは0.04～0.32mと一定ではない。傾向としては南へ行くにしたがって柱穴の底のレベルは高くなっている。これらは一部溝を切るように検出されているが、ほとんどが溝の埋土を除去して後に見つかっており、溝との関係性がうかがえる。西側に関してはS-59とした小穴群や、S-31とした南北溝、またS-85の南北溝状の遺構も同様に溝に関係する可能性がある。これらのことを勘案する調査時点は溝として調査を行ったが、実際には道路遺構であった可能性が高い。この調査以降に発掘調査された調査例の中に同じような構造を持つ遺構が確認されており、それらは井上氏の条坊案と整合性が高い。実例としては右郭4坊ラインにこれに似た構造の道路遺構が多く見つかった。この180SD040については、井上氏条坊案左郭六坊ラインに整合することからもこの遺構が道路として使用されていた推測することが可能である。

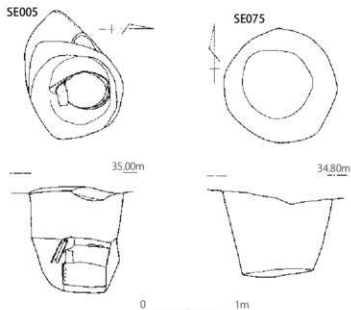


Fig. 103 180SE005・075 遺構実測図 (1/40)

下層の出土遺物からみると掘削の当初は9世紀以降の可能性があるが、実際に機能していたのは他の多くの出土遺物より考えて、12～13世紀以前であろう。

180SD085

調査区西部南側で検出された南北溝。東西長1m、南北長4m、深さ0.17～0.38mを測る。振れは、S-1° 35' 28.1" W。180SD040の南側に位置しており、関連が高いと考えている。道路遺構の西側側溝の可能性がある。

出土遺物から中世段階で埋没した遺構と考えられる。

180SD090

調査区西部南側で検出された南北溝。振れはN-1° 27' 0.78" E。S-68と平行しており、非常に浅くたまり状に連なっている遺構である。東西長0.5m、南北長4m、深さ0.04～0.09mを測る。埋土は茶黄色土。

出土遺物から遺構は中世期に埋没したと考えられる。

井戸

180SE005 (Fig. 103)

調査区西部北側で検出された井戸。平面プランは隅丸方形。東西長1m、南北長1m、深さ1.06mを測る。遺構を掘り下げていくと遺構検出面から0.5mほどで、木製品の曲物を再利用した井戸枠を検出した。曲物は二段に重ねてあり、南側は上段部がやや崩壊していた。井戸枠の裏込めについては、上位は暗灰色粘土だが、下位に行くに従って白色砂に変わる。また、礫を多く含むようになる傾向が観察された。井戸が機能していた段階でも、井戸枠を支えた砂と礫の層が水を澄ます役割を果たしていた可能性を考えておきたい。なお、調査時点でも遺構の底からは大量の湧水が確認されている。

出土遺物からこの遺構の埋没時期はXVI～XVII期（13世紀前半～中頃）と考えられる。

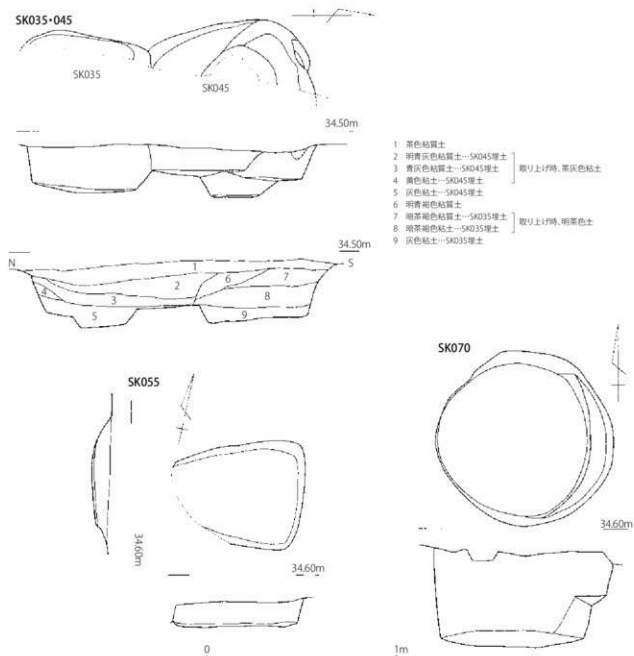


Fig. 104 180SK035・045・055・070 遺構実測図 (1/40)

180SE075 (Fig. 103)

調査区中央部東側に位置する土坑。平面プランは円形。東西長 1.7×南北長 1.65m を測る。

出土遺物からこの遺構の埋没時期はX III期 (12世紀前半) と考えられる。

土坑

180SK035 (Fig. 104)

調査区東部中央に位置する土坑。180SK045 に切られる。調査区外に遺構が展開するため全容は不明。確認できた範囲では、南北長 1.35m、東西長 0.2m、深さ 0.5m を測る。遺物取り上げ時の土色は、上層から明茶色土、灰色粘質土 (炭混じり) である。

出土遺物から遺構の埋没時期は、奈良～平安時代と考えられる。

180SK045 (Fig. 104)

調査区東部中央に位置する土坑。180SK035 を切る。調査区外に遺構が展開するため全容は不明。確認できた範囲では、南北長 1.83m、東西長 0.65m、深さ 0.5m を測る。遺物取り上げ時の土色は、上層から茶色土、茶灰色粘質土、灰色粘質土である。

出土遺物から遺構の埋没時期は、12 世紀以降と考えられる。

180SK055 (Fig. 104)

調査区東部中央に位置する土坑。遺構の西側は攪乱により削平されているため全容は不明。確認できた範囲では、南北長 1.25m、東西長 1.4m、深さ 0.25m を測る。遺物取り上げ時の土色は、上層から暗灰色粘土、暗灰色粘質土（大量のどんぐり類を含む）である。

出土遺物から遺構の埋没時期は、古墳時代前期と考えられる。

180SK070 (Fig. 104)

調査区東部南側に位置する土坑。平面プランは円形。東西長 1.2m、南北長 1.2m、深さ 0.9m を測る。埋土は上層から、灰色粘質土、暗茶色土、灰茶色粘質土。埋土の途中に焼けた樹木があった。出土遺物から遺構の埋没時期はXⅧ期（13 世紀後半）と考えられる。

180SK080

調査区西部南側に位置する不整形の土坑。東西長 2.3m、南北長 4.8m、深さ 0.07～0.1m を測る。埋土は茶色土。出土遺物から遺構の埋没時期は 13 世紀以降と考えられる。

180SK095

調査区中央部南側に位置する不整形の土坑。180SD040 との関係性が疑われる。調査区外に伸びるため、全形は不明。埋土を除去すると SX069・084 と同じような連続した小穴が検出されている。出土遺物からこの遺構の埋没時期は 12 世紀以降と考えられる。

その他の遺構

180SX001

調査区西部北側に位置するたまり状遺構。東西長 1.1m、南北長 2.1m、深さ 0.06m を測る。埋土は茶灰色土。出土遺物からこの遺構の埋没は中世後期と考えられる。

180SX013

調査区西部北側に位置する小穴。180SX001 を除去後に検出をした。東西長 0.42m、南北長 0.72m、深さ 0.15m を測る。中央にもう一段下がった穴がある。その穴は東西長 0.4m、南北長 0.32m、深さ 0.08m である。埋土は淡灰色砂。出土遺物からこの遺構の埋没時期は中世以降と考えられる。

180SX023

調査区中央部北側に位置するたまり状遺構。出土遺物から埋没時期は 13 世紀と考えられる。奈良時代の遺物や動物遺体（骨）も含む。

180SX025

調査区中央部北側に位置するたまり状遺構。180SX023 を掘り下げ検出した。南北方向の溝状のたまり。出土遺物からこの遺構の埋没時期は奈良時代以降と考えられる。

180SX028

調査区中央部北部に位置するたまり状遺構。180SX023 を切っている。埋土は黄褐色砂礫混じり。出土遺物からこの遺構の埋没時期は中世以降と考えられる。

180SX030

調査区北部に位置するたまり状遺構。南北方向の溝状のもの。埋土は黄茶褐色礫。出土遺物からこの遺構の埋没時期は 13 世紀以降と考えられる。

180SX032

調査区北部西側に位置する小穴。180SD040 の下層で検出。埋土は灰色砂。注目される遺物として越州窯系青磁碗 I-2b 類が出土している。

180SX033

調査区北部西側に位置する小穴。180SD040 の下層で検出。埋土は灰色砂。

180SX042

調査区中央部に位置する南北方向のたまり状遺構。埋土は茶灰色粘質土。出土遺物から遺構の埋没は 13 世紀以降と考えられる。

180SX049

調査区中央部北側に位置する小穴群。埋土は灰色土。出土遺物から遺構の埋没は奈良時代前半以降と考えられる。

180SX051

調査区東部中央に位置するたまり状遺構群。埋土は茶灰色土。180SD020 を切る。出土遺物から遺構の埋没は中世以降と考えられる。

180SX052

調査区東部中央に位置するたまり状遺構群。180SX051 に切られる。埋土は明茶灰色土。出土遺物から遺構の埋没は中世以降と考えられる。

180SX054

調査区中央部に位置するたまり状遺構。埋土は茶灰色土。出土遺物から遺構の埋没時期は奈良時代以降と考えられる。

180SX057

調査区中央部西側に位置するたまり状遺構群。埋土は茶灰色土。出土遺物から遺構の埋没時期は中世以降と考えられる。

180SX065

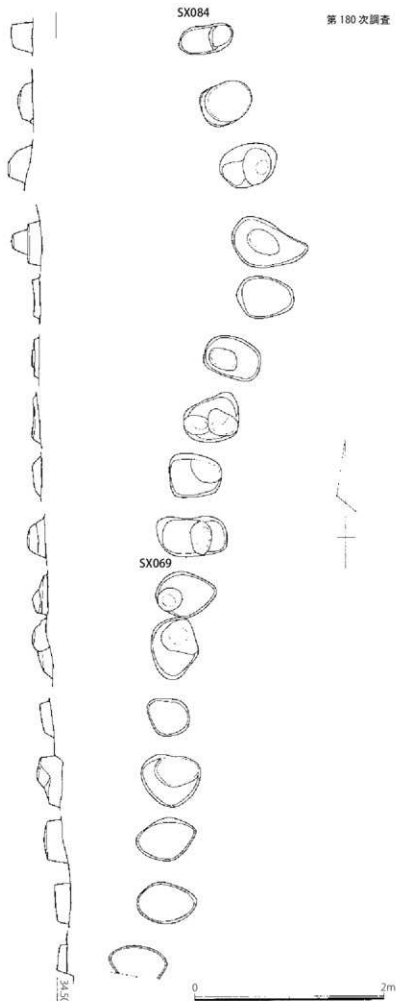


Fig. 105 180SX069・084 遺構実測図 (1/40)

調査区東部東側に位置する回み状遺構。埋土は、古い堆積から黒色土→茶色土→灰色粘質土→茶灰色粘質土→茶灰色土となる。出土遺物から遺構の埋没は中世以降と考えられる。

180SX066

調査区東部南側に位置する回み状遺構。調査区外に展開するため全容は不明。埋土は黄色土・茶色土ブロック混入明黄茶色土。出土遺物から遺構の埋没は中世以降と考えられる。

180SX076

調査区東部南側に位置するたまり遺構。埋土は茶灰色土。出土遺物から遺構の埋没は中世以降と考えられる。

180SX081

調査区南部中央に位置する小穴。埋土は茶灰色土。出土遺物から奈良時代以降の埋没と考えられる。

180SX086

調査区中央部西側に位置する小穴群。180SD040の下層から検出された。出土遺物から10世紀以降に埋没したものか。

(4) 出土遺物

柵列

180SA060 出土遺物 (Fig. 106)

木製品

木杭 (1~8) 小木を縦に分割し、厚み4~5cmほどに整えて、先端部を斜めに削ぎ加工した木製の杭群である。埋土に埋まっていた部分が主に残存しているが、上部は腐っており、当初の杭の長さは不明である。aは長さ45cm、幅4.45cm、厚み4.4cm、bは長さ21.3cm、幅4.1cm、厚み2.5cm、cは長さ47.8cm、幅5.0cm、厚み5.1cm、dは長さ36.4cm、幅5.3cm、厚み2.55cm、eは長さ29.2cm、幅3.9cm、厚み2.1cm、fは長さ28.7cm、幅2.3cm、厚み1.8cm、gは長さ34.2cm、幅4.5cm、厚み2.5cm、hは長さ30.7cm、幅3.9cm、厚み2.4cm。

溝

180SD010 出土遺物 (Fig. 107)

須恵器

鉢 (1) 口縁部破片。口縁はやや丸みを持つ。還元・焼成共に良好。篠窯か。

土師器

小皿 a (2) 口縁部破片。底部切り離し技法は回転糸切り。XIII期以降か。

陶器

甕 (3) 底部破片。残存高4.6cm。内外面に施軸をする。軸色は暗茶色~暗褐色。軸調は薄く施される。不透明で光沢なし。

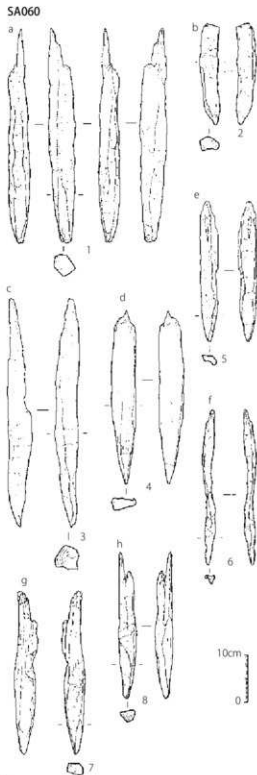


Fig. 106 180SA060 出土遺物実測図 (1/8)

瓦質土器

火鉢(4) 口縁部破片。口縁部は内湾している。外面には花文をスタンプしている。焼成はやや不良。
石製品

用途不明石製品(5) 滑石製。縦6.8cm、横2.7cm、厚さ1.7cm。滑石製石鍋の再利用品か。

180SD010 暗灰色粘質土出土遺物 (Fig. 107)

金属製品

飾金具(6) 縦3.1cm、横4.5cm、厚さ1.1cm。金属の厚みは1mm程度で薄い。断面をみると、円形で上部に3mm程度隙間が空いている。上部に一カ所2mmほどの孔が穿たれている。何かの縁を飾る金具と考えられる。

180SD020 灰色粘土出土遺物 (Fig. 107)

土師器

小皿a(7) 口縁部破片。器高1.1cm。底部切り離し技法は糸切りか。

木製品

木杭(8) 縦30.3cm、横3.5cm、厚さ2.8cm。下部を加工して三角状にしている。

石製品

不明(9) 縦5.2cm、横5.6cm、厚さ2.1cm。部分的に打ち欠いた跡が残る。安山岩。

剥片(10~12) 10はチャート製。一部原石面が残る。11・12は黒曜石。

180SD020 茶赤色土出土遺物 (Fig. 107)

越州窯系青磁

碗(13) 底部破片。Ⅱ-2類。

中国陶磁

水注(14) 把手部破片。焼成やや良好。色調は明橙茶白色～淡茶褐色。

土製品

輪羽口(15) 羽口破片。色調は外面が淡黄白色～淡赤褐色。内面が淡赤褐色～淡橙白色。焼成は良好。

180SD020 茶灰色土出土遺物 (Fig. 107)

土師器

小皿a(16) 復元口径9.0cm、器高1.05cm、復元底径7.3cm。底部切り離し技法は回転ヘラ切り。その他の調整は摩耗のため不明。XⅢ～XⅣ期。

鍋×甕(17) 口縁部破片。外面に煤付着。胎土はやや粗く1～2mm程度の白色砂粒をやや多く含む。

金属製品

ピン(18) 縦0.8cm、横0.6cm、厚さ0.2cm。上部が丸く下部が尖っている。銅製。

鉾滓(19) 縦5.7cm、横4.35cm、厚さ1.95cm。

石製品

砥石(20) 縦6.9cm、横8.5cm、厚さ2.2cm。欠損して割れている箇所以外は、石材面が平滑になっており、砥石として使用されたと考えられる。

180SD020 暗灰色粘質土出土遺物 (Fig. 107)

白磁

碗(21) 底部破片。Ⅴ類。底部外面に墨書あり。縦方向に二文字あり。「述時」か。

180SD020 暗褐色砂出土遺物 (Fig. 108)

石製品

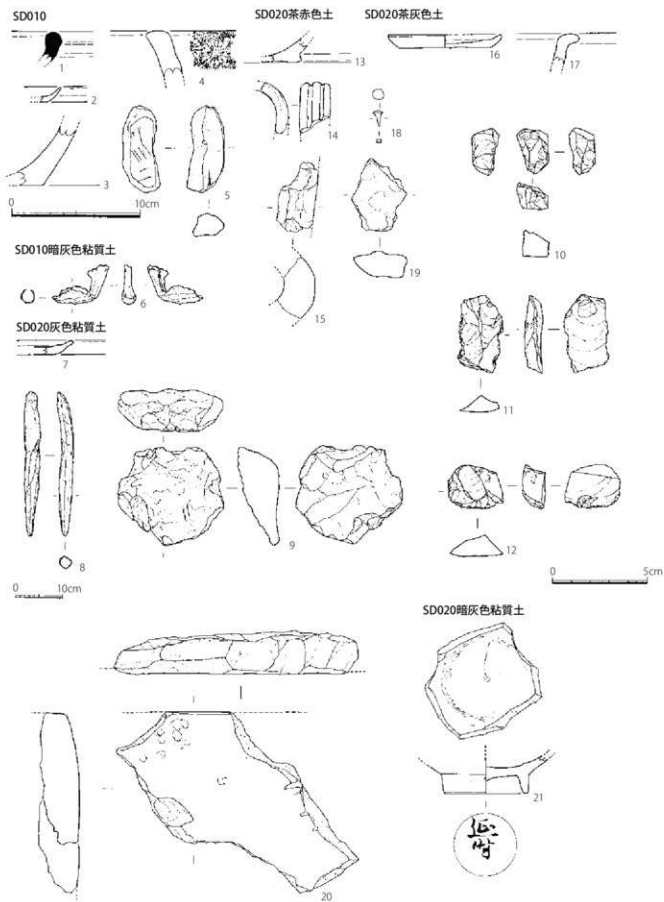


Fig. 107 180SD010・020 ①出土遺物実測図 (1/3、石製品は1/2、8は1/8)

SD020暗褐色砂

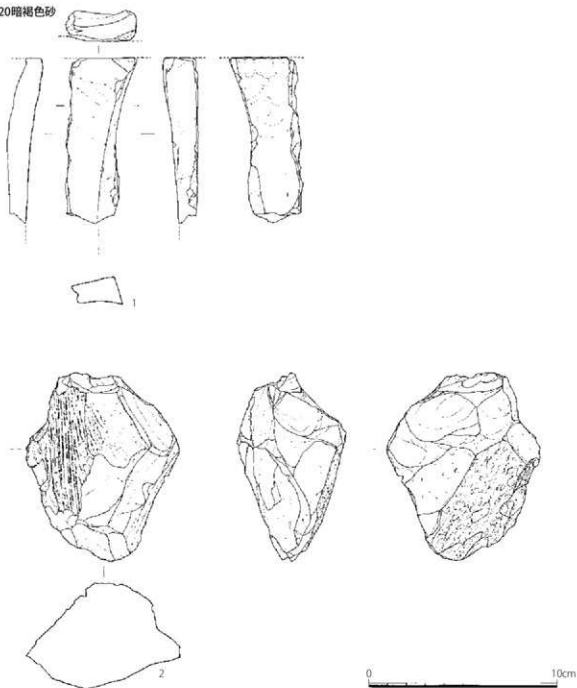


Fig. 108 180SD020 ②出土遺物実測図 (1/2)

砥石 (1) 一部平滑な面があり、これを砥石として使用したものか。他の面は割れている。全体的に面が荒れているため使用面は不明瞭。石材は泥岩。

石核 (2) 縦 9.55cm、横 8.1cm、厚さ 5.5cm。原石面と打ち欠いた面があるが、全体に摩耗が進み不明瞭。石材は安山岩。

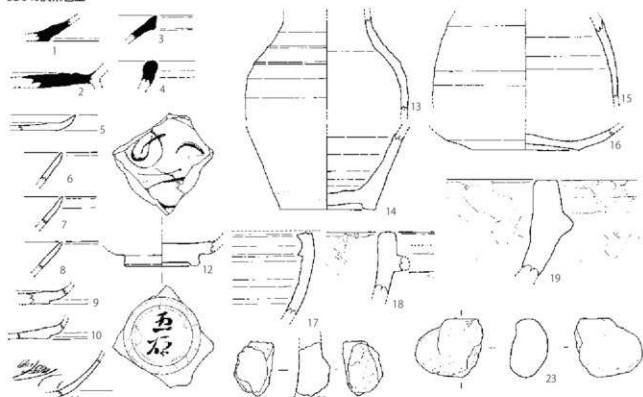
180SD040 灰茶色出土遺物 (Fig. 109)

須恵質土器

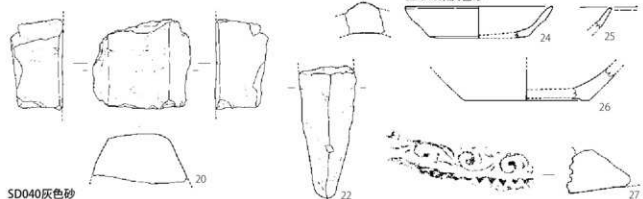
碗 (1) 底部破片。残存高 1.6cm。底部切り離し技法は回転系切り。色調は内外面ともに淡青灰色。胎土は 1mm までの白色砂粒を少量含む。搬入品。東播系か。

壺? (2) 底部破片。還元・焼成共に良好。

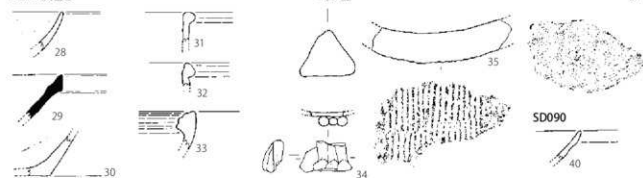
SD040 灰茶色土



SD040 茶灰色砂



SD040 灰色砂



SD085

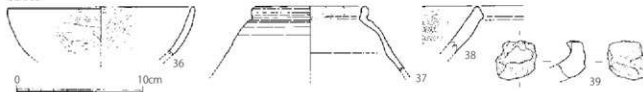


Fig. 109 180SD040 出土遺物実測図 (1/3)

鉢(3、4) 口縁部破片。3は口縁端部に強い回転ナデを施し、端部を上に向けて口縁部を帯状に肥厚させている。東播系。4は口縁端部に丸みを持つ。還元は良好。焼成はやや良好。

土師器

小皿 a (5) 口縁部から底部の破片。器高1.25cm。摩耗のため底部切り離し技法は不明。

坏(6~8) 口縁部破片。6の色調は明茶灰色。7の色調は暗茶灰色~茶灰色。8の色調は淡茶灰色。

坏 a (9、10) 底部破片。摩耗のため調整は不明。

白磁

碗(11) 体部破片。Ⅶ-b類。

龍泉窯系青磁

碗(12) I-2a類。底部破片。底部外面に墨書あり。縦に二文字。「五口右カ」

中国陶器

壺(13) 体部破片。内外面共に施釉。残存高7.2cm。外面はやや光沢のある灰緑色の釉が全体にかかる。内面はやや光沢がある灰褐色味を帯びた釉が全体に薄くかかる。

水注×壺(14、15) 14は底部破片。底部高台部は基筒底風にヘラ削りを施し、露胎している。15は体部の破片。内外面に施釉。残存高6.1cm。釉調はやや光沢のある緑灰色の釉が内外面に薄くかかる。

盤(16) 底部破片。内外面施釉。胎土は青灰色で、0.5mm以下の黒色砂粒を少量含む。I類か。

鉢(17) 口縁部から体部への破片。I-1b類。

石製品

石鍋(18、19) 18、19は滑石製石鍋。外側に鈔が回る。外面には煤が付着する。19はローリングを受けている。

砥石(20) 縦7.1cm、横7.7cm、厚さ4.2cm。割れ口以外の面が砥石として使用されて、平滑になっている。砂岩製。

用途不明品(22) 縦10.5cm、横4.6cm、厚さ3.6cm。重さ165.3g。三角錐状。

土製品

輪羽口(21) 羽口の破片。内面は明灰色を呈し、外面に向かって白灰色から橙茶色となる。外面にマンガンと思われる付着物がある。

不明品(23) 縦4.7cm、横5.4cm、厚さ3.0cm。全体にナデ調整を施す。色調は、淡赤茶色~茶灰色~黒灰色だが、茶褐色や黒色の付着物が観察できる。

180SD040 茶灰色砂出土遺物 (Fig. 109)

土師器

坏 a (24) 復元口径10.6cm、器高2.4cm、復元底径7.8cm。摩耗のため調整は不明。

坏(25) 口縁部破片。色調は明茶灰色~淡茶灰色。

中国陶器

鉢(26) 底部破片。残存高2.5cm、復元底径9.9cm。内外面施釉。釉調は明茶色。

瓦類

軒平瓦(27) 瓦当面の一部。下外区には凸鋸歯文、内区は唐草文。

180SD040 灰色砂出土遺物 (Fig. 109)

瓦器

碗(28) 口縁部破片。内面にはミガキ b 後にミガキ c。外面は回転ナデ調整後、一部にミガキ c。在地産。

須恵質土器

鉢 (29) 口縁部破片。東播系。

中国陶器

鉢 (30) 底部破片。内面にナデ調整、一部摺り目を確認できる。底部未調整、外面は回転ヘラ削り調整。

壺 (31, 32) 31は口縁部破片。全面に緑色釉を施釉。口縁部端部は丸みを帯びてやや外側に張り出す。32は口縁部破片。玉縁状。釉調は内外面に光沢のある赤褐色の釉がかかる。A群。

鉢 (33) 口縁部破片。I-1c類。

長沙窯系青磁

水注 (34) 把手のみの破片。釉調は、やや光沢のある淡褐色の釉が外面に薄く掛けられる。胎土は黄白灰色。0.5mm以下の細かい白色砂粒をごく少量含む。

瓦類

平瓦 (35) 凹面は布目痕、凸面は縄目調整。焼成は良好、須恵質。

180SD085 出土遺物 (Fig. 109)

瓦器

椀 (36) 口縁部から体部の破片。復元口径14.8cm、残存高3.8cm。内外面ミガキcを施す。在地産。

中国陶器

壺 (37) IV類。

瓦質土器

鉢 (38) 口縁部破片。内面は刷毛目調整。外面の調整は不明。

土製品

トリべ (39) 破片。内面側にタール状のものが付着している。

180SD090 出土遺物 (Fig. 109)

土師器

坏 a × 坏 b (40) 破片。色調は内外面ともに淡褐色を呈する。

井戸

180SE005 出土遺物 (Fig. 110)

土師器

坏 a (1, 2) 1は底部破片。底部切り離しは、回転系切りで後に板状圧痕。2は口径12.85cm、器高2.25cm、底径8.45cmを測る。底部切り離しは回転系切りで、その後板状圧痕を施す。XVII期～。

石製品

石鍋 (3) 滑石製石鍋の底部破片。外面に黒色の煤が付着している。

180SE005 青灰色粘質土出土遺物 (Fig. 110)

土師器

坏 a (4) 復元口径13.8cm、器高2.4cm、底径9.2cmを測る。底部切り離し技法は回転系切り。XVI～XVII期。

180SE005 出土木製品 (Fig. 111・112)

木製品



Fig. 110 180SE005 出土遺物実測図 (1/3)

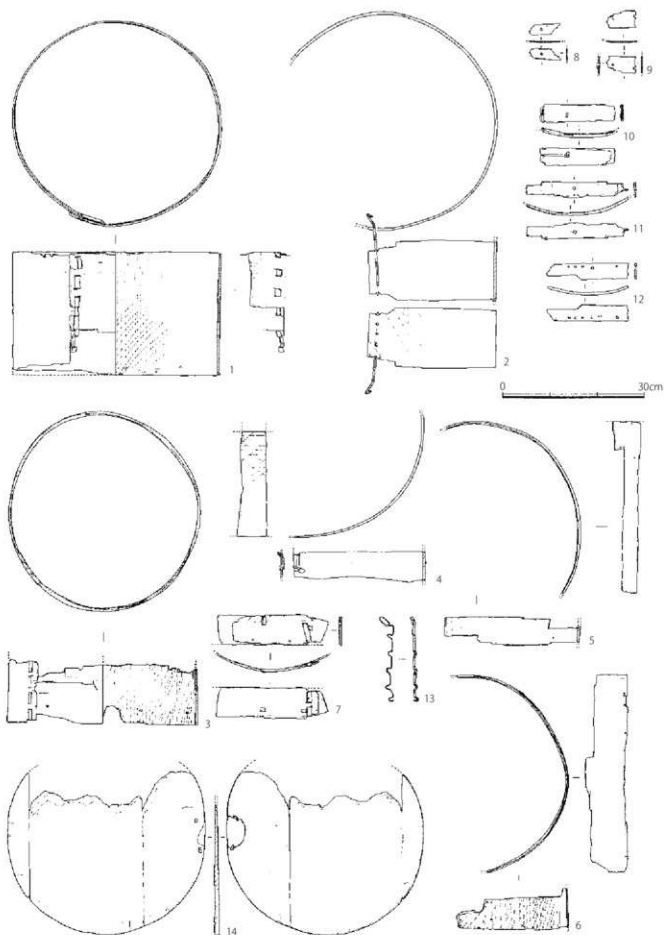


Fig. 111 180SE005 出土遺物実測図① (1/8)

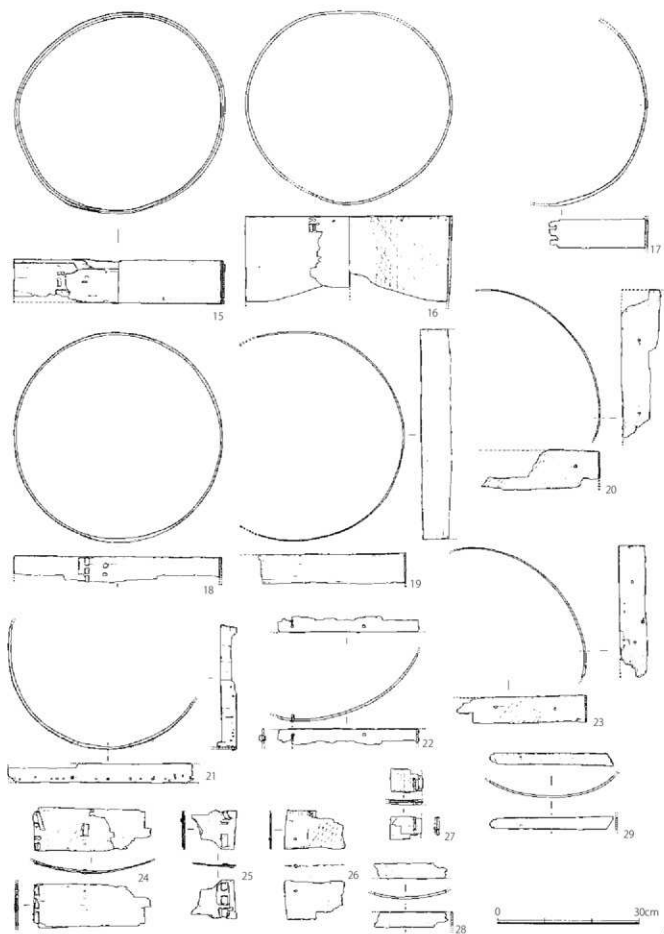


Fig. 112 180SE005 出土遺物実測図② (1/8)

曲物(1~29) 井戸枠に転用されていた曲物。曲物は検出時点では2段組みであった。しかし現場から取り上げ後はバラバラになってしまったため、できる限り破片まで固化を試みている。

1が形状を一番保っているもので、出土状況で確認された上下に設置されていた曲物の下部のものにあたる。口径44.0cm、高さ26.0cm、厚み0.4cmを測る。薄い板に細かい溝を入れ曲げて円形に成形しており、部分的に重ねた板に穴を開けて木の皮で綴っている。2は1/2以上残存している。綴じため穴と皮が一部残存している。3は口径40.2cm、高さ13.2cm、厚み0.6cmを測る。綴じ合わせ部位も残存している。この個体には直径3mm程度の穴が7カ所ほぼ等間隔に穿たれている。これは本来、曲物の底板を固定するための木釘が打たれていたものと考えられる。4は破片。残存率は1/4程度。木皮で綴じた一部が残っている。5は高さ5.9cm。残存率は1/3程度。6は高さ8.9cm。残存率は1/2程度。7は曲物の重ねた部分。木皮で2カ所に渡って綴じている。8~12はそれぞれ曲物の破片。13は曲物を綴るための木皮。14は底板。口径41.4cm、厚み0.6~1.05cmを測る。板に直交して3カ所、底板固定用の釘穴が穿たれている。注目されるのは、一部補修をした跡があり、表側から別の板をあてがい、穴が空いた場所を塞いで2カ所に穴を開けて、木皮で綴って固定した部位がある。15は3と同じく木釘用の穴が穿たれている。3カ所。内面には縦方向の薄い溝を入れている。口径は44.4cm、高さは9.1cm。16は復元口径43.7cm、高さ18.0cm。17は破片。残存率は1/3程度。18は口径44.0cm、高さ4cm。重なった部位に木皮の綴った部分が残っている。19は破片。残存率2/3。20は破片。残存率1/4。21は破片。残存率は1/2程度。直径2~3mmの木釘穴が多く確認できる。底板と接合していたものか。22は破片。残存率1/4。23は破片。残存率1/4。24は破片。板を重ねて綴じている部位。縦方向に2カ所、木皮で固定している箇所が確認できる。25~29は小破片。木皮での綴じている部位が確認できる個体が多い。

以上、出土した曲物を観察してきたが、底板の固定箇所がある個体が2つあるため、確実に曲物2個体は井戸枠に転用していた可能性が考えられる。

180SE075 出土遺物 (Fig. 113)

土師器

小皿 a(1) 口縁部破片。器高1.5cm。

丸底杯 (2、3) 2は口縁部から体部の破片。器高4.5cm、3は復元口径15.6cm、残存高3.1cm。

180SE075 灰黒色粘土出土遺物 (Fig. 113)

土師器

小皿 a (4) 復元口径9.2cm、器高1.4cm、復元底径6.9cmを測る。底部切り離し技法は、回転ヘラ切り。

XIII期。

土坑

180SK035 出土遺物 (Fig. 114)

須恵器

蓋 3 (1) 口縁端部破片。復元口径13.0cm、残存高0.9cm。還元・焼成共に良好。

杯 (2) 口縁端部破片。口縁端部はやや外反している。

土師器

杯 (3) 口縁部破片。色調は淡橙白色~橙茶色。

180SK045 茶灰色粘質土出土遺物 (Fig. 114)

土製品

輪羽口 (4) 羽口の破片。色調は暗灰色~暗茶灰色~茶褐色。

180SK045 灰色粘質土出土遺物 (Fig. 114)

土師器

小皿 a (5) 口縁部～底部の破片。器高 1.1cm。底部切り離しは回転糸切り。色調は明茶褐色。

180SK055 暗灰色粘質土出土遺物 (Fig. 115)

古式土師器

高坏 (1, 2) 1 は坏部破片。内外面に刷毛目調整。2 は脚部破片。内面は刷毛目調整。外面は摩滅で調整不明。

甕 (3) 口縁部破片。くの字形の口縁部か。外面は横ナデ調整。

壺 (4) 頸部破片。頸部屈曲部に突帯を貼り付けている。内面は刷毛目調整。色調は淡灰褐色。

支脚 (5～7) 残存高は 5.5cm。内外面は刷毛目調整。色調は淡灰褐色～淡褐灰色。6 は底部破片。調整は摩耗にて不明。色調は淡黄褐色。7 は脚部破片。外面は刷毛目調整。

木製品

杓子 (8) 縦 48.5cm、幅 12.3cm、厚さ 0.6cm を測る。出土時点で木質の残りが悪く取り上げ時に作図と写真撮影をした。分断されているが、柄と丸みを帯びた柄杓の頭の部分と推測した。

180SK070 灰色粘質土出土遺物 (Fig. 114)

土師器

坏 (6, 7) 共に口縁部破片。

坏 a (8～11) 口径 12.4～12.8、器高 2.2～2.7cm、底径 7.5～10.0cm を測る。すべて底部切り離し技法は回転糸切り。9 を除いて切り離し後に板状圧痕がつく。XVII 期か。

須恵質土器

鉢 (12) 口縁部、片口部の破片。東播系か。

180SK070 暗茶色土出土遺物 (Fig. 114)

土師器

坏 a (13～16) 口径は 12.3～13.3cm、器高 2.5～2.7cm、底径 7.5～8.9cm を測る。底部切り離し技法はすべて回転糸切りの後に板状圧痕を施す。XVII～XVIII 期。

瓦質土器

鉢 (17) 口縁部破片。内外面の横ナデ調整。全体の色調は淡灰色だが、口縁部周りは帯状に黒灰色へ変化している。

須恵質土器

こね鉢 (18) 底部のみ。外面下部に指頭圧痕あり。底部内面は摩耗する。還元焼成共に良好。

中国陶器

鉢 (19) IV-I 類。口縁内面に目跡あり。

石製品

石鍋 (20) 滑石製石鍋の底部。色調は淡黒灰色。

180SK070 灰茶色粘質土出土遺物 (Fig. 114)

瓦類

埴 (21) 縦 29.2cm、横 30.0cm、厚さ 14.8cm。完形ではなく欠損している。色調は上面が黄白色。



Fig. 113 180SE075 出土遺物
実測図 (1/8)

側面は黄白色で一部淡赤色。断面は暗灰色で一部橙茶色。胎土は4mm以下の白色砂粒を大量に含む。焼成は良好。

木製品

木杭 (22~24) 一木の細い木の先端を削って細く成形しており、杭として使ったと考えられる。

180SK080 出土遺物

(Fig. 115)

須恵器

鉢 (9) 口縁部の破片。玉縁状。

土師器

坏 (10) 口縁部破片。調整は摩滅して不明。色調は淡褐黄色。

石製品

石鍋 (11) 縦6.5cm、横7.7cm、厚さ1.7cmを測る。滑石製石鍋の再加工品か。

180SK095 出土遺物

(Fig. 114)

土師器

坏 (25) 口縁部破片。色調は内面が淡褐灰色。外面がやや暗い褐灰色。

その他の遺構

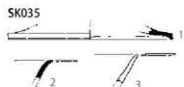
180SX001 出土遺物

(Fig. 116)

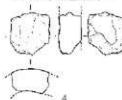
瓦質土器

火鉢 (1) 口縁部破片。外面に菱形のスタンプを押している。色調は淡褐灰色~暗灰色。

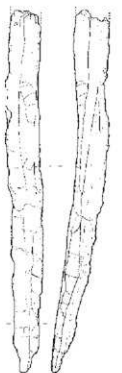
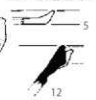
金属製品



SK045 茶灰色粘質土



SK045 灰色粘質土



SK070 暗茶色土



SK070 灰茶色粘質土



SK070 暗茶色土



SK070 暗茶色土



SK070 暗茶色土

SK070 灰色粘質土

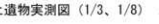
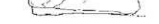
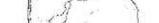
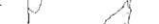


Fig. 114 180SK035・045・070・095 出土遺物実測図 (1/3、1/8)

鉦 滓 (2) 縦
3.85cm、横 4.2cm、
厚さ 2.8cm、色調は
黒色～暗灰茶色。

180SX013 出土遺
物 (Fig. 116)

石製品
叩き石 (3) 縦
8.4cm、横 8.8cm、
厚さ 2.55cm。扁平
な形状で、完形では
なく割れている。図
上で下の部位に細か
い打痕を確認でき
る。石材は緑色片岩。

180SX023 出土遺
物 (Fig. 116)

朝鮮系無軸陶器
壺 × 甕 (4) 底
部から体部の破片。
内面は回転ナデ調
整。外面調整は底部
際が回転ヘラ削り、
それ以外は叩き調整
の後にナデ調整。色
調は内外面ともに暗
灰色。胎土の色調は
暗茶色で、精良。焼成は良好。

180SX025 出土遺物 (Fig. 116)

須恵器

蓋 c (5) つまみ部破片。やや潰れた擬宝珠形。残存高 1.5cm。

土師器

把手 (6) 把手部破片。色調は明赤茶色。鉢か甕に使われたものか。

180SX028 出土遺物 (Fig. 116)

土師器

小皿 a (7) 復元口径 8.6cm、器高 0.9cm、復元底径 6.7cm を測る。底部切り離し技法は不明、板状
圧痕あり。

石製品

磨り石 (8) 縦 4.5cm、横 3.6cm、厚さ 3.6cm。色調は明灰色。全体に敲打痕あり。

土製品

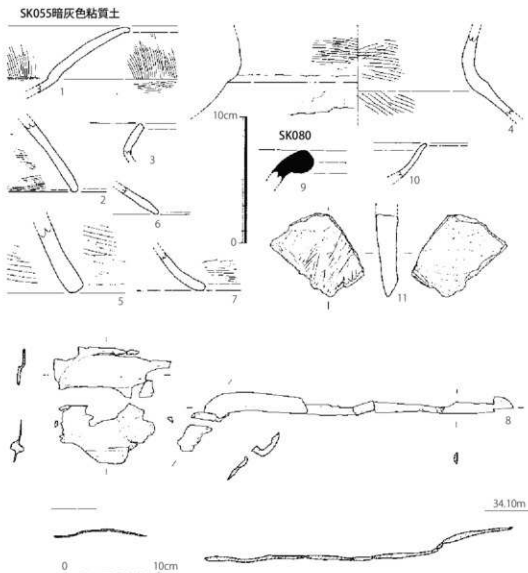


Fig. 115 180SX055・080 出土遺物実測図 (1/3、1/4)

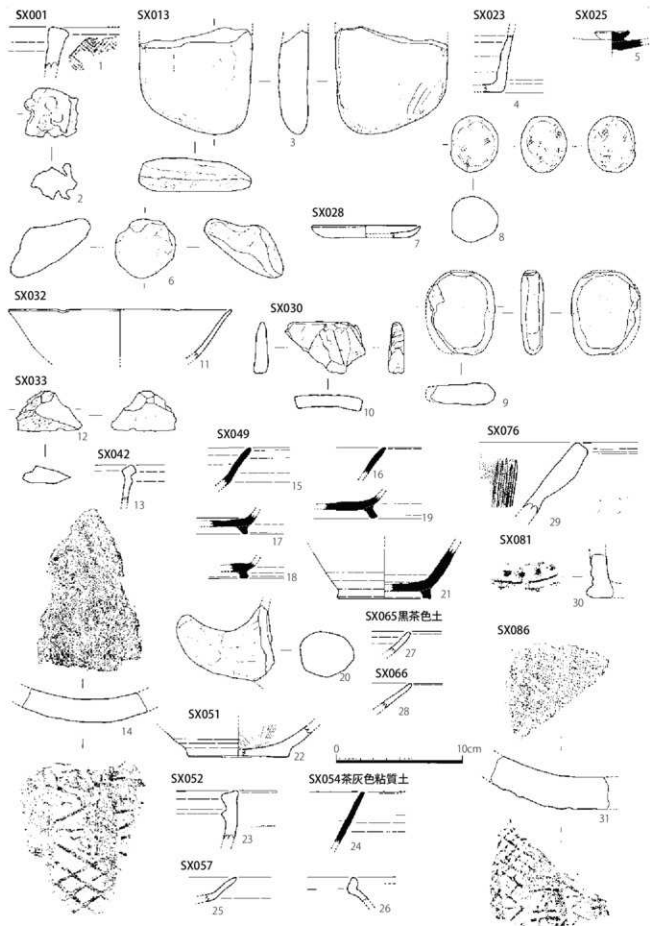


Fig. 116 第 180 次調査その他の遺構出土遺物実測図 (1/3)

不明製品 (9) 縦6.6cm、横5.5cm、厚さ1.8cm、重さ73.1g。全体をナデ調整で仕上げている。隅丸方形を呈する。色調は黒灰色。胎土は3mm以下の白色砂粒を多く含む。焼成は良好。

180SX030 出土遺物 (Fig. 116)

石製品

石鍋 (10) 滑石製石鍋再利用品。色調は灰青色。鍋の外面部に煤が付着している。

180SX032 出土遺物 (Fig. 116)

越州窯系青磁

碗 (11) 復元口径17.6cm、残存器高3.8cm。口縁部へ体部の破片。口縁端部に輪花あり。釉がほとんど剥離している。I-2b類。

180SX033 出土遺物 (Fig. 116)

石製品

剥片 (12) 安山岩製。打点は上部にあり、原石面を残す。

180SX042 出土遺物 (Fig. 116)

中国陶器

鉢 (13) 口縁部破片。全面に施釉。釉調は淡黄褐色の薄い釉である。

瓦類

平瓦 (14) 凹面に布目痕、凸面に格子目叩き調整。文字瓦IV-b類。「安楽之寺」

180SX049 出土遺物 (Fig. 116)

須恵器

坏 (15、16) 共に口縁部破片。

坏c×碗c (17～19) 高台破片。17の高台は方形のものがやや潰れた形状。18はやや高台が外に向かって張っている。19は外側に向かって張る形状。

壺 (21) 底部から体部への破片。残存高3.9cm、復元底径7.4cm。貼り付け高台。外面は回転ヘラ削り調整。内面は回転ナデ調整。

土師器

把手 (20) 焼成は不良。色調は淡橙褐色。甕や甔等の把手か。

180SX051 出土遺物 (Fig. 116)

中国陶器

鉢 (22) 底部破片。外底面はベタ高台のようで回転ナデ調整を施している。外部立ち上がりはヘラ削り調整。内面は縦方向の摺目が入る。I-2a類。

180SX052 出土遺物 (Fig. 116)

中国陶器

鉢 (23) 口縁部破片。鉢I-2a類。焼成はやや良好。

180SX054 茶灰色粘質土出土遺物 (Fig. 116)

須恵器

碗×坏 (24) 体部から口縁部への破片。還元・焼成共に良好。

180SX057 出土遺物 (Fig. 116)

土師器

小皿a (25) 残存高2.0cm。口縁部破片。器壁の調整は摩耗により不明。

中国陶器

壺 (26) 口縁部破片。軸調は淡褐灰色の薄い軸で発色不良。光沢もない。口縁部内面に淡褐色・灰色の付着物があり、目跡の可能性がある。四耳壺VI × VIIか。

180SX065 黒茶色土出土遺物 (Fig. 116)

土師器

坏 (27) 口縁部破片。残存高 1.5cm。色調は暗褐灰色～淡褐色。

180SX066 出土遺物 (Fig. 116)

土師器

坏 (28) 口縁部破片。色調は淡褐黄色。

180SX076 出土遺物 (Fig. 116)

土師質土器

播鉢 (29) 口縁部破片。内面は刷毛目調整後に縦方向の摺目が入っており、外面には指頭圧痕が確認できる。色調は淡黄褐色。

180SX081 出土遺物 (Fig. 116)

瓦類

軒丸瓦 (30) 瓦当部破片。珠文が 4 つ確認できる。

180SX086 出土遺物 (Fig. 116)

瓦類

平瓦 (31) 破片。凹面布目痕、凸面は格子瓦叩き。文字瓦。I-7a「平井」。

土層

茶色土出土遺物 (Fig. 117)

須恵器

蓋 1 (1) 内面に返りを持つ。返りは口縁端部と平行。天井部はヘラ削り。

蓋 (2) 底部の破片。残存高 3.7cm、復元底径 9.6cm。外底部は叩き調整の後ナデ調整。

転用硯 (3) 甕を転用した硯。元の内面を硯として使用しており、使用部位は平滑となる。

土師器

椀 c (4) 底部破片。貼り付け高台。高台は外側に向かって強く張る。残存高 3.3cm、復元底径 8.0cm。

甕 (5) 口縁部破片。内面は刷毛目調整。

黒色土器

椀 c (6、7) 底部破片。貼り付け高台。高台断面形がやや丸みを帯びる三角形を呈す。A 類。

国産陶器

播鉢 (8) 口縁部の破片。全面施軸。内面に縦方向の摺目。

水注 × 壺 (9) 底部破片。高台は基筈底形。内外面に施軸する。ただし、内面は意図的な施軸ではなく、軸垂れと考える。

白磁

椀 (10) VI × VII類。墨書土器。高台内に現状では一文字確認できる。

瓦類

埴 (11) 小破片。焼成不良。外面に強い指頭圧痕がつく。肩部は原型をとどめているが後の部位は、割れていて元の大きさは不明。

石製品

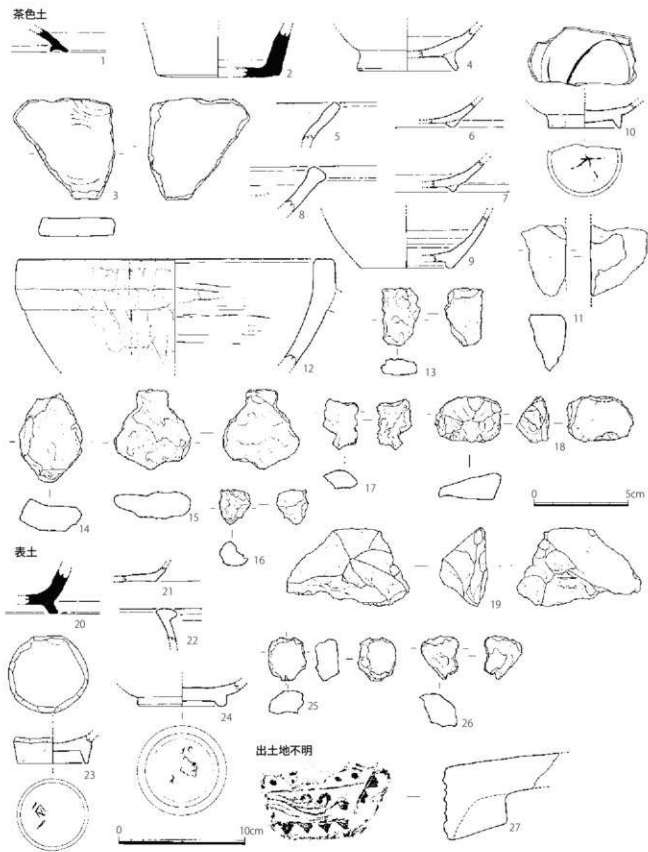


Fig. 117 第 180 次調査茶色土・表土ほか出土遺物実測図 (1/3、石製品は 1/2)

石鍋 (12) 復元口径 25.0cm、残存高 8.35cm。突帯は削られて剥離している。

剥片 (18、19) 18 は黒曜石。19 は安山岩製。

金属製品

鉾滓 (13～17) 17 は丸みがあり炉内部に溜まっていた鉾滓である可能性がある。

表土出土遺物 (Fig. 117)

須恵器

壺 (20) 高台部破片。高台はしっかり外に向かって張るタイプ。

土師器

小皿 a (21) 底部切り離し技法は糸切り。

中国陶器

壺 (22) 口縁部破片。全面施軸。

白磁

椀 (23、24) 23 は V 類。高台に墨書あり。一文字「口」。内面見込み部に打ち欠き加工痕跡があるため、メノコとして利用されていた可能性が高い。24 は IV 類。削り出し高台。底部外面が露胎。高台内に墨痕のようなものが確認できる。

金属製品

鉾滓 (25、26) 25 の一部にメタルが残存していた。

出土地不明

瓦類

軒平瓦 (27) 瓦当面。老司式。

(5) 小結

今回の調査地は、井上信正氏の条坊プランでは左郭 11 条 6 坊にあたる。6 坊路に関しては調査区内の 180SD040 が相当すると考えているが調査時点では問題意識が足りず、道路遺構として検証するような調査を行えなかったことを担当者として反省したい。関連した遺構として、大宰府条坊跡第 88 次調査（未報告）の調査区南西隅で検出された 88SD562 などの溝群が 6 坊路として機能していた可能性がある。また 11 条路については調査区内では検出ができていない。

180SD020 については湧水対策の水路であった可能性も考えられる。その理由として古墳時代前期のいわゆるドングリビット (180SK055) の存在があげられよう。湿潤な地でないとこれらの遺構は意味をなさない。その後も 180SE075 のような井戸も作られていることから水に関係する遺構が調査区の東半分には集中している。

出土遺物の多くは中世前期のものだが、調査区の中央から北側の遺構には奈良時代の遺物を主に含むたまり状の遺構が多いことを留意しておきたい。



Fig. 118 第 180 次調査遺構略測図 (1/200)

表 25 第 180 次調査 条坊関連遺構座標値

遺構番号	位置	遺構任意中点座標		政庁跡南門中点からの距離		方位
		X座標	Y座標	X方向 (m)	Y方向 (m)	
180SD010	南P	56,056.270	-44,298.850	-652.410	521.880	N-10° 34' 51.16" -W
	北P	56,064.300	-44,300.350	-644.380	520.380	
180SD040	南P	56,051.000	-44,292.800	-644.630	527.930	N-4° 22' 54.9" -W
	北P	56,064.050	-44,293.800	-644.630	526.930	
180SD085	南P	56,044.000	-44,294.500	-664.680	526.230	S-1° 35' 28.1" -W
	北P	56,047.600	-44,294.400	-661.080	526.330	
180SD090	南P	56,044.300	-44,300.000	-664.380	520.730	N-1° 27' 0.78" -E
	北P	56,048.250	-44,299.900	-660.430	520.830	

表26 第180次調査 遺構一覧表

5-番号	遺構番号	種別	備考	埋土状況(古→新)	遺構明細(古→新)	時期	地区番号
1	180S3001	たまり状遺構		茶灰色土	6-1	中世前期	E11
2		小穴群		茶灰色土			E・F11
3		小穴		茶灰色土			E10
4		土塊		茶灰色土			F11
5	180S3005	井戸		茶褐色土→茶褐色粘質土→黄灰色粘質土→暗青灰色粘質土		X層	E10
6		溝		黄灰色砂質土			F11
7		小穴		灰白色砂	7-10		F11
8		小穴		灰白色砂	10-8		G10
9		溝		灰白色粘質土	9+10-1		F11
10	180S3010	南北溝		暗茶灰色土	10-1	～12世紀前半	E10～19
11		溝(溝群)		灰白色砂	11-19		E11
12		土塊		灰白色粘質土			G11
13	180S3013	小穴		灰白色砂		中世～	D6
14		溝		暗褐色砂	30-14		D6
15		溝(溝群)		暗褐色粘質土	10-15+8		F11～H11
16		たまり状		灰白色粘質土	16-13		F7
17		たまり状		黄褐色礫混じり土	17-16		F7・G7
18		小穴群		茶灰色土	19-15		E6
19		たまり状		茶褐色土	30-19		E6
20	180S3020	成坑		茶褐色土	20-47	～12世紀前半	G4～K8
21		たまり状		黄褐色礫混じり土	30-21		E6
22		小穴		黄褐色土	22-19		G7
23	180S3023	たまり状		灰白色砂	23-28	13世紀～	F7～F8
24		小穴		灰白色砂	24-22		E6
25	180S3025	たまり状		黄褐色礫混じり	25-23	奈良～	E・D7
26		小穴		茶褐色土	26-18		E6
27		溝		灰白色砂	23-27		E7
28	180S3028	たまり状		黄褐色礫混じり	28-29	中世～	E8
29		溝?		灰白色粘質土	28-29		E7
30	180S3030	たまり状		黄褐色礫	30-16	13世紀～	D6～F6
31		溝		灰白色粘質土	31-40		F9
32	180S3032	小穴		灰白色砂	32-40	9世紀～	F9
33	180S3033	小穴		灰白色砂	33-40		F8
34	180S3034	小穴群		明茶灰色土			G8
35		土塊		茶灰色土	35-45	奈良～平安	G2
36		土塊	S-36とS-3911同一	茶灰色粘質土	36-23+38		G7
37		たまり状		茶黄色粘質土			G7
38		小穴		灰白色土			G7
39		たまり状		灰白色粘質土→灰白色砂			G7
40	180S3040	溝		灰白色砂→茶灰色砂→灰褐色土		12～13世紀	E8～F9
41		溝		茶灰色粘質土	41-38		G7
42	180S3042	たまり状		茶灰色粘質土		13世紀～	F6
43		小穴群		黄褐色砂	43-43		F6
44		たまり状	S-23と同一か?	黄褐色粘質土	46-46		F7
45	180S3045	土塊		茶灰色粘質土	35-45	12世紀～	G2
46		小穴		灰白色土	46-44		F7
47		小穴群		茶褐色土	20-47		F2
48		溝	S-23の埋積層か?	茶褐色土	23-48+43		F6
49	180S3049	小穴群		灰白色土		奈良前半～	F6
51	180S3051	たまり状		茶灰色土	52-41	中世～	G4
52	180S3052	たまり状		明茶灰色土	52-51	中世～	G4
53		たまり状		明灰色砂	52-53+51		G4
54	180S3054	たまり状遺構群		茶灰色土		奈良～	G6
55	180S3055	埋藏穴(1)		明灰色粘質土		古墳前期	H6
56		たまり状		茶褐色土	56-34		H6
57		土塊群		茶褐色土		中世～	H7
58		土塊		茶灰色土			H9
59		小穴群		暗茶灰色粘質土	59-49		H9
60	180S3060	板列	S3020に伴う護岸用の板列か。			中世	H4～F3
61		小穴群		茶褐色粘質土			H10～11
62		たまり状		暗灰色粘質土			E10
63		小穴群		茶灰色土	66-63		F3
64		部片		茶褐色土(茶色土ブロック入)			F3
65	180S3065	部片		褐色土→茶褐色土→灰白色粘質土→茶灰色土		中世～	F3
66		部片		各種ブロック混入明茶褐色土	66-75	中世～	K3
67		小穴群		茶褐色土			L4
68		たまり状	包含層の取り残し	茶褐色土			K11
69	180S3069	小穴群		茶褐色土			K8
70		土塊		灰茶褐色粘質土→明茶褐色土→灰白色粘質土		X層	F3
71		部片					K7
72		小穴群					L7
73		小穴					L7
74		小穴群		茶褐色土			L3
75	180S3075	井戸		茶褐色土			K4
76		たまり状		茶灰色土		中世～	L3
77		小穴		茶灰色土			L3
78		小穴		茶灰色土	81-77		L3
79		小穴		茶褐色粘質土			L3
80		土塊		茶褐色土		13世紀～	K10
81	180S3081	小穴		茶褐色土		奈良～	L3
82		小穴		茶灰色土			K6
83		小穴		茶灰色土			F7
84	180S3084	小穴群		茶灰色土			F8
85		溝		茶褐色土		～中世	K9
86	180S3086	小穴群				10世紀～	F8
87		部片		茶褐色土			J10
88		溝					
89		溝		茶褐色土		～中世	11ライン
91							
92							
93							
94							
95		土塊				12世紀～	L3
96							
97							
98							
99							
100		土塊					M5

表 27 第180次調査 出土遺物一覧表

5-1	銅 器 銅環c、鏃、鏃 土 師 銅片、銅片 瓦 質 土 銅片跡 瓦 銅丸瓦 金 属 製 品 銅片	5-16	銅 器 銅環c、鏃b、鏃e 土 師 銅片、銅片 瓦 銅平瓦(溝目)
5-2	土 師 銅破片	5-18	銅 器 銅鏃 土 師 銅鏃、銅片
5-3	銅 器 銅鏃3、破片 土 師 銅鏃 瓦 銅平瓦(溝目)	5-19	銅 器 銅環a、環c、高坪、鏃 土 師 銅破片 瓦 銅破片
5-4	土 師 銅供養具、破片	5-20	銅 器 銅鏃、破片 土 師 銅供養具 瓦 銅平瓦(格子、溝)
5-5	銅 器 銅鏃3、環c、鏃 土 師 銅環a(イト)、小皿a 中 国 陶 器 鏃、破片(1) 瓦 銅破片 木 製品 品不明 石 製 品 滑石製石鏃	5-20系赤色土	銅 器 銅鏃3、鏃c、環c、高坪、鏃、鏃b 土 師 銅環a、大柄c、鏃、把手、高坪、高溝具(角閃石、在埋)、供養具 瓦 銅破片 群馬県系青磁焼：I-II(1) 群馬県系青磁焼：I-II(1)、再利用品 阿波県系青磁焼：I-IIb(1) 白 磁 焼：I(1)、II(1)、IV(2) 中 国 陶 器 滑石製石(1) その他：破片(1) 銅 器 質(輸入)：(1) 瓦 銅平瓦(溝、格子) 土 製 品 銅口 石 製 品 石臼(高塚石、サヌカイト)、碁石 金 属 製 品 銅片 そ の 他 散骨
5-5青灰色粘土	銅 器 銅鏃3、鏃 土 師 銅環a(イト) 瓦 質 土 銅鏃?	5-20系灰色土	銅 器 銅鏃3、鏃c、環c、高坪、鏃、鏃b、鏃 土 師 銅丸鏃a、小皿a、把手 白 磁 焼：I(1)、IV(2)、V-4(1) 瓦 銅平瓦(溝、格子) 石 製 品 石臼(サヌカイト、滑石、チャート、黒曜石)、不明品 供 生 土 銅大鏃 木 製 品 杖 金 属 製 品 銅片
5-5緑黄色粘土	銅 器 銅鏃3 土 師 銅環a、環c(イト)、供養具、高溝具	5-20系灰色土	銅 器 銅環1、鏃3、鏃c、環c、鏃、鏃e 土 師 銅石、小皿a、鏃、鏃、把手、供養具 金 属 質 土 銅こぶ跡 白 磁 焼：IV(2)、V4(1)、VII(2) 其 他(1)、未分類(1) 遺物他：破片(5) 中 国 陶 器 銅破片(1) 銅片(1) 瓦 銅丸瓦、破片(格子、溝) 金 属 製 品 ピン、銅片 石 製 品 石鏃(滑石)、磁石、破片(サヌカイト) そ の 他 散骨
5-5緑黄色粘土	銅 器 銅鏃3 土 師 銅環a、環c(イト)、供養具、高溝具	5-20系灰色砂	銅 器 銅鏃、鏃 黒 色 土 器 A 銅破片 瓦 銅破片(溝)
5-6	銅 器 銅供養具 土 師 銅高溝具	5-20系灰色粘質土	銅 器 銅環c、鏃、鏃c 土 師 銅器残片 白 磁 焼：IV(4)、V(溝目) 瓦 銅丸瓦 金 属 製 品 銅片
5-7	瓦 銅破片 金 属 製 品 銅片	5-20系褐色砂	銅 器 銅環1、鏃3、鏃c、環c、鏃、鏃e 土 師 銅環c、鏃、鏃c、環c、鏃、鏃e 黒 色 土 器 B 銅破片 高 属 青 磁 焼：I(1) 白 磁 焼：IV(2) 瓦 銅平瓦(溝) 金 属 製 品 銅片 石 製 品 石鏃(滑石)、磁石(灰鉛)、サヌカイト そ の 他 散骨
5-8	銅 器 銅環×皿 土 師 銅供養具(破片) 群馬県系青磁焼：II-b(1)	5-21	銅 器 銅鏃 土 師 銅破片 黒 色 土 器 A 銅破片
5-9	銅 器 銅鏃 土 師 銅環a(イト) 金 属 製 品 銅片	5-22	銅 器 銅破片 土 師 銅破片
5-10	銅 器 銅環c、鏃、鏃、鏃(鏃) 土 師 銅環c、小皿a、鏃、供養具、高溝具 群馬県系青磁焼：I(2)、I-2(1)、I-4(1)、II(1) 他：銅鏃；破片(2) 阿波県系青磁焼：破片(1) 高 属 青 磁 焼：銅(1) 銅 器 質 土 銅こぶ跡 瓦 質 土 銅片跡 白 磁 焼：IV(2)、VII(1)、破片(2) 其 他：IX-1(2) 遺物他：取耳遺物(1) 銅 器 銅 銅片a 青 磁 未 分 類 燻 中 国 陶 器 その他：鏃(1) 瓦 銅平瓦(格子)、破片(溝、格子目)、瓦瓦 金 属 製 品 銅鏃、釘、銅片 石 製 品 滑石製石鏃(再利用品)	5-23(包含層)	銅 器 銅環a、環c、鏃、鏃(円面残) 土 師 銅環c、鏃 群馬県系青磁焼：I-2(2) 銅 器 質(輸入)：I(溝×鏃) 瓦 銅平瓦(格子、溝目)、大瓦(格子) 金 属 製 品 銅片 土 の 他 散骨
5-10暗灰色粘質土	金 属 製 品 銅金具、銅片	5-24	銅 器 銅鏃3、環c、鏃 土 師 銅供養具 瓦 銅破片(溝目)
5-11	銅 器 銅環c、鏃、鏃 土 師 銅供養具 群馬県系青磁焼その他：鏃(1)、特異(1)、破片(1) 阿波県系青磁焼その他：破片(1) 金 属 製 品 鉄釘、銅片		
5-12	銅 器 銅環c		
5-13	銅 器 銅鏃3、環c、鏃、鏃 土 師 銅供養具 白 磁 器 器他：破片(1) 瓦 銅破片 金 属 製 品 銅片 石 製 品 叩き石?		
5-14	銅 器 銅環c、鏃		
5-15	銅 器 銅鏃3、鏃 土 師 銅破片 金 属 製 品 銅片		

5-25
眞 惠 器蓋、杯、壺、甕
土 師 器片、灰坪、灰土
瓦 壺破片(横目)、丸瓦(横目)
金 属 製 品総称
5-26
眞 惠 器片c、壺
土 師 器破片
5-27
眞 惠 器像、供養具
土 師 器破片
青 銅 末 分 類破片
瓦 壺破片
5-28
眞 惠 器片c
土 師 器片a
青 銅 末 分 類破片
瓦 壺 朝平瓦(格子、横目)、瓦(西利用品)
石 製 品磨り石
土 製 品不判製品
5-29
眞 惠 器像、供養具
土 師 器片
石 製 品破片(サヌカイト)
5-30
眞 惠 器片c、壺
土 師 器片c、壺、灰、把手
縄 文 器 系 青 銅 鏡 I (1)
中 国 陶 器 器破片(1)
瓦 壺 朝平瓦(横目)、格子
石 製 品滑石製石
5-31
眞 惠 器像
土 師 器片
瓦 壺 朝平瓦(横目、格子)
5-32
縄 文 器 系 青 銅 鏡 I-2a(1)
瓦 壺破片
5-33
石 製 品破片(サヌカイト)
5-34
眞 惠 器蓋、杯c、壺、供養具
土 師 器片
瓦 壺丸瓦
金 属 製 品総称
5-35
眞 惠 器蓋、杯
土 師 器片、壺
5-36
眞 惠 器像、壺
土 師 器片c、壺、杯×皿a
瓦 壺 朝平瓦(格子)、丸瓦(破片)
5-37
眞 惠 器片c、壺、鉢
土 師 器片c
瓦 壺 朝平瓦(横目)
5-38
土 師 器像
5-39
眞 惠 器像、杯c
土 師 器像
瓦 壺破片
5-40灰色土
眞 惠 器蓋、壺c、杯a、杯c、小皿a、壺、壺、壺b、壺c、鉢(横)
土 師 器片a、丸瓦片、杯c、小皿a、高坪、壺、把手
灰色土 器 s
瓦 壺
瓦 壺
縄 文 器 系 青 銅 鏡 I (5)、I-1a(5)、I-2a(1)、I-4(1)、II-5(7)、破片(4)
縄 文 器 系 青 銅 鏡 II (1) その他:破片(1)
河 原 器 系 青 銅 鏡 I-1b(1)
眞 惠 質 土 器 壺、壺、こお鉢
眞 惠 質 土 器 千子鉢
白 磁 壺 I (1)、IV (1)、壺 7 (1)、壺 2 次 (1) 壺類破片(4)
中 国 陶 器 壺 I (1)、水注×壺 (1)、破片(2)
瓦 壺 鉢 I-1b(1) その他:壺(1)
瓦 壺 朝平瓦(横目、格子)、丸瓦(横目)、朝平瓦
金 属 製 品総称
石 製 品:滑石製石、破片(黒曜石)、磁石(磁石)
土 製 品:輪郭口、棒状土製品、焼石、不明品
5-40系灰色砂
眞 惠 器片c、高坪、壺、壺
土 師 器片c、壺、煮沸具
縄 文 器 系 青 銅 鏡 I (1)、I-4a(1)、II-5(5)、IV (2)、破片(5)
縄 文 器 系 青 銅 鏡 II (1)、I-2(1)
白 磁 壺 I (1)、壺(1) 壺 I 次(1) その他:破片(2)
中 国 陶 器 その他:鉢(1)
赤 生 土 器 壺
瓦 壺 朝平瓦(格子、横目)、丸瓦、朝平瓦、破片(格子、横目)

5-40灰色砂
眞 惠 器蓋、杯c、杯a、高坪、壺、壺
土 師 器像
灰色土 器 a 壺 杯(1)
瓦 壺
長 沙 器 系 青 銅 水注(1)
縄 文 器 系 青 銅 鏡 I (5)、I-2(5)、II-5(5)
縄 文 器 系 青 銅 鏡 II その他:破片(3)(1)、破片(1)
眞 惠 質 土 器 こお鉢
眞 惠 質 土 器 こお鉢
鉢 無 陶 器 a(中国)
白 磁 壺 IV (1)、VI×壺(1)、壺(2) 壺:破片(1)
中 国 陶 器 壺:壺(1)
瓦 壺 朝平瓦(横目a、格子)、丸瓦
金 属 製 品:鉄筒(不明)、鉄浮
石 製 品:石籠(滑石)
5-41
眞 惠 器蓋、壺
土 師 器像、壺
灰色土 器 s 壺破片
白 磁 破片 (1)
瓦 壺破片
5-42
眞 惠 器蓋、杯c、壺
縄 文 器 系 青 銅 鏡 II-2a(2)、I (2)、I-4 (1)
白 磁 壺:V-1×壺(1)
中 国 陶 器 その他:鉢 I-2(1)
瓦 壺 朝平瓦(格子、文字「安徳之寺」)
5-43
眞 惠 器像、供養具
土 師 器片
瓦 壺破片
5-44
眞 惠 器蓋、杯c、壺、壺
土 師 器片
瓦 壺 朝平瓦(横目)
金 属 製 品総称
5-45茶灰色粘質土
眞 惠 器像
土 師 器片
瓦 壺 朝平瓦(横目)
土 製 品:輪郭口
5-45灰色粘質土
土 師 朝小皿a(1)
5-46
眞 惠 器像
土 師 器片
瓦 壺 朝平瓦(横目)
金 属 製 品:鉄筒
5-47
眞 惠 器蓋、杯c、杯a、壺
土 師 器片
瓦 壺破片
5-48
眞 惠 器像
土 師 器片
瓦 壺 朝平瓦(横目)
5-49
眞 惠 器片c×壺c、壺
土 師 器片c
瓦 壺破片
5-51
眞 惠 器片c、壺、壺
土 師 器片、壺(陶石)
中 国 陶 器 鉢:II-19 (1)
瓦 壺破片
5-52
眞 惠 器片c、壺、壺
土 師 器片
瓦 壺 朝平瓦(横目)
中 国 陶 器 鉢:II-2a(1)
5-53
眞 惠 器像
土 師 器片
瓦 壺破片
5-54茶灰色土
眞 惠 器蓋、杯×壺、壺
土 師 器片
瓦 壺 朝平瓦(横目)
5-54系灰色粘質土(下層)
眞 惠 器片
瓦 壺破片
5-55緑灰色粘質土
眞 惠 器像
古 式 土 師 器片c、壺、壺、支脚、大型壺
木 製 品:舟子
金 属 製 品:鉄筒

S-56	原 意 銅蓋c、杯c、壺
土 師 銅丸瓦	
S-57	原 意 銅蓋c、杯c、壺
土 師 銅杯、小皿a	
中 国 陶 銅蓋;百耳蓋VI×VII(1)	
瓦 銅丸瓦	
S-58	原 意 銅破片
土 師 實土 銅鉢	
S-59	原 意 銅壺
土 師 銅杯	
黒色土 銅人頭腕	
S-60	木 製 品杖
S-61	原 意 銅壺、供養具
土 師 銅破片	
瓦 銅破片	
金 属 製 品刀子	
S-62	原 意 銅杯、壺
土 師 銅書道具	
瓦 銅破片	
金 属 製 品漆埴	
S-63	原 意 銅杯c
土 師 銅破片	
黒色土 銅人頭破片	
S-64	原 意 銅壺
土 師 銅杯、鉢	
瓦 銅破片	
S-65茶色粘土	土 師 銅小皿a
S-66茶色土	土 師 銅供養具、書道具
中 国 陶 銅鉢;破片 他器種;壺類か(1)	
S-67茶色土	土 師 銅破片
黒色土 銅人頭破片	
S-68茶色粘土	原 意 銅壺
S-69黒茶色土	土 師 銅杯
S-66	原 意 銅蓋
土 師 銅杯、書道具	
瓦 銅破片	
S-67	原 意 銅供養具
土 師 銅供養具	
S-68(包含取り残し)	原 意 銅杯、高杯、壺
土 師 銅杯、書道具	
瓦 銅破片	
金 属 製 品漆埴	
S-69	原 意 銅杯c、壺
土 師 銅供養具	
黒色土 銅人頭腕	
金 属 製 品漆埴	
S-70茶色粘質土	原 意 銅壺
土 師 銅杯、銅c(イ下)、書道具	
原 意 實土 銅片口蓋(蓋部);破片(1)	
白 銅蓋;鉄;1a(1)	
瓦 銅破片	
S-70黒茶色土	原 意 銅蓋c、壺
土 師 銅杯a(イト)、鉢	
縄 文 土 師 銅蓋;I-2(1)、I(2)	
縄 文 土 師 銅蓋;銅片(1)	
原 意 實土 銅c;木柵	
瓦 實土 銅鉢	
中 国 陶 銅鉢;IV(1)	
瓦 銅破片(破片)	
石 製 品銅片(伊又カイト)、石鏡	
S-70茶色粘質土	原 意 銅壺
瓦 銅製 品杖	

S-70茶色粘質土	土 師 銅破片
瓦 銅壺、破片	
S-71	原 意 銅破片
土 師 銅破片	
瓦 銅平瓦(溝)、破片	
S-72	瓦 銅破片
S-73	金 属 製 品漆埴
S-74	土 師 銅杯、小皿a、書道具
S-75	原 意 銅壺
土 師 銅丸蓋杯a(へ下)、小皿	
瓦 銅破片	
S-75茶色粘土	原 意 銅壺、杯c
土 師 銅丸蓋杯、小皿a(へ下)、書道具	
石 製 品漆石	
S-75茶色粘質土	土 師 銅舞台
白 銅蓋部地;破片	
中 国 陶 銅その他;破片(1)	
S-76	土 師 實土 銅漆鉢
S-77	原 意 銅供養具
土 師 銅書道具	
瓦 銅破片	
金 属 製 品漆埴	
S-78	原 意 銅壺、供養具
土 師 銅供養具	
S-79	原 意 銅杯、供養具
土 師 銅供養具	
S-80	原 意 銅蓋3、杯c、壺、蓋
土 師 銅杯、供養具、書道具	
黒色土 銅b 銅壺	
縄 文 土 師 銅蓋×杯;IV(1)	
同 文 土 師 銅蓋部地;破片(1)	
同 文 土 師 銅蓋部地;破片(1)	
瓦 銅平瓦(1)	
金 属 製 品漆埴	
石 製 品漆石製石鏡	
S-81	原 意 銅壺
瓦 銅製平瓦	
金 属 製 品漆埴	
S-82	原 意 銅壺
土 師 銅破片	
S-83	土 師 銅輪蓋口
S-84	原 意 銅杯c
縄 文 土 師 銅蓋;IV(2) その他;破片(2)	
中 国 陶 銅その他;破片(1)	
金 属 製 品漆埴	
S-85	土 師 銅杯a、蓋
銅 銅壺	
瓦 實土 銅鉢	
中 国 陶 銅蓋;IV(1)、百耳蓋VI(1) その他;破片(3)	
金 属 製 品漆埴	
土 師 銅c;銅片、輪蓋口	
木 の 組敷骨	
S-86	原 意 銅壺、供養具
土 師 銅供養具	
国 産 陶 銅破片	
瓦 銅平瓦(橋子、文字「平井」)	
S-87	原 意 銅蓋、皿、壺
白 銅製;IV(1)	
瓦 銅破片	
金 属 製 品漆埴	

4、第 203 次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市朱雀 1 丁目 2692-1 で、観世音寺南方約 680m に位置し、旧字は平野である。

1998 (平成 10) 年 3 月 11 日、(株) ふじわらから土地利用計画に先立ち、埋蔵文化財の取り扱いについての問い合わせを受けた。1998 (平成 10) 年 7 月 14 日、RC 造の共同住宅の建設で計画することが決定され、1998 (平成 10) 年 7 月 16 日に確認調査を行い、遺構が確認された。隣接する 2693-3 等も建設用地に含まれていたが、この土地に関しては、1990 (平成 2) 年 11 月 21 日に確認調査を行ったが、攪乱のため遺構が確認できなかったため、今回の調査対象から除外された。発掘調査は開発者の費用負担により、1998 (平成 10) 年 9 月 16 日から 10 月 27 日にかけて実施した。開発対象面積は約 781 m²、調査対象面積 508.75 m²、調査面積 200 m²を測る。調査は宮崎亮一が担当した。

(2) 基本層位

この付近は江戸時代後半に描かれた『太宰府旧蹟全図北図』に見られる「ウナキナウテ」付近に位置し、五条在住の古老の話では、この付近に南側が 2m 程高い土手があって、そこを「ウナギドテ」と言っていたという。また、調査地の南側 2～300m 付近ではトノコを採取する丘があったというが、現在周辺一帯は土地の改変が著しいため、かつての面影は全く残っていない。

調査地は、住宅に囲まれた一画で、真砂土などで約 1.1m 前後盛土されている。盛土の下には旧耕作土が 0.2m 程残っている。昭和 23 年の空撮写真で確認する限り、昭和中期は畑として利用されていたようである。

(3) 検出遺構

溝

203SD001

南北にやや蛇行しながら続く溝で、埋土は黒灰色粘質土の単一層で、周囲の遺構と明らかに異なっている。今回の調査区の中で最も固い土質であった。途中で 2 本に枝分かれしているが、分岐部分に遺物が集中していたため切り合い等は確認できなかった。

土坑

203SK012 (Fig. 120)

隅丸方形の土坑で、東西 1.9m、南北 2.0m、深さ 0.5m を測る。埋土は少々砂質の暗灰色土で、層位は確認されなかった。土坑群の中では比較的浅いもので、底面は平坦でなく、やや凸凹である。

203SK017

円形に近い隅丸方形の土坑で、東西 2.05m、南北 2.05m、深さ 0.7m 以上を測る。不規則な堆積状況を示していたため、遺構検出時にひとつの土坑と確認しきれなかったが、その後の調査によって、その不規則な堆積は、この土坑の窪地に堆積した埋土であったことがわかった。未完掘。

203SK021 (Fig. 120)

南北に長い長方形プランの土坑で、東西 1.55m、南北 2.45m、深さ 0.9m を測る。墳墓のような形状であるが、底面から棺の痕跡は確認できず、堆積状況からも墳墓と感じさせる要素は見つからなかった。底面地山は青白色粘土である。埋土は周囲の土を掘り返したようなもので、自然堆積というより採掘直後に埋めたような印象を受ける。

203SK022 (Fig. 120)

東西 2.3m、南北 1.6m、深さ 0.7m を測る。形状は北側が方形で、南側は半円形を示している。

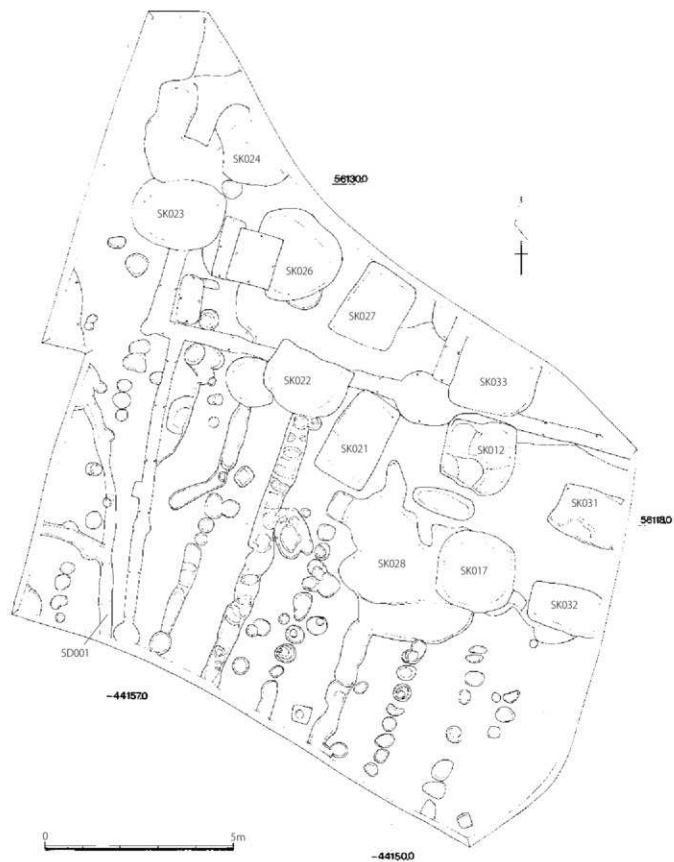


Fig. 119 第 203 次調査遺構全体図 (1/100)

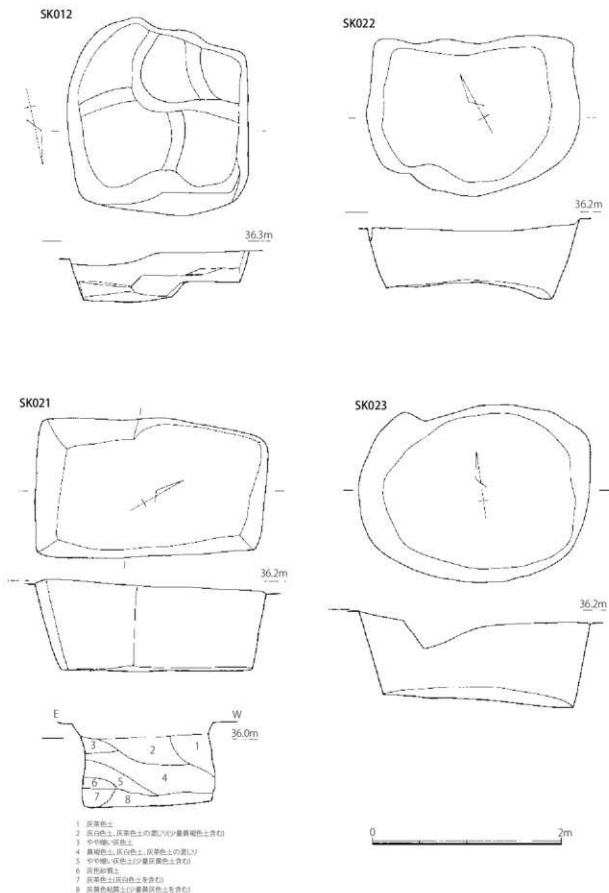


Fig. 120 203SK012・021・022・023 遺構実測図 (1/40)

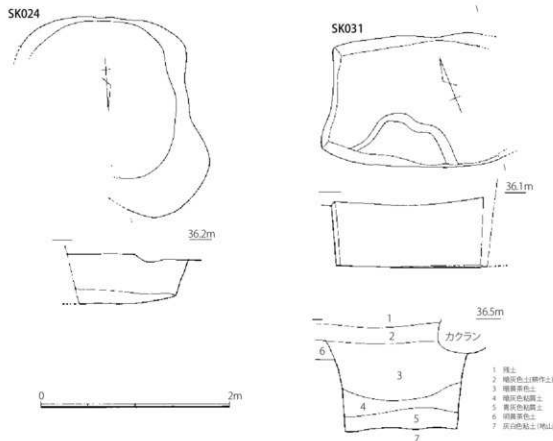


Fig. 121 203SK024・031 遺構実測図 (1/40)

SK012 に似た土坑で、埋土は暗灰色土で、底面はやや凸凹がある。

203SK023 (Fig. 120)

楕円形をした土坑で、東西 2.45m、南北 1.9m、深さ 1m を測る。埋土は上層が暗灰色土で遺物が少量出土する。その下の埋土は白灰色粘土、黄灰色粘土、青灰色粘土が交互に堆積している。これらの層からの出土遺物は極めて少ない。平面プランは井戸のような形状を示しているが、周囲の土質が粘土質であり、砂層などの湧水層が確認されないため井戸ではないと思われる。

203SK024 (Fig. 121)

略円形をした土坑で、東西 1.8m 以上、南北 2.1m、深さ 0.55m を測る。調査区際のため全体は不明。

203SK026

隅丸三角形をした土坑で、東西約 2.3m、南北 2.5m、深さ 0.6m 以上を測る。西側は攪乱によって破壊されている。未完掘。未掘の埋土は青灰色土である。

203SK027

方形プランの土坑で、東西 1.66m、南北 2.1m、深さ 0.4m 以上を測る。遺構検出段階では不規則なプランが重なり合っていたが、埋土の土質の違いであった。未完掘。

203SK031 (Fig. 121)

東西に長い長方形をした土坑で、東西 1.8m 以上、南北 1.4m、深さ 0.75m を測る。遺構の東側は調査区外に続いている。

203SK032

東西に長い長方形をした土坑で、東西 1.85m 以上、南北 1.25m、深さ 0.35m 以上を測る。遺構の東側

は調査区外に続いている。埋土は明灰茶色土で、他に比べきれいな水平堆積を示している。遺構の状況は SK031 に似ている。未完掘。

203SK033

方形プランをした土坑で、東西約 2.2m、南北 1.55m 以上、深さ 0.65m 以上を測る。未完掘。

(4) 出土遺物

溝

203SD001 出土遺物 (Fig. 122)

土師器

坏 (1) 復元口径 15.4cm、胎土は 0.1cm 以下の砂粒を多く含み、色調は赤茶色を呈する。磨滅が目立ち調整不明瞭。

鉢 (2) 復元口径 22.3cm、器高 13.0cm。胎土は 0.5cm 以下の白色砂粒を多く含み、赤色砂粒や灰色砂粒も少量含む。焼成は良好で、色調は灰茶色を呈する。外面上半部は磨滅し調整不明、外面下半は不定方向の粗いナゲ、外面底部には細かい布目の圧痕を残す。口縁部内面はヨコナゲ、その他はヘラケズリ。

鍋 (3) 鍋として報告するが、器種は明確に言い難い底部と思われる破片。胎土は 0.5cm 以下の砂粒を多く含み、色調は黄茶灰色を呈する。内外面ともヘラケズリで外面はその後ナゲ調整を行っているように見える。

把手 (4) 甕もしくは櫃の把手で、手づくねで仕上げている。胎土は砂粒を多く含み、色調は灰茶色を呈する。

土坑

203SK017 出土遺物 (Fig. 122)

瓦質土器

火鉢 (5) 脚部付近の破片で、全面磨滅し調整不明。内面には煤が一部付着する。胎土は 0.1cm 以下の砂粒を含むが精製され、色調は黒灰色を呈する。

203SK021 灰黄色土出土遺物 (Fig. 122)

土師器

小皿 a (6) 復元口径 8.0cm、器高 1.3cm、復元底径 6.4cm、外面底部は回転糸切り。

203SK022 出土遺物 (Fig. 122)

瓦質土器

鉢 (7) 胎土は砂粒を含むが精製され、色調は白灰色や黒色を呈する。内面には斜め方向の細かいハケ、外面にはタテハケと指押さえ痕を残す。口縁端部にもハケを施す。

高麗青磁

碗 (8) 胎土は灰色で、内面は暗緑色釉を施し、白色釉で文様を描く。外面は青緑色釉を薄く施す。全体的に貫入が入る。

肥前系磁器

皿 (9) 口縁端部の破片で、内面に淡い青色釉で文様を描く。

碗 (10) 口縁端部の破片で、内面に淡い青色釉で文様を描く。

国産陶器

碗 (11) 片口状に波打つ口縁部で、外面上半部と内面には黄色味の草色釉を施し、内外面ともハケで文様を施す。

203SK023 出土遺物 (Fig. 122)

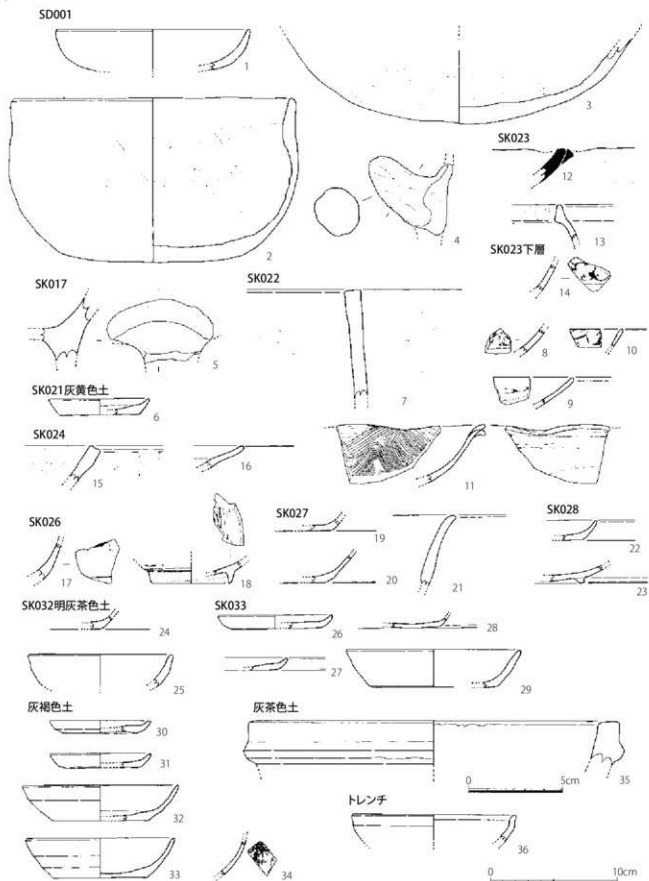


Fig. 122 第 203 次調査出土遺物実測図 (1/3、35 は 1/2)

須恵質土器

鉢 (12) 片口の鉢で、胎土は黒色粒を含むが精製され、白灰色や暗灰色を呈する。内外面ヨコナデ調整され、外面には一部指頭圧痕も残す。

中国陶器

壺 (13) 若干肥厚させた口縁部である。胎土は黄灰色で、内外面とも淡黄褐色釉を薄く施し、口縁部内面には目跡を残す。

203SK023 下層出土遺物 (Fig. 122)

肥前系磁器

碗 (14) 胎土は白灰色で、外面には薄青色釉で文様を描く。

203SK024 出土遺物 (Fig. 122)

瓦質土器

鉢 (15) 若干肥厚させた口縁部で、胎土は精製され白灰色を呈する。内面には細かいハケ、外面はヨコナデで指頭圧痕も残す。

国産陶器

皿 (16) 体部中位で僅かに屈曲させる。胎土は淡茶灰色で内外面とも茶色がかった釉を薄く施す。

203SK026 出土遺物 (Fig. 122)

肥前系磁器

碗 (17、18) 17 は内外面とも透明釉を薄く施し、外面下半に薄い青色釉で圏線を描く。18 は復元高台径 6.1cm。内外面とも淡水色釉を施し、高台畳付は露胎。外面と内面底部には薄青色釉で文様を施す。全体的にぼんやりとした色合いである。

203SK027 出土遺物 (Fig. 122)

土師器

小皿 a (19) 磨滅するが、底部は回転糸切り。色調は白黄色を呈する。

坏 a (20) 全面磨滅する。色調は白黄色を呈する。

鉢 (21) 全面磨滅するが、外面の一部にヨコナデが残る。胎土は 0.4cm 以下の砂粒を多く含み、色調は白黄褐色を呈する。

203SK028 出土遺物 (Fig. 122)

土師器

小皿 b (22) 器高 1.6cm。外面底部には板状圧痕を残す。

黒色土器

碗 c (23) 低い高台を貼付する。全体的に磨滅するが、外面底部はナデ。A 類。

203SK032 明灰茶色土出土遺物 (Fig. 122)

土師器

小皿 a (24) 全面磨滅し調整不明。色調は淡黄色を呈する。

碗 (25) 破片で全形不明瞭だが碗と推測される。全面磨滅し調整不明。色調は白黄色を呈する。復元口径 11.4cm。

203SK033 出土遺物 (Fig. 122)

土師器

小皿 a (26 ~ 28) 3 点とも全面磨滅し調整不明。色調は淡橙色を呈する。26 は復元口径 9.0cm、器高 1.1cm、復元底径 7.3cm。27 は器高 1.0cm。

坏 a (29) 復元口径 13.8cm、器高 3.0cm、復元底径 10.2cm。全面磨減し調整不明。

その他の遺構

灰褐色土出土遺物 (Fig. 122)

土師器

小皿 a (30、31) 30 は復元口径 8.0cm、器高 1.0cm、復元底径 5.9cm。全面磨減し調整不明。30 は復元口径 8.0cm、器高 1.1cm、復元底径 6.5cm。全面磨減し調整不明。

坏 a (32、33) 2 点とも同じような器形で、外面底部は回転糸切りで板状圧痕を残す。32 は復元口径 11.7cm、器高 3.15cm、復元底径 7.5cm。30 は復元口径 12.4cm、器高 2.8cm、復元底径 7.6cm。

肥前系磁器

椀 (34) 外面に薄い青色釉で文様を描く。

灰茶色土出土遺物 (Fig. 122)

石製品

石鍋 (35) 復元口径 19.6cm。内外面に成形のケズリ痕を残す。滑石製。

トレンチ出土遺物 (Fig. 122)

中国陶器

天目椀 (36) 復元口径 13.0cm。口縁端部は茶色釉、屈曲部以下は明茶色釉、その他は黒色に施釉される。

(5) 小結

今回の調査では、調査区北側を中心に土坑が 11 基検出された。土坑については埋土が黄色土と明茶色土の混じりで、調査時点では比較的新しい攪乱的なものと判断し、サンプルとして 6 基を完掘しただけで、そのほかは完掘しなかった。出土遺物から中世以降としか言えないものもあったが、一部の土坑に近世陶磁器が含まれることから、全体として近世以降の土坑である可能性も考えられる。これらの土坑はプランから墓の可能性も考えられたが、桶などの埋葬痕跡は全く確認できず、骨片はもちろん、副葬品が 1 点も出土しないことからすると墓の可能性は全くないとみて良いだろう。また、粘土探掘坑と考えるには、ひとつひとつが独立し過ぎている。大宰府条坊跡第 251・255 次調査で確認された粘土探掘坑は、平面的な広がりを示していたため、明らかに異なっている。以上のことから、この土坑群の意味については不明と言わざるを得ない。

参考文献 太宰府市教委『大宰府条坊跡 42』太宰府市の文化財第 114 集 2012

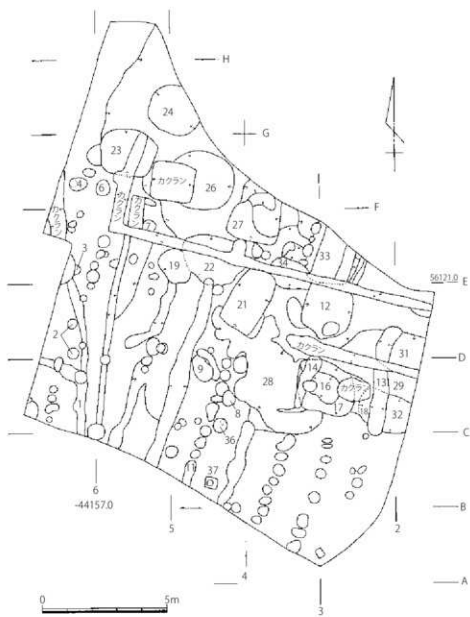


Fig. 123 第 203 次調査遺構略測図 (1/150)

表 29 第 203 次調査 遺構一覽表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	203SD001	溝	黒灰色粘質土	平安前半～中期	C6
2		ピット群			D6
3		ピット	暗灰色土	古代～	E6
4		ピット	暗灰色土		F6
6		ピット	暗灰色土	古代～	F5
7		ピット	暗灰色土		E5
8		ピット群	暗灰色土 S-8とS-28混在	古代～	C4
9		土坑	黒灰色土 炭塊あり		C4
11		溝(畑の耕作痕跡か?)	淡灰茶色土		B4
12	203SK012	土坑	暗灰色土	13世紀後半～	D2
13		溝	淡灰黄色土	平安後期～	C2
14		溝			C3
16		土坑	灰白色土	中世?	C2
17	203SK017	土坑	灰白色土 未完掘	14世紀～?	C2
18		土坑	黄褐色土、白灰色土、黄茶色土の混合層		C2
19		土坑	暗灰色土 S-22の上層	近世～	E4
21	203SK021	土坑	底面は青白色粘土	13世紀後半～	D3
22	203SK022	土坑		近世～	E4
23	203SK023	土坑	白灰色粘土、黄灰色粘土、青灰色粘土の互層	近世～	F5
24	203SK024	土坑		近世～	G4
26	203SK026	土坑	未完掘	近世～	F4
27	203SK027	土坑	灰褐色土(やや砂質多い) 未完掘	中世～	E3
28	203SK028	土坑	暗灰色土 焼け石を少量含む	中世～	C3
29		窪み	S-31の上層		C2
31	203SK031	土坑	灰黄色土	平安後期～	D2
32	203SK032	土坑	明灰茶色土 未完掘	平安後期～	C2
33	203SK033	土坑	暗灰色土 S-34→33 未完掘	14世紀～?	E3
34		土坑?	黒茶色土 S-34→33		E3
36		柱穴?			C4
37		柱穴?			B4

表 30 第 203 次調査 出土遺物一覽表

S-1	須 惠 器 腰、破片
	土 師 器 杯、壺、把手、鉢、甕、破片
	古式土 器 杯
	瓦 壺 平瓦
S-2	須 惠 器 破片
	土 師 器 杯、破片
	石 製 品 丸石
S-3	土 師 器 腰、破片
S-4	須 惠 器 腰
	土 師 器 腰
S-6	須 惠 器 破片
	土 師 器 腰、破片
S-7	土 師 器 腰
S-8	須 惠 器 器類
	土 師 器 杯
S-9	土 師 器 杯、破片
S-11	白 磁 器 破片(1)
S-12	須 惠 器 腰、壺、破片
	土 師 器 杯、小皿a×杯a(1)、破片
	白 磁 器 破片(1) 皿-B(1) 壺(1)
	龍泉窯系青磁 破片(1) 皿-T(1) 壺(1)
	中 国 陶 器 道四(1) 陶器破片(2)
	瓦 壺 瓦瓦、破片
	石 製 品 丸石

S-13	土 師 器 杯
	白 磁 器 破片(1)
S-14	須 惠 器 杯
	土 師 器 杯、破片
	国 産 陶 器 腰
	白 磁 器 破片(2)
	龍泉窯系青磁 破片(1)
	同安窯系青磁 破片(1)
	中 国 陶 器 鉢1-1b(2)
S-16	土 師 器 杯
	須 惠 質 土 器 破片
	瓦 壺 破片
S-17	須 惠 器 腰、破片
	土 師 器 杯、杯a、小皿a、破片
	瓦 質 土 器 大鉢
	白 磁 器: II-1(1) 破片高口縁(1)
	龍泉窯系青磁 破片(1) 小鉢皿(1)
	龍泉窯系青磁 破片(1)、1-4(1)、IV(1) 破片皿(1)
	同安窯系青磁 破片(1)
	中 国 陶 器 破片(1)
	金 屬 製 品 釧環
S-18	須 惠 器 腰
	土 師 器 杯
S-19	須 惠 器 腰、破片
	土 師 器 杯、破片
	須 惠 質 土 器 破片
	白 磁 小碗(1)
	龍泉窯系青磁 破片(1)、1-2(2)
	同安窯系青磁 破片1-1b(1)
	中 国 陶 器 破片(2)
	瓦 壺 破片
	石 製 品 丸石

S-21			
須 惠	銅鑿、破片		
土 師	器环、破片		
白	磁器破片(1)		
龍泉窯系青磁	器环-3a(1) 破片(1)		

S-21増沢色土

須 惠	銅鑿、破片		
土 師	器破片		
白	磁陶: V~Vb(1) 磁: Vb(1) 磁?(1)		
龍泉窯系青磁	器陶: I-b(1) 磁: I(1)		
同安窯系青磁	器陶: I-b(1)		
中 国 陶	器破片(1)		
瓦	器破片		

S-21戻黄色土

須 惠	器环、鑿		
土 師	器陶、小皿a		
須 惠 質 土	器鉢		
越前窯系青磁	器陶: I(1)		
龍泉窯系青磁	器破片(1)		
同安窯系青磁	器陶: I-b(1)		
中 国 陶	器白磁V(1)		
石 製	品平玉石		

S-22

須 惠	銅鑿、破片		
土 師	器环、小皿a		
瓦 質 土	器鉢、器鉢		
肥前系磁器	器鉢、器鉢		
国産陶	器陶		
白	磁陶: 口縁折形(1) 磁: V(1)、破片?(1) 白磁破片(2)		
龍泉窯系青磁	器陶: I-b(1)、II-b(1) 破片(1)		
同安窯系青磁	器磁: I(1) 破片(2)		
中 国 陶	器破片(2)		
高麗青磁	器陶破片?(1)		
瓦	器破片		
木 製	品木片		

S-23下層

肥前系磁器			
-------	--	--	--

S-23

須 惠	銅鑿、蓋c、环、环c、鑿		
土 師	器环、器台、煮炊具、破片		
須 惠 質 土	器鉢		
中 国 陶	器蓋		
肥前系陶器	器破片		
白	白磁破片(1)、内面磨目(1)		
龍泉窯系青磁	器陶: I-2(1)、II-b(1)、III(1) 破片: (1)、III(1)		
中 国 陶	器蓋破片(1) 破片(2)		
瓦	類平瓦(磨目形)、破片(橋子形)		

S-24

須 惠	銅鑿、蓋c、鑿、破片		
土 師	器环、环c、破片		
須 惠 質 土	器鉢		
瓦 質 土	器鉢		
白	磁陶破片(1) 磁: I(1) 白磁破片(2)		
龍泉窯系青磁	器陶: I-2~4(1)		
瓦	磁破片(無文)		

S-26

須 惠	銅鑿c、蓋c、鑿		
土 師	器环、环c、小皿a、鑿、破片		
須 惠 質 土	器鉢、破片		
肥前系磁器	器鉢		
白	磁陶破片(1) 白磁破片(1)		
龍泉窯系青磁	器陶: I(1)、I-2×3(1)、II-a(1)、III(1) 蓋?(1)		
青	磁破片(1)		
中 国 陶	器破片(2)		
瓦	類平瓦(無文)、破片		

S-27

須 惠	器环c、破片		
土 師	器环c、小皿a、鉢、鑿、破片		
国産陶	器破片		
白	磁陶破片(1) 磁: I(1) 白磁破片(4)		
龍泉窯系青磁	器陶: II-b(1)、IV(1)、破片(1) 龍泉破片?(1)		
中 国 陶	器陶鉢破片(1)		
石 製	品平玉石		

S-28

須 惠	銅鑿c、鑿		
土 師	器环c、小皿a、破片		
須 惠 質 土	器鉢		
瓦 質 土	器鉢鉢		

S-28下層

須 惠	銅鑿		
土 師	器环、环c		
白	磁破片式灰系(1)		
同安窯系青磁	器陶: I-b(1)		
瓦	類平瓦		

S-29

須 惠	銅鑿		
土 師	器环、破片		

S-31

土 師	器环a、破片		
瓦	類平瓦(無文)		
石 製	品灰石、平玉石		

S-32明沢茶色土

須 惠	銅鑿		
土 師	器小皿a、陶		
同安窯系青磁	器破片(1)		
金 属 製	品配浮		

S-33

須 惠	器环c、鑿、煮		
土 師	器环a、小皿a、煮		
白	磁陶: IV(1) 磁: I(1) 白磁破片(1)、口縁外反(1)		
龍泉窯系青磁	器陶: I(2)、II-b(1)、IV?(1) 大皿?(1) 龍泉破片?(1)		
同安窯系青磁	器陶: I-1(2)、I-b(2)、V?1(1)		
金 属 製	品鉄釘		
石 製	品石磨		

S-34

土 師	器小皿a		
-----	------	--	--

戻茶色土

須 惠	銅鑿c、环c、皿a、鑿、煮、破片		
土 師	器环c、环c、小皿a、鑿、破片		
瓦	器陶		
瓦 質 土	器鉢		
肥前系磁器	器破片		
国産陶	器鉢		
白	磁陶: IV(1)、破片(2) 白磁破片(4)、口縁折形(1) 磁: I-1(1)、III-a(1)、IX(2)、破片(1)		
龍泉窯系青磁	器陶: I(1)、I-2(1)、I-2×3(1)、I-2-4(1)、I-4(1) II-b(1)、破片(2) 龍泉破片(1)		
同安窯系青磁	器陶: I-1(1) 磁: I(2)		
中 国 陶	器鉢: I-b(1) 破片(4)		
瓦	類焼し瓦、破片		
金 属 製	品1円硬貨、配浮、鉄釘		
石 製	品灰石、石磨、灰石		

戻褐色土

須 惠	銅鑿、破片		
土 師	器陶c、环、环a、小皿a、鑿? 破片		
肥前系磁器	器破片		
国産陶	器鉢		
白	磁陶: 口縁外反(1)		
龍泉窯系青磁	器陶: I-2(1)、I-4(1)、II-b(1)、磨目(1)、破片(1)		
中 国 陶	器台: IV(1) 水注(1)		
瓦	類平瓦(橋子形)		
石 製	品灰石		

トレンチ

須 惠	銅鑿、破片		
土 師	器小皿a、破片		
国産陶	器白磁		
龍泉窯系青磁	器陶: I-3(1) 破片(1)		
同安窯系青磁	器陶: I-b(1)		
金 属 製	品配浮		

表土

須 惠	銅鑿		
土 師	器环		
須 惠 質 土	器鉢		
白	磁陶: 口縁折形(1)		
龍泉窯系青磁	器陶: I(2)、I-2(2)		
同安窯系青磁	器陶: I(1)		

5、第218次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市朱雀4丁目2653-6の内、2653-10の内で、大宰府条坊跡の中心付近に位置する。

太宰府市道路用地課から隈・桜町2号線の道路改良工事に伴う文化財の取り扱いについて問い合わせがあり、拡幅面積が調査可能な広さを有していたため、調査を前提に協議を行った。2001（平成13）年7月30日に確認調査を行い、遺構が確認されたため、2001（平成13）年8月6日～8月10日にかけて発掘調査を実施した。調査対象面積は58.64㎡、調査面積は14.7㎡を測る。調査は宮崎亮一が行った。

(2) 基本層位

調査区の南側は小高い丘陵が広がり、そのちょうど裾部に位置している。この丘陵上面は削平されている部分が多いことが、確認調査や立会調査などでわかっているが、その丘陵周囲には遺構が残存することが確認されている。また、西方約50mには安倍晴明が開いたと伝えられる井戸や市指定天然記念物のエノキの巨樹が存在する。

調査前の対象地は住宅地で、宅地以前は畑だったという。上面は住宅地の頃の攪乱層があって、その下はやや不明瞭だが淡灰茶色土と灰茶色土に分かれ、その下層の灰茶色土は土師器等の土器片を包含している。その下の明茶色土に遺構が残っている。調査区内の北側は淡灰色土が覆っている。遺構検出面は北側の道路から深さ約0.55mで、標高は33m付近である。

(3) 検出遺構

廃棄ビット

218SX001 (Fig. 125)

直径0.45m、深さ0.3mの円形ビットで、ビット内は埋土の量より土師器の破片量が目立ち、土師器のみビットに捨てた状態である。土師器はすでに割れているものが多く、割れたものを廃棄した可能性が窺える。

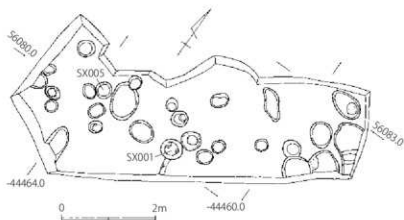


Fig. 124 第218次調査遺構全体図 (1/80)

218SX005 (Fig. 125)

直径0.35m、深さ0.37mの円形ピットで、ピット内は土師器と炭が多く検出された。

(4) 出土遺物

廃棄ピット

218SX001 出土遺物
(Fig. 126)

土師器

小皿 a (1~10) 復

元口径8.2~9.4cm、器高0.8~1.2cm、復元底径6.2~7.8cm。底部切り離しは全て回転糸切りで、殆どで板状圧痕を残す。10は底部がやや厚みがある。

坏 a (11~14) 復元口径14.1~15.0cm、器高2.5~3.05cm、復元底径10.4~11.6cm。底部切り離しは全て回転糸切りで、殆どで板状圧痕を残す。

218SX005 出土遺物 (Fig. 126)

土師器

小皿 a (15~19) 復元口径8.9~9.8cm、器高1.05~1.25cm、復元底径6.65~7.5cm。底部切り離しは全て回転糸切りで、殆どで板状圧痕を残す。

坏 a (20~25) 復元口径14.0~16.8cm、器高1.6~2.6cm、復元底径9.6~13.0cm。底部切り離しは全て回転糸切りで、糸切り後は板状圧痕やナデ痕跡を残す。

丸底坏 a (26~28) 復元口径15.6~16.2cm。27は器高3.25cm、内面ミガキ b、底部に回転糸切りが確認できる。

218SX012 出土遺物 (Fig. 126)

土師器

坏 a (29) 口径12.5cm、器高4.1cm、底径7.25cm。底部はヘラ切りで、色調は褐灰色を呈する。

碗 c (30) 復元高台径8.8cm。色調は黄橙色を呈する。

甕 (31) 口縁部はヨコナデ、体部内面はヘラケズリ、外面はタテハケで煤が付着する。胎土は砂粒が多く、角閃石を僅かに含む。色調は暗茶灰色を呈する。

(5) 小結

今回は調査範囲が狭かったため建物等の確認までには至っていないが、狭いながらも遺構密度は高いものであった。12世紀代の廃棄ピットが検出されたため、この付近一帯には築坊廃絶後も生活空間があったことをうかがえる。

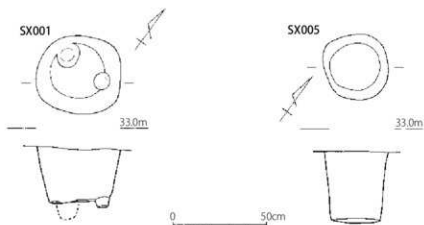


Fig. 125 218SX001・005 遺構実測図 (1/20)

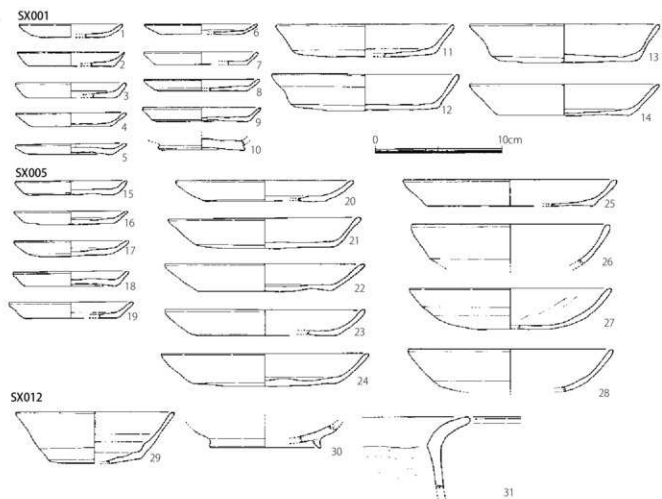


Fig. 126 第 218 次調査出土遺物実測図 (1/3)

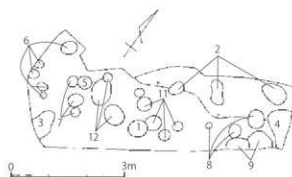


Fig. 127 第 218 次調査遺構略測図 (1/100)

表31 第218次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	218SX001	廃棄ピット		XV期(12世紀後半)	
2		ピット群		古代～	
3		土坑		古代～	
4		ピット		古代～	
5	218SX005	廃棄ピット	炭混じり	XIV期(12世紀中頃)	
6		ピット群		平安後期～	
7		ピット群		平安～	
8		ピット群		古代～	
9		ピット群		古代～	
11		ピット群		平安～	
12	218SX012	土坑群		平安中期?	

表32 第218次調査 出土遺物一覧表

S-1	須 恵 期 灰?、破片
土 師 器 類	須 恵a(7)、小皿a(11)、罎×甕
白	磁 破片(1)
S-2	須 恵 期 蓋3、坏c、甕
土 師 器 類	甕
S-3	須 恵 期 蓋1、坏、甕
土 師 器 類	須 恵a×皿a、碗c、甕、破片
S-4	須 恵 期 蓋1、蓋3、破片
土 師 器 類	破片
S-5	土 師 器 類
土 師 器 類	須 恵a(7)、小皿a(7)、丸底坏a、罎×甕
S-6	須 恵 期 甕、破片
土 師 器 類	須 恵 坏、甕、破片
黒色土器B類	甕

S-7	土 師 器 破片
黒色土器A類	甕
黒色土器B類	甕

S-8	須 恵 期 蓋a、坏c、甕、甕?
土 師 器 類	甕 坏、甕、破片

S-9	須 恵 期 破片
土 師 器 類	甕、破片
黒色土器B類	破片

S-11	須 恵 期 坏、破片
土 師 器 類	破片

S-12	須 恵 期 坏、甕、甕
土 師 器 類	甕c、碗c、甕
瓦	甕 平瓦(橋子形)

表33 第218次調査 土師器計測表

A:内径ナゲ B:板状注流

種別	器 種	遺物番号	回番号	口径	器高	底径	A	B	
土師器	小皿a	イト	R-001	Fig.126-5	8.8	0.9	6.6	○	○
	小皿a	イト	R-002	Fig.126-8	9(2)	0.9	7(3)	○	○
	小皿a	イト	R-003	Fig.126-4	8(8)	1.1	6(4)	○	○
	小皿a	イト	R-004	Fig.126-9	8(4)	1.15	7(8)	○	○
	小皿a	イト	R-005	Fig.126-1	8(2)	1.05	6(2)	○	○
	小皿a	イト	R-006	Fig.126-3	8(8)	1.2	6(9)	○	○
	小皿a	イト	R-007	Fig.126-2	8(5)	1.1	6(8)	○	○
	小皿a	イト	R-008	Fig.126-6	8(9)	0.8	6(4)	○	○
	小皿a	イト	R-009	Fig.126-7	8(3)	1.0	7(3)	○	○
	小皿a	イト	R-014	Fig.126-10	8.9+a	6.9	0	○	○
	坏a	イト	R-010	Fig.126-13	15(5)	3.05	11.5	○	○
	坏a	イト	R-011	Fig.126-12	14(8)	2.9	11.6	○	○
	坏a	イト	R-012	Fig.126-14	15(5)	2.5	11(4)	○	○
	坏a	イト	R-013	Fig.126-11	14(1)	2.5	11(4)	○	○

種別	器 種	遺物番号	回番号	口径	器高	底径	A	B	
土師器	小皿a	ヘラ	R-001	Fig.126-16	9.0	1.05	6.85	○	○
	小皿a	イト	R-002	Fig.126-18	8.2	1.1	7.0	○	○
	小皿a	イト	R-003	Fig.126-15	8.9	1.1	7.5	○	○
	小皿a	イト	R-004	Fig.126-17	9.1	1.25	6.65	○	○
	小皿a	イト	R-005	Fig.126-19	9(8)	1.25	7(2)	○	○
	坏a	イト	R-006	Fig.126-25	16(8)	2.05	13(3)	○	○
	坏a	イト	R-007	Fig.126-22	15(8)	2.1	10(4)	○	○
	坏a	イト	R-008	Fig.126-20	14(3)	1.6	9(4)	○	○
	坏a	イト	R-009	Fig.126-23	15(4)	2.05	11(4)	○	○
	坏a	イト	R-010	Fig.126-24	16(4)	2.6	11(4)	○	○
坏a	イト	R-011	Fig.126-21	15(2)	2.45	11(3)	○	○	
丸底坏a	イト	R-012	Fig.126-26	15(4)	3.15	12(4)	○	○	
丸底坏a	イト	R-013	Fig.126-27	16(5)	3.25	12(1)	○	○	
丸底坏a	イト	R-014	Fig.126-28	16(2)	3.3+a	12(2)	○	○	

種別	器 種	遺物番号	回番号	口径	器高	底径	A	B	
土師器	坏a	イト	R-002	Fig.126-29	12.5	4.1	7.25	○	○
	坏c	イト	R-001	Fig.126-30		1.7+a	18(8)	○	○

6、第227次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市朱雀4丁目2634-36、2637-2、2641-17、2641-5、2641-14、2735の一部である。埋蔵文化財包蔵地区内での公共開発事業（地区道路整備事業道路拡幅）に伴う埋蔵文化財発掘調査である。開発理由は現況道路の道路幅が狭いため、北側の水田部分に道路を拡張するためである。

調査区は南北方向に幅2m弱、東西方向の長さ35mと細長い。調査前の協議は2003（平成15）年2月に地区道路係と開始し、工事の進行にあわせて発掘調査を行う形となった。調査期間としては2003（平成15）年3月3日開始だが、途中工事による中断もあり、終了は同年4月23日である。開発対象面積は220㎡、調査面積は71㎡で、調査は高橋学が担当した。

(2) 基本層位

調査地は般若寺が位置する丘陵北端丘陵裾にあたる。現在の道路から下は整地土層で、その下に灰色土が確認できた。その下に茶色土があり、これを検出土とした。この茶色土を除去すると遺構面となる。

(3) 検出遺構

溝

227SD001 (Fig. 129)

調査区中央で確認された東西方向の溝。振れはE-12° 10' 37.59" -N。東西長19.8m、南北長0.5m、深さ0.15mを測る。埋土は上層が灰茶色土、下層が灰茶色粘質土。出土遺物が奈良時代から近代まで含まれていることから、使用された時期はどこまで遡るかが不明だが、現在の道路が施行される以前まで丘陵裾を廻る溝として使われていたと思われる。出土遺物の須恵器に8世紀初頭のものが含まれていることから、この調査区より位置的に上部にあたる場所、つまり南側の般若寺丘陵の開発が早い段階に行われていたことが遺物より推測される。

227SD020 (Fig. 129)

調査区西部で確認された南北方向の溝。調査区外に伸びる。振れはN-0° 50' 19.1" -Wと真北に近い。東西長0.93m、南北長1.4m、深さ0.34mを測る。埋土は上層が淡灰色土に黄褐色ブロックが混じる。下層は淡灰色土に灰白色砂が混じる。出土遺物から奈良時代以降に埋没したと考えられるが、S-18を切っているので最終埋没は中世まで下る可能性がある。

井戸

227SE005 (Fig. 129)

調査区中央南部で検出された井戸。調査区外に続くため全形は不明だが、検出している範囲では、平面プランはやや崩れた方形である。東西長1.08m、南北長0.85m、遺構検出面からの深さは、1.35mを測る。

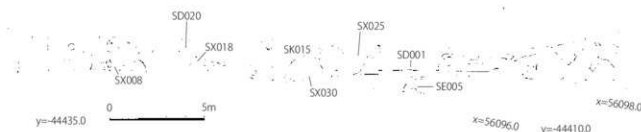


Fig. 128 第227次調査遺構全体図 (1/200)



Fig. 129 227SD001・002・020土層図、SE005遺構実測図(1/40)

井戸枠は確認できなかった。底面中央南より、直径0.28m、深さ0.28m程度の円形の穴がある。これは井戸内の水を澄ますための穴と思われる。出土遺物によると、井戸としての機能が終わったのは8世紀前半であり、その後後半にかけて埋まったと考えられる。

土坑

227SK015

調査区中央部北側で検出された土坑。北側は調査区外に展開するため全体の形状は不明。検出した範囲では、東西長2.8m、南北長0.6m、深さ0.3mを測る。出土遺物は平安時代を中心としたものだが、近世の燻し瓦が1点出土している。この近世遺物は調査時での紛れ込みの可能性が高いと思われる。

その他の遺構

227SX008

調査区西側で検出されたたまり状の遺構。調査区外に遺構に続き、平面形は楕円形。短辺軸0.78m、長辺軸1.3m、深さ0.15mを測る。出土遺物から平安時代に埋没したと考えられる。埋土は黒色土。

227SX018

調査区中央西側で検出された小穴群。出土遺物から埋没時期はXIX期か。

227SX025

調査区中央で検出されたたまり状の遺構。この調査区内では比較的まとまって遺物が出土した。

227SX030

調査区中央南で検出されたたまり状の遺構。

(4) 出土遺物

溝

227SD001 出土遺物 (Fig. 130)

須志器

蓋1 (1) 口縁部の破片。内側にかえりが付く。

蓋3 (2) 口縁部の破片。

鉢 (3) 口縁部は丸く玉縁状になっている。焼成・還元ともに不良。色調は灰白色。京都産篠窯の製目で、鉢cにあたる。

井戸

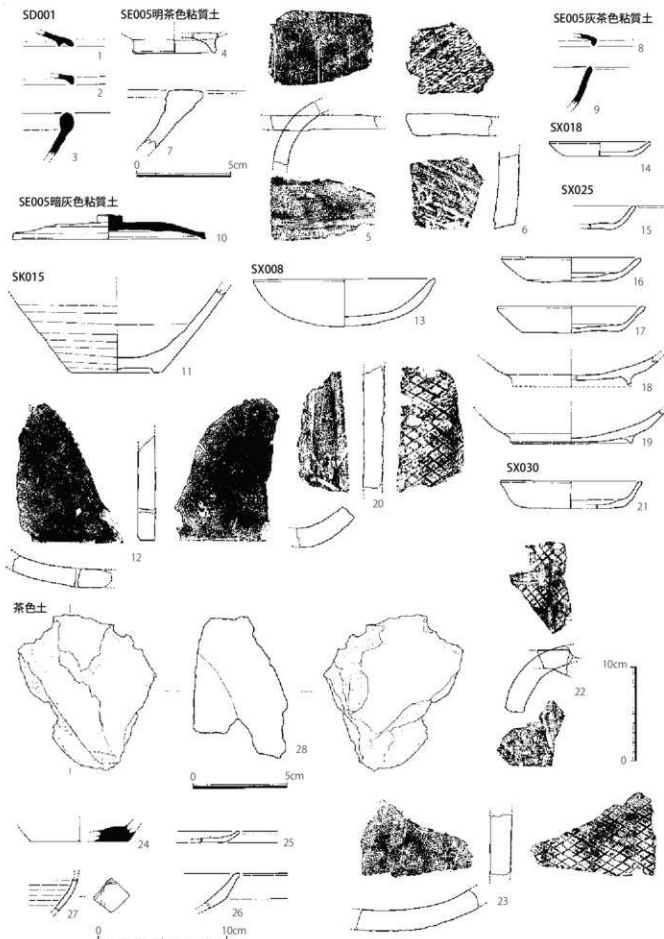


Fig. 130 第 227 次調査出土遺物実測図 (1/3、28は1/2、瓦は1/4)

227SE005 明茶色粘質土出土遺物 (Fig. 130)

土師器

椀 c × 坏 c (4) 底部高台部の破片。高台径は復元径で 6.6cm。

瓦類

丸瓦 (5) 玉緑部の破片か。凹面は布目痕、凸面はへら削りで調整しており無文。須恵質だが、やや焼成は不良。

平瓦 (6) 端部をへら切り調整している。凹面は布目痕、凸面は縄目痕のあとナゲ調整。

石製品

鉢 (7) 口縁部破片。上部は平滑に仕上げている。内外面は摩耗と剥離で調整は不明。

227SE005 灰茶色粘質土出土遺物 (Fig. 130)

須恵器

蓋 3 (8) 口縁部破片。焼成・還元ともに良好。

坏 × 椀 (9) 口縁部から体部にかけての破片。

227SE005 暗灰色粘質土出土遺物 (Fig. 130)

須恵器

蓋 c3 (10) 口縁部の一部を欠損するがほぼ完形。口径 15.3cm、器高 2.0cm。色調は内外面ともに暗灰色。天井部に重ね焼き痕跡あり。摘み部は、やや低いボタン形を呈す。天井部は回転へら削り調整を施す。

土坑

227SK015 出土遺物 (Fig. 130)

中国陶器

鉢 (11) 底部から体部の破片。底部は基筒底的な高台が付き、高台内は回転へら削り調整を施す。内面は回転へら削り調整。内面はロクロ調整。胎土は 2mm 程度の白色粒をやや多く含む。

瓦類

焼し瓦 (12) 端部の破片。凹面凸面とも焼しており、表面は黒色で光沢がある。直径 5mm 程度の穿孔が 1 つ確認できる。端部はへら切り調整。近世以降の製品か。

その他の遺構

227SX008 出土遺物 (Fig. 130)

土師器

椀 a (13) 復元口径 14.4cm、器高 3.7cm。内外面とも器壁が磨滅しており、口縁端部の横ナゲ調整しか確認できない。焼成は不良。色調は淡橙白色～淡灰色。器壁が厚い。押し出し痕跡は確認できない。

227SX018 出土遺物 (Fig. 130)

土師器

小皿 a (14) 復元口径 8.0cm、器高 1.15cm、復元底径 5.3cm。焼成やや不良。底部切り離し技法は不明瞭だが、器形や寸法から XⅧ～XⅨ期と推定する。

227SX025 出土遺物 (Fig. 130)

土師器

坏 a (15～17) 15 は破片。器高 1.9cm。底部に板状圧痕あり。色調は淡橙灰色を呈する。16 は復元口径 11.0cm、器高 1.95cm、復元底径 6.8cm。底部板状圧痕あり。坏 a から小皿 a への移行期と考えられる。IX～X 期か。17 は復元口径 11.7cm、器高 2.1cm、底径 7.7cm。底部に板状圧痕あり。不明瞭だが、底部切り離しはへら切りか。

碗c (18, 19) 両方とも貼り付け高台の底部の破片である。18の高台はやや断面四角形を呈し、19の高台はやや三角形である。復元底径は18が9.7cm、19が9.4cmである。

瓦類

平瓦(20) 側端部の破片。凹面は布目痕、凸面は格子目叩き。格子目叩き分類では、I-C-C類。側端部は一部ヘラ切りののち分割されその後未調整。

227SX030 出土遺物 (Fig. 130)

土師器

坏a (21) 復元口径11.2cm、器高2.15cm、復元口径8.8cmを測る。底部切り離し技法は回転ヘラ切りか。IX期か。

瓦類

丸瓦(22) 側端部の破片。凹面に布目痕、凸面に格子目叩き。格子目叩き分類でI-A-b類。側端部は一部ヘラ切りで、そこから分割して、分割部は未調整。

平瓦(23) 破片。凹面は布目痕、凸面は格子目叩き。格子目叩き分類でI-C-e類。

土層

茶色土出土遺物 (Fig. 130)

須恵器

壺(24) 底部破片。底部切り離し技法が回転糸切り。残存器高1.3cm、復元底径7.8cm。産地不明。

土師器

小皿a (25) 破片。器高0.9cm。器壁が摩耗しており調整は不明。色調は白黄色を呈する。

丸底坏(26) 口縁部の破片。色調は灰黄色～黄橙色。焼成は不良。

白磁

壺(27) 体部の破片。内面は強いロクロナデ調整。沈線が縦横に入っている。小破片で判断が難しいが、瓜型の器形になる可能性がある。

土製品

炉壁(28) 炉壁の一部。外面には鈹滓がべつとりと付着している。内面をみると、内側が橙黄色で、外側は黄灰色を呈している。鈹滓は気泡が多く確認でき色調は濃青黒色。

(5) 小結

今回の調査によって得られた情報としては、以下のとおりである。

- 1、般若寺丘陵の北側山裾に位置する調査地から8世紀初頭の遺物が出土しており、当該期の遺構が調査地周辺に点在している可能性がある。
- 2、8世紀前半には使用されている井戸は8世紀後半には埋没して使われなくなっている。
- 3、平安時代を中心に土坑、小穴、たまり状遺構等少数だが検出された。
- 4、近代に大きな造作が入り、現在の景観とつながる。

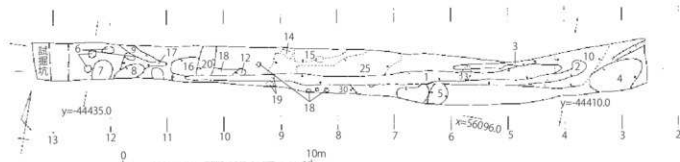


Fig. 131 第227次調査遺構略測図 (1/200)

表 34 第 227 次調査 遺構一覽表

S-番号	遺構番号	種 別	埋土状況 (古→新)	遺構間切合 (古→新)	時 期	地区番号
1	227S001	溝	茶褐色土	2→1	近代～	A10～
2	227S002	溝	灰色土	10→2, 2→1	A3～6	
3		溝	青灰色土	13→3	近代～	B4・5
4		土坑			～近代	A2・3
5	227SE005	井戸	暗灰色粘質土→灰茶色粘質土→明茶色粘質土		奈良～	A6
6		小穴群	淡黒色土		平安～	A12-B12
7		土坑	黒色土		平安～	A12-B12
8	227SX008	たまり状	黒色土		11c～	A11
9		溝	淡黒色土		平安～	B11
10		土坑	茶褐色灰色土(灰色砂まじり)	17→9	平安～	A・B3
11		小穴	黒色土		平安～	A11
12		小穴	黒色土	18→12	平安～	A9
13		小穴		13→3		A5
14		小穴		15→14	12c～	B8
15	227SK015	土坑		15→14	平安～	B7・8
16		たまり×土坑		16→20→1	平安～	A・B10
17		たまり		17→9, 17→8	平安～	B11
18		小穴群		30→18, 18→12	平安～	A8
19		土坑			平安～	B8
20	227SX020	土坑×溝	淡灰色土(灰白色砂混じり)→淡灰色土(茶褐色土アツマじり)	16→20→1	奈良～平安	A・B10
25	227SX025	たまり		25→1	平安～	A-B7→A-B8
30	227SX030	溝×たまり		30→16→1	10c～	A9→10

表 35 第 227 次調査 出土遺物一覽表

<p>5-1</p> <ul style="list-style-type: none"> 須 恵 器蓋①、蓋②、杯×杯c、壺、鉢c(梅型) 土 師 器破片 須 恵 陶 器破片 須 恵 磁 器破片 白 磁 碗①×4(環②①) 他:破片① 瓦 類①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿ 	<p>5-10</p> <ul style="list-style-type: none"> 須 恵 器蓋 土 師 器破片 須 恵 陶 器破片 須 恵 磁 器破片 須 恵 茶青磁碗①、②、③(①) 瓦 類①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿ 	<p>5-25</p> <ul style="list-style-type: none"> 須 恵 器蓋 土 師 器破片、丸底杯c、丸底杯、小皿a、碗c 灰色土器土師破片 瓦 類①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
<p>5-2</p> <ul style="list-style-type: none"> 須 恵 器蓋、破片 土 師 器破片 須 恵 陶 器破片 白 磁 碗①:破片① 	<p>5-11</p> <ul style="list-style-type: none"> 須 恵 器蓋 土 師 器破片、破片(白色系) 	<p>5-30</p> <ul style="list-style-type: none"> 須 恵 器蓋①、杯c 土 師 器破片、杯c 須 恵 質土器蓋、破片 白 磁 碗①:破片① 瓦 類①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
<p>5-4</p> <ul style="list-style-type: none"> 須 恵 器蓋 龍泉茶青磁碗①:破片① 肥前系陶磁器①(付①②) 須 恵 陶 器破片 瓦 類①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿ 	<p>5-12</p> <ul style="list-style-type: none"> 須 恵 器蓋 土 師 器破片 	<p>5-35</p> <ul style="list-style-type: none"> 茶褐色土 須 恵 器蓋(方形、つぶれた龍文珠形)、碗×杯c 壺、鉢①② 土 師 器蓋、器蓋(平安)、破片①② 須 恵 質土器土師破片 土 師 質土器七輪①② 須 恵 質土器破片①② 肥前系陶磁器①(出葉網)、染付①②③ 須 恵 陶 器破片 須 恵 陶 器破片 白 磁 碗①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
<p>5-5 明茶色粘質土</p> <ul style="list-style-type: none"> 須 恵 器蓋③、杯×杯c 土 師 器蓋①、高台(白色) 瓦 類①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿ 	<p>5-13</p> <ul style="list-style-type: none"> 土 師 器破片 	<p>5-40</p> <ul style="list-style-type: none"> 茶褐色土 須 恵 器蓋(方形、つぶれた龍文珠形)、碗×杯c 壺、鉢①② 土 師 器蓋、器蓋(平安)、破片①② 須 恵 質土器土師破片 土 師 質土器七輪①② 須 恵 質土器破片①② 肥前系陶磁器①(出葉網)、染付①②③ 須 恵 陶 器破片 須 恵 陶 器破片 白 磁 碗①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
<p>5-6 灰茶色粘質土</p> <ul style="list-style-type: none"> 須 恵 器蓋③、杯×杯 土 師 器破片 	<p>5-14</p> <ul style="list-style-type: none"> 須 恵 器蓋 土 師 器破片(赤色、白色) 同安茶青磁碗①、②(①) 染付(輸入)破片① 石 製 品①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿ 	<p>5-45</p> <ul style="list-style-type: none"> 茶褐色土 須 恵 器蓋、壺、鉢① 土 師 器蓋①、小皿a、丸底杯、破片 灰色土器土師破片 龍泉茶青磁碗① 肥前系陶磁器①(出葉網) 須 恵 陶 器破片、破片① 須 恵 陶 器破片、破片① 白 磁 碗①:破片① 瓦 類①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
<p>5-8 暗灰色粘質土</p> <ul style="list-style-type: none"> 須 恵 器蓋③ 土 師 器蓋 	<p>5-15</p> <ul style="list-style-type: none"> 土 師 器破片(赤色、白色) 瓦 類①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿ 	<p>5-50</p> <ul style="list-style-type: none"> 出土地不明 須 恵 器蓋 瓦 類①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
<p>5-6</p> <ul style="list-style-type: none"> 須 恵 器蓋③ 土 師 器破片(赤色、白色) 	<p>5-16</p> <ul style="list-style-type: none"> 土 師 器破片(赤色、白色) 瓦 類①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿ 	
<p>5-7</p> <ul style="list-style-type: none"> 土 師 器破片(白色系) 須 恵 土器土師破片 	<p>5-17</p> <ul style="list-style-type: none"> 須 恵 器破片 土 師 器蓋①、破片 	
<p>5-8</p> <ul style="list-style-type: none"> 須 恵 器蓋 土 師 器蓋 須 恵 質土器蓋 須 恵 質土器蓋 白 磁 碗①:破片① 石 製 品①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿ 	<p>5-18</p> <ul style="list-style-type: none"> 須 恵 器破片 土 師 器蓋①、小皿a 須 恵 質土器蓋 瓦 質土器破片 	
<p>5-9</p> <ul style="list-style-type: none"> 須 恵 器蓋 土 師 器破片 白 磁 碗①:片① 瓦 類①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿ 	<p>5-19</p> <ul style="list-style-type: none"> 土 師 器破片(白色系) 	
	<p>5-20</p> <ul style="list-style-type: none"> 須 恵 器蓋 土 師 器蓋①、破片(白色系) 瓦 類①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿ 	

7、第 235 次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市朱雀 1 丁目 2659-1、2659-8、2659-9 で、般若寺跡が所在する丘陵から北側に派生する丘陵上に位置する。調査を開始する前は雑草と樹木が茂っていた。

2003（平成 15）年 9 月から、個人住宅建築に伴う文化財の取り扱いについて、問い合わせが始まった。2003（平成 15）年 9 月 29 日、確認調査を実施し、GL-0.2m という浅い位置で遺構が確認されたため、遺構に影響が及ぶことがわかり、調査を行うこととなった。



Fig. 132 第 235 次調査遺構全体図 (1/150)

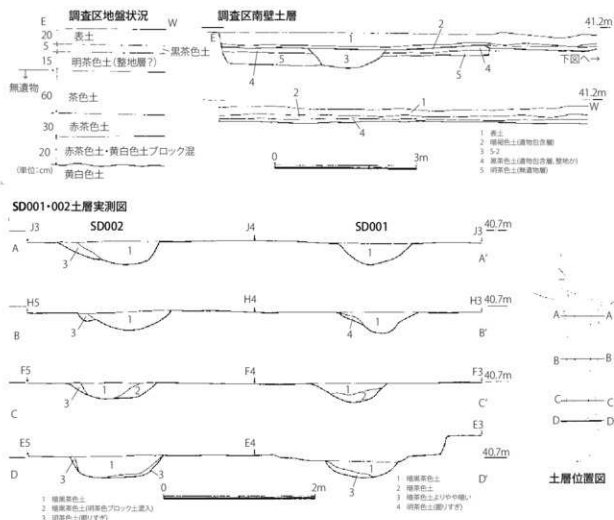


Fig. 133 第235次調査区、SD001・002土層実測図 (1/80)

発掘調査は2004(平成16)年4月5日～6月14日に実施した。開発対象面積は434㎡で、調査面積は348㎡である。調査は渡邊仁が担当した。

(2) 基本層位 (Fig. 133)

土地の地目は宅地となっているが、調査前の状況では雑草が繁茂する空き地になっていた。表土が厚さ0.1～0.3mあり、その下に0.1m前後の遺物包含層があり、その直下に遺構が展開する。遺構検出時の遺物は黒茶色土で取り上げている。

(3) 検出遺構

溝

235SD001 (Fig. 133)

SD002と対になる南北方向に走る溝で、SF005の東側側溝である。振れはN-3° 29' 58" -E。検出長19.8m、幅1.0～1.6m、深さ0.2～0.3mで、北に向かって若干下がっている。埋土は暗黒茶色土である。部分的に溝底付近で明茶色土ブロックを含む流れ込み状の堆積が見られた。これは溝底部が崩落しブロック状に落ちたものと考えられる。

235SD002 (Fig. 133)

SD001と対になる南北方向に走る溝で、SF005の西側側溝である。振れはN-2° 17' 52" -E。検出長24.5m、幅1.1～1.75m、深さ0.15～0.3mで、北に向かって若干下がっている。埋土は暗黒茶色土である。埋土には平安後期の遺物が若干含まれるため、最終埋設は11世紀後半頃であるが、ほとんどが10世紀

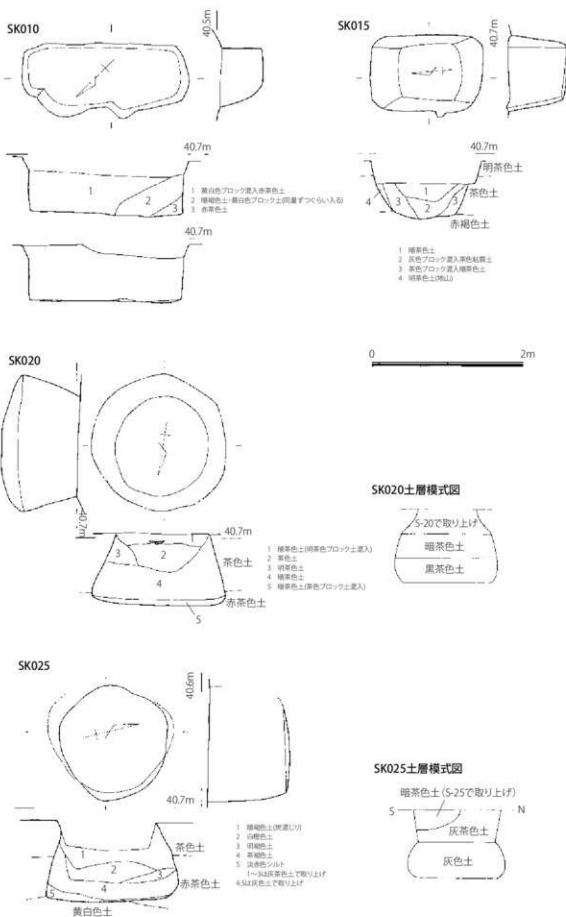


Fig. 134 235SK010・015・020・025 遺構実測図 (1/50)

までの遺物という状況から、側溝として主に機能していたのは平安前期までと推測される。

土坑

235SK010 (Fig. 134)

長さ 2.2m、幅 0.75～0.95m、深さ 0.7m の長方形の土坑である。形状から墳墓の可能性も考えられるが、棺材や副葬品は出土しておらず、明確に言い切れない。

235SK015 (Fig. 134)

長さ 1.47m、幅 1.0m、深さ 0.76m の方形、断面逆台形の土坑である。用途は不明である。

貯蔵穴

235SK020 (Fig. 134)

開口部が狭く底面が広い、断面台形のいわゆる袋状貯蔵穴である。開口部径 1.3m 前後、底面径 1.8m、深さ 1m 前後で、底面は若干丸味がある。埋土は暗茶色土や茶色土である。

235SK025 (Fig. 134)

開口部が狭く底面が広い、断面台形のいわゆる袋状貯蔵穴である。開口部径 1.3m 前後、底面径 1.67m、深さ 1m 前後である。埋土は全体的に粘質の暗褐色土や茶褐色土で、最上層には炭が混じっていた。なお、調査区際のため完掘できていない。

道路

235SF005

SD001 と SD002 の並行する 2 本の溝に挟まれた空間を道路とした。振れは N-2° 58' 51" -E の南北道路である。検出長は約 24m で、路面幅は 2～2.5m である。路面に路盤や通行痕跡が確認できなかったが、丘陵上面という特性上削平されている可能性は十分考えられる。

(4) 出土遺物

溝

235SD001 暗茶色土出土遺物 (Fig. 135)

須恵器

坏 a (1) 復元底径 7.6cm。焼成還元やや不良で、色調は灰茶色を呈する。

坏 c (2) 外面底部端に高台を貼付する。復元高台径 10.2cm。色調は暗青灰色を呈する。

土師器

小皿 a (3) 小片のため明確に言い難いが、小皿と推測される。内外面磨減し調整不明。色調は淡黄橙色を呈する。

坏 a (4、5) 平坦な底部で、体部との境界は丸味がある。色調は 5 が淡黄灰色、6 は赤茶色を呈する。

碗 c (6) 内外面磨減する。色調は淡黄橙色を呈する。

黒色土器

碗 c (7) A 類。高台は欠損するが細い高台である。底部は平坦ではない。内外面磨減し調整不明。胎土の色調は橙茶色を呈する。

灰釉陶器

皿 (8) いわゆる三日月高台を貼付する。内面には淡緑色釉を薄く施すが、内面底部の一部が露胎。外面は回転ナデ。

瓦類

平瓦 (9) 1cm 程の斜格子叩きを有する。厚さ 1.6cm。色調は茶灰色を呈する。

埴 (10) 胎土は 0.2cm 以下の白色砂粒を多く含み、焼成良好で色調は灰色を呈する。表面が残る部

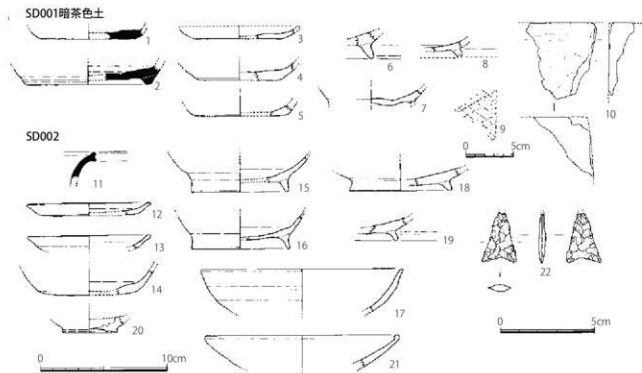


Fig. 135 235SD001・002 出土遺物実測図 (1/3、22は1/2、9は1/4)

分では、ナデ調整が確認できる。

235SD002 出土遺物 (Fig. 135)

須恵器

壺 (11) 口縁端部で、内外面回転ナデ調整。色調は外面が暗青灰色、断面が紫灰色を呈する。朝鮮系無軸陶器か。

土師器

小皿 a (12、13) 2点とも復元口径9.8cm、全面磨滅し調整不明。

坏 a (14) 若干丸味のある底部で、復元底径7.8cm。色調は黄白色を呈する。

碗 c (15、16) 内外面磨滅し調整不明。色調は黄白色を呈する。15は復元高台径7.7cm、16は復元高台径7.8cm。

碗 (17) 復元口径16.0cm。調整磨滅。色調は淡黄灰色を呈する。

黒色土器

碗 c (18、19) 2点とも A 類。18は復元高台径7.5cm。胎土は精製され淡赤橙色を呈する。

緑釉陶器

碗 (20) 削り出し高台で、高台径4.45cm。胎土は精製され、色調は淡明灰色を呈する。緑黄色釉を内外面に薄く施軸する。

越州窯系青磁

唾壺 (21) I 類。復元口径15.4cm。口縁端部を内側に屈曲させる。釉はオリーブ色で鈍い光沢がある。内面はやや劣化している。

石製品

石鏃 (22) 先端を欠損し、現存長2.6cm、基部幅1.85cm、厚さ0.35cm。安山岩製。

貯蔵穴

235SK020 出土遺物 (Fig. 136)

弥生土器

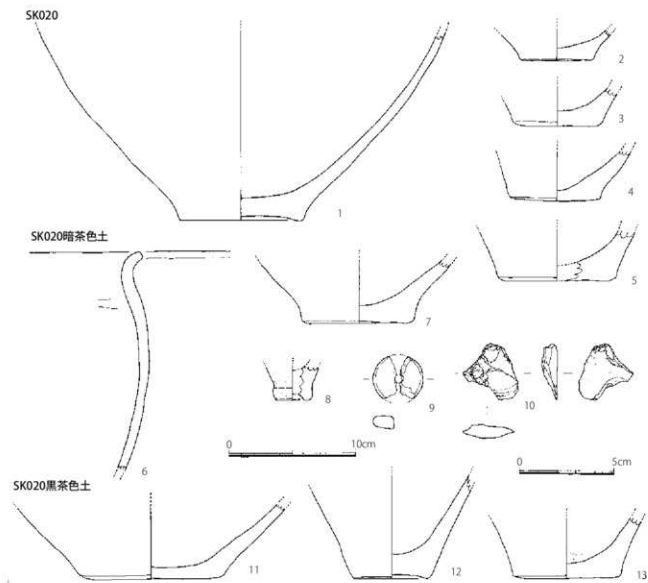


Fig. 136 235SK020 出土遺物実測図 (1/3、10は1/2)

壺 (1) 若干上げ底気味の底部で、底部径9.4cm。内外面とも磨減し調整不明瞭。胎土は0.3cm以下の砂粒を多く含み、色調は赤橙色や暗茶褐色を呈する。

甕 (2～5) 胎土は0.5cm前後の砂粒を多く含み、色調は灰茶色や暗黄灰色を呈する。磨減が目立つ。2は底径5.8cm。3は底径7.0cm。外面にはタテハケがぼんやりと残る。4は底径7.1cm。内面は砂粒が浮き出るくらい磨減する。5は復元底径9.3cm。

235SK020 暗茶色土出土遺物 (Fig. 136)

弥生土器

甕 (6) 胎土は0.4cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は黄褐色を呈する。内外面磨減する。

甕×壺 (7) 底径8.8cm。内外面磨減する。胎土は砂粒を多く含み、色調は黄茶色を呈する。

小鉢 (8) 手捏ね土器。上げ底の底部で、復元底部径3.0cm。色調は淡黄茶色を呈する。

土製品

紡錘車 (9) 半分欠損する。胎土は0.2cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は暗黄色を呈する。

石製品

剥片 (10) 大きさは3.0×2.95cm、厚さ0.8cm。黒曜石製。

235SK020 黒茶色土出土遺物 (Fig. 136)

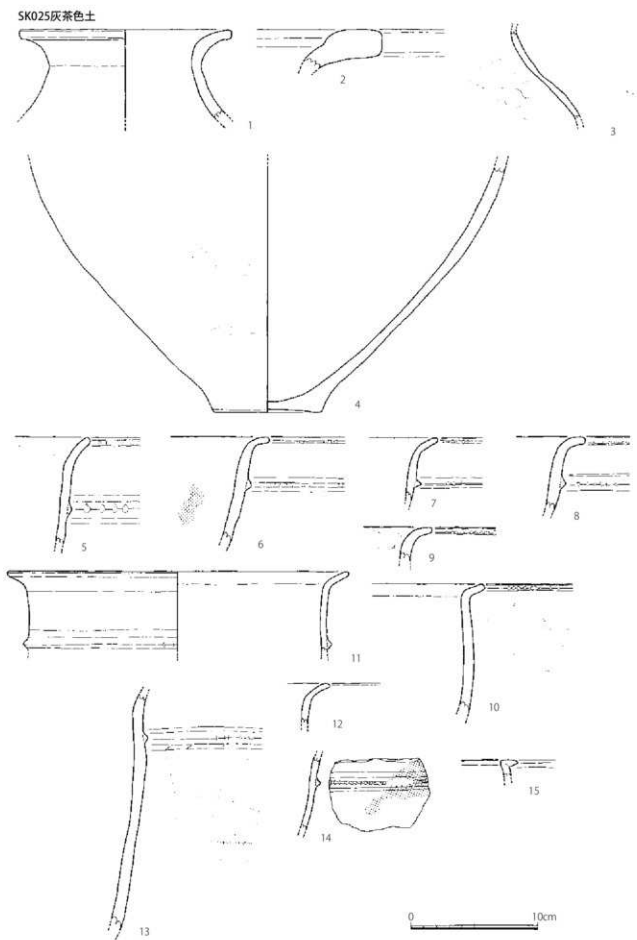
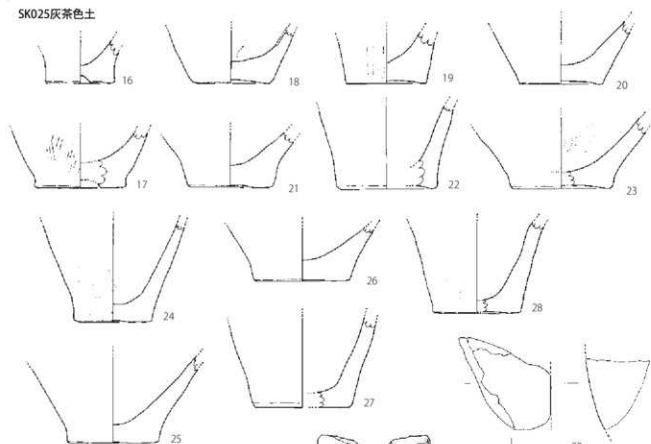


Fig. 137 235SK025 出土遺物実測図① (1/3)

SK025灰茶色土



SK025灰色土

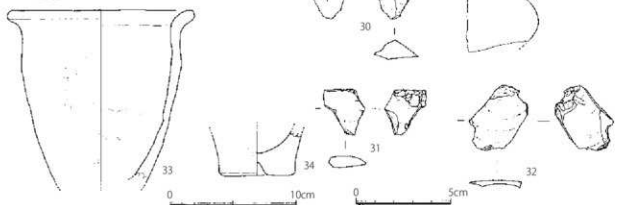


Fig. 138 235SK025 出土遺物実測図② (1/3、石製品は 1/2)

弥生土器

壺 (11) 復元底径 11.5cm。全体的に磨減し調整不明瞭。胎土は砂粒を多く含み、色調は灰茶色を呈する。

甕 (12, 13) 胎土は砂粒を多く含み、色調は橙色や淡茶色を呈する。磨減も目立つ。2は若干上げ底気味で底径 6.0 cm。13は底径 8.5cm。外面に僅かにタテハケが残る。

235SK025 灰茶色土出土遺物 (Fig. 137・138)

弥生土器

壺 (1～4) 1は復元口径 16.8cm。胎土は砂粒を多く含み、色調は淡褐色を呈する。2は口縁部を大きく肥厚させる。色調は淡黄橙色を呈する。磨減し調整不明瞭。3は肩部の破片で、内面は指頭圧痕、外面ハケ目を施す。色調は暗橙色を呈する。4は大きく張る胴部で、復元底径 8.4cm。内外面は調整不明。

胎土は砂粒を多く含み、色調は黄橙色を呈する。

甕 (5～28) 全体として胎土は砂粒を多く含み、色調は橙色、茶褐色、黄橙色を呈する。5～12 は口縁部付近で、外反させた口縁端部に刻み目を施し、胴部上位に断面三角形の刻み目のある突帯を貼付する。内外面のほとんどが磨滅し調整不明。5 の内面はヨコハケ、外面はナデ調整のようにみえる。10 は外面に突帯がなく、細かいハケ目を施す。また、外面は被熱しているように見え、色調は明橙色を呈する。11 は復元口径 27.0cm。全体的に磨滅し、口縁部には刻み目が確認できない。12 は口縁部に刻み目は認められない。13・14 は胴部で、断面三角形の刻み目のある突帯を巡らす。外面はタテハケが確認できるが、内面は磨滅し調整不明。13 の内面は黒斑がある。16～28 は底部である。16・17 は底部外面中央が上げ底であるが、底部の厚みは他より若干厚い程度である。復元底径は 16 が 5.5 cm、17 が 7.2 cm、18～23 は若干上げ底気味の底部である。18 は底径 6.0 cm、内面が被熱で変色し剥落する。19 は復元底径 6.4 cm、内面ナデ、外面タテハケだが磨滅が目立つ。20 は復元底径 6.6 cm、外面は一次焼成で黒灰色を呈する。21 は復元底径 6.8 cm、外面にタテハケがあるが磨滅する。22 は復元底径 8.0 cm、23 は復元底径 8.0 cm、外面はミガキ、内面もミガキのような痕跡がみられる。24～28 は平底の底部である。磨滅も目立つ。24 は底径 6.2 cm、外面に細かいタテハケがうっすら残る。25 は底径 7.2 cm、外面には部分的に煤が付着する。26 は底径 7.6 cm、外面底部に部分的に煤が付着する。27 は復元底径 8.0 cm、内面ナデ、外面はハケ目が僅かに残る。28 は復元底径 7.0 cm、外面タテハケ。

小甕 (15) 口縁端部を 90 度に屈曲させる。色調は黒茶色を呈する。

石製品

石斧 (29) 研磨された石斧の一部で、やや磨滅している。安山岩製。

剥片 (30～32) 30 は側面に小刻みな調整痕がみられる。大きさは 2.85×2.45cm、厚さ 0.9cm、安山岩製。31 は大きさ 2.4×2.25cm、厚さ 0.6cm、黒曜石製。32 は大きさ 3.4×3.1 cm、厚さ 0.3cm、黒曜石製。

235SK025 灰色土出土遺物 (Fig. 138)

弥生土器

甕 (33, 34) 胎土は 0.5cm 以下の白色砂粒を多く含み、色調は赤橙色や橙黄色を呈する。33 は復元口径 14.8cm。磨滅が目立つが外面にはタテハケが残る。34 は底部外面中央が窪ませ、上げ底とする。復元底径 6.0cm、外面にタテハケのようなものが見える。

(5) 小結

今回の調査の主な所見は以下のとおりである。

- ・貯蔵穴の検出。
- ・南北道路の検出。

この般若寺周辺の丘陵地では、弥生時代の貯蔵穴が他にも見つかっているが、弥生時代の住居など集落は確認されていない(第 237・294 次)。しかし、調査地から東側 800m 付近は小字を「鉾ノ浦」といい、かつて銅鉾が出土した記録が残されている。また、高尾山の東側では弥生中期を中心とする集落や埴輪墓群が見つかっている。今回の調査地付近は高尾山から派生する丘陵地の西端であるため、集落が形成されなかったのかもしれないが、現在の日本経済大学やその周辺の住宅地にはかつて弥生時代の集落が存在した可能性も考えられる。

今回確認された南北道路跡は、井上条坊案の左郭 5 坊路と一致する。調査地は、周囲より 5m 程高い丘陵地であるが、大宰府条坊の推定範囲内の丘陵上で明確な道路痕跡を確認したのは、今回の調査が初めてである。これにより、条坊が平地だけに限らず、丘陵にも計画的に施工されたことがわかった。し

かし、道路側溝が使用されていたのは、主に平安前期までと推測され、それ以降の積極的な土地利用を見出すことはできない。

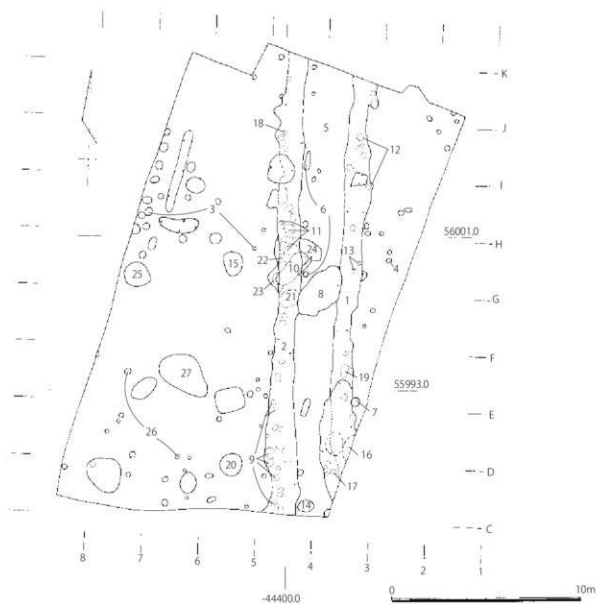


Fig. 139 第 235 次調査遺構略測図 (1/200)

表 36 第 235 次調査 遺構一覽表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	235SD001	溝	SF005東側溝。暗茶色土→黒褐色土	10世紀代?	C~J3
2	235SD002	溝	SF005西側溝。	11世紀後半頃	C~K4
3		ピット	暗茶色土		H5・7
4		ピット	暗茶色土		G2
5	235SF005	道路		平安時代	C~K3・4
6		ピット群	暗茶色土		G14
7		ピット	暗茶色土	古代	E3
8		窪み	黒茶色土→暗褐色土	古代	FG3・4
9		ピット群	暗茶色土	平安時代	CD4
10	235SK010	土坑	褐色土 S-22→10→2		G4
11		ピット群	暗茶色土	古代	GH4
12		ピット群	暗茶色土	古代	H13
13		ピット群	暗茶色土		G3
14		窪み	暗茶色土		C4
15	235SK015	土坑		古墳時代?	G5
16		窪み	黒茶色土 S-16→1	古代以前	D3
17		ピット	黒茶色土		C3
18		ピット	黒茶色土	平安時代	I4
19		ピット	黒茶色土	古代	E3
20	235SK020	貯蔵穴	暗茶色土→明茶色土	弥生中期?	C5
21		窪み	黒茶色土	古代?	F4
22		窪み	黒褐色土 S-22→10→2		G4
23		窪み	暗黒色土 S-23→10		G4
24		窪み	暗黒色土 S-24→10		G4
25	235SK025	貯蔵穴	暗茶色土(焼土+炭?の混)←灰茶色土	弥生前期末～中期初頭	G7
26		ピット群	暗茶色土	古代	D6・E7
27		土坑	茶褐色土	古代	E6

表 37 第 235 次調査 条坊関連遺構座標値

遺構番号	位置	遺構中点座標値		南門からの距離		方位
		X	Y	X方向 (m)	Y方向 (m)	
235SD001	北端中点	56009.200	-44385.875	-695.094	441.832	N-3° 29' 58" -E
	南端中点	55991.425	-44386.962	-712.879	440.923	
235SD002	北端中点	56010.450	-44389.420	-693.879	438.275	N-2° 17' 52" -E
	南端中点	55986.650	-44390.375	-717.688	437.558	
235SF005	SD001～002の中点北端	56009.200	-44387.725	-695.112	439.982	N-2° 58' 1" -E
	SD001～002の中点南端	55991.450	-44388.645	-712.870	439.240	

表 38 第 235 次調査 出土遺物一覧表

S-1			
銅 器	銅 環、鏃、鏃、破片		
土 師	銅 環a、鏃c、鏃類		
瓦	鏃破片		
S-1 緑茶色土			
銅 器	銅 蓋、蓋1、蓋3、環a、環c、高環、鏃、鏃、つまみ		
土 師	銅 環、環a、鏃c、鏃c、小蓋a、鏃c、鏃		
黒色土 師 A	鏃類c、破片		
黒色土 師 B	鏃破片		
灰 輪 陶	銅 蓋		
越 州 瓦 系 青 磁 陶	1-2ア(1)、II-2(1)		
弥 生 土 師 類	銅 平瓦(格子、調目、無文)、丸瓦(無文)、鏃、破片		
金 属 製 品	鏃		
石 製	品割片(黒曜石)、磁石?、平玉石		
S-2			
銅 器	銅 蓋1、蓋3、環a、鏃c、鏃、破片		
土 師	銅 環a、丸底環a、鏃c、鏃c、小蓋a、鏃、破片		
黒色土 師 A	鏃類c、破片		
緑 輪 陶	銅 蓋		
白	磁 陶1-1(1)、II-11(1)		
越 州 瓦 系 青 磁 陶	1-2ア(1) 環1-2(1)		
瓦	鏃類(1) 鏃破片(1)、II(1)		
須 恵 質 (輸入)	朝鮮系無釉陶器		
金 属 製 品	鏃 銅平瓦(調目、格子)、丸瓦(格子、無文)、破片		
石 製	品割片(黒曜石、磁石、安山岩)		
S-3			
土 師	銅 破片		
S-4			
石 製	品小玉?		
S-6			
銅 器	鏃破片		
土 師	鏃破片		
土 製	品土塊		
S-7			
銅 器	鏃破片		
土 師	銅 鏃、鏃類、破片		
石 製	品石鏃		
S-8			
銅 器	銅 蓋1、環c、高環、鏃、鏃		
土 師	銅 小蓋a×環a、鏃、破片		
黒色土 師 B	鏃破片		
瓦	銅 平瓦(格子)、瓦玉、破片		
金 属 製 品	鏃		
石 製	品割片(黒曜石)		
S-8 黒茶色土			
土 師	鏃破片		
瓦	鏃破片		
石 製	品割片(黒曜石)		
S-9			
土 師	銅 環a、破片		
瓦	鏃破片		
S-10			
土 師	鏃破片		
石 製	品割片(黒曜石)		
S-11			
銅 器	鏃破片		
土 師	銅 鏃類、破片		
瓦	鏃破片		
石 製	品割片(安山岩)		
S-12			
土 師	鏃破片		
S-13			
土 師	鏃破片		
S-14			
土 師	銅 鏃類		
S-15			
土 師	鏃破片		
古 式 土 師	銅 鏃類		
S-16			
土 師	銅 鏃類		
石 製	品割片(黒曜石)		
S-17			
土 師	鏃破片		
S-18			
土 師	鏃破片		
緑 輪 陶	銅 鏃×鏃		
S-19			
土 師	鏃破片		
S-20			
弥 生 土 師 類	鏃破片		
石 製	品割片(安山岩、黒曜石)、割片(安山岩)		
S-20 緑茶色土			
弥 生 土 師 類	手づくね土器、粘刺車、破片		
石 製	品割片(黒曜石)		
S-20 黒茶色土			
弥 生 土 師 類	鏃、破片		
石 製	品割片(黒曜石)		
土 製	品積土塊		
S-20?			
弥 生 土 師 類			
S-21			
土 師	鏃破片		
S-22			
土 師	鏃破片		
弥 生 土 師 類	鏃破片		
S-23			
土 師	鏃破片		
石 製	品割片(安山岩)		
S-24			
土 師	鏃破片		
石 製	品割片(安山岩)		
S-25			
弥 生 土 師 類	鏃破片		
S-25 灰黒色土			
弥 生 土 師 類	小鏃、鏃、破片		
石 製	品(石片、割片(黒曜石、安山岩)、石英)		
S-25 灰色土			
弥 生 土 師 類	鏃破片		
S-26			
土 師	鏃破片		
S-27			
土 師	鏃破片		
黒茶色土			
銅 器	銅 蓋1、蓋3、環a、環c、高環、鏃、破片		
土 師	銅 環、環a、丸底環、鏃c、小蓋a、鏃、鏃類、破片		
古 式 土 師 類	鏃		
黒色土 師 B	鏃類、鏃c		
肥 前 系 陶 磁 器	鏃破片		
国 産 陶 磁 器	鏃		
灰 輪 陶	銅 蓋		
越 州 瓦 系 青 磁 陶	1-2ア(1) 鏃1-3(1) 鏃破片(1)		
龍 泉 瓦 系 青 磁 陶	1×II(1)、1-2×3(1)、II-3(1) 鏃破片(1)		
同 安 原 系 青 磁 陶	鏃(1)		
中 国 陶 磁 器	耳重(1) 破片(1)		
瓦	銅 平瓦(格子、調目)		
金 属 製 品	鏃、鏃、鏃、破片		
石 製	品割片(黒曜石)		
土 製	品土塊、土塊		

8、第 237 次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市朱雀 1 丁目 2659-2 で、般若寺の所在する丘陵から、北側に派生する標高 40 ～ 41m の尾根上に位置する。

太宰府市用地課による地区道路整備事業の代替地整備が行われることから、それに先立って発掘調査を行うこととなった。発掘調査は 2004 (平成 16) 年 6 月 3 日～7 月 8 日に実施した。開発対象面積は 96.35 m²で、調査面積は 59 m²である。調査は渡邊仁が担当した。

(2) 基本層位

表土とその下の暗茶色土を除去すると、赤褐色のいわゆる鳥栖ローム層の地山となり、そこに遺構が切り込んでいる。遺構面は現地表から深さ 0.4 ～ 0.5m である。

(3) 検出遺構

土坑

237SK003 (Fig. 141)

大きさは 1.54 × 0.8m、深さ 0.2m 前後の丸味のある長方形土坑で、中央には径 0.28 ～ 0.32m、深さ 0.5m の円形ピットが掘られている。上面を大きく削平されているようだが、形状から落とし穴と推測される。

237SK004 (Fig. 141)

大きさは 1.34 × 1.0m、深さ 0.5m 前後の長方形土坑で、中央には径 0.32 ～ 0.36m、深さ 0.3m の円形ピットが掘られている。形状から落とし穴と推測される。

237SK005 (Fig. 141)

調査区際で検出されたため、全形はつかめていないが、大きさは径 1.5m、深さ 0.25m の円形土坑とみられ、埋土は暗茶色土の自然堆積で、東隣の第 235 次調査で見つかった弥生時代の貯蔵穴の埋土と近似している。上面を大きく削平されているとすれば、貯蔵穴の可能性が考えられる。

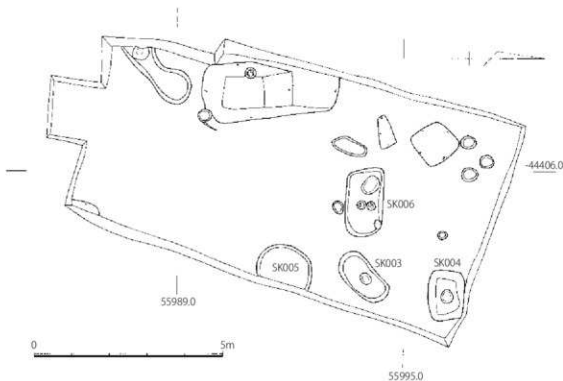


Fig. 140 第 237 次調査全体図 (1/100)

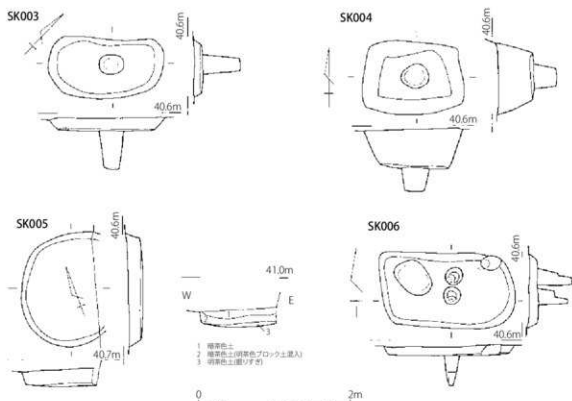


Fig. 141 237SK003・004・005・006 遺構実測図 (1/50)

237SK006 (Fig. 141)

大きさは1.75×1.0m、深さ0.1m前後の長方形土坑で、中央付近には径約0.22m、深さ0.47mと深さ0.4mの円形ピットが2つ掘られている。形状から落とす穴と推測される。

(4) 出土遺物

土坑

237SK005 出土遺物 (Fig. 142)

弥生土器

甕 (1) 復元底径6.8cm、胎土は0.6cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は内面が暗灰茶色、外面が橙黄色を呈する。内面底部には工具のような痕跡が残る。外面は磨滅し調整不明。

石製品

丸石 (2) 大きさは2.0×2.0cm、厚さ1.3cm、暗灰色の石材で、明確ではないが丸く加工した可能性が考えられる。

その他の遺構出土遺物 (Fig. 142)

須恵器

坏c (3) 低くがっちりとした高台を貼付する。焼成良好だが、還元不良で色調は茶褐色を呈する。外面ヨコナデ、内面不定方向のナデ。SX002より出土。

弥生土器

甕 (4) 復元底径7.0cm、胎土は0.6cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は黄橙色を呈する。外面底部はナデ、外面はタテハケ、内面はナデで指頭圧痕を残す。黒茶色土より出土。

石製品

敲石 (5) 端部を欠損する。現存縦11.8cm、幅6.25cm、厚さ3.55cm。端部に若干敲打したような痕跡がみられる。表土より出土。

(5) 小結

今回の調査の主な所見は以下の通りである。

- ・落とし穴の検出。
- ・貯蔵穴の検出。

土坑など深い遺構以外に遺構がほとんど検出されず、また、落とし穴と推測される土坑も残存状況が非常に悪い。このことから、この土地は大きく削平されていることがうかがえる。

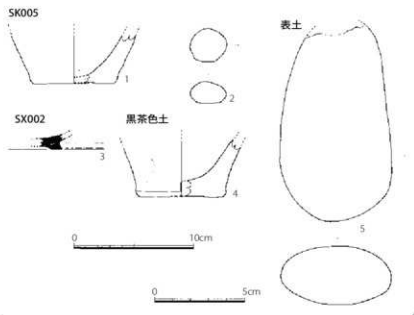


Fig. 142 第 237 調査出土遺物実測図 (1/3, 5は 1/2)

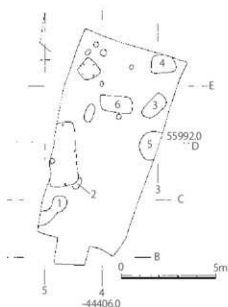


Fig. 143 第 237 調査遺構略測図(1/200)

表 39 第 237 次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1		たまり			B4
2	237SK002	ピット		古代?	C4
3	237SK003	貯蔵穴	無遺物		D3
4	237SK004	貯蔵穴	無遺物		E2
5	237SK005	土坑		弥生中期?	C3
6	237SK006	貯蔵穴	無遺物		D3

表 40 第 237 次調査 出土遺物一覧表

S-1	土 部	器破片
S-2	灰 恵	器片c
	土 部	器破片
S-5	弥 生 土	器 破 片
	石 製 品	丸石
表土	肥 前 系 陶 器	器破片
	石 製 品	叩き石

黒茶色土	
須 恵	器 破 片、器、破片
土 部	器 破 片、器 破 片
肥 前 系 陶 器	器 破 片 (I-2x3(I), II-b(I) 器 破 片 (I))
肥 前 系 陶 器	器 破 片 (現代)
国 産 陶	器 破 片
国 産 磁	器 破 片
弥 生 土	器 破 片
瓦	器 破 片 (現代)
金 属 製 品	銅 鐸
石 製 品	削 片 (黒曜石)

9、第 238 次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市朱雀 1 丁目 2680 番地で、般若寺が所在する丘陵の北端部に位置する。

2003（平成 15）年 9 月文化財の問い合わせが始まり、共同住宅の建築計画で遺構の破壊が明確であったため、発掘調査を実施することとなった。調査は諸般の事情から地区道路整備事業として実施することとなり、調査は 2004（平成 16）年 6 月 21 日～8 月 4 日に実施した。開発対象面積は 727 m²で、調査面積 430 m²である。調査は渡邊仁が担当した。

なお、今回の調査は第 145 次調査の一部を含む形で行われた。

(2) 基本層位 (Fig. 145)

真砂土などの表土が厚さ 0.3～0.4m、その下に包含層として厚さ 0.2m 前後の暗茶褐色土と 0.1m 程の赤褐色土が堆積し、地表面から約 0.6m 前後の標高 35.9m 付近に遺構が広がっている。

(3) 検出遺構

柵列

238SA020 (Fig. 145)

調査区西端で検出した南北 3 間の柱列で、検出長 2.96m で、掘り方は径 0.22～0.3m の円形で、柱間が北から 1.06m、0.76m、1.14m である。振れはおよそ N-3° 7' 5" -E である。西側調査区外に広がっていれば、建物になる可能性があるが、現時点では柵列として報告する。

溝

238SD005 (Fig. 145)

振れは E-4° 25' 37" -N の東西溝。検出長 13.0m、幅 0.65～1.36m、深さ 0.02～0.3m で、西に向かって若干下がっている。埋土は茶色ブロック混じりの暗褐色土で、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

238SD015

振れは E-2° 9' 11" -N の東西溝。連続土坑状に途切れているが、合わせて検出長 6.1m、幅 0.6～0.8m、深さ 0.01m 前後である。西に向かって若干下がっている。

井戸

238SE010 (Fig. 145)

掘り方は 1.9m×2.0m、深さ 2.5m の円形で、花崗岩風化土の地山に掘り込んでいる。埋土途中には陥没状に埋土の違いはあったが、井戸枠材は残存していなかったが、方形の井戸枠であった可能性が高い。底面にはやや歪んでいるが、大きさ 0.54×0.6m、高さ 0.45m 程の曲物が掘えられていた。底面付近は砂層で、崩落する危険があったため、曲物を取り上げることができなかった。低丘陵という立地のためか、やや深い井戸である。

土坑

238SK012

東西 5.2m、南北 3.8m、深さ 0.3～0.43m のアメーバ状の不定形な土坑である。

(4) 出土遺物

溝

238SD005 出土遺物 (Fig. 146)

土師器



Fig. 144 第 238 次調査遺構全体図 (1/150)

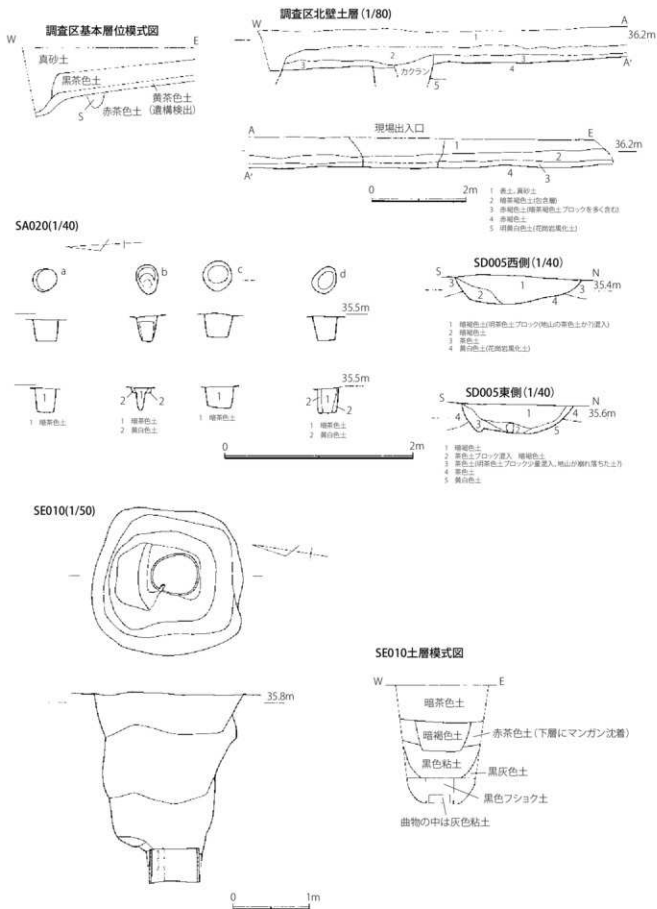


Fig. 145 238SA020、SD005、SE10 遺構実測図 (1/80、1/40、1/50)

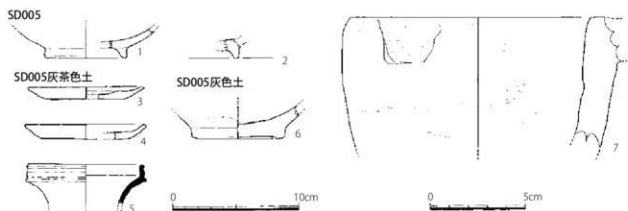


Fig. 146 238SD005 出土遺物実測図 (1/3, 7は1/2)

碗 c (1) 復元高台径 6.5cm。色調は黄白色を呈する。

灰軸陶器

碗 c (2) 胎土は僅かに砂粒を含み、色調は黄白色を呈する。内外面ともヨコナデ調整。

238SD005 灰茶色土出土遺物 (Fig. 146)

土師器

小皿 a (3,4) 3は復元口径 6.4cm、器高 1.0cm、復元底径 9.2cm。内面底部ナデ、底部に板状圧痕残る。

3は復元口径 6.8cm、器高 1.2cm、復元底径 9.6cm。底部に板状圧痕残る。

朝鮮系無軸陶器

壺 (5) 口縁部外面は 2 条の沈線が巡る。復元口径 9.2cm。内外面ともヨコナデ調整。胎土は精製され、色調は内外面とも暗青灰色、断面は白色の胎土が若干混じる赤茶色を呈する。

238SD005 灰色土出土遺物 (Fig. 146)

白磁

碗 (6) IV-1a 類。

石製品

石鍋 (7) 復元口径 13.4cm。滑石製。断面方形の瘤状の把手は欠損する。表面が若干荒れていて調整は見づらいが、ヘラケズリ痕が残る。

井戸

238SE010 暗茶色土出土遺物 (Fig. 147)

土師器

小皿 a (1~3) 復元口径 7.9~10.2cm、器高 0.9~1.05cm、復元底径 6.2~7.8cm。2・3は底部ヘラ切り。

鉢 (4,5) 口縁部を若干外反させる。器面は磨滅し調整不明。4は胎土が 2.5cm 以下の白色砂粒を多く含み、色調は淡黄色〜黄白色を呈する。5は胎土が 4cm 以下の白色砂粒を多く含み、色調は暗茶色〜茶褐色を呈する。

石製品

砥石 (6) 大きさは 9.7×8.2cm、厚さ 3.0cm。使用面は 3 面。側面には擦痕が明瞭に残る。

238SE010 暗褐色土出土遺物 (Fig. 147)

土師器

小皿 a (7~11) 復元口径 8.6~10.2cm、器高 0.9~1.35cm、復元底径 6.3~7.8cm。底部は回転ヘラ切り。8は内外面に錆状の泥が付着する。

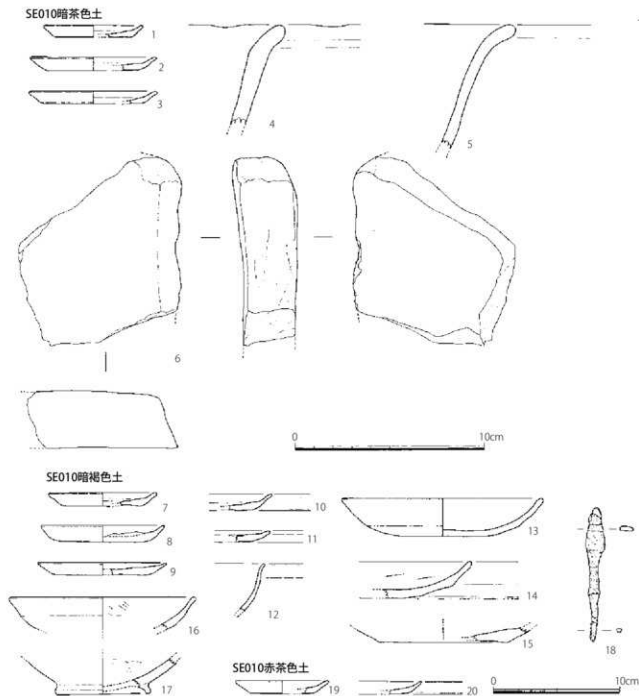


Fig. 147 238SE010 出土遺物実測図① (1/3, 6は1/2)

碗 (12) 口縁部を若干外反させる。色調は黄白色を呈する。内外面磨減し調整不明。

丸底坏 a (13, 14) 13は復元口径 15.8cm, 器高 3.0cm。色調は白黄色を呈する。14は器高 2.9cm。内面にはミガキ b を施す。

皿 × 鉢 (15) 復元底径 10.0cm, 胎土は 0.3cm 以下の白色砂粒をやや多く含む。色調は白黄色を呈する。内外面とも磨減し調整不明。

黒色土器

碗 (16) 復元口径 14.8cm, B類とみられるものの、磨減が目立つ。内面にはミガキのようなものが残る。焼成時に黒斑ができた土師器の可能性もある。

碗 c (17) 復元高台径 7.5cm, 内面はミガキ c を施すが、磨減も目立つ。B類。

金属製品

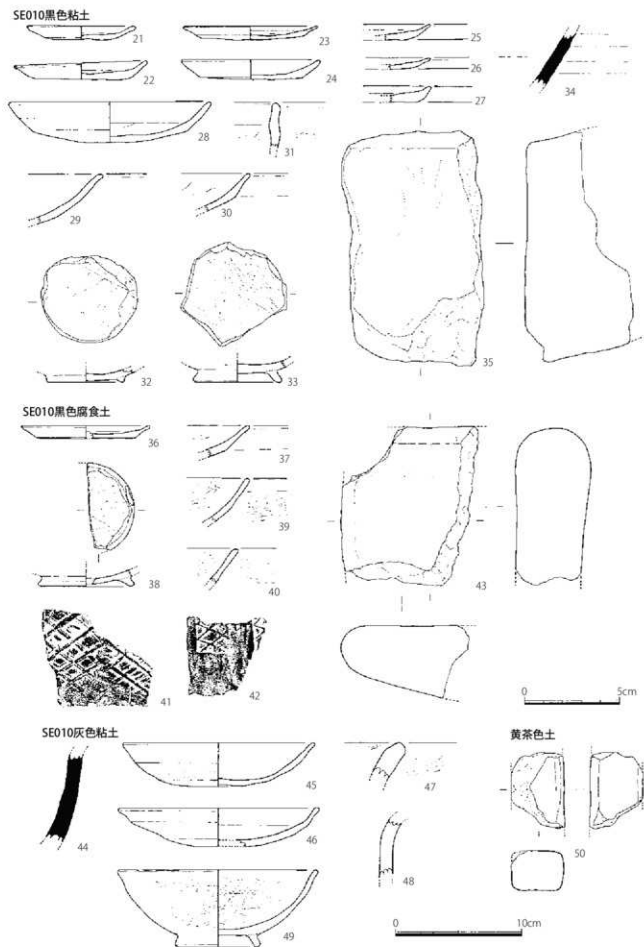


Fig. 148 238SE010・黄茶色土出土遺物実測図② (1/3、石製品は1/2、瓦は1/4)

鉄鏝 (18) 長さ 10.6cm。鏝身部は柳葉状で、頭部中位には出っ張った筧被が確認できる。

238SE010 赤茶色土出土遺物 (Fig. 147)

土師器

小皿 a (19、20) 2点とも磨減が目立ち調整不明。19は復元口径 7.4cm、器高 1.05cm、復元底径 5.2cm。20は器高 1.05cm。

238SE010 黒色粘土出土遺物 (Fig. 148)

土師器

小皿 a (21～27) 復元口径 8.6～11.0cm、器高 0.9～1.6cm、復元底径 5.7～8.6cm。底部切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕を残す。

丸底坏 a (28～30) 28は復元口径 16.0cm、器高 3.2cm。外面底部ヘラ切りで、板状圧痕を残す。内面磨減するがミガキを残す。29は内外面磨減。30は内面ミガキb、外面下半はヘラ切り後底部押し出し。

小鉢 (31) 小片で全形が不明瞭だが、小鉢のようなものとみられる。口縁部はヨコナデ、中位以下は内外面ともケズリのような痕跡を残す。胎土は微細な砂粒を含み、色調は淡橙色を呈する。

黒色土器

碗 c (32、33) 2点とも B 類で、内面底部には細かいミガキを施す。32は低い高台で復元高台径 6.2cm。33は外側に踏ん張る高台で、復元高台径 7.0cm。

須恵質土器

鉢 (34) 内外面とも回転ナデ調整で、内面は使用により平滑である。色調は暗青灰色を呈する。

石製品

砥石 (35) 石材は花崗岩で、使用面は 1 面。

238SE010 黒色腐食土出土遺物 (Fig. 148)

土師器

小皿 a (36) 復元口径 10.2cm、器高 1.0cm、復元底径 7.9cm。底部切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕を残す。

丸底坏 (37) 内面にはミガキを施す。

黒色土器

碗 c (38) A 類。低い外踏ん張りの高台で、復元高台径 7.6cm。内面底部にはミガキを施す。

碗 (39、40) B 類。内外面とも細かいミガキを施す。

瓦類

平瓦 (41、42) やや大きめの格子叩きを施す。41はやや土師質。

石製品

砥石 (43) 使用面は 2 面で、2 面とも若干窪んでいる。

238SE010 灰色粘土出土遺物 (Fig. 148)

須恵器

鉢 (44) 内外面ともヨコナデ調整。口縁部は欠損するが外反する様子が窺える。

土師器

丸底坏 a (45、46) 底部押し出しで、外面には板状圧痕も残す。内面はミガキ b を施す。45は口径 15.2cm、器高 3.4cm。46は復元口径 15.8cm、器高 3.1cm。

甕×鉢 (47) 胎土は 0.1cm 以下の砂粒を含み、色調は淡明灰色を呈する。内外面に細かいヨココハケを施す。

鉢 (48) 体部は直立し、口縁部は外反する。胎土は0.3cm以下の白色砂粒を含み、色調は黄白色を呈する。内外面ともヨコナデ調整。

黒色土器

碗 c (49) B類。復元口径15.8cm、器高6.1cm、復元高台径6.7cm。内外面ともミガキcを施す。

黄茶色土出土遺物 (Fig. 148)

土製品

棒状土製品 (50) 両端は欠損する。断面方形で4.2×3.2cmを測る。胎土は0.2cm以下の白色砂粒を含み、色調は淡黄色を呈する。外面磨滅し調整不明。

(5) 小結

調査区は南側が高く、北側に傾斜する丘陵の突端部付近に位置しているため、遺構面も南から北～西側にむけて緩く傾斜していた。調査区南側は遺構が閑散としている状況から、現状よりさらに高い土地



Fig. 149 第238次調査遺構略測図 (1/200)

だった可能性も考えられる。

また、東西溝であるSD005とSD015は対となり、幅3m程の道路をなしていた可能性も考えられるが、SD005がしっかりとした溝であるのに対し、SD015は貧弱で出土遺物も少ない。また、平安後期埋没のSK012がSD015を横切るように掘られていることを考えると宅地の区画溝の意味合いが強いと推測される。

表41 第238次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1		ピット群	暗茶色土	平安時代	K・L6
2		土坑	暗茶色土	平安時代	L7
3		ピット群	暗茶色土	平安時代	IJ7・8
4		ピット	赤茶色土		GH3
5	238SD005	溝	黒茶色土	11世紀後半～12世紀初	I4～8
6		ピット群	暗茶色土	平安時代?	G～17
7		土坑	暗茶色土	平安後期?	G8
8		ピット	暗茶色土	X期前後	H8
9		窪み	暗茶色土	古代	H6・7
10	238SE010	井戸	暗茶色土	11世紀後半～12世紀初	G5・6
11		窪み群	暗茶色土	古代	G・H・16
12	238SK012	土坑	暗茶色土	平安後期	JK6・7
13	238SK012	土坑	暗茶色土 S-12の底面 S-13→12	平安後期	JK6・7
14		溝	S-5→14	平安時代～	F～J3～5
15	238SD015	溝	暗茶色土	平安時代?	J5
16		ピット群	暗茶色土	平安時代	I～K5・6
17		溝	灰色土		H～J・4～5
18		溝	灰色土	近現代	H・13・4
19		ピット	S-19→5		16
20	238SA020	楕円		平安時代	E・F9
21		たまり	茶色土		H5
22		ピット	暗茶色土 S-22→15	古代	J5
23		ピット群	暗茶色土	平安時代	C・D6・8
24		ピット	茶色土		C6
25		溝	暗茶色土	近現代	C8・9
26		ピット群		平安後期?	FG8・9

表42 第238次調査 条坊関連遺構座標値

遺構番号	位置	遺構中点座標値		南門からの距離		方位
		X	Y	X方向 (m)	Y方向 (m)	
238SD005	東端中点	56087.23	-44250.85	-615.716	576.700	E-4° 25' 37" -N
	西端中点	56086.27	-44263.25	-616.800	563.680	
238SD015	東端中点	56090.24	-44249.88	-612.697	577.010	E-2° 9' 11" -N
	西端中点	56090.04	-44255.20	-612.950	571.692	

政庁中軸線方位=N-0° 34' 24" -E 政庁南門中点座標=(X=56708.680, Y=-44820.730)

10、第 268 次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市朱雀 4 丁目 2-3、2628-13、2628-14、2628-16 で、観世音寺から南へ 450m の畑地である。

2006 (平成 18) 年 12 月 7 日、市道御垣野隈野線の道路新設に伴い、太宰府市役所まちづくり技術開発課から問い合わせがあった。対象地は第 234 次調査の東側隣接地で遺構の存在が濃厚であったが、一応確認調査を行い、遺構が確認されたため、時間の関係上そのまま発掘調査を実施した。調査は 2006 (平成 18) 年 12 月 20 日～27 日に実施した。開発対象面積は 319.58 m²、調査面積は 44 m² である。調査は宮崎亮一が行った。

また、調査地北隣の道路予定地についても工事立会を行ったが、自然流路は確認されたものの、遺構は確認できず、2007 (平成 19) 年 1 月 24 日に調査を終了とした。

この調査は、調査範囲が狭い上に、遺構面までが 2m 程の深さに達する状況から、周囲の土砂の崩落を防ぐため、バックホウで掘削後に両側に矢板を打ち込み、その中を調査した。しかし、矢板の深さの関係もあり、調査は主に遺構が確認された白色砂の検出面で終わり、白色砂については氾濫原の堆積土の様相を示していたため、トレンチを設定し遺物を回収したのみである。よって、遺物が全くない地山は未確認である。工事行程と安全を考慮し調査は 2 回に分けて行い、北側を A 区、南側を B 区として行った。座標値はそれぞれ任意で設定し、調査後座標を与えた。

(2) 基本層位 (Fig. 151)

最上面に近年盛土された真砂土が 70cm ほど覆い、その下層に耕作土が約 50cm、その下層に耕作土もしくは堆積土とみられる遺物が少ない土層があり、その下に遺物包含層である暗灰色土が調査区全体を覆っている。これは氾濫原もしくは流路の堆積土とみられる。そして、この暗灰色土を除去した白色砂礫層で遺構が確認される。この白色砂礫層にも僅かに遺物は含まれている。遺構面までは、現況道路から 1.7m 前後である。

(3) 検出遺構

井戸

268SE007 (Fig. 151)

掘り方が南北 1.9m、東西 1.2m 以上、深さ 0.87m の円形をした井戸で、中央には径約 0.6m の曲物を据えたような痕跡があり、僅かに木片が確認された。埋土は黒灰色土で周囲は白色砂礫層で、上面は白灰色砂で一部覆われていた。

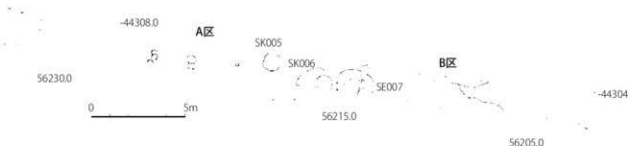


Fig. 150 第 268 次調査遺構全体図 (1/200)

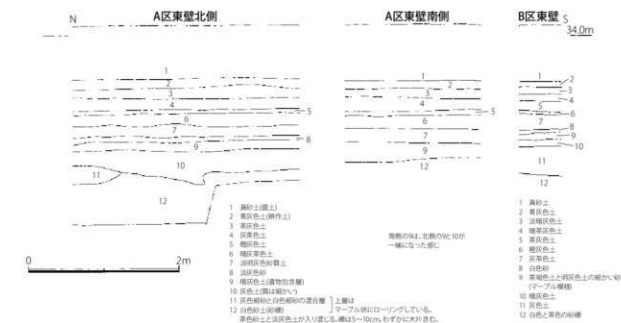


Fig. 151 第 268 次調査土層、268SE007 遺構実測図 (1/50、1/40)

(4) 出土遺物

井戸

268SE007 出土遺物 (Fig. 152)

土師器

小皿 a(1) 復元口径 10.4cm。器高 1.4cm、復元底径 8.0cm。底部外面には板状圧痕を残す。内面ナデ、

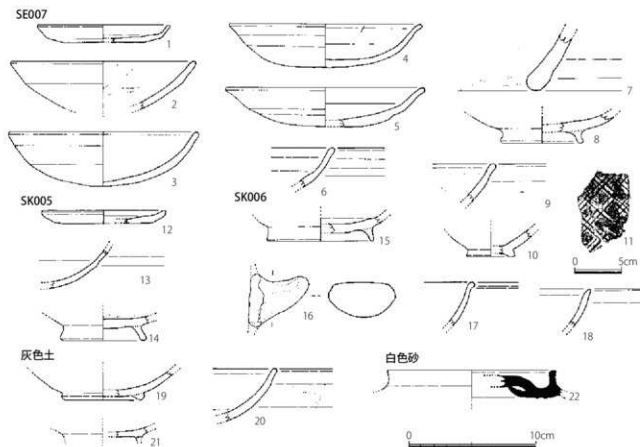


Fig. 152 第268次調査出土遺物実測図 (1/3, 11は1/4)

その他は回転ナデ。底部切り離しは不明瞭だが、ヘラ切りとみられる。

丸底坏 a(2～5) 復元口径 14.6～15.6cm。器高 3.05～4.35cm。下半は底部押し出し、内面ミガキ b、色調は薄茶灰色や白黄灰色を呈する。4・5は外面底部に板状圧痕を残す。

丸底坏 (6) 内面ミガキ b、外面上半部は回転ナデ、色調は白黄灰色を呈する。

瓶 (7) 瓶の下半部で、胎土は白色砂粒を含み、色調は暗茶灰色や薄黄茶灰色を呈する。外面は粗いヨコナデ、内面は横方向のケズリである。

黒色土器

碗 c (8) 復元高台径 6.6cm。体部の内外面はミガキ c、その他は回転ナデ。B類。

碗 (9) 内外面ともミガキ c。B類。

初期高麗青磁

碗 (10) 1-2類。内外面とも緑灰色釉を薄く施し、高台畳付けは軸抜き取り。軸は透明感があり微細な貫入が入る。復元高台径 3.8cm。

瓦類

平瓦 (11) 二重格子叩き。焼成良好で白灰色や暗茶灰色を呈する。

土坑

268SK005 出土遺物 (Fig. 152)

土師器

小皿 a (12) 復元口径 9.8cm、器高 1.05cm、復元底径 7.8cm。底部切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕を残す。

丸底坏 a (13) 内面はミガキ b、底部外面へラ切り後押し出している。色調は白灰色を呈する。

黒色土器

碗 c (14) 高台径 6.8cm, A 類。内面は磨滅するがミガキ c、外面底部には板状圧痕を残す。

268SK006 出土遺物 (Fig. 152)

土師器

碗 c (15) 復元高台径 8.4cm。色調は淡茶灰色で内外面とも磨滅する。

把手 (16) 胎土は白色粒や茶色粒を多く含み、色調は薄茶灰色を呈する。内外面ナデ調整される。

黒色土器

碗 (17) 口縁端部を僅かに外反させる。内面は黒灰色だが磨滅しミガキは分かりづらい。A 類。

白磁

碗 (18) V-1×Ⅷ-1 類。

堆積層

灰色土出土遺物 (Fig. 152)

黒色土器

碗 c (19) B 類だが、内面の黒色化は甘く、内面の色調は淡灰色を呈する。復元高台径 6.5cm。内面ミガキ b、外面はヨコナデか。

瓦器

碗 (20) 内外面は暗い青灰色を呈し、ミガキ b を残す。

灰釉陶器

皿 (21) 胎土は 0.1cm 以下の白色砂を含み、白灰色を呈する。内面には緑色味のある灰色釉が若干残る。外面は回転ナデ調整。

白色砂出土遺物 (Fig. 152)

須恵器

円面碗 (22) 復元口径 13.3cm。焼成良好で灰色を呈する。碗面は使用により平滑である。

(5) 小結

基本的に西側で行われた第 234 次調査と同様、氾濫原と井戸・土坑を検出したのみであった。調査面積が狭いため、全容は不明瞭である。氾濫原とみられる白色砂礫層に遺構が穿たれていたが、白色砂礫層からは平安後期の遺物も含まれるものの、奈良時代の遺物が多く、奈良時代以降に氾濫がおき、その後宅地がつくられたと推測される。その後も遺構面を砂層が覆っていることや流量が減ったことによる堆積土（暗灰色土）が見られるなど、若干の氾濫が繰り返されたことが窺える。

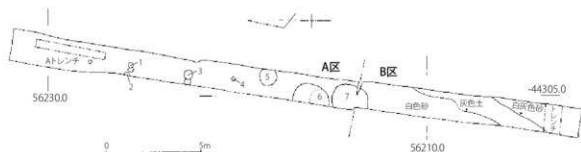


Fig. 153 第 268 次調査遺構略測図 (1/200)

表44 第268次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1		ピット	暗灰色土	平安時代	AIX
2		ピット	暗灰色土	平安後期?	AIX
3		ピット	灰色土	平安時代	AIX
4		ピット	暗灰色土	平安時代	AIX
5	268SK005	土坑	黒灰色土	11世紀後半～12世紀前半	AIX
6	268SK006	土坑	黒灰色土	11世紀後半～12世紀前半?	AIX
7	268SE007	井戸	黒灰色土	11世紀後半～12世紀前半	A・BIX

表45 第268次調査 出土遺物一覧表

S-1	須恵 器壺 土 師 器杯c、破片
S-2	須恵 器壺 土 師 器杯、破片 黒色土師A 瓶破片
S-3	土 師 器杯
S-4	土 師 器杯
S-5	須恵 器壺 土 師 器丸底杯a、陶c、小皿a、壺 黒色土師A 瓶陶c、破片 黒色土師B 瓶陶 白 磁碗：V-1×壺+2(1) 龍泉窯系青磁破片(1) 瓦 瓶平瓦(燕子印)
S-6	須恵 器破片 土 師 器杯、陶c、壺、把手 黒色土師A 瓶陶 越州窯系青磁陶：1-1a(1) 瓦 瓶破片?
S-7	須恵 器壺、蓋3、壺、破片 土 師 器杯a、小皿a、丸底杯、丸底杯a、陶c、壺、瓶、蓋?、破片 黒色土師A 瓶陶、破片 黒色土師B 瓶陶、陶c 白 磁碗：IV-1b×破(1) 白磁広葉系(1) 高麗 青 磁碗：1-2 瓦 瓶平瓦(燕子印、圓日印、無文)、丸瓦(無文)、破片 石 製 品漆石製品、石 土 製 品漆土塊

埋灰色土	須恵 器壺、蓋3、杯c、壺 土 師 器杯a、丸底杯?、陶c、高杯、壺
白灰色砂	須恵 器壺、蓋?、破片 土 師 器杯
灰色土 (AIX)	須恵 器杯c、壺、破片
灰色土 (BIX)	須恵 器蓋3、壺、破片 土 師 器杯、器付柄 黒色土師B 瓶陶 瓦 器碗 灰 軸 陶 器皿? 白 磁碗：IV(1)、IV-b(1)、口縁灰(1) 蓋(1) 越州窯系青磁陶：1-2ア(1) 石 製 品平玉石
白色砂 (AIX)	須恵 器蓋c、杯c、壺、蓋、円面碗 土 師 器杯a、壺 黒色土師A 瓶陶 瓦 瓶平瓦(圓日印、無文) 石 製 品割片(黒曜石)
白色砂 (BIX)	須恵 器壺、杯c、壺 土 師 器杯a、壺 黒色土師A 瓶破片 白 磁碗：II-2(1) 龍泉窯系(1)、白磁破片(3) 越州窯系青磁陶：1-1a(1)
表土	須恵 器杯、壺 土 師 器杯a、杯c、丸底杯a、陶c 白 磁碗：IV(1)、破片(2) 越州窯系青磁陶：II(1) 龍泉窯系青磁陶：II-b(1) 破片?(1)

V、第 180 次調査における自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本地域では、これまでも多くの遺跡で自然科学分析を実施してきた。その結果、遺物の素材、古植生、生業等の一端が明らかになりつつある。今回調査が行われた大宰府条坊跡では、条 180 次までに第 133 次・137 次・158 次・169 次調査で花粉分析、第 176 次調査で花粉分析・植物珪酸体分析・X線回折分析等が行われている。また、今回報告する第 180 次調査では樹種同定および種実同定を実施している。

本報告では大宰府条坊跡から出土した木材の年代を確認するために放射性炭素年代測定を行う。また、木材および骨の種類を明らかにするために各遺物の同定を行う。なお、骨の同定は、早稲田大学金子浩昌先生にお願いした。

1. 放射性炭素年代測定

(1) 試料

試料は、180SK070 灰色粘質土から出土した木材である。木材は 2 片入っており、大きいものがシキミに、小さいものがスダジイにそれぞれ同定された。本報告では、仮に大きいものを試料番号 1、小さいものを試料番号 2 とした。

(2) 方法

試料を乾燥後に粉砕し、水に入れて浮上してきたものを除去した。次に水酸化ナトリウム溶液で煮沸した。室温まで冷却した後、水酸化ナトリウム溶液を傾斜法で除去した。この作業を除去した水酸化ナトリウム溶液の色が薄い褐色になるまで繰返した。次に濃硝酸を加えて煮沸した。室温まで冷却した後、傾斜法により除去した。充分水で洗浄した後、乾燥して蒸し焼き（無酸素状態で 400℃に加熱）にした。蒸し焼きにした試料は純酸素中で燃焼して二酸化炭素を発生させた。発生した二酸化炭素は捕集後、純粋な炭酸カルシウムとして回収した。

回収した炭酸カルシウムから真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成した。最終的に得られた合成ベンゼン 3ml（足りない場合は、市販の特級ベンゼンを足して 3ml とした）にシンチレーターを含むベンゼン 2ml を加えたものを測定試料とした。

測定は、1 回の測定時間 50 分間を 20 回繰返す計 1,000 分間行った。未知試料の他に、値が知られているスタンダード試料と自然計数を測定するブランク試料と一緒に測定した。

放射性炭素の算出には、放射性炭素の半減期として L IBBY の半減期 5,570 年を使用した。

(3) 結果

分析結果を表 1 に示す。2 点の試料は、試料番号 1 が 660y. B. P.、試料番号 2 が 740y. B. P. P であった。

表 46 年代測定結果

地区・遺構名など	試料の質	年代値	誤差		Lab No.
			+	-	
180SK070 灰色粘質土 No.1	木材（大：スダジイ）	660	380	360	PAL-72
180SK070 灰色粘質土 No.2	木材（小：シキミ）	740	470	450	PAL-73

注. 1) 年代値は、1950 年よりの年数

2) 誤差は、2σ（測定値の 95% が入る範囲）を年代値に換算した値

(4) 考察

木材は、他に出土した遺物の年代観から鎌倉時代と考えられている。2点の試料は、年代値が80年ほど離れているが、誤差範囲では一致している。また、樹齢などの問題を考慮すれば、ほぼ一致した値と見ることができる。試料の年代測定値を暦年代に換算すると、試料番号1がA.D.1290年、試料番号2がA.D.1210年となる。これは、いずれも鎌倉時代を示す年代値であり、発掘調査の所見とも調和的である。

2. 樹種同定

(1) 試料

試料は、180SK070から出土した木材8点(試料番号1～7,11)である。このうち、試料番号11には4点が含まれていたため、ハイフォンで1～4の枝番号を付した。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表1に記した。

(2) 方法

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を製作し、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

(3) 結果

樹種同定結果を表2に示す。木材は、いずれも広葉樹材で、4種類(スダジイ・シキミ・ユズリハ属・ハイノキ属)に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・スダジイ (*Castanopsis cuspidate* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイノキ属

環孔材～放射孔材で孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。柔組織は周囲状、散在状および短接線状。

・シキミ (*Illicium anisatum* L.) シキミ科シキミ属

散孔材で管壁厚は中庸～薄く、横断面では多角形、単独または2～4個が複合する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列、道管内壁にはらせん肥厚がかすかに認められる。放射組織は異性II～I型、1～2細胞幅、1～20細胞高。

・ユズリハ属 (*Daphniphyllum*) トウダイグサ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形、単独および2～3個が複合する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性II型、1～2細胞幅、1～20細胞高であるが時に上下に連結する。

・ハイノキ属 (*Symplocos*) ハイノキ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形～角張った楕円形、単独および2～5個が複合する。道管は階段穿孔を有し、段は多数。放射組織は異性II～I型、1～3細胞幅、1～20細胞高であるが、時に上下に連結する。

表 47 樹種同定結果

出土遺構など	時代・時期	番号	樹種
180SK070	鎌倉時代	1	シキミ
		2	スダジイ
		3	シキミ
		4	シキミ
		5	スダジイ
		6	スダジイ
		7	スダジイ
		11-1	ユズリハ属
		11-2	ユズリハ属
		11-3	ハイノキ属
		11-4	ユズリハ属

(4) 考察

出土した木材は、形状から杭材のようにも見えるが、用途などの詳細は不明である。確認された4種類は、基本的に暖温帯常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の構成種である。これまで市内で行ってきた花粉分析結果や樹種同定結果等から、周囲に照葉樹林が見られた可能性が指摘されており（未公表資料）、今回の結果とも調和的である。このことから、鎌倉時代においても周囲に常緑広葉樹を主とした植生が見られ、木材はそこから入手されたものと考えられる。

3. 種実同定

(1) 目的

古墳時代前期の土坑（H2区 SK055）内から、堅果類が多量に検出され、また木製品も出土した。今回は、堅果類以外の種類を中心に同定を行い、当時の植生ならびに植物利用に関する情報を得る。

(2) 試料

試料は、第180次調査SK055から検出された堅果類以外の種実遺体22ケースである。

(3) 方法

双眼実体顕微鏡下で、その形態的特徴から種類を同定する。

(4) 結果

以下に検出された種類と形態的特徴を記す。

・ヤマモモ (*Myrica rubra* Sieb. et Zucc.) ヤマモモ科ヤマモモ属

種子が1個体検出された。大きさは8mm程度。側面観は楕円形、上面観は両凸レンズ型。種皮は堅く表面には太く短い毛が生える。

・コナラ属 (*Quercus*P.) ブナ科

果実が8個体検出された。褐色で大きさは数1.5cm程度。種皮は薄くて堅く、光沢があり維管束の筋が縦方向に走っている。保存の良い個体では、肩部に毛が密集し、花柱の付け根に輪状紋がみられる。花柱は太くて短い、先端部は破損している。このような形態的特徴から、保存のよい堅果類はイチイガシ (*Quercus gilva* Blume) であると考えられる。

・カラスザンショウ属 (*Fagaria* sp.) ミカン科

核が1個体検出された。黒褐色で薄くて堅く、やや光沢がある。大きさは3mm程度。表面には粗い亀甲状の網目模様が見られる。

・アカメガシワ (*Mollotus japonicus* (Thunb.) Mueller-Arg.) トウダイグサ科アカメガシワ属
種子が3個体検出された。大きさは4mm程度。黒色でY字型の小さな「へそ」があり、表面には小さな瘤状隆起を密布する。種皮は薄く硬い。

・エゴノキ属 (*Styrax* sp.) エゴノキ科

核が14個体検出された。灰黒色。側面観は楕円形、上面観は円形。長さ1cm程度。下端に大きな「へそ」があり、表面に3本の浅い溝がある。核は厚く硬い。

・ミズキ (*Cornus controversa* Hemsley) ミズキ科ミズキ属

核が2個体検出された。褐色で大きさは5mm程度。縦方向にややつぶれた球形。基部に大きな臍がある。縦方向に走る溝がみられるがほとんど磨耗している。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

炭化した胚乳が4個体検出された。大きさは4mm程度。雁が位置する部分は欠如し大きく窪んでいる。表面には縦に平行な隆起構造が数本認められる。

・トウガン (*Benincasa hispida* Sp. Cogn.) ウリ科トウガン属

種子が3個体検出された。種子は褐色。長さ8mm程度。長楕円形をしており、種皮は厚く堅い。

・ヒョウタン類 (*Lagenaria* sp.) ウリ科・ヒョウタン

種子が1個体検出された。褐色で長さ10mm程度。長楕円形をしており、縦軸方向にしわが存在する。

・メロン類 (*Cucumis melo* L.) ウリ科キュウリ属

種子が1個体検出された。大きさは7mm程度。側面観は楕円形、上面観はやや扁平な楕円形。表面は比較的平滑。

(5) 考察

180SK055は、堅果類が多量に検出されていることから、貯蔵施設であった可能性がある。今回は堅果類が送付されておらず、同定を十分に行っていないが、保存のよい堅果類は、イチイガシであった。ドングリには「あく」の強いものが多く、食用にするためには複雑な処理が必要である。しかし、その中でもイチイガシは最も「あく」が少ない部類(D類)に入り、アカガシ亜属(カシ類)の中では唯一生食可能な種類である(渡辺、1975)。一方他のカシ類は、水さらしなどの「あくぬき」が必要である。このようにイチイガシは他のカシ類と処理方法が異なるため、他の種類と混在していた貯蔵されていた可能性は薄く、土坑内の堅果類すべてがイチイガシであったと推測される。

ドングリの出土形態にはいくつかあるが、今回のようなビット状の貯蔵施設の中に皮をむかないで納められているものは、岡山県南方前池遺跡や山口県岩田遺跡など、西日本に多い傾向にある(渡辺、1975)。これらの貯蔵穴の構造は、種子を充填した上に葉や木材を置き、さらに粘土や砂で埋めて、そのうえに石を載せるという形状になっている。このような貯蔵形態をとる原因は、温度変化の少ない地中で保存するためとみられるが、これらは春になると発芽するため、一冬のみ貯蔵形態である(永瀬、1982)。また、今回のような地下水位の高い低地での貯蔵は、水に長期間浸かることから、虫殺しや「あくぬき」なども兼ねていたと推測される。

その他の種実のうち、アカメガシワやエゴノキ属、カラスザンショウ属、ヤマモモ、ミズキは、林縁部などに生育する低〜高木である。遺跡の背後には山地が広がっていることからすると、これらは山地と低地の境界付近に分布していたものと考えられ、周辺植生を反映していると考えられる。一方、イネ、メロン類、ヒョウタン類、トウガンはいずれも栽培のために渡来した種類で、弥生時代以降、検出される遺跡数は個体数が増加する種類である。

<文献>

永瀬福男 (1982) 「貯蔵穴」『季刊考古学』創刊号 P59-61 雄山閣

渡辺 誠 (1975) 『縄文時代の植物食』P247 雄山閣

4. 骨同定

(1) 試料

資料は180SX023や180SD040から出土した骨一式である。試料の時代性や覆土の状態などは結果と共に表48に示す。

(2) 方法

試料を肉眼および実顕微鏡下で観察し、種類および部位の同定を行った。

(3) 結果

結果を表3に示す。同定された種類は、以下に示す1種類である。

ウマ科 FamilyEquidae

(4) 考察

180SD040からウマの歯の一部ないし破片が認められた。これらウマの歯の評価については、遺構の性格と合わせた検討が必要である。また、180SX023から出土した骨は獣骨の肩胛骨と同定されるが、種類の同定には至っていない。

<引用文献>

石河寛昭 (1977) 最新液体シンチレーション測定法。189p., 南山堂。

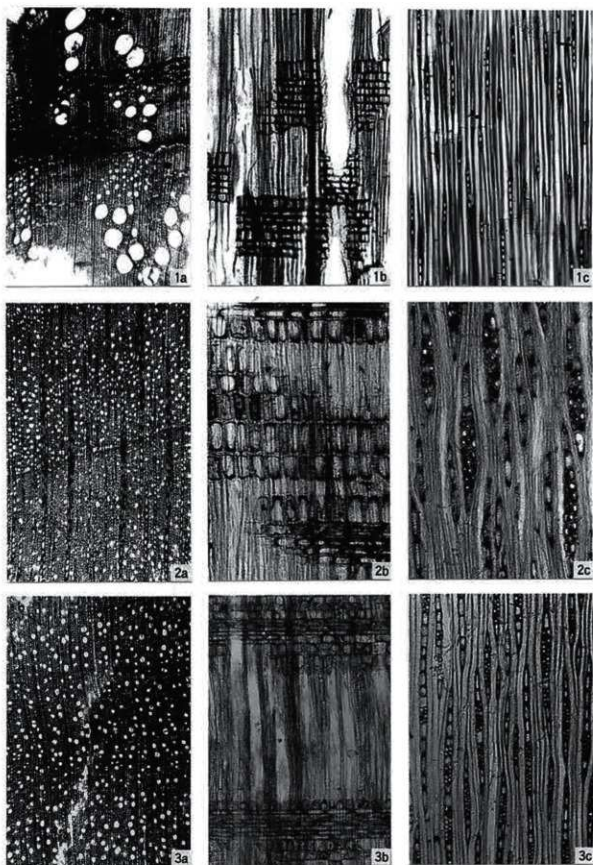
富樫茂子・松本英二 (1983) ベンゼン-液体シンチレーションによる14C年代測定法。地質調査所月報, 34, p 513-527.

表 48 骨同定結果

調査回数	遺構名	土色	時代	種類および部位名	備考
180次	SX023		鎌倉時代	獣骨 肩胛骨 (1)	破片
180次	SD040	灰色砂	鎌倉時代	ウマ 白歯 (1)	破片

日本化学会編 (1976) 同位体, 年代測定, 「新実験化学講座10 宇宙地球科学」, p, 337-353, 丸善

注. 種類および部位の () 内の数字は個数を示す。



1. スダジイ (試料番号2)
 2. シキミ (試料番号3)
 3. ユズリハ属 (試料番号11-2)
 a: 木口, b: 柾目, c: 板目

200 μ m : a
 200 μ m : b, c

Fig. 154 木材(1)

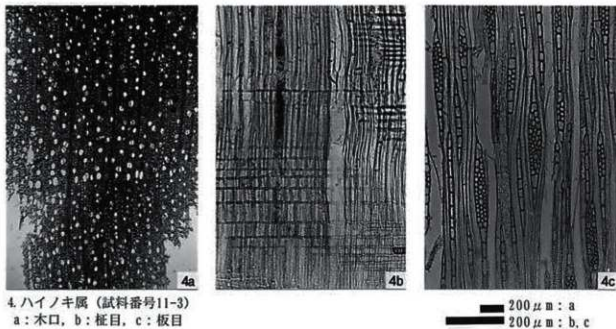


Fig. 155 木材(2)

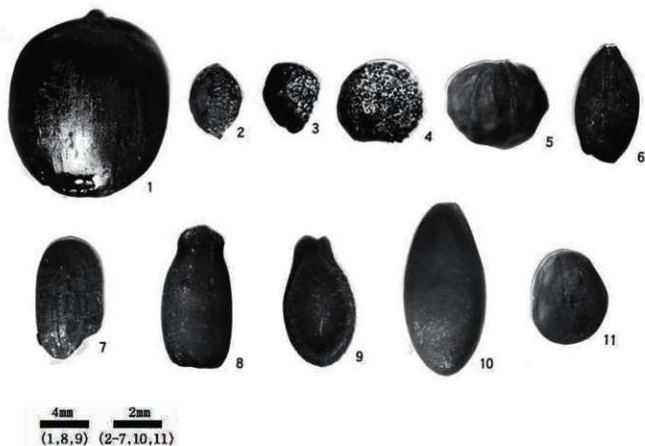


Fig. 156 種実遺体

種実遺体

1. イチイガン近似種 2. ヤマモモ 3. カラスザンショウ属 4. アカメガシワ 5. ミズキ
 6. エゴノキ 7. イネ 8. ヒョウタン類 9. トウガン 10. メロン類 11. 不明

VI、調査まとめ

【坂本地区について】(Fig. 3)

第190次調査で9世紀の灰釉陶器製蔵骨器(ST115)が出土した。大宰府条坊周辺で過去に確認された8・9世紀代の墳墓として、宮ノ本遺跡(8～9世紀)、米噴火葬墓(8世紀)、峯火葬墓(8世紀前半～9世紀前半)、結ヶ浦火葬墓(8世紀前半)、花見ヶ丘火葬墓(8世紀)、堀池遺跡(9世紀)などが知られている。坂本地区周辺でもサコ遺跡第1次(8世紀)、御笠団印出土地遺跡6ST100(9世紀前半)などがある。過去の調査例から、8世紀はもちろん9世紀も条坊内で墳墓が造られた状況は窺えず、養老令の喪葬令の造墓規定が大宰府でも適用されていたと考えられ、10世紀以降時代が下るにしたがって、条坊内にも墳墓が造られる傾向がある。現在までの研究を踏襲するならば、灰釉陶器製蔵骨器が出土した第190次調査地は、8世紀代に官衙施設が造られるものの、9世紀には条坊外と認識されていた可能性もあり、政庁Ⅱ期の右郭が8坊路までの可能性を指摘している井上条坊案を裏付けるような結果となっている。

今回の調査地の建物群の時期をみると、第190次調査が7世紀後半～8世紀後半の建物群、第264・265次調査が8世紀前半～中頃中心の建物群、第269次調査では8世紀前半～中頃に始まり、9世紀後半に廃絶している。第190・264・265次調査と第269次調査との間には井上条坊案の右郭8坊路が推定されている。奈良時代には8坊路を跨いで西側にも建物が展開するが、9世紀には8坊路までしか建物が展開しない。推定8坊路を挟んで明確な土地利用の違いが見てとれるのだが、その理由は不明と言わざるを得ない。

調査地の周辺地形をみると、苜萱閤伝承地付近が御笠川の氾濫原の端部に位置し、江戸期から名所として知られた千代鶴の墓(現在苜萱閤碑建立地付近)周囲の試掘調査でも、氾濫原が広がり、遺構は全く残されていない。旧日田街道付近がいわゆる河岸段丘の境目にあたり、それより南側では遺構が残されていないとみられている。また、四王寺山から国分地区南辺部を流れる大谷川が御笠川にそそぐため、今回の報告地である松倉丘陵北側から西側にかけて大谷川の影響で、遺構が確認することができない。東側については、水城小学校や学業院中学校の建設等により大きく改変され、遺構の状況は掴めないが、学業院中学校校庭の確認調査では校庭の東端で遺構が確認されたが(史170次)、校庭では谷堆積があるのみで遺構は確認されていない。5坊路付近で匠司と推測されている来木地区と区分けされていたかもしれない。よって、今回の調査地点一帯は、遺構が確認できた場所でもあり、河川氾濫の影響を受けなかった場所でもある。

今回報告した調査地一帯は、古代大宰府の官衙城の西側に位置し、1899(明治32)年には遠賀団印、1927(昭和2)年には御笠団印が出土しているため、筑前国府の推定地のひとつとなっている。また、南方には水城東門を通る古代官道が通り、北東方向から斜めに大宰府条坊の4条路に取り付くものと推測されている。その交点は閤屋と呼ばれ、苜萱閤伝承地が残されている。苜萱閤伝承地については、江戸期の地誌に名所として登場しているが、古代から存在していたかは明確ではない。1.2km離れた水城東門が大宰府の出入口として万葉集をはじめ古代の和歌の登場し、「水城の閤」とも詠われている。また、水城東門付近に衣掛天神、衣掛石、衣掛松、姿見井などの菅原道真が大宰府に入り衣服を整えたという伝承地が集中しているため、菅原道真が大宰府に左遷された10世紀初頭はもちろん「水城の閤」と詠われた11世紀初頭まで、大宰府の入口として水城東門があったと考えられる。また、水城西門ルートの官道と条坊との交点に閤所が置かれたという伝承が残されていないことから、古代から苜萱閤伝承地付近に閤所が置かれたとするには証拠が乏しい。

しかしながら、大宰府条坊の4条路には、大宰府政庁はもちろん観世音寺、学校院、蔵司

など大宰府の中核施設が並んでおり、第269次調査で確認された掘立柱建物(SB085)や多量の緑釉陶器、第190次調査の蔵骨器の出土などを考えれば、8坊路までが条坊域で、最低でも4条路以北は官衙域だった可能性が高い。しかし、8世紀代については、松倉丘陵(第161・190次)や官道沿い(第264・265・269次)で10坊路まで遺構が確認されているものの局所的であり、条坊全体が10坊路まで広がったと明確に言える検出状況ではなく、北西部の条坊外に設けられた官衙のひとつであった可能性も考えられる。今回報告した坂本地区の掘立柱建物群の性格としては、条坊の西端、官道が取り付く立地、軍団印の出土などから、大宰府条坊の西端を守衛する官衙施設や軍団に関連した施設と考えるのだが、推測の域を出ない。

【五条地区について】

今回報告した第306次調査は、井上条坊家の12坊の推定ライン上に位置するものの、条坊に関連する溝や道路痕跡は確認できなかった。第306次調査での遺構検出面が、西側県道より0.3m程高いため、坊路が県道と重複していたならば、坊路痕跡が削平された可能性は十分考えられるが、調査地の北側約30mで行った第105次調査や南方約40mの第224次調査2・5区でも条坊の道路痕跡は確認できていない。しかし、南方約60mに位置する五条交差点より南側で実施した第217・224次調査では、坊路(南北道路)痕跡が確認されている。第224次調査の調査例からすると、坊路東側溝の延長が第306次調査地で検出されるはずであるが、それに対応する遺構は全く検出されなかった。

五条交差点付近は、大宰府政庁の前面を通る4条路が12坊路に接続すると推定されている。交差点の南隣の第224次調査3区では、その坊路西側溝に多量に捨てられた人・馬・牛などの骨が見つかった。条坊道路側溝から僅かに骨片が出土することはよくあるが、多量に骨が出土する状況は、条坊内ではここだけである。このような道路側溝の断絶や獣骨・人骨の遺棄という状況から、条坊域でも4条路と12坊路の交差点というのは、やや特異な空間であり、4条路を境に条坊景観が異なっていた可能性が考えられる。4条路以北は、大宰府政庁・学校院・観世音寺など官的施設が並ぶエリアであり、それを境に様相が異なっても不思議ではないだろう。なお、観世音寺文書には2条12坊や3条12坊が登場するため、条坊が施工されていたことは間違いないだろう。しかし、観世音寺より東側については、調査例はあるものの未整理で不明確なことが多いが、平安後期～中世の遺構が爆発的に多いため、条坊施工の時期など検討すべき課題は多い。しかし、第78次調査では狭小な範囲で遺構・遺物とも僅かであるが、古代前期のものが多かったことは、何らかの土地利用があったことを窺わせる所見である。

【朱雀地区について】

今回報告した地域一帯は、低丘陵上とその周辺部という立地のためか、奈良・平安時代の遺構が幾重にも重なって検出される状況は確認できなかったが、第235次調査では、丘陵上で初めて大宰府条坊に関する明確な道路遺構(235SF005)が確認され、丘陵上にも平地と同じような条坊が施工されていたことがわかった。

また、丘陵上に調査地において、7世紀初頭埋没とみられる土坑(160SK005)や弥生前期末～中期初頭の貯蔵穴(235SK025)や第237次調査の落とし穴群など古墳時代以前の遺構が確認される例が増えてきており、今後周辺丘陵上での検出例が増加する可能性が高い。

参考文献

- 国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告』第10集 1986年
太宰府市『太宰府市史 考古資料編』
九州歴史資料館『水城跡 下巻』2009年
太宰府市教委『大宰府史跡』太宰府市の文化財第36集 1997年
太宰府市教委『御笠団印出土地周辺遺跡1』太宰府市の文化財第47集 2000年
太宰府市教委『御笠団印出土地周辺遺跡2』太宰府市の文化財第98集 2008年
太宰府市教委『大宰府条坊跡40』太宰府市の文化財第107集 2009年
井上信正「大宰府条坊研究の現状」『大宰府条坊跡44』太宰府市の文化財第122集 2014年
筑紫野市教委『堀池遺跡現地説明会資料』2012年

写真図版

写真図版には遺構の主な写真を掲載している。その他の遺構写真および遺物写真は、付録のCDにカラー情報で収録している。



第97次調査全景（南から）



第143次調査全景（北から）



第 161 次調査全景（南西から）



第 190 次調査全景（上が西）



第190次調査掘立柱建物群全景（上が西）



190SB050 全景（南から）



190SB055 全景 (南から)



190SB065・070 全景 (南から)



第 269 次調査全景（上が南）



第 78 次調査全景（北西から）



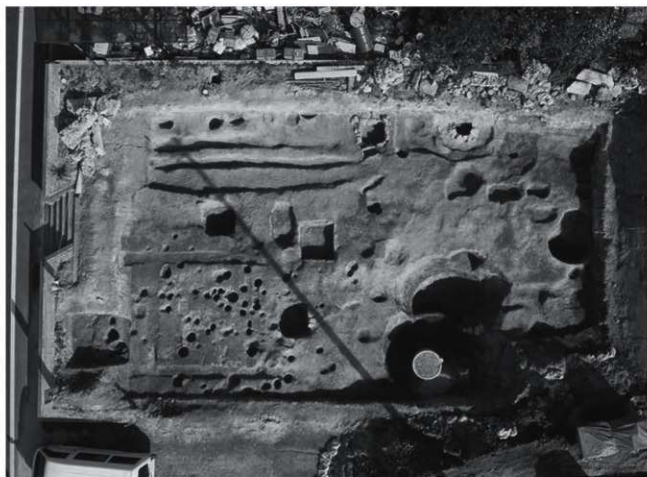
第167次調査全景（東から）



第297次調査全景（南から）



第 298 次調査全景（北から）



第 306 次調査全景（上が南）



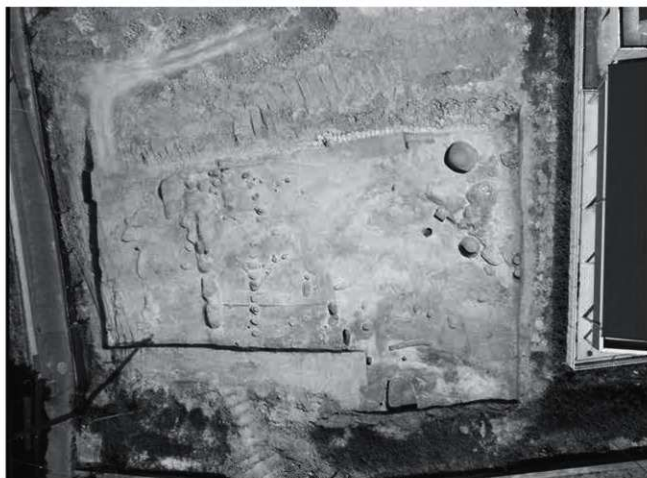
第 145 次東調査区全景（北東から）



第 160 次調査全景（上が南）



第180次調査北側全景（上が北）



第180次調査南側全景（上が北）



第 203 次調査全景（東南から）



第 218 次調査全景（南西から）



第 227 次調査全景（西から）



第 235 次調査全景（北から）



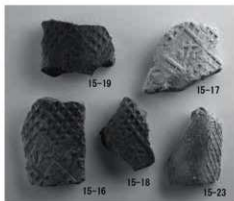
第 237 次調査全景 (上が西)



第 238 次調査北側全景 (上が南)



第 268 次調査 A 区完掘状況 (南から)

143SX020 明褐色土出土緑釉陶器
(Fig. 14-27)第 143 次表土出土須恵器
(Fig. 15-24)

第 143 次調査出土瓦 (Fig. 15)



190SI020 出土須恵器 (Fig. 31)



190SB050 出土須恵器 (Fig. 32)



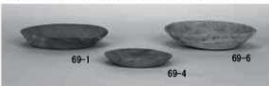
190ST115 出土蔵骨器 (Fig. 35)



269SB085 @出土柱材
(Fig. 61-55)



269SX080 出土土師器脚付鉢 (Fig. 51-35)



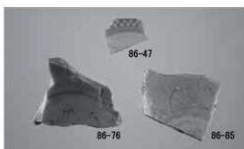
167SE001 出土土師器 (Fig. 69)



306SK047 出土銅錢
(Fig. 88-38)



306SK035 暗灰色土出土土器 (Fig. 88)



306SE015 出土白磁・青白磁 (Fig. 86)



160SK005 茶色粘質土出土須恵器 (Fig. 99)



203SD001 出土土師器鉢 (Fig. 122-2)



180SD020 暗灰色粘質土出土
白磁碗 (Fig. 107-21)



180SD040 灰茶色土出土龍泉
窯系青磁碗 (Fig. 109-12)



180SE005 出土曲物 (Fig. 111-1)



218SX005 出土土師器 (Fig. 126)



235SK025 灰茶色土出土遺物外面
(Fig. 137)



238SE010 灰色粘土出土遺物 (Fig. 148)

報告書抄録

ふりがな	だざいふじょうぼうあと									
書名	大宰府条坊跡									
著者名	坂本・五条・朱雀地区の調査									
シリーズ名	太宰府市の文化財									
シリーズ番号	127集									
編者	福岡第一、中島昭次郎、高橋守									
編集機関	太宰府市教育委員会									
所在地	福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号									
発行年月日	2015（平成27）年12月25日									
ふりがな	条坊	ふりがな	コード	X	Y	調査期間	終了	調査面積 ㎡	調査内容	
【編者による注記】	所在地	所在地	出典	調査番号	X	Y	開始	終了	調査内容	
だざいふじょうぼうあと	右標2番6坊・7坊	坂本3丁目	402214	210050-97	57030.0	-45478.0	19900710	19900810	154	共同住宅建設 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと		さかもと	402214	210050-143	56924.0	-45658.0	19931020	19931103	200	共同住宅建設 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	右標2番8坊	坂本3丁目	402214	210050-161	56931.0	-45688.0	19940920	19941002	47.5	専用住宅建設 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	右標2番8・9坊	坂本2丁目	402214	210050-190	57060.0	-45616.0	19970303	19970523	165.6	共同住宅建設 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	右標1・2番8坊	坂本2丁目	402214	210050-289	56821.0	-45396.0	20070423	20070820	360	店舗建設 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	左標3番5坊	かみざねふじ 観世音寺2丁目	402214	210050-78	56700.0	-43765.0	19881008	19881008	16	共同住宅建設 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	左標4番10坊	五条1丁目	402214	210050-147	56561.0	-43708.0	19950508	19950518	60	店舗兼住宅建設 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	左標5番11坊	五条1丁目	402214	210050-297	56566.0	-43728.0	20120706	20120710	28	店舗兼住宅建設 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	左標5番11坊	五条2丁目	402214	210050-298	56570.0	-43735.0	20130120	20130131	4.9	道路拡幅 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	左標5番12坊	五条2丁目	402214	210050-306	56748.0	-43746.0	20140922	20141106	151	専用住宅建設 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	左標4番11坊	五条1丁目	402214	210050-145	56872.0	-44238.0	19931112	19931119	200	共同住宅建設 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	左標10番6坊	大字太宰府	402214	210050-140	55951.0	-43366.0	19940817	19940913	349	代官地(宅地)整備 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	左標11番5坊	大字太宰府	402214	210050-203	56118.0	-44150.0	19980916	19981027	700	代官地(宅地)整備 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	左標10・11番5坊	朱雀1丁目	402214	210050-180	56050.0	-44280.0	19964008	19960823	700	共同住宅建設 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	左標10番7坊	朱雀1丁目	402214	210050-218	56080.0	-44480.0	20010906	20010810	14.7	記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	左標10番4坊	朱雀1丁目	402214	210050-227	56098.0	-44420.0	20030303	20030423	71	道路改良 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	左標10番4坊	朱雀1丁目	402214	210050-235	56060.0	-44390.0	20040405	20040614	348	個人住宅建設 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	左標11番4坊	朱雀1丁目	402214	210050-237	55965.0	-44406.0	20040603	20040708	59	道路改良 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	左標10番6坊	朱雀1丁目	402214	210050-238	56085.0	-44406.0	20040621	20040804	430	共同住宅建設 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	左標8番5坊	朱雀1丁目	402214	210050-268	56215.0	-43304.0	20061220	20061227	44	道路拡幅 記録保存調査
所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
大宰府条坊跡 第97次	都城	古代	塼土塼、土坑、ビット	東鹿野、土塼跡	東鹿野、土塼跡					
大宰府条坊跡 第143次	都城	古墳、奈良、平安	渡路	東鹿野、土塼跡、瓦、砂輪陶器	東鹿野、土塼跡、瓦、砂輪陶器					
大宰府条坊跡 第161次	都城	奈良	竪立柱建物	土塼跡、瓦	土塼跡、瓦					
大宰府条坊跡 第190次	都城	奈良	竪立柱建物、櫓列	東鹿野、土塼跡、瓦輪陶器	東鹿野、土塼跡、瓦輪陶器					
大宰府条坊跡 第269次	都城	平安	竪穴住居、土坑、溝	古式土塼跡	古式土塼跡					
大宰府条坊跡 第78次	都城	平安	竪立柱建物	土塼跡、砂輪陶器、櫓列口	土塼跡、砂輪陶器、櫓列口					
大宰府条坊跡 第167次	都城	平安(前期)	ビット	東鹿野、土塼跡、黒色土塼	土塼跡、東鹿野土塼、石輪					
大宰府条坊跡 第297次	都城	平安	ビット	土塼跡	土塼跡					
大宰府条坊跡 第298次	都城	平安(前期)	井戸	東鹿野、土塼跡、瓦	東鹿野、土塼跡、瓦					
大宰府条坊跡 第306次	都城	平安、中世	井戸、土坑	東鹿野土塼、瓦質土塼	東鹿野土塼、瓦質土塼					
大宰府条坊跡 第146次	都城	平安	ビット	土塼跡、東鹿野土塼	土塼跡、東鹿野土塼					
大宰府条坊跡 第160次	都城	古墳、奈良、平安	竪立柱建物、櫓列、土坑	東鹿野、土塼跡、古式土塼跡	東鹿野、土塼跡、古式土塼跡					
大宰府条坊跡 第180次	都城	平安、中世	櫓列、井戸、溝、土坑	東鹿野、土塼跡、石輪、瓦	東鹿野土塼、東鹿野土塼					
大宰府条坊跡 第303次	都城	中世、近世	溝、土坑	東鹿野、土塼跡、瓦質土塼	東鹿野土塼、瓦質土塼、東鹿野系青磁					
大宰府条坊跡 第218次	都城	平安	ビット	東鹿野、土塼跡	東鹿野、土塼跡					
大宰府条坊跡 第227次	都城	奈良、平安	井戸、土坑、溝	東鹿野、土塼跡、瓦	東鹿野、土塼跡、瓦					
大宰府条坊跡 第235次	都城	奈良、平安	道路、土坑	東鹿野、土塼跡、陶磁器	東鹿野、土塼跡、陶磁器					
大宰府条坊跡 第237次	都城	奈良	溝と土穴、貯蔵穴	赤土塼、石輪	赤土塼、石輪					
大宰府条坊跡 第238次	都城	平安	櫓列、溝、井戸	東鹿野、土塼跡、黒色土塼	東鹿野、土塼跡、黒色土塼					
大宰府条坊跡 第268次	都城	平安	井戸、土坑	土塼跡、黒色土塼、瓦	土塼跡、黒色土塼、瓦					

太宰府市の文化財 第127集

大宰府条坊跡 46

-坂本・五条・朱雀地区の調査-

平成27(2015)年12月

編集 太宰府市教育委員会

発行 太宰府市観世音寺1-1-1

印刷 (株)四ヶ所